

# 裏窓

■ 絵物語★たいむ・ましん第一号  
■ 絵物語★哀艶十六夜街道  
■ 絵物語★フン族の暴雄アッチラ



6月号

裏窓

- 絵物語★たいむ・ましん第一号
- 絵物語★フン族の暴雄アッチラ
- 色餓鬼島田
- 黒髪幻想曲
- 絵物語★哀艶十六夜街道
- 絵物語★鞭に生きる女
- グラビア★追いつめられていく演技
- 新連載★風雲地獄街道
- 日本刑罰史
- 現代マゾヒズム文化時評

定価 200 円

IBM 1807







あなたの  
わたしの

# 桃色旅行案内

永 肇川

奇習・奇祭コンクール、びっくり神さま  
お色気詣でなど一風変わった全国観光地案  
内！ 普通の旅行案内にあきた裏窓フ  
ンならば必読のトラベル・ガイド！

一七〇円

女性犯罪  
実話集

## 夜の蝶・もだえるとき

日比野 晃

若い娘。人妻。未亡人……あらゆる層の  
女体を密かに盗み見しては快感におぼれ  
た男の物語……など裏窓ファンには欠か  
せない、お好み耽美実話集！

一五〇円

女のずるさ  
いやらしさ

## 女なんて大嫌い

井 関 雅 夫

こんな本なんて大嫌い！ と一人の女が  
いいました。悪性にして赤裸々な女性を  
描いて酷！ 映画にならないエロ話／法  
悦境の表現など異色女性に関する十二章。

一三〇円

推事  
理件

## ボーイハントの報酬

雨宮 郁夫

シャツとパンツだけの被害者X氏。頸に  
布をまきつけただけの被害者Y氏。犯人  
は男色者だったのか？ ゆがんだ性欲が  
うんだ変態犯罪……など特選ミステリー。

一三〇円

検  
微診  
笑台

## 奇癖のある女たち

岡 浩 林

夜見た夢のなかで女が強姦された。そん  
な朝、女は本当に強姦された気持になっ  
た。ノイローゼからくるセックス問題を  
扱った街で話題のセックスノイローゼ。

一五〇円

お楽し  
み学

## 隠すれど色に出にけり

田 畑 大 有

肉のない尻は凶相・薄削な尻もまた凶相  
豊満な大きいお尻は大の吉相。人間・ア  
タマから足のつま先までいたるところで  
幸・不幸が判る人体易入門の好指導！

一五〇円

おもしろくて、安くてゾクゾクする

あなたをエクスタシーにさそう！

あまとりあ社の異色新書判をどうぞ

東京都中野区江古田一ノ二三〇二

(振替・東京一〇七五六・久保書店宛)

株式会社・あまとりあ社

各冊送料  
40円





裏窓・六月号目次

■表紙……藤沢 修

■目次カット……秋吉 巒

オフセット  
二色絵物語

無残女忍者記

文・矢桐重八  
画・古正英生 (9)

時間旅行機第一号

文・豊田一狼  
画・山田彬弘 (223)

鞭に生きる女④

文・ヴァン・ロッド  
画・ (103)

フン族の暴雄アッチラ

文・松平莊司  
画・中川彩子 (127)

★巻頭百枚読切時代小説★

女囚  
流転記

碧眼蛮女伝

小田桐 爽 (24)

黒い血  
の流れ

肉の濁流

城堂 純 (50)

女尊の  
世の界

畜獣デリムソンⅦ

阿麻哲郎 (58)





## 特選グラビア

- ★追いつめられていく演技毛卓三 (15)
- ★たたみの牢獄……………毛卓三 (111)
- ★和室のひとり……………猪島昌也 (120)
- ★女体倉庫……………毛卓三 (215)
- ★ふとんの上で……………猪島昌也 (216)
- ★特選悦虐フォト集……………編集部・選 (220)

時代色  
異サ随  
想ド想

- 色餓鬼島田……………竜崎聖吾 (74)
- 桜とサムライとサディズム…浜野真砂 (82)

時代  
絵物語

- 哀艶十六夜街道……………文内城寺達 (68)

ほと  
その周  
文獻と  
史録

- A心酔のタイプ……………かびや・かずひこ (90)
- 日本刑罰史①……………名和弓雄 (96)

絹縄  
執念

- 稲妻ざんげ……………万里小路崑 (144)

M文  
献の

- 現代マゾヒズム文化時評…森下高茂 (152)

妖しい  
願望

- 黒髪幻想曲……………篁文彦 (158)

女体  
密輸  
フォト・  
モノローグ

- 地獄船青竜号……………永井卓二郎 (180)
- 縄を待つ女……………堀越早苗 (170)

新連載  
第一回

- 風雲地獄街道……………鈴宮英樹 (190)

- 原稿募集……………(214)
- 編集後記……………(214)



時代絵物語

# 無残女忍者記

作・矢桐重八  
絵・古正英生



## ①美貌の忍者

——ややッ、この忍者は、女だ！

山鴨甚内は、内心、ぎくりとした。組みとめた黒装束の曲者の胸に、はっきりと乳房のよりあがりを見とめたのだ。

女にちがいない、また、敵方の間者にも相違なかった。瞬時のためらいの後、山鴨甚内は、その女忍者を高手小手に縛りあげた。覆面を剥ぐと、まだ若く、美貌の女である。

慶長六年七月——。木曾驚之口城攻防戦の寄せ手の陣中であつた。

攻めるは徳川方、正木勝俊ひきいる十万の軍勢。守るは豊臣方の武将、宇井修理之介信高。城兵およそ三万。

山鴨甚内は、勝俊直属の伊賀忍者十六人衆の頭である。年齢はすでに五十を越えているが、かくしゃくとした熟達（じき）の忍者であつた。「なに、女の忍者とな。おもしろい。責めてみよ。こやつ（この女）の口から、城方の情報を白状させてみよ」

包囲軍の余裕をみせて、勝俊がいった。捕えた女忍者への責め問いが開始された。





## ② 竹やぶ責め

女忍者を責めながら、ふと、甚内の心が痛んだ。甚内もかつては、人の子の親であった。その子は一六年前、伊賀谷の大驚にさらわれ、ゆくえを絶っている。

「これ、娘。白状せい。口を割れ。さすればこのような痛い目をみずともすむ」

笞の手をやすめて、甚内は小声でいった。

だが、女忍者の返答は、白い顔のせせら笑いだけだった。

強烈なエビ責めが、女忍者のからだに加えられた。女にあぐらをかせ、両足首をかく縛り、その縄をつぎに、首のうしろへかけてひきしぼるのである。首と足とがひとつになり、背中が折れ曲がって顔が足に触れた。

「むむむーッ！」

女の顔色が蒼白になった。腰の骨が折れんばかりの苦痛。しかも、その腰骨へ、甚内の笞が鳴った。

うめき声はあがるが、しかし、歯をがっきりと噛み、ことばは吐かない。

「うぬッ、しぶとい。ならば——」

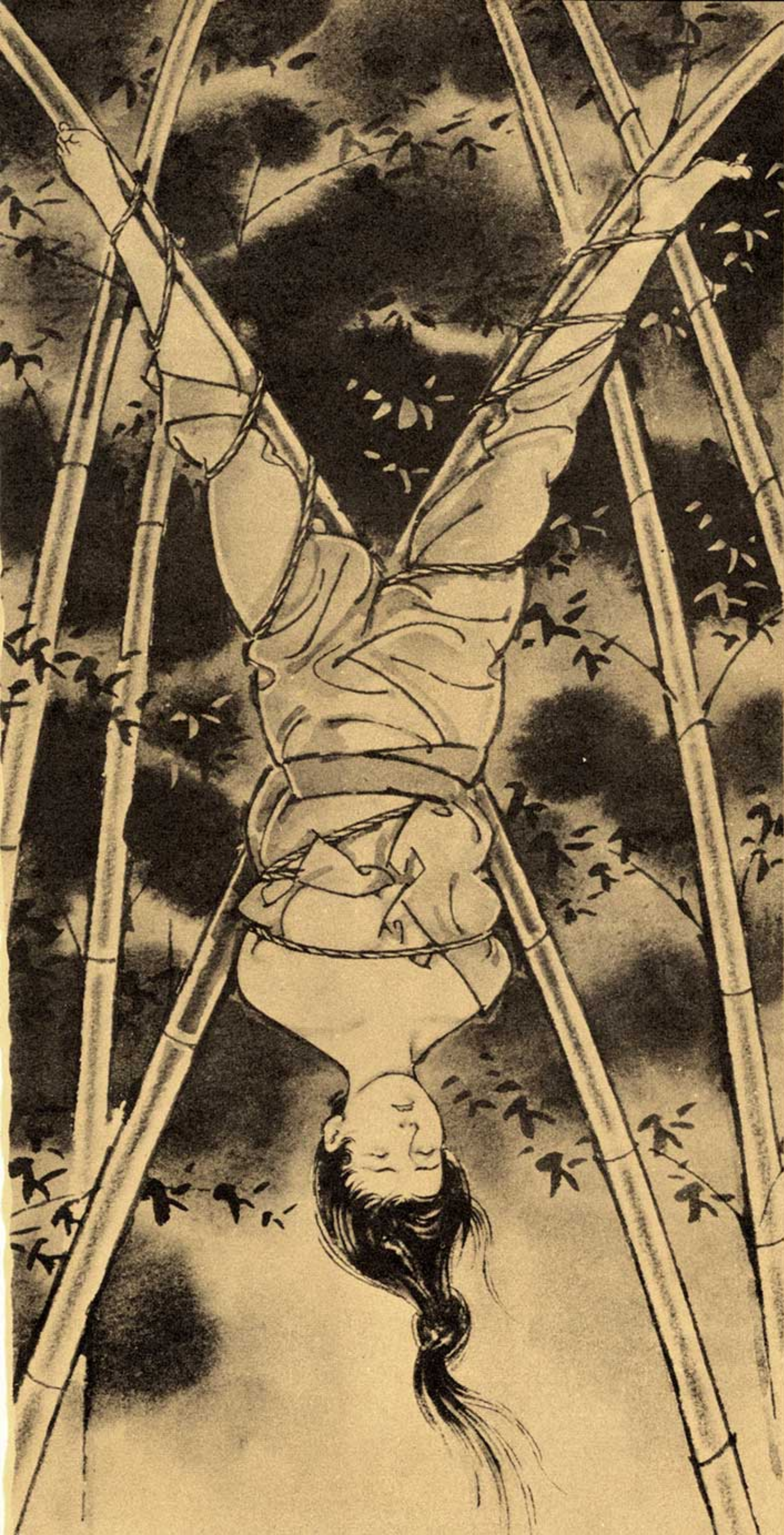
甚内も、いまは退くにひけない。女からだを、陣幕裏の竹やぶの中へひきずりこんだ。二本の太竹を交叉させ、そこへ、女の四肢を、さかさに縛りつけた。竹の弾力を利用したの股裂きの責めだった。





はじめは、笞打ちだった。青竹を裂き、それをまたかたく渋糸で縛り合わせた笞で、女忍者の背後から笞を打つ。ぴしりッぴしりッ。  
「ううッ、ううッ！」  
齒をかみあわせて、女は無言を守った。





女の衣裳は、しだいに破れ裂け、雪のような白肌がさらけだされる。しかもなお、さすがに忍者。沈黙を守りつつける。  
無抵抗の下半身に、五十七歳の老忍者の目が劣情に燃えた。手がのびた。夜は暗い。





### ③どくろのアザ

朝がきた。ぐったりした下半身に朝日がさす。甚内の顔が、ガク然とのけぞった。

小半刻後――。

甚内と女忍者が、折り重なって息絶えていた。甚内は女を刺し、その刀で、おのれの胸を突いて自害したのだった。

さらけでた女忍者の内腿にあるドクロのかわちをした赤アザ。

これこそ、十六年前、驚にさらわれた甚内の娘の、証拠のアザだったのである。



# 追いつめられていく演技



■演技するひと…………エセル・モニカ

■カメラ…………毛卓三

■演出…………藤見郁































裏窓



六 月 号

第七卷・第六号



☆小説切読百頭巻☆

異人女囚流転記

碧眼蛮女伝

海辺へ漂着した黒い怪船 現われた碧眼の美女  
は マルキ・ド・サドの子どもを抱いていた！

海坊主

享和三年——徳川十一代將軍家齊の治世。

西歴では、一八〇三年である。

その年の春も終りの、三月二十四日の出来事であった。

常陸の国の原舎の浜という海岸で、異様な事件があった。

払曉のころ、漁船で沖へ出ようとした二人

の若い漁夫が波打際から二十間ばかり先のあたりに漂着した巨大な物体を見たのである。

その物体は球状であり、色が黒く、四角形の眼を持っていた。

一望千里——という形容そのままのなだらかな海岸線の中に、突然あらわれた黒い球体は、漁夫にとって全く世の常のものとは思えなかった。得体の知れぬ怪物と見えた。

「……こ、こりゃあ、えれえ事になったぞう、

海坊主の親玉に違いなかつた！」

「見ちゃあならねえだぞ、た、祟りがあったらどうするだ！」

「は、は、早く逃げるだ！」

「桑原、桑原！」

二人は砂浜を転ろがるようにして、村へ逃げ還った。

知らせにより屈強な男達が大勢、浜辺へ現われたのは、水平線に陽が昇って波間が鮮か

爽 桐 田 小

弘 彬 山田・絵





に輝き始めたころのことであつた。

男達の有様は、さながら百姓一揆のようにものものしい。

向こう鉢巻きをして半裸の男がいる。頬かぶりをして薙を身にまとった者がいる。ど

うやって手に入れたものか、陣笠、籠手当て、鎖帷子、等の武者具足を不揃いに寄せ集めて身を固めた者もいた。

思い思いのいで立ちで総勢四五十人ぐらゐが、棍棒、竹槍、鳶口、斧、掛矢、太綱、等

の種種雑多な得物を手にして、恐る恐る接近するのだが、海坊主の親玉の方は一向に変化を見せない。

遠浅の砂底に乗り上げて、やや傾斜した儘の怪物は微動もしないのだ。



球体の高さは、一丈と二、二三尺はあるように思われた。その中程には、釜の鰐に似た形のも物が付いている。鰐の上には四角型の眼が四つある――。

尤も、それを「眼」と思ったのは発見者の恐怖心によるものであり、仔細に眺めれば、窓であることが知れたはずだった。

「……こいつは、これでも生き物け？」

と、一人が言った。

「そう言やあ、海坊主とは見えねえようだのう……」

年かきの男が合槌を打ち、首をかしげた。

「天から降った星ではあるめえか？」

「星にしては、色が黒すぎんなあ」

口々に意見を出し始めたが、生き物だと主張する者は、もはや一人もいなかった。

「誰か、傍さ行つて突いてみる」

という提案が出されたが、然し、互いに顔を見合せて尻込みするばかりであった。

「行く者がねえなら、ここから何かをぶつけてみるか……」

「んだな。それが良かつ……」

「よし。おらがやってみるべえ」

名乗りを上げたのは、村相撲の大関を張る力自慢の大男であった。

大男は、持っていた手斧を構え、十分に狙

いを付けて投げた。斧は正確に飛んで、球体に命中した。

ガーンノ

金属性の音が起こって、斧は撥ね返り、水中へ落ちた。

「やっぱり、生き物ではねえ。鉄で出来ているようだの……」

「なかは、がらんどうのようだ」

「何かの、いれものではあるめえか？」

「おらは、船だと思うがな……」

恐怖は去り、好奇心が湧き始めた。

真っ先きに進み出て勇敢さを示したのは、手斧を投げ付けた大男であった。

彼は鵞口を借りて海へ入り、油断なく身構えながら球体へ接近した。

鵞口で一突きしてみたが、もとより動物の手応えではない。

「これ、やいノ 内にだれかいるのか？ い

るなら返答しろいノ」

大声で叫んだが、球体からは何の反応もない。近くで見ると、明らかにこれは船である

に相違なかった。只、形態がいかにも異様である。船とすれば異国のそれであろう。

大男は勇を振るって球体に取りついた。鰐の上へよちのぼって、窓へ顔を寄せ、内

部をのぞいて見た――。

「ひやあノ」

彼は奇声を上げた。

「おう、皆の衆ノ 早くこうノ こりやあ海坊主なんかではねえ。やっぱり船だぞ。人が乗っている。異人だ……異人の女だあノ」

## 碧眼の美女

浜辺には、老若男女、村中の者ことごとくが集って、前代末聞の怪船を見物していた。

太綱で搦めて、大勢が曳く。

波打際まで引き寄せるには、大して時間もかからぬことであつた。

奇妙なことに、その船には帆もなく舵もない。櫓も櫓も付いてはいない。つまり、船として必要なはずの推進器がまったくないのである。球体の中程に有る鰐状の物は、海上での動揺を防ぐ為の装置だろうが、それはこの村の者達に理解できることではなかった。

さらにふしぎと思えたのは、その船の天井にある丸い蓋である。

鉄製の蓋が嚴重に密閉してあり、開ける方法が判らなかつた。

隣村から鍛冶屋がよばれ、苦心の末に、ようやく蓋がはずされたのは、すでにひるを過ぎたころのことであつた。

鍛冶屋の説明によると、内側からでは絶対



に開かぬ仕掛けの蓋だという。

それはつまり、船内の異国の女が不法に閉じこめられた者であることを意味した。

鉄蓋の内側には、異国の文字が刻み付けてあった。それはどうやら、この女の身の上についてしるした文字のように思われたが、もとより解読し得る者はいない。

「これ、何をしてるだ？ 早く出てこうッ」

「何も取って喰おうとは言わねえだぞ。グズグズしねえで外へ出たらよかつペノ」

数人の男達が鏑の上へ乗って、船内の女に声をかけたが、女は、無言のまま身をおのかせているばかりであった。

女は非常な美貌であり、年も若いようである。もはや決して恐ろしい相手ではない。

「異人の女っちゅうもんは、何とまあ、えらく強情だのう」

「面倒くせえ。誰か、内さへえって引っ張り出したらいいだノ」

気短かな提案があつて、一人の男がそれを実行に移した。

男に飛び込まれて、女は切迫した悲鳴を上げた。同時に、鎖の音が聞こえた。

「どうしただ？」

問いに答えて、船内の男は驚ろきの声を上げた。

「……ほうノ こりやあ動けねえのも無理はねえ。鉄の足枷でよう、足をつながれてるだよう。鎖を切らねえと外へは出られねえようにされてるだあノ」

続いて、さらに新らしい発見があつた。

「やあ、女一人かと思つたが、そうではねえ赤ン坊がいるぞノ こりやあ、親子らしいのう……」

鉄の足枷をはずすため、鍛冶屋が再び苦心をした。頑丈な足枷であつた。足枷には太い鎖が付いており、その長さは一間ほどで、先端は船底の中央につないであつた。

桎梏を解かれた女が漸く船の外へ姿を現わしたとき、集まつた者達はだれもが驚嘆の声をもらした。

異国の人間を見るのは初めてである。まして、これは異国の美女であつた。

碧い眼。白い肌。異様な服と履き物——。総てが珍奇である。

ただ、女は碧眼ではあつたが、紅毛ではなかつた。黒い髪だつた。

日本人の髪の毛の黒さとは少し異質の、栗色がかつた色調を持ち、柔らかな波を打って豊かに背へ流れている。

顔立ちには気品の有る美しさだが、その表情は恐怖のため硬直して、赤子をぎゅっと胸へ

抱き寄せている。

「おめえ……どこから来ただ？」

そんな問いが発せられたが、女は何をきかれても返答の出来るはずはなく、ただ、悲しげに首を振るばかりであつた。

この辺りを知行地とする祿高四千石の旗本小笠原和泉守の家臣が三名、騎馬で姿を現わしたのはそんなときである。

領地内に蛮女が漂着した——との噂を聞いて、おっとり刀で駆け付けたものだった。

「ええノ 邪魔だノ」

「道をあけいノ」

口口に叫びながら、血相を変えて人垣を割り、渚近くまで馬を乗り入れた。

「こりや、女ノ その方、いずれより参つた者かノ」

「神妙に返答せいノ」

中の一人が、乱暴にも白刃を突き付けて威嚇した。

女は恐怖して何事か口走りながら、右手を胸へ当てて、十字を切った。

「うむノ こ奴、まさしく切支丹伴天連に相違ないノ」

「者共ノ この女を搦め捕るのだノ 油断はならぬ、早くせいノ」

待達は、奇妙なほどに興奮していた。



## うつろ船

球状の怪船は、空船（うつろふね）と呼ばれて、非常な評判となった。

「空船漂着事件」を伝えた江戸後期の書物には、滝沢馬琴等が編纂した随筆集「兎園小説」だとか、梅乃舎主人の著作になる「梅の塵」などがある。

後者の記述の方が短文にして簡潔なので、以下、その原文を紹介しておこう。

### 空船の事

享和三癸亥年三月二十四日、常陸の国の原舎浜と言ふ処へ、異船漂着せり。其の船の形ち、空にして、釜の如く、又半ばに釜の刃の如きものあり。これより上は黒塗りにして、四方に窓あり。障子はことごとく、チャン（松脂を利用した接着剤）にてかたむ。下の方に筋鉄をうち、

何れも南蛮鉄の最上なるもの也。総船の高さ一丈貳尺、横径一丈八尺なり。此中に婦人一人ありけるが、凡そ年令二十歳ばかりに見えて、身の丈五尺、色白き事雪の如く、黒髪あざやかに長く後に垂れその美顔なる事、言ふ計りなし。身に着たるは異様な織物にて、名は知れず。言語は一向に通ぜず。また小さな箱を持ちて、如何なるものか、人を寄せ付けずとぞ。船中、敷物と見ゆるもの二枚あり。やわからかにして、何というものかしれず。食物は、菓子とおぼしきもの、ならびに、煉りたるもの、その外肉類ありまた茶碗一つ、模様は見事なる物なれど分明らず。原舎の浜は、小笠原和泉公の領地なり――。

とあって、船と女の絵が添えてある。船内には、パンやチーズや焼肉などがあったわけ

であり、また「兎園小説」の記述によれば、飲料水も十分に積み込まれていた、という。冷静に考えれば、この女は残酷な私刑にあつて、海へ流されたのだということが、推察し得るはずであった。

然し、私刑の執行人は海上での飢渴死を計画したのではあるまい。この哀れな女が東洋のどこかの国へ漂着することは、予定、というか目的というるか、とにかく、その者の残忍な計算の中に入っていたのだ。

漂着のとき、余分の食料や飲料水が船内に残っていたということはその証左といえた。

冷静に考えれば、そうである。

だが、冷静さの足りなかった小笠原家の侍達は「用意十分の渡航者」とみた。十字を切ったことから「切支丹伴天連の一味」と断定してしまった。

発見から「救助」までの状況を、村民達が正確に語らなかつたことも、女に不運を招く結果となった。

出過ぎた致し方――というような叱責が下だるのおそれ、村民達は多くを語らなかつたのである。鍛冶屋は咎めを蒙る危険を感じて、自分が外ずした鉄製の足枷を海中へ投げて捨てた――。

侍達は女を厳重に監禁し、主君の下知を仰







ぐため江戸表へ早馬をたてた。

それに対して、小笠原和泉守は、「蛮女を直ちに江戸へ檻送せよ——」との、指令を発した。

領地内で起こった事件は、原則としては領主に裁断の権限がある。しかし、これは小笠原家の手におえる問題ではなかった。

渡航者であるにせよ漂流者であるにせよ、異国の人間に関する処分などはまったくの未経験であった。

「ともかく、蛮女の身柄を宗門改め奉行に引渡してしまう他はあるまい——」と、和泉守は考えたのである。

面倒なことが持ち上がったものだ、という気持と、国禁を破る切支丹を捕えた、という功名心のようなものが交錯していた。

### 邪宗門の子

女は「犯罪者」として江戸へ送られる身となった。

「得体の知れぬ丸い船も、女と共に江戸まで運んではどうか——」という案も出されたがこれは、実行できることではなかった。

陸路に行くには余りにも巨大であり、運搬に骨が折れる代物である。見取図をかいいて報告すれば事は足りる、という結論になった。



ただし、円型の鉄蓋だけは持つて行ける。裏側には異国の文字が刻み込まれているのだし、証拠の品として重要だと思われた。

こうして、四月の初め——。異様な一行が江戸へ向かって旅立った。

水戸、石岡、土浦、取手、松戸——等を経て江戸へ到るのであり、この道筋を陸前浜街道という。原舎はらとまから江戸までは、およそ四十里の道程であった。

この四十里は、女にとって苦難にみちた道中となった。檻送——という指令をそのままに、女はまったく重罪人の扱いを受けて送られたのである。

高手小手、嚴重に本縄を打たれて馬の背に括り付けられた女の身体は、ひどく不安定であった。

つぎに、赤子を乗せた馬が続く。この馬の背には船内にあった箱——つまり揺りかごが括りつけられ、子供はその内に入れられた。男の子であった。まだ言葉を喋るほどではないが、漂流の間に生まれた子とも思えなかった。

残酷な私刑の執行人が、この女の母性愛さえも迫害しようとはかって、生れたばかりの子供をわざわざ船の中へ入れて流したのでもあろうか——。

さらに、円型の鉄蓋を積んだ馬が続いて進む。

この一行を、街道筋の人々は、非常な好奇心と若干の恐怖心が混った眼で見守った。

碧い眼、異人、切支丹伴天連、妖術使いの邪宗門、魔女——と、そういう連想が、理窟を跳び超えて恐怖心をよぶのである。

しかし、実際は、もとよりこの女が魔女などであろうはずはなかった。

女はただ、抜群に美しく、抜群に不幸であった、というに過ぎないのだ。異国へ流れつき、全く一方的に重罪人として扱われているこの女は、不安と恐怖、苦痛と屈辱に身心をさいなまれ、馬上に喘ぎ続ける。

護送役の男達は、乱暴であり無慈悲であった。原舎をたつて以来、女は嚴重にいましめられたままである。なぜこのような迫害を受けねばならぬのか、その理由がまったくわからない。

(せめて、言葉が通じたならば……)

女の碧い眸は悲運を哀しみ、涙がときおり白い頬を濡らしていた。

奇妙なのは、女の後に続く馬の背の幼児であった。

幼児は、箱のふちに摺まって顔を上げ、何の罪もなくして迫害される哀れな母親の姿を

疑視し続けた。これはふしぎなほど、泣かぬ子供であった。

幼い碧い眼は、まるで分別をわきまえている成人のそのように、悲しみと怒りと呪いの錯綜したような瞳の色で、浅間しい姿の母親を凝視し続けていたのである。

泣かぬ子であると同時に、笑わぬ子でもあった。決して笑顔をみせない碧眼の幼児は、無心という形容とはまったく逆の、非常に不気味な存在であった。

「……異人の子供とは、こんなものかな?」  
「奇妙だ。大人の眼を持つておる……」

「この子供、考えてみれば哀れな気もするが然し、しぶとい童とは思わんか?」

「うむ。まさに、貴殿の言う通りだ。やはり邪宗門、紅毛伴天連の子は恐ろしい。魔性が宿っておるようだ……」

「一体、こ奴、何を考えておるのか?」  
「ともかく、余り良い気分はせぬ役目だな」

護送の侍達は、そんな囁きを交わした。

## 憎悪と喜悅

明日はいよいよ江戸へ着く——という、護送の旅も終りに近いころの、我孫子の宿での出来事である。

ここは、すでに常陸を過ぎて、下総国。



街道の南側に、東西三里、南北三十町余りの広さを持つ手賀沼という細長い沼がある。正九つ、午の刻——一行は、その沼のほとりにある茶店で足を休め、昼食をとった。

馬の背から降ろされた女は、茶店の縁台へ捕縄も解かれぬままで坐り、苦しそうに握り飯を口へ入れた。護送の役人が差し出すそれを犬のように口だけを使って喰うのである。

この国の食事に慣れたわけではない。喰わなくては乳が止まるからであった。

その有様を、近在の村人達が大勢集まって遠まきに見物していた。

いかにこの時代の重罪人でも、捕縄を打つたままで食事をさせるような無慈悲は、普通では行なわれない。しかし、切支丹の場合はすべてが特別な扱いとなる。

切支丹は魔術ふしぎな妖術を使う——と昔から伝えられており、徳川家のもっとも憎悪するところの敵——とされてきた。

昔は「吉利支丹」の文字で書かれていた彼らが、享保のころから「切支丹」と改められたのは、八代將軍徳川吉宗の名が吉利支丹宗の中に二字も入ることになっては畏れ多い——という理由からだったが、そんな事柄にまで神経を使うほど、幕府はキリシタンを忌み嫌い、憎悪した。

したがって、切支丹の罪人に対しては徹頭徹尾、迫害の限りを尽すのが常であり、慈悲をかけるなどは思いもよらぬことであつた。女を見物する村民達の眼の色にも、習慣的なその憎悪が表われていた——。

女は、やがて衣服の胸元を武骨な男の手によつてはだけられ、豊かに白い双の乳房を陽光にさらすことをしいられた。幼児に乳を与えるためであり、道中、もとよりこれが初めてではない。この方法以外の哺乳は許されぬのである。

衆人環視の中で、両手を背中て括られたまま我が子に乳を与えることを、この異国の若い母親は身も世も無くはじた。苦難にみちた旅の中でも、これははなはだしい苦痛であつたに違いない。

たぐいかな美貌が羞恥と屈辱に血の気を全く失つて、切なげに悶え苦しみ、涙が乳房へしただた。堪え切れずに思わず自国語で何やら哀願をするのだが所詮は何の甲斐もない。原舎を出て以来、かいなの中に抱いてやることも許されぬ我が子が、迫害者の手によつて冷酷に、膝の上へ置かれる。

女は不自由な身を更に海老のように折り曲げて、乳房を子供の唇に近づける。

子供は、常の場合であれば母親の微笑を誘

う筈の、あの烈しさで、息を詰め、口腔と咽喉に音を立てて貪婪に乳を吸った。

成人のそれにも似た眼を持つ不気味な幼児も、飢えは避けられないのであろう。

やがて——この不倖な母子に、ささやかな満足がおとずれようとしたときである。

女が突然、鋭い悲鳴を上げた。

おどろいた迫害者達が見たものは、雪をあざむくまでに、純白な見事な乳房の烈しい動揺と苦悶であり、その乳首から流れ出る紅い血汐であつた。子供が噛んだのである。

子供は、なおも乳首を噛み続け、のみならず、残る片方の乳房には幼い爪を立てて、狂ったように掻きむしつたものであつた。

「ヒーツノ 助ケテ下サイノ 助ケテノ」  
女が自国語で救いを求めたとき、ようやく

子供が胸からもぎ取られた。

子供の顔は鮮血で染まっていた。

恐るべきは、その表情であつた。得体の知

れぬ憎悪と呪詛と、そして喜悦が、碧い眼を持つ小さな顔にみち溢れていたのである。

女は身を震わせて、引き離された我が子を見守った。心もおおる想いであつた。

「アア……ヤッパリ、コノ子ハ……」

何の意味でか、そう呟いて女は、急速に暗く哀しげな表情となつて行つたのである——



## 邪宗門吟味

松平上総介信純は、思わず眼をみはった。常陸国から送られて来た異邦人の女囚が、余りにも美しかったことにおどろいたのである。彼は、紅毛人の容貌について智識を持たなかったわけではない。

長崎出島の和蘭陀人が毎年正月の十五日に長崎をたち、三月の初めに江戸へ着いて、將軍に拝えつのため登城するのは恒例となっている。その折に紅毛人を見ることが出来る。

紅毛、碧眼、鷲鼻であり、顔の皮膚は赤い。それは天狗や鬼を連想させる、怪異の相であつた。無論、彼等がただけしく振舞うわけではないから、怖れからくる連想ではなかつたが、要するに美的な印象を受けたことはなかつたのである。

紅毛人は、どれも皆同じような怪異な相貌を持つているもの——と思つていた。

だが、この断定が誤まりであつたことを、信純はしつた。

いま、白州に引き出されて来た異国の女の抗う力を奪われた痛ましさの中から漂ようふしぎな美しくしさは、その魅惑というものは一体、何にたとえればよいのだろう——。(さしづめ、花ならば……)

信純は、糾問官としての立場を暫し忘れてその美しさに見入るのであつた。

彫りの深い美貌は、悲愁と苦痛に満ちて、名匠が巧みな誇張のもとに造り上げた彫刻のようでさえあつた。

本縄を掛けられているため、無残にも露わとなつて描き出される肢体の曲線は、日本の女のもととは全くことなる妖しいまでの華麗さをみせている。

日本の女の美を川とするならば、眼の前に居るこの異国の女は、入江や湾の、あの起伏と色彩に富んだ美しさともいえようか——。

半ば茫然と我を忘れる信純だったが、やがて、役目遂行の心を取戻した。

「面を上げい……」

と言つてみて、にわかにとまどつた。

正体も判らず、言葉も通じないこの相手をどう吟味すれば良いのか。

元来、彼は切支丹信徒糾明の専門家ではない。信純の職は大目付であつた。

寛永の昔、島原の乱が平定されてからのちは、さしもの根強い切支丹も急速に亡びて、いまでは信徒が発見されるようなことも稀であつた。隠れ切支丹が潜伏する長崎地方などはともかくとして、江戸府内で邪宗門事件が起こることは、もはやまつたくない。

江戸最後の外人宣教師、ヨワン・シドッチの事件があつてから、すでに約百年がたつてゐる。

そのシドッチを幽閉した宗門改め奉行の役宅、すなわち小日向の切支丹屋敷ですらも、いまでは廃されて、普通の武家屋敷となつてゐるのだ。宗門改めを専任とする奉行職は、とうの昔に廃されていた。ただ、形式的に、「大目付」か「作事奉行」がこれを兼任する方法をとつてゐるのだが、実際に事件を裁くことは絶えて久しい。

いうならば、不用意の虚を突かれた形である。

大目付は老中の支配下にあり、老中は五人である。その中の一人、戸田采女正氏教が、信純を招いて城中で言つたのだ——。

「上総殿。切支丹の疑いある異国の母子と船を、常陸の漁民が搦め捕つたそうじや。愚かなまねを致しおる……」

その口ぶりをげし兼ねて、信純は聞き返した。

「……と、おおせられますと？ 異人を殺傷でも？」

「いや、殺してしまふならば、まだよい。搦め捕つたことが既に愚かでござるよ。異国船が近寄ることはままあることなれど、それを





搦め捕って訴え出たるためしは至って少ないのじゃ。公儀をわずらわし、かわりあいにもなるは愚策ゆえ、上陸をこぼみ、沖へ追いつが常となっておる。それをわきまえずして訴え出たる小笠原和泉の浅慮は……」

氏教はにがしげに唇を歪めてから、再び語を継いだ。

「……なれど、のう、上総殿。今となつては是非もござるまい。その母子は、既に常陸をたち、江戸へ檻送されつつあるとの由。吟味

は致さねばならぬが……」

しかし、取り調べは形式だけでよい。要するに、適当に処分してしまえ——というのが氏教の申し含みであった。

取り調べが長びいては何かと事面倒。毒を



盛って殺してしまうのもよし、吟味に事寄せて責め殺すのも一つの方法——と氏教は言ったのである。

その言葉に、信純は、反射的な嫌悪を覚えた。とって三十六歳。少壮気鋭である。

（事にのぞんで最善を尽してこそ、御政道が立ち行くのではないか！）

と、反撥する心を持っていた。

## 踏　み　絵

結局、信純が選んだ方法は「踏み絵」であった。寛永のころに造られた木彫りの踏み絵が二た通り用意された。

「受難像」と呼ばれる、荊冠縛手のキリスト像が浮き彫りとなっているもの——。

「ロザリオの聖母」と呼ばれる、聖母マリヤがキリストを抱いている図のもの——。

その二枚が、女の眼の前に並べられた。

信純が、眼で差図をする。

心得て、役人の一人が女の縄尻を掴んだ。

「女、立ちませい！」

と叱咤する。

正坐をしいられ、慣れぬ姿勢で膝を折り曲げ、苦しそうに引き据えられていた女は、顔を上げて役人の方を振り返った。

「……………」

哀しげな、長いまつげである。

「立つのだ！ えい、立てと申すのだ！」

縄尻を手荒く上へ引かれて、ようやく命令を判断し得た女は、力なく立ち上がった。

役人は、女の背を小突く。

「歩け！ その絵を踏むのだ！」

と二枚の絵を指さす。

女は、恐ろしそうに立ちすくんだ。

長崎地方で造られた精巧な真鍮製のものと違って、この木彫りの踏み絵は図柄が稚拙であつた。神々しさも壮厳さも表われてはいない。その上、ひどく古い。磨滅がはなはだしかった。だから、ただ手を縛られた人物と悲しげな母子の像——としか女には見えない。

自分の現在の境涯との連想が強過ぎて、女は本能的に進むことを怖れたのである。

「踏め。ええ、踏めい！ このようにするのだ！」

役人は自分で踏んで見せた。

だが、女は首を左右に振り、従わない。

「おのれ！ やはり切支丹か！」

噛み付くように役人が威嚇した時、信純が声をかけた。

「待て……。構わぬ。その者の足をとって踏ませてみよ」

信徒の抵抗を奪って足を掴み、無理矢理に

踏ませる方法は昔も行なわれたという。拷問で倒れた信徒の足へ強引に押し当てたこともあつたという。そういう方法で踏まされた信徒達は、あとでコンチリサン（痛悔の祈り）をとなえてつぐないとしたというのだが——。

信純は、それを命じたのである。

役人は頷きを返して、女の片足を掴んだ。

「アアッ！」

小さな悲鳴をあげ、女は身を硬直させる。

だが、容赦なく足を引かれ、獄衣の裾が割れ、豊かに長い艶麗な太腿の白さがむき出しとなった。

役人は無理強いにその足を踏み絵へ押し付ける。一枚目——続いて、二枚目——。

「もうよいぞ。その者の心底、もはや相判つた。切支丹伴天連に非らざることは、明白」と信純が言った。何やら、満足げな口調のようでもあつた。

「は……」

役人は手を放したが、納得し兼ねる表情で信純を見上げた。

「……いま一度、自分から踏ませてみてはいかがでござりましょうか？」

「その儀、無用である。考えてもみよ。乳飲み児をとまって海を渡りくる女性の切支丹伴天連など、あろうはずはない。その女、不



幸にもこの日本へ漂いきたる者に相違なく不逞の企てなどは持たぬのであらう。この上は、生国と身の上を糾すまでのこと……」  
信純の視線には、明らかに憐憫の色があった。

「縛を解いてやるがよい。重ねていうが、切支丹ではないのだ。母子とも、しばらくは牢へ留め置かねばならぬが、せいぜい慈悲をかけてやり、苛責を加えたりなど致してはならぬ……」

念を押すように申し渡した信純は、改めて女の美しさに眼を惹かれた。

何とかして救うてやりたいものだ、と考えていた――。

## 通詞 左内

幕府の通詞（通訳）で足立左内という者が神田駿河台の信純の屋敷へ招かれた。

漂着した異国の美女の身の上を問いただすためである。

まだ若い、学究らしい知的な容貌を持つ武士――足立左内は、蘭語と英語と露語にくわしい人物であり、当時、もっともすぐれた通訳官であった。

その業跡を史書から拾うのは容易であり、たとえば――文化六年六月に、常陸の国の大

津浜へ十余艘のイギリス船が現われ、五、六十人の水夫が上陸してきた事件があった。領主の中山備前守は抗戦を決意し、水戸藩にも援兵を頼んだので、数百人の武士が天津へ集結し、ただならぬ事態となった。このときに通詞として江戸から派遣され、無事、事態の収拾を付ける事に成功したのが、すなわちこの足立左内である。

さらにくだって、文政七年には、自著「ロシア学塾」を、左内は幕府へ献じている。

西洋通としてもこの時代の第一人者に属し探究心の旺盛な性格であった。

彼は、全能力をあげて異国の美女の身の上を調べ始めた。

女が英語を話せたことは、左内にとってさいわいであつた。彼女の辿った数奇な運命が漸く明らかにされたのは、この年の四月も末に近いころのことであつた。

「御前。……あれは、まことにふしぎな女でございますな」

左内は奇妙な微笑を浮かべて、信純に報告した。――松平邸の書院の中である。

「ほう。ふしぎとは？」

「名をクリスチーナと申し、フランス国の貴族の娘です。フランス国はイギリスから約十里の海峡をへだてて南東に位置する国です。」

このフランス国では、今から約十年ほど前に国王の一族がことごとく町人達に捕らえられて斬首の刑に処せられる、という異変が有つたのです……。つまり、大がかりな一揆のようなものでしょう」

「ふむ。それで？」

信純は思わず身を乗り出して、左内の言葉に耳を傾けるのだった。

「国王だけではなく、貴族達もまた次々と処刑され、パリという都は血で染まる有様となりました。あの女、クリスチーナはそのころ十歳だったと申しておりますが、家族と共に捕われ、父や母の首が刎ねられるのを眼の前で見たのです……」

左内は、自分が手にする覚書きを眺めながら、さらに語り続ける。

「一揆軍は、乱を起こす手始めとして都の牢獄へ押し寄せ、咎人を総て解き放したということです。その牢、バスチーユという名ですがそこへ入牢していた者の一人に、サドという名の貴族があり、当時、年は五十歳前後とか……」

「佐渡……？」

「左様です。もとより、フランス語ですから越後の佐渡とは違いますが……」

左内は微笑をみせた。彼が作った覚書きに



も佐渡の文字がたわむれに使用されていたからである。その方が覚えやすい――。

「尤も、このサドという男は、牢獄襲撃の十日ほど前にシャルトンという所の養生所へ移されたため、すぐには切りほだきを受けられぬ身でしたが、天下の情勢が一変して法律が改まったために、間もなく自由の身となりあのクリスチヌと申す女とあったのです。」

そして、少女ながらも際立った容色を持つクリスチヌに、サドは年甲斐もなき懸想を致し、策を弄して妾とした……」

「十歳の女をか？」

「左様です。じつは、奇妙なのはあの女自身ではなく、このサドという男の方だと申すべきが本当でしょうが……」

「牢から養生所へ移されたというのは、身体でも悪かったのか？」

「いや。身体ではなく、心です。その男は狂

人とみなされたのです。しかし、全くの狂人というわけでもなく、入牢中は戯作に耽っていたと申しますが」

「牢内で戯作か。変わった奴だの」

「いかにも風変わりです。とくに、この男の行状が、まことに奇妙です。入牢となったのもその行状ゆえですが……」

### マルキ・ド・サド

「……何とノ 女をさいなむ奇癖、と言われたか?!」

信純は話の奇妙さに驚いた。

「いかにも、その通りです。心ひかれる女を捕らえ、手足を縛り、裸体となして、鞭で打つ。あるいは又、木の枝へ吊り責めとし、刀で膚を傷付け、その傷口へ熱ろうを注ぐ……などということはいちじるしくくり返して行なったのです。この男の戯作も同様に、女を

さいなむ物語ばかりを書いたものだ、ということですよ」

「……やはり狂人であろう。妻はめとらぬのか、その男は？」

「いやいや、名門の娘を、妻としている由です。我が国で言えば江戸町奉行の身分に当る者の娘だということですが……」

「ほう……」

「サドという、この男もやはり名門の生れで学識才知も浅からず、また王の旗本として戦場を往来したこともある、ひとかどの人物ではあるようです。しかし、不行跡から牢にたびたび投ぜられ、獄内にあること前後十四年の長きにわたったと申しますから……じつに何とも、ふしぎな人物でございますな」

「して、あの女が日本へ流されたわけは？」

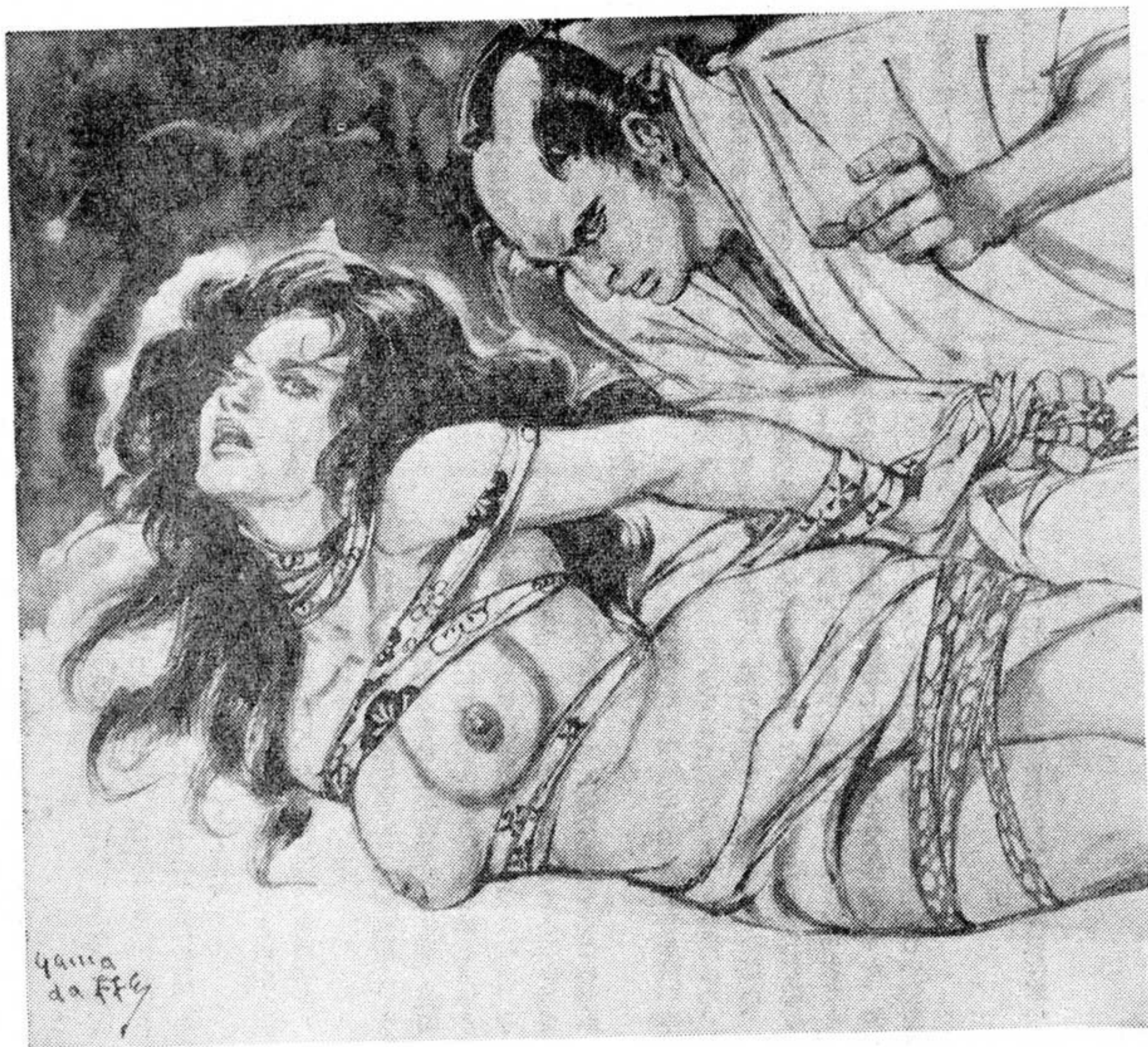
「されば……あの女、サドの慰みものとして育てられ、二十才の春を迎えたところになって初めて子を宿し、男子出生いたしたのです」

「その痴れ者、既に老令であつたろうに」

「左様。六十一才、とか申しておりますが、流石に畸人のサドも、この上、奇癖による狼籍も致しかねたとみえて、最後の総仕上げを企てたのです。すなわち南蛮鉄にて堅牢なる船を造らしめ、母子を押しこめ、絶海に漂うことの恐怖を覚えさせた上で、終ることな







き迫害を見知らぬ国の者の手にゆだねる……  
という恐るべき考えです」

「さて、不埒な男よ……」

信純は思わず吐息をもらした。

「我が子であろうに……」

「女をしいたげることが、その男にとっては  
愛だというのですが、これはとうてい、世の  
常の理窟にては理解し得ぬところです」

左内は、覚書きのある部分をひろげて、信  
純に示した。

「うつろ船の蓋の内側に刻まれていた文字を  
日本文に直すと、こうなります……」

いわれて、信純が目読した文章は、これま  
た奇怪を極めたものであった。

我が性癖ヲ充タサンガ為ノ犠牲トシテ、  
予ガ捕エ、馴致シ、苛責ヲ加エタル、パ  
リノ貴族ノ娘クリスチヌヲ、敢エテ東  
洋ノ海ヘ流シ、更ニ永遠ニ虐グルモノナ  
リ。コレニ依リ、予ガ欣快モマタ永遠ナ  
ルベシ。一千八百〇三年一月。ドナティ  
アン・アルフォンス・フランソア・ド・  
サド——。

背徳と乱虐への讃美を続けて生涯を過ごし  
た一代の異端児、サド侯爵が老境に入って着  
想した最後の狼籍は、信純をおどろかすに十  
分であった。



## 評 定 所

「不届き至極な奴め、女もさぞや怨みに思っていることであらうな」

「ところが……じつはそれほど、怨んではおりません」

「何と?! 憎まぬと申すのか?」

「しかと口には出しませんが……どうも、そのように見受けられます。ただ、我が子の行末を思いやって深く哀しんではおりますが」

聞けば聞くほど、奇怪な話であった。左内の調べた事柄は大体、以上のようなものである。だが、信純には二、三の疑問があった。

「日本へ向けて流したのは何故か?」

「日本とは限らず、唐天竺でもよいと思ったのでしよう。日本や唐土を、よほどおそろしい国と心得ているものようです」

「例のうつろ船だが、フランス国から常陸まで漂よい来たものとは思えぬが……」

「東洋へ向う交易船に大枚の金子を払って、えい行させたらしいのです。交易船から切り放されたのは呂宋島の近く、と思われる辺りでのことだった、と女は申ししております」

「なるほど。……ところで、その不埒な男だが、妙に長い名だのう」

「戯作者としての名は、簡略なものを用ちいておった由です。すなわち、マルキ・ド・サド……」

足立左内の通訳によって、クリスチーヌの

身の上を明らかにする「蛮女漂着聞取書」と題する分厚い報告書が出来上がったのは、その年の五月初めのことであった。

松平上総介信純は、早速にこれを老中へ提出した。そのさい、信純は取調べ担当者としての意見を書きそえておいた。

「其の身、切支丹伴天連にては御座無く、まことに不憫なる身の上の者に候らえば、長崎より紅毛船にて自国へ送り帰らしめ——」と

いう、穏当な処分を要請したのだったが、それから後、一ヵ月余りを過ぎたころになって、も女の処分については何の裁断もくだらなかつた。

異人の母子は、信純の屋敷内にある狭い牢へつながれたまま、初夏の訪ずれを迎えた。

信純は、牢内に畳を入れさせ、そのほか、なるべく苦痛をあたえぬようにと特別の配慮を払ったのだが、クリスチーヌはいつまでも日本式の暮らしに馴れることがなかった。恐怖と不安と困惑が、その美貌に痛ましい影を加えるばかりだった。

「哀れな……」

牢内の母子の有様を見かねて、信純は老中

に請願を試みた。

それは六月十一日——竜の口の評定所へ出仕したさいのことであった。

毎月、二日、十一日、二十一日は「式日」といって、この日は、老中、大目付、寺社奉行、町奉行、勘定奉行、等々が竜の口評定所に集まり、合同会議（評定）が行なわれるのである。

「御老中。フランス国の蛮女クリスチーヌ御処分の儀、いかが相成りましたや」

頃合いを見計らって信純は、そう質疑を發した。

瞬間、居並ぶ者たちは、何やら意味ありげに、互に顔を見合せた——。一種、不可思議な空気となったのを、信純もすぐに感じ取ったが、その実体を掴むことはできなかった。

「上総殿……」

ややあって、口をひらいた者は戸田采女正であった。

「お手前は、慈悲深い心をお持ちのようござるの」

采女正は、何故か冷やかな口調だった。

「だが……かの異国の女、自国へ送りつかわすことは、所詮、叶うまいと存ずる」

「とはまた、何ゆえでござりましょうや?」

「国是でござるよ」



「国是……?」

「ほう。……上総殿は外国船打ち払い令が国是であることを御存知ないのか?!」

大仰におどろいてみせたような、芝居めいた声だった。

(何か、下心でもありそうな……)

と信純は感じた。慎重に、よく言葉を選んで信純は答えた。

「異国船打ち払い令については、もとより、手前とてもおきまえております。しかしながら、このたび、手前係りにて取り調べましたる蛮女は、船と呼ぶほどの船に乗り来たれる者ではなく、みづからは渡航の意思も持たぬ者……ありようは、悲運の漂流者であるに過ぎず……」

信純の説明を遮るように、突然、

「かつまた稀にみる美女、ということだな」

と言った者があった。声の主は寺社奉行、と思えたが、素知らぬ顔をしているところを見ると、これは弥次のつもりだったのかも知れない。

## 国 是

「渡航の意思のあるなしにかかわらず、たとえ漂流者であろうとも、国是は国是。慈悲をかけるなどはもってのほか……」

采女正は、にわかに厳しい表情となった。への字型に結んだ唇の辺りに、酷薄な気質を物語る相が現われていた。

あらかじめ用意されてあったもののように入女正は机の上の書類の中から、一冊の綴りを抜き取って信純に示した。

「これをお読みなさるがよい」

手元へ回されてきたその綴りは、外国船打ち払いに関する書類であり、寛政四年に発せられた「御達し文」の写しであった。

天明二年の十二月——伊勢から江戸へ向かう神昌丸という船が駿河湾の沖で暴風雨にあり、遠くオロシアの国まで漂流する、という出来事があった。乗員のうち、幸太夫と磯吉という二人の者が、それから十二年目に露国船によって松前へ送られて来たのが、すなわち寛政四年六月のことである。

そのさい、將軍家齊から露国船へ通達された御国法御達し文の内容を、采女正は信純に見せたのである。

一、兼てより通信なき異国の船、日本の地へ来たる時は、あるいは召捕り、又は海上にて打ち払ふ事、昔よりの国法にして今もその掟に違ふことなし。縦令我が国より漂流したる人を送り来るといふとも、長崎の外の湊にては上陸のことを許

さず又、異国の船漂流し来るは兼てより通信ある国のものにては、長崎の湊より紅毛船をしてその本国に送り帰さしむ。

されども我が国法にさまたげあるはなおとどめて帰さず。また、国主より通信なき国よりして漂流し来るは、船は打砕き人は永にとどめて帰さず。

という厳しい条文を含んだ、全五箇条にわたる長文のものである。

これによると、異邦人の漂流者のうち、自国へ帰ることが可能なのは、制限付きで通商を許可されている和蘭陀と唐土の人間のみであり、国交のないフランス国からの漂流者などは、生涯、日本国内へ留置して帰ることは許さない——というのである。

「……もとより、当代の上様、家齊公より下しおかれたる御諚にござれば、国是も国是、これに違背つかまつる慈悲心を持つなどは、まことにおそれ多ききわみ、と申さねばなるまい。……上総殿、お判りかな」

突き放すような冷たさで采女正は言う。

「しかしながら、御老中……」

上総介は異議を述べようとした。だが、采女正は彼の言葉を遮断するように、  
「この上の論議は、もはや無用。なお、蛮女の身柄は、追って何分の沙汰あるまで、お手





前が預かりおくよう……」

と、まさに取りつく島もない。

この上、さらに喰い下がることはできそう  
にもなかった。

## いらだち

深夜――。

上総介信純は、睡りを破られた。

庭先で飼犬の太郎がしきりと吠え立ててい

るのを、夢うつつの間に聞いたような気がしたのだが、目醒めた今、耳をすましてみると何の異変もなかった。

(夢か……)

信純は、闇の中で苦笑を洩らした。



近ごろの自分はいささか妙だ——と思う。  
神経が尖がり、心のいら立ちを覚えること  
が多くなったようだ。

原因はどうやら、ひとり寝が長く続きすぎ  
たことにあるらしい。そう考えるほかはない。  
信純の妻は、ここ数年、健康がすぐれなか  
った。病弱——というほどではないが、もと  
もと余り丈夫な方ではない。

春の初めに、供を連れて信州へ湯治に出か  
けたのだが、それが、まだ戻らない。

「十分に養生して、元気な姿を見せてくれ」  
と言って送り出し、もとよりその気持は今  
も変わらないのだが——しかし、人間の体は面  
倒なものである。男としての煩悩は、振り切  
ることができない。

その気にさえなれば、女を得る道はいくら  
もある。身边にも——早い話が屋敷に働く腰  
元に手をつけたとしても、世上にはまもある  
ことであり、許される、とまでは言えないま  
でも、決して指弾されるような種類のことで  
はなかった。

だが、男にもふた通りがある。それができ  
る男と、できない男と。

信純は後者であり、潔癖だった。病中の妻  
を裏切る気にはなれないのだ。

(いつ、戻るのか……)

信純は、しきりと、妻を想った。

(そなたが帰ってくれぬと、俺は落着かぬ。  
過日も、あやうく老中の意に逆らうところで  
あったぞ……)

そこまで考えて、不意に——思考が轉移し  
た。脳裡に描いていた妻の面影が、牢につな  
いでおくクリスチーヌの美貌と入れかわった  
のである。

(あの女……自分の力では、所詮、救けてや  
ることはできぬのか……)

役目や慈悲心のためばかりではなく、ひど  
く気がかりであった。

悲運に喘ぐ弱い女を救ってやりたい、と考  
えるのは、だれの場合にも共通な、いわば男  
としての本能であろう。

信純もそう思ったかったが、心のどこかで  
もつと生なましい、もつと卑俗な心情がうご  
めきかかるのを自覚しないわけには行かなか  
った。

吟味の日に見たクリスチーヌの脚の白さや  
豊かな艶やかさは、今でも瞼から離れてはい  
ない。獄衣に包まれた全身の肌はどれほど美  
麗なものであるのか——想像がつくようでも  
あり、あるいは、その想像をはるかに超える  
ものであるのかも知れぬ、と考えたりした。  
半ば衝動のように、信純は夜具をはねのけ

て、上体を起こした。

## 女体自縛

クリスチーヌを見てどうしようという明確  
な気持があったわけではなく、信純はただ、  
妖美な魔力に惹かれるようにして、牢の前ま  
で来た。

牢とは言っても大目付の役宅であるから、  
咎人を留め置くことは滅多になく、牢番など  
もない。

信純は屋敷の者に見られることもなく、牢  
格子の前までくることができた。

つまりこれは——恋情であろう。恋する心  
に思案や分別を求めるのは無理である。

確固とした目的もなく、夜中、女のもとへ  
忍んだとしても、格別に奇妙とは言えない。  
寝顔をかいま見たい——というような欲求  
だったのでもあろうか、信純は、灯をさしの  
べて、静かに牢内をのぞいた。

だが、クリスチーヌはねむってはいなかつ  
た。

「おっ、何とした?!

思わず、驚きの声をあげた。彼がそこに見  
たものは、まことに異様な光景であり、すぐ  
には事態の判断がつかなかった。

クリスチーヌは、一糸もまとわぬ裸身とな



り、帯や紐を、咽喉や腕、胸、胴、足、などに巻きつけて床に倒れていたのである。

自害をはかったにしては裸身であるのが妙だ。とすれば、狂気したのか――。

信純は、自分の思いやりからとくに、囚人には不相応なほどの衣服や帯紐をこの女に与えたことを強く悔いた。

柱に掛けてある鍵を取る間ももどかしく、彼は牢の海老錠をあけた。

「狂ったのか?!

抱き起こすと、女は、背中へ回した両腕の手首に紐をからめたようにして握っているのであることが知れた。明らかに、自縛を試みた姿なのである。

クリスチーヌは信純の腕の中へもたれかかり、身悶えし、低く呻いた。

(この女は、サドの加虐を恨んではない)と述べた足立左内の言葉が、閃めくように想

い出された。

「……不埒な女め!」

呻吟にも似た声と同時に、信純はクリスチーヌの裸身を強く抱きしめた。

「男を……男の心を、こうして狂わせるのか!」

女の両の掌から伸びている紐の余りを、信純は探り当て、力まかせに左右へ引きしほった。

女は身をくねらせ、ほとんど憚りもないほどの呻き声を立てた。

二人はすでに、片隅にねむっている幼児のことを忘れた。おのれの立場さえも忘れていた。一切の理屈を越えて、妖しい美酒に酔ったように、獣の如くのたうった――。

「……痴れ者!」

「構わぬ。男の方は斬ってしまえ!」

そんな声が、不意にすぐ近くで起こった。

信純にとって、それは最大の、そして最初にして最後でもある不覚だった。

数人の黒装束が音もなく牢内へ忍び入ったのを、気づかずになっていたのである。

手燭を武器の代りに掴んで、最初のひと太刀は払ったのだが、背後から襲う剣をかわすことはできなかった。

「無念……!!」

灼けるような痛覚が、前後から何度も突き刺さってきた。滅多斬りであった。

男たちの引き上げて行く気配をおぼろげに感じながら、信純は虚しく暗闇へ手をのぼし「クリスチーヌ!」と叫んだ。

女と子供が連れ去られたのを、信純は知っていた。

「……ゆ、ゆるせ……」

妻に詫びたのか、それとも、ついに救ってやることのできなかったクリスチーヌへか――恐らく、その両方であろう。

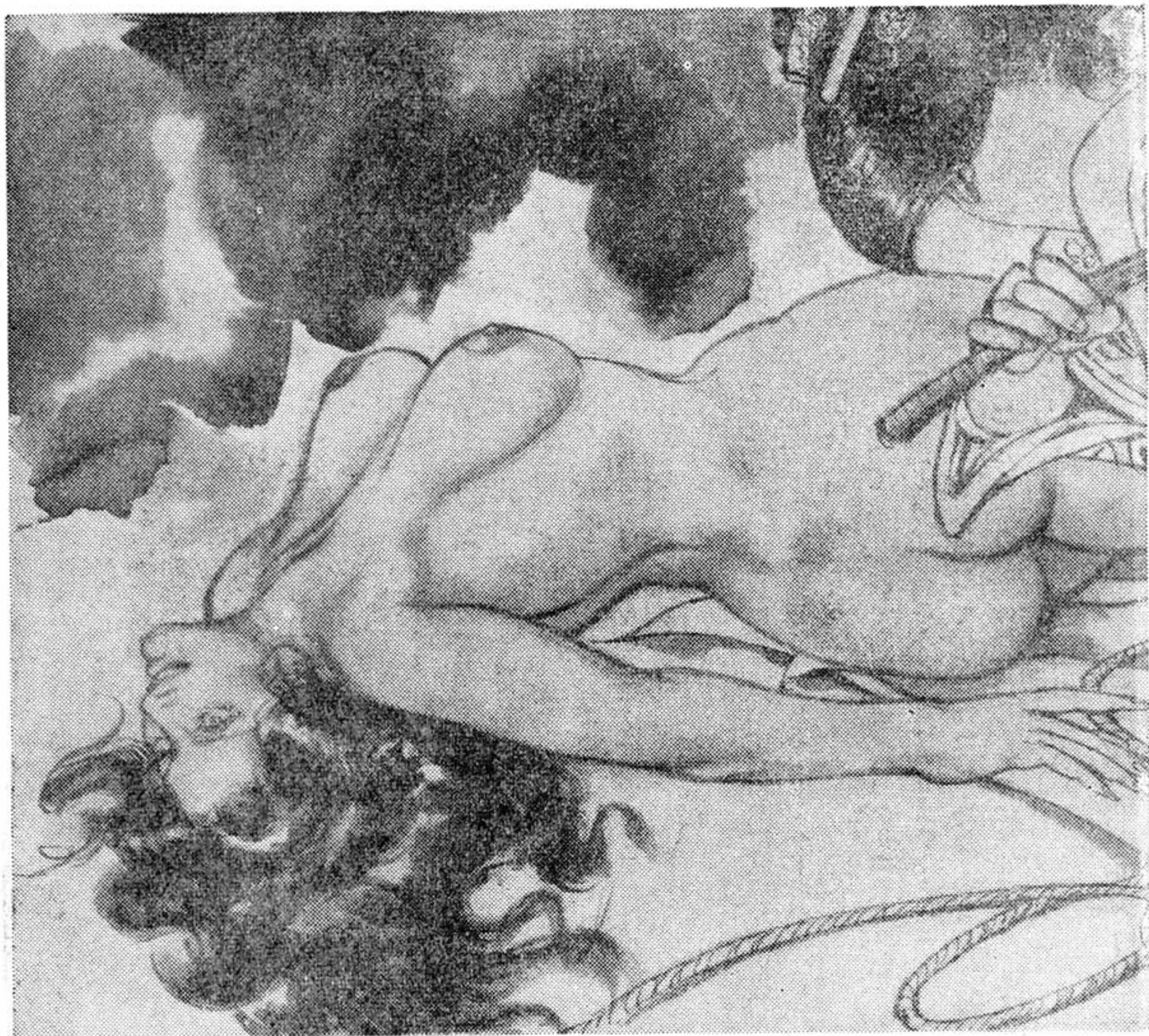
牢格子の方へにじり寄ろうとした信純は、一尺も進まぬ辺りで、息が絶えた。

## 主水の井戸

宵に厚い雲が出はじめ、間もなく月を隠した――。

まったく寝静まった夜の町は真の闇であり





もとより人通りも絶えているが、神田塗師町——俗に主水河岸と呼ばれる辺りの通りを、一挺の駕籠が急いでいた。

前後を担ぐ者と、それを取り囲むようにして進む影が五つ——。いずれも黒装束である。彼等は、足音というものをまったく立てない歩きぶりであり、それでいて、速度はすこぶる早い。

静寂な闇の中の一部が、無音、急速に移動して行く感であり、尋常な人間の行動ではない。とすれば——甲賀か、伊賀か、ともかく忍者の団であるに相違なかった。

彼らはやがて、塗師町の大久保主水の屋敷内へ、吸い込まれるように入って行った。

この大久保家は、將軍家御用菓子司を代々つとめる家柄である。といっても、ただの菓子造りではない。

大久保家の先祖、藤五郎忠行が將軍家康の命を受けて、神田上水——つまり江戸市に水道を引く工事を開始したのが、天正十八年夏のことであった。

武蔵国多摩郡吉祥寺村の弁財天の池を源として、高井戸、中野、落合から関口を経て小石川の水戸家の邸内を通り、お茶の水に大樋を掛け渡し、神田へ至る——という大工事だったが、藤五郎は見事にこれを完成せしめ、



江戸市民へ清爽な飲料水を供給することに成功した。

工事が終わったときは、すでに二代將軍秀忠の世であった。秀忠はその手柄をたたえ、水源の池をあらたに「井の頭」と名付け、藤五郎には主水（もんど）の名を与えた。

但し、「水は濁らざるを以て尊しとするゆえ、そちは特にもとと名乗るがよい——」との秀忠の言葉により、代々、大久保家は世襲として主水と名乗っているのである。

元来、藤五郎忠行は三河で三百石を拝領する武士であったのだが、戦場で足に負傷をしてのちは、歩行不自由となったため、水道の工事や御菓子司の職を得たのである。当時菓子の中へ毒を仕込んで貴人の命を狙う事件がしばしば起こったが、將軍家は主水の菓子だけは絶対の信用を置き、安心して食するのが常だった——という。

つまり、大久保家は江戸創業の功労者であり、將軍家の信任厚い家柄でもあるのだ。

その大久保邸へ入った黒装束の一人は、依然として無言のまま、おとずれを告げるでもなく案内を乞うでもなく——玄關口を素通りし、中庭へと進んで行った。

同時に、それを予期していたもののごとく廊下から庭へ降り立った武士があった。

侍女が一人、手燭の灯りで足元を照らしながら従うところをみれば、この武士は当屋数の主、すなわち大久保主水なのであろう。

「おのおの方。御役目、御苦労でござった」

尊大な口調で声をかける。

七人の黒装束は無言のまま目礼を返した。

「して……首尾は？」

問われて、黒装束の中の一人が、駕籠を指さし、

「はっ。万事、手筈の通り遺漏なく……」

と低声で答えた。

「それは重畳……」

悠然と頷いた武士の横顔は、灯影の暗さでさだかには見定められぬが、ただの菓子造りとは思えぬ面魂であり、いかにも一癖ありげだということだけは、すぐに知れた。

黒装束の一人が駕籠の戸を開け、まづ幼児を抱き上げた。

母親に似て黒い髪だが、不気味な碧い眼を持つ、それはマルキ・ド・サドの子にまぎれもなかった。

続いて別な黒装束が、クリスチーナを引きずり出そうとする。クリスチーナは忍者の手によってばくされたのであろう、彼らに特有の厳酷無残な縄目を裸身に受けており、その姿はまことに痛々しい。

「出るのだ！」

手荒く縄尻を引かれて、この異国の美女は足元が乱れて惨めにもそのまま、地へ倒れ伏した。

しかし、その身には悲鳴を発する自由すら与えられてはいない。口には嚴重な猿轡がはめられているのである。

「世話の焼ける女だ！」

忍者は低く舌打ちして縄尻を吊り上げた。

クリスチーナは辛うじて立ち上がる。

忍者は、囚女の猿轡を解き、豊かな髪を鷲掴みにしてその白い顔を手燭の方へ向けた。

「……御検分を」

「ほう……なるほど、美形でござるの。体も十分に美しい」

主水はクリスチーナの美貌に、しばし見入った後、大きく頷いて言った。

「たしかに、受け取り申した」

「では……」

忍者は縄尻を侍女に預け、子供を主水に手渡すと、

「われらは、これにて……」

と目礼し、音もなく闇の中へ消え去った。

主水と侍女の二人は、庭を横切り邸内の一隅にある豪壮な造りの蔵へと進んで行った。

この蔵を「御水蔵」という。御水蔵の中に



は「主水の井戸」と呼ばれる名代の名水があり、「御膳水」と称して將軍家の飲料に供する場合以外は扉を閉ざし、常に厳重な施錠をしておくのが大久保家の掟となっていた。その蔵の扉を、いま——この夜ふけに、大久保主水は何故か、ひらこうとするのであった。

## 地下の石牢

「ヒッ……ヒョーン」

身も世もない女の悲鳴が、いくつもの壁に突き当たり、撥ね返り、つぎつぎと反響を起して、ひろがって行く——。

さらに、肉を打つ笄の音が混って、凄絶異様な不協和音を起こした。

空気はつめたく、昼と夜の区別のない場所であった。

地下の石牢——と、いつて間違いではないが、それだけではなかった。牢格子の前には石畳を敷いた通路があり、それが奥行きの知れぬ深さで地の底を走っていた。

その通路を挟んで石牢の向かい側に、豪華な造りの座敷があった。

悲鳴の主は、その座敷の柱に縛り付けられているクリスチヌである。

衣服は、人身御供を思わせる白無垢のもの

が着せられていた。

「こりや、女……」

冷やかに声をかけて、一人の若い女がクリスチヌの胸の縄目へ棒の端をこじ入れた。「そなたは、このようにして責められたことがおありかえ？ どうじゃ」

本来は何の用途を持つ棒なのか——ともかく、この場では責め道具である。女はその棒を持つ手に力をこめ、情容赦もなくクリスチヌの縄目をこじ上げる。

クリスチヌは長い髪を振り乱して、はげしく苦悶し、悲痛な呻吟をもらした。

「喜曾……。もっと趣向を変えて、責めてみよう。そうじゃ。その蛮女めに新参舞いをさせてみるがよい」

男の声が命令した。

一段高い座にいて、脇息にもたれて坐っているその男は、三十才前後と見えるが、奇妙な程に華美な服装をしていた。

喜曾——と呼ばれた女は、うやうやしく会釈でこたえて、クリスチヌへ向き直った。

「女。上様の仰せじゃ。大奥で恒例の新参舞い、せいぜい大事に務めるがよい」

言いながら縄目から抜いた棒を、今度はクリスチヌの咽喉へ当てがい、顔を押し上げた。

女は、大奥と言い、上様とも言った。

ここは——江戸城本丸の地下、秘密の抜け穴の一隅であった。

抜け穴は、神田の方角へ向かって延びており、その出口は、大久保主水邸の御水蔵の中、主水の井戸の中腹に通じているのだ。

古来、名城と呼ばれるほどの城には「抜け穴」の伝説が少くない。非常のときに備えて城の地下に複雑な迷路を造り、巧みに脱出地点を設けておくのである。正確な道筋を辿って往来できるのは、城主と少数の信任厚い側近の者だけであり、かりに、敵が踏み込んで来た場合には、意外な罫へ落ち込んでしまうような工夫がほどこされている。

江戸城の場合は、大久保家がその出口を守護していた。

松平上総介の屋敷から連れ出されたクリスチヌとその子は、主水の井戸から抜け穴を通ってここまで運ばれ、地下牢へつながれる身となったのである。

「異国の美女を見たいものじゃ」と言い出したのは、すなわち將軍家畜であった。

「フランス革命」の噂を耳にしたこの將軍は遠い異国の王の運命よりも、クリスチヌというところよい響きの名を持つ美女の方に心をひかれたのである。



それは意外なほどに強烈な執心であった。老中戸田采女正は、その執心を満足させるべく、クリスチーナ誘拐の手配をし、一夜、忍者の団を松平上総介の屋敷へ差し向けたのである。

もとより、鎖国は寛永以来の国法であり、異国の女を城内に留め置くなどは、まことに法外のことである。しかし、將軍は法の上に立つ者であって、法の拘束を受けない。

この封建君主制に特有の論理に加えて、江戸城の地下には秘密の部屋が存在していた。將軍職にあること五十年。その間、四十人の中臈に五十五人もの子を産ませ、その他に流産も少なくなく、また墮胎されたものも夥しい数にのぼる——という、歴代將軍中随一の好色家である家齊に、知られざる秘密が一つ、こうして地下の秘室を舞台として、くりひろげられたのである。

## 新参舞い

家齊は「新参舞い」と言った。

新しく大奥へ奉公に上がった女に行なわしめる無礼講に近い余興のことである。全裸になることを強いた上で、みだらな種類の踊りを演じさせるのが、しきたりとなっていた。

將軍家にとっては、新しい女体の閲覧であ

り、古参の女達にとっては、新参者の羞恥を見物する公然の嗜虐であった。

その奇習を、クリスチーナにも演じさせようというのだ——。

お喜曾はクリスチーナの縄を解き、衣服を剥ぎ取ろうとする。

クリスチーナの腕は、すでに痺れ切っており、抵抗する力をまったく失っていた。

お喜曾は荒々しく剥ぐ。手の動きに憎悪と嫉妬がこもっていた。

家齊の関心がこの女に向けられていることは、不快であり、いらだたしかった。自分が無視されることに直結する意味をもつからである。

のちに——清昇院お喜曾の方として家齊の寵を受け、元姫という子を生んだこの女も、いまはただ、競争者を憎む嫉妬の白鬼でしかない。

この女が使った縄や鞭や棒にも、ただ単に家齊の申し付けに従って、ということ以上の冷酷な力がこめられていた。

完膚なきまでに責めさいなみ、辱しめてやろう——という、自分自身の残忍な意思が働いていた。

しかし、それはこの場合、逆な結果を招くこととなった。

クリスチーナの裸身は、まさに絶世と形容してよいほどに見事だったのである。

その肌は神秘を感じるまでに白い。掌では隠し切れない豊かなふたつの乳房を、しかしクリスチーナは必死に抑えて、体を折り曲げる。

艶麗で豊満な女盛りの裸身は、灯影に白々と浮き上がって夢のように美しい。

その背に、嫉妬の鞭が高鳴った。

「ヒッ……」

裸身は悶え、喘いだ——なぜか続いて襲う鞭を避ける様子は示さなかった。

課題を果たそうとでもするかのように、クリスチーナは鞭の下にそのまま身をさらして痛撃を受け続ける。

切なげに、哀しげに苦悶はするのだが、痛みから逃げようとはしなかった。

ことさらに手足を縛る必要はない。白い裸身はすでに観念して、ただ鞭の終るのを待っているかのように見えた。

責め手のお喜曾にとっては意外である。

「ええ、女！ 踊れ。舞え！」

狼狽に近い声となって、さらに鞭を振るうたがクリスチーナの悶え方は変らなかった。

お喜曾にしてみれば、鞭によってこの女を跳ね躍らせ、ぶざまに転ろげ回らせたいので



ある。

しかし、それは完全に裏切られた。

クリスチーナは、もっとも美しい悶え方を心得ているかのようにあった。

悲鳴や呻吟までが、美しい音色を持ってい

た。その姿や声には、媚びのようなものが含まれている、と思えた。

これは、辱しめたことにも、苦しめたことにもならないのではなからうか——と、お喜曾は考え始めていた。

### 嗜虐の鞭

家齊は息を吞んで、思わず眼をみはった。彼の経験にはない、魅力にみちた対象であった。責められるためにのみ生れてきたよう





な女——という奇怪な身の上にも興味があつた。この女を虐たげることによって欣快を得たという老人、マルキ・ド・サドの心情も何となくわかるような気がする。

不意に、家斉が立ち上がった。

「喜會。そちは戻るがよい……」

と、女に去ることを命じた。

「それは……」

お喜會は躊躇をみせた。自分が去ったならば、この場には家斉だけが残ることになる。

將軍家を一人きりにしておくことは、江戸城の習慣にない。闇房にさえ不寝番がつく身分である。

だが、家斉はうるさそうに首を振った。

「予も、ときには自分一人で気ままに振舞うてみたい。苦しゅうない。去れ」

仕方がない。異国の囚女を大奥の地下に閉じこめておくことからして、すでに異例である。喜會は鞭を足元に置いた。

一礼して、その部屋を出た。

と同時に、室内で鋭い悲鳴が上がった。鞭の音が重なる——。

お喜會は、これも拔群の美貌ではあったがその白い顔に慎しみのない冷笑をうかべて、石畳を歩きはじめた。

だが——数歩も行かぬうちに、突然、立ち

どまった。石牢の前であつた。

牢格子に撞まって立っている異国の幼児の眼におどろき思わず足がすくんだのである。

幼児のものとも思えぬ烈しい視線が、射るようにお喜會を見上げていた。碧い眸がいつそう怪奇に見えた。

慄然とするものを覚えたお喜會は、魔を避けるような思いで顔をそ向け、足早やに去って行った——。

室内の家斉は、鞭を振り続ける。

女の肩へ、背へ、脚へ、胸へ——激しく、また弱く、いつまでも振り続けた。

クリスチーナは長い髪をふり乱し、掌で顔をおおって、身も世もなく呻吟する。

震えている白い指先までが、新鮮な美しさに充ちていた。

その四肢は、打たれるたびにさまざまの屈伸をみせ、変化に富んでいた。

家斉は手を休め、一息いれた。

「女……」喘ぐような声となっていた。

「予の……予の鞭はどうじゃ！ そちの国の男とくらべて、どうじゃ？ いずれが烈しいか？」

クリスチーナは肩で喘ぎながら、家斉をふり仰いだ。凄艶な顔のなかに、妖しい情感が漂よっていた。

言葉の通じぬことが家斉にはもどかしい。

「女……」彼は鞭を捨て、女を抱き寄せようとした。柔軟な抵抗があつた。

「ええ、手向かいするか！」

家斉は強い力で、自分の両腕の中へ女を捉らえた。不意に、女が変化をみせた。家斉の背へ両腕がのびて行き、しなやかに抱いた。

形のよい紅唇が、家斉の顔へ近寄って行った。香ぐわしい喘ぎが迫った。

「あッ……」思わずそんな嘆声をもらすほどの、これは新鮮な驚ろきであつた。

「……愛い奴！」

そんな言葉と共に、今度は家斉の方から、クリスチーナの唇を求めていった。

四本の腕が互いに緊め合つて——家斉の心身はすでに將軍家としてのそれではなく、ただの男となっていた。

## 執心

「上様が事もあらうに、異国の蛮女に御執心——」

という噂が大奥でひろがった。

一代の畸人、マルキ・ド・サドの手により玩弄用の女として育てられた美女クリスチーナが、家斉を欣喜させたのも無理ではなかった。家斉にとっては、口やかましい三太夫的



存在でしかなかった松平定信が、老中筆頭の職を退ぞいてから十年が経っていた。

白河（定信のこと）の清き流れに住みかねて、元の濁りの田沼恋しき

世の中に蚊ほどうるさきものはなし、文武というて夜も睡れず

松平定信のいわゆる寛政の改革が行なわれたころ、そんな落首が庶民の間でよまれたことは名高い。世人は定信に反感を示し、田沼時代をさえなつかしがったのだが——家斉とても同様であった。だから定信がいなくなつてからというものは、彼は氣随氣まま、放恣と荒淫の限りをつくした。

そして十年——。もはや漁色は習慣であり情性のようなものに近くなっていた。

そこへ現われたのがクリスチーナだ。容姿も、肉体も、氣持も、動作も、すべてがまったく異色であった。妖しい美酒のようである。

家斉のような男が、そういう美酒に酔い痴れて溺れていったのは、当然の成り行きであるといえた。

しかし——これに露骨な眉をひそめた者達がいいた。まず、大奥の女達である。

その急先鋒は、家斉の乳人として大奥に権勢を張る、御年寄大崎であった。

大崎は松平定信排斥運動の陰の原動力——

と伝えられた女である。

今度も黙ってはいなかった。

陰謀——と呼ぶほどの策は弄さなかった。

大崎を取巻く女達一派は、強引な毒殺を計画したのである。

大奥で憎まれた女が命を断たれた例は、少なくない。その方法もいくつも種類がある。

クリスチーナは言葉が通ぜず、大奥の習慣もまったく知らない。どんな牙を向けられてもそれを避けたり防いだりする能力は持たない女だ。殺害するには好都合だった。

ある日、それが実行された——。

夜食の膳に、毒が盛られたのである。

夜に入つて——足どりの軽く地底の秘室を訪ずれた家斉は、そこに瀕死のクリスチーナを見て、驚愕した。

「……な、何としたのじや?!」

かき抱だいて、烈しく名を呼んだ。

「氣をたしかに持て! 予が参つたのだ、予は家斉じゃ! これ、クリスチーナ!」

玩具を奪われそうになった子供のようになり、狼狽し、動転した。クリスチーナの蒼ざめた顔には、すでに死の影が色濃く迫っていた。

力のほとんどを失なつた手が、かすかに家斉に向けて差しのべられようとした。

「ウエサマ……ジャンノコト……」

短い間にこの女が覚えた片言の日本語である。ジャンとは子供の名であった。碧い瞳が言語の不自由を補なつて必死に訴えていた。

「ウエサマ……」

「おお、子供か。案ずるには及ばぬ。子供は予が必らず……おつ、クリスチーナ!!」

励ましの言葉が終らぬうちに、女の首が生命の終りを告げるように、グッタリと力を失なつた——。

それから二十数年を過ぎた天保のころ——江戸の街に出没して破邪の剣を振るう、碧眼異相の怪剣士があつた。

彼が狙う相手は、権力と手を握って私腹を肥やす悪徳商人や汚吏などであり、それらを懲するには情容赦するところがなく、ときには、思い切り残酷な手段を用いることさえあつたが、江戸の市民は常に拍手を送つてやまなかつた。

奉行所は躍起となつてこれを追つたが、碧眼の剣士は、まさに神出鬼没であり、捕吏を尻目にかけて俊敏な行動を続けた。

將軍家斉のお墨付きを持っている——というようなふしぎな噂もあつたこの男は、名を丸木寿安と称した、という。

すなわち、マルキ・ド・サドの子、ジャンの成長した姿だったのである。



## ■ある欲望の手記

# 肉の濁流

城堂 純

ぼくはおびえ 自虐する  
ぼくの血にひそむ この黒い情念に！

絵・都築峰子

### 一

ぼくの小さい時の記憶は、ひどくあいまいだ。ことに小学校に入る前の記憶になると、絶無に近い状態だ。このことは、ひどくぼくを悲しくさせるし、時には、その方がすっきりしていい、と思うこともある。ぼくの両親は、ぼくがほんの二つか三つの時、死んだと聞いている。それ以来ぼくは、叔父夫婦に育てられてきた。家族は、証券会社に行っている叔父と、叔母とぼくと、ぼくより二つ下の、叔父夫婦の娘の冴子の四人だ。何の変哲もない家族構成だったが、ぼくがこの家族

の、本当の一員でないことは、折にふれての叔母の突きはなすような冷淡な態度で、明確だった。その叔母の態度は、無言の内に常にぼくにこう言っていた。――亘、お前は私の子ではないのですよ。お前のお父さんの因果で、やむなく弟夫婦の私達が、お前を引取ったのだから、その辺のけじめを、しっかりキモに命じておきなさい。お前は自然に育っているけど、私達の家族にとっては異端者なんだから。

どんなに家族で楽しく打ち解け合っても、彼らの中にぼくが、入り込む限界は定まっていた。大笑いをして、ある線を越えると、

ぼくの心は白々しいものになっているのが、常だった。「お父さんそっくりだよお前は」この言葉のくり返しを、ぼくは今日まで何度聞いたろうか。ぼくのわずかな失敗も、悪であり、すぐさま叔母の口からこの言葉が飛び出した。いつの間にかぼくには、父は悪の象徴の如く、思えていた。あれは、小学校の三年の時だったろうか。冴子と仲の良かった近所の女の子とぼくは、二階のぼくの部屋の押入れで夢中でお医者さんごっこをしていた。女の子の体を、鉛筆で注射にまねていじっている拍子に、傷つけてしまった。真赤な血が女の子の細い内腿に糸を引いた。彼女はそれ





を見て、大声を上げて泣き出した。叔母の階段を駆け上がって来る音に、ほくは子供心ながら恐怖した。叔母は、真赤な顔をした。女の子にお菓子をやりたりしてなだめた後、何事もなかったように叔母は、しばらく女の

子の相手をして遊び、彼女が帰って行った後ほくの頬を平手でぶって言った。「本当に恥ずかしいいったらありやしない。父子の遺伝って恐ろしいものだね。何もかもお父さんそっくりだよお前は。亘さん、今後あ

んなことをしたら、私が許しませんからね」ほくはその時泣きながら叔母に許しを乞うたようである。

中学に入って、ほくは肉体的に、わずかながらも成長した。自瀆行為を覚えたのは、一年の終り頃だった。これは、友人に聞いたのでもなく、本から得た知識でもなかった。何かのはずみで快感を感じたことが、原因だったようだ。ほくはこの行為に溺れた。行為の結果得る快感と、異性との結び付きを考えたことは、だが一度もなかった。中学三年になった時、ほくは自分でも意識する程、男になっていた。ほくは女好きのする顔だったようだ。色が白いのは、母に似たのだと、誰からか聞いた。自分の肌が白いのは、唯一のほくの母の片身なのだ。そう思うとほくは、自分の色白を誘示した。他人の干渉には無関心だった。冴子の口からほくは、近所の女性の間、あるいは彼女の友人の間に、ほくが、かなりの噂にのぼっているのを聞いた。ある時冴子がこんなことを言った。「隣りの小母さんてへんね。亘兄さんのこと、いろいろ聞くの。恥かしいことばかり。『ママが大変ね』って、にやにや笑うの」

叔母は、背はそう高くなかったが、色が白く、小肥りしていて、四十歳という年齢より



ぼくの高校入試が近ずき、自然ぼくの夜は遅くなった。叔母は、そんなぼくにやさしかった。真夜中、お茶を入れて持って来てくれることがたびたびあった。「頑張ってるのね」そう言つて、無造作に肩に触れる叔母の掌にぼくは、興奮することが、ままあった。十五ワットの白い螢光燈の光の中で、夜着の襟から覗く、叔母の肌が、薄桃色に見えた。そんな時のぼくは、文字を追う自分の行為が、全くの徒労に終ることを知っていた。

指を唾で濡らして障子に、小さな穴を作っていた。ぼくはふるえをおさえ、うす暗い部屋に目をやった。真っ先に、向こうむきの、裸の叔父の上半体が、視界に飛び込んだ。叔父の肩に、白い叔母の両腕が掛かっている。沈んだ橙色のあかりに、叔父の背中の汗が、ギラギラ映えていた。徐々にぼくの目は、下部へ移っていった。叔父は全裸だった。叔父の臀部がかすかに揺れていた。

翌朝ぼくは、何くわぬ顔をして、朝食の膳についた。叔母の茶碗を差し出す手に、昨夜の全裸の叔母の姿態を連想した。これは、おさえようとしても、どうすることもできない事実だった。

紅茶の入ったカップを机に置いて、

「疲れてるんです」ぼくは吐き捨てるように答える。

「障子を破いたの、亘さんでしょ」叔母は声を低くして、ぼくの顔を覗き込むように言った。瞬間ぼくは、叔母は何もかも察しているな、と思った。

「そうです」そう言いながら、叔母の顔を見上げた。自分の顔が、みるみる赤くなっているのがわかった。叔母の目と唇に、何とも言われぬ笑みが浮かんでいた。

「亘さんは……」そう叔母がいいかけた時、  
ほくは、自分でもおどろくほどの大きな声で  
それをさえぎって言った。

「そうです。ほくは何もかも、親父にそっくりなんだ」あわてて叔母は、  
「落ち着きなさい。亘さん。今度のことは、みんな私が、そつと胸にしまつて置くだけで誰にも言いませんからね」その時、叔母の唇が、額に触れた。それから叔母は、静かに部屋を出て行った。

憤りと、羞恥心と、途惑いがからみ合つて  
ほくの心は騒いでいた。



高校に入ってから半年、ぼくには、特定のガールフレンドはいない。単なる女友達ならば、幾人かはいるが、彼女等は、ただそれだけの存在なのだ。彼女等の一人一人が、それだけで満足していないのは、自分にはよく判っているのだが、それならば、一体どうしろと言うのだろうか。ぼく等はただかた十六歳の高校生ではないか。ぼくは、そんな疑問のもとに、特定の、一人の女性徒との交流は、今日まで避けてきた。

ぼくは、入学すると同時に、新聞部に入った。その夏のクラブは、隣県の国立公園D山にキャンプした。総勢十五人が参加した。最初の夜は、キャンプファイアーを囲んで、合唱やら談笑で終る。

さすがに山の夜は冷えて、ふと目覚めたのは、三時半頃だったろうか。ぼく等のキャンプ内から、三年の田辺さんがいなくなっていた、小用だろうと思った。ぼくもその気になり、キャンプを出る。夜風がヒヤッと、眠気ざましの愛撫をぼくにくれる。山小屋風に形作った公衆便所までは、ずいぶん遠い。こんな時、自分が男であることを、意外に便利に思う。一緒に来た女生徒達は、尿意をもよおすたび、ゆううつになるのではなからうかと思う。適当に小用を済ませ、ぼくは散歩がて

ら、河原の方に降りて行った。この河原には

大小無数の花崗岩が、ごろごろしている。耳を澄ますと、岩の下を流れる水の音がかすかで、息のつまりそうな静寂を、より深めている感だった。自分は、息をひそめて生きる、一個の小さな存在に過ぎぬことを、知ったような気がした。ぼくはその時、星あかりの下、二つの人影を見た。二つの影は、立ったまま、一つになった。瞬間それが、田辺さんと、同じ三年の真梨子さんであることがわかった。真梨子さんは、ぼくらのあこがれだった。背が高く、肌がとてもきれいで、真黒な長い髪が、とても魅力だった。ぼくら下級生にとってもやさしく、ひそかに、お姉さんと呼ぶ友人もいた。その真梨子さんと、田辺さんが何かあるってことは、ぼくは前から気づいていた。が、ぼくの直感を、誰にももらしたことはなかった。体の半分以上はある岩が、ごろごろしている石の河原を、ぼくは二人の方に、身をひそめて近づいて行った。二人の荒い息使いが、等身大の岩の向うでした。

「まさるさん、お願い、やめて」間違いなく真梨子さんの声だった。荒い息使いの間に彼女の小さな叫びが聞こえた。

「愛してるよ。愛してるよ。君に夢中なんだ真梨」低い、ソフトな田辺さんの声が、彼女

の小さな叫びを押し殺すように聞こえた。

ぼくは、息を殺して岩の向こうに目をやった。ショートパンツとブラウス姿の真梨子さんを、田辺さんの大きな体が、上から押さえつけていた。彼の顔は、真梨子さんの顔にかぶさっている。

彼が唇を離す度、真梨子さんの呼吸が荒くなった。彼の、乳房を押さえる掌を拒んでいた真梨子さんの手が、力なく伸びる。いっときして乳房を離れた田辺さんの手が、ショーツパンツのベルトに伸びた。

彼女は全身をよじって、彼の行為を拒んでいる。

「お願い、やめて」彼女はそう何度も、泣き声で言う。時がきて、彼女は静かになった。

彼女の顔を閉じた顔が、淡い星あかりの下に、上気しているのがわかった。

二人から、息を殺して去るぼくの胸は、早鐘を打つように騒いだ。ぼくの手には、真梨子さんのピンク色のショーツが握られているのだ。無意識にぼくは、彼女の足もとの下着を、奪っていたのだ。

みんなの朝は早く、まきぞえを食ってぼくも、重い頭を抱えて谷川に、顔を洗いに行った。昨夜の男女の行為は、まったくの幻想のように思える。が、あのことが真実であるこ



とは、ほくのリュックの底の、ハンカチに包まれたものが、証明している。ほくは朝からそれとなく、真梨子さんの顔色をうかがっていた。昨夜の行為の後、彼女は、自分の下ばきが紛失したことを、きつと疑問に思い、その結果、不安な朝を迎えたに違いなかった。が、彼女の表情には、まったくそのかげがなく、ただ美しく、すきとおるような肌の清潔な顔が、そこにうかがえるばかりだった。自分にはひそかに驚嘆していた。男女の行為は、常にこのように自然で、おだやかなものだと言うのか。偽善とは呼ばせない美しさが、彼女の瞳に宿っていた。その日、全員で登頂した。そして、二日後の午後、山を去った。

ほくが帰った時、ちゃんと風呂がわいていた。汗と泥にまみれたほくを、叔母は笑顔で迎えてくれた。その夜遅く、ほくは机の上でハンカチの包みを解いた。真梨子さんの、淡いピンクの下着は、しわになっていた。ほくはそれを、掌で伸ばしながら、形を整えた。彼女の体の触れる部分に、うすくにじんだ、しみがあつた。ほくは、下ばきに顔を押し当て、彼女の匂いを嗅いだ。

強烈な臭気が、鼻を打った。ほくはそれを悪臭とは呼べない。ほくはその時、猛烈に興奮していたのだ。その夜からほくはこの下着



に、夢中になった。強烈な興奮がほくを襲うと、その下ばきを利用して、ある行為に移るのが、常であつた。ある夜は、彼女の薄汚れたそのショーツをはいて寝た。幾日か後には彼女の下ばきは、すっかり汚れてしまった。

淡いピンクの上に、ほくの興奮の跡が、いくつもしみになって残っていた。が、彼女の匂いはいつまでも、ほくの嗅覚を、刺激した。十月初めのある夜だった。ほくは二階の自室の障子を開いた。叔母がほくの椅子に座っ



ていた。叔父と牙子は、隣りの家に行つて、留守だった。ぼくは黙つたまま、机に近付いた。突然叔母が立上がった。叔母は、右手をぼくに突き出した。その手に、真梨子さんの下着が、つかまれてあつた。瞬間ぼくは、ギョツとした。「どうしてそれを？」そう尋ねながら、みるみる自分が真青になっていくのが、よくわかつた。叔母は、さも不潔なものを見るような目つきで下ばきを見て、それをぼくのほうに放つた。胸に当たつて足もとにそれは落ちた。叔母は、ぼくに近寄つて言つた。

「何から何までお父さんそっくりの、厭な人ね」ぼくは、羞惡感を抱きながら、その言葉を聞いた。と同時に、大きな疑問を感じた。叔母は今日まで幾度となく、「お父さんそっくりね」と言つて、ぼくを非難してきた。いつの間にか、ぼくには父が、惡の象徴の如く思へだし、漠然と悪いことは、父に關係してゐるのだと思うようになった。が、いま初めて、叔母の口から、父の惡の正体を聞かされたような、氣がした。「女の下着を盗むことが、どうして父に似てゐるのです」ぼくは、捨鉢な氣持になつて、叔母に言つた。叔母は、不意に隣れむような目つきになつた。そして言つた。

「亘さん、いつかはあなたに話さなければならぬと思つてたのよ。でも今日まで、その機会がなかったけど、今夜は、ちょうどいいわ。あなたのためになることだから、まじめにお聞きなさい。あなたのお父さんの礼一郎さんは、世間で言う、いわゆる變態者だったの……」叔母は、ふいに言葉を切つた。ぼくがその場に突然しゃがみ込んだからである。正直言つてぼくは、息が苦しくなるほどの衝撃を、叔母の終りの言葉から受けた。がそれは、いま初めて聞いたことではないような氣が、ぼくにはなし始めた。叔母のつぎの言葉を黙つたまま、ぼくは待つていた。しばらくの後、叔母は口を開いた。ぼくはその言葉をぼくに、叩きつけられる言葉の如く聞いていた。父の變態ぶりは、時や所をかまわず、目にあまるひどさだったそうだと。叔母も、便所の掃き取り口から用便中、何度も覗かれた。女の下着を盗むことなどはまだいい方で、女便所を覗いたり、よその夫婦の寢室を夜になると覗いたりしたそうだと。

母がぼくを身ごもつた時、父の惡癖が、これを機におさまるだろうと、母は喜こんだそうだが、ぼくが生まれて一月ばかりが限界だった。

母はぼくの体を案じて、その頃からたびたび、

び、ぼくを叔母の所にあずけたのだ。十一月の十三日、とても寒い夜だったそうだが、母が叔母の家を訪ねて、「亘のことを、くれぐれもお願ひします」と言つてぼくを、叔母に渡して、その夜自殺したとのことだ。

一年後父は病死し、それ以来ずっとぼくは叔父夫婦の子として、育てられた。

叔母の話は、以上のような内容だった。話が終つた時、ぼくは、叔母の顔も見ず、部屋を飛び出した。その時のぼくには、ただ、何に對するものかわからない、憎惡の念だけがあつた。何もかもが、ただ憎かつた。

ぼくの父母の、ことの真相を叔母に聞いてからと言うものは、いつも自分の体内を脈々と流れる血を意識していた。そうすることがせめてもの自分への慰さめだった。

叔母との仲はべつに変わりしなかつた。叔母も、言うべきことを言つたので、すっきりした氣持になつたろうと思う。

ぼくは二年になった。牙子は中学三年になり、すっかり大人びてきた。彼女は体操部にゐるせいか、均整のとれた、いい体をしてゐた。叔母に似て色が白く、美人だった。

六月の下旬、牙子は修学旅行で北九州に發つた。一日遅れて叔父は、大阪の本社によばれて旅立つた。広い家に叔母とぼくは残され





た。思えば今日までこの家に、叔母と二人っきりになったことはなかった。叔父の発った日、叔母は朝からせわしなく、動きまわっていた。夕食後ほくは風呂に入った。二階に上がってしばらくしてほくは、湯槽につかる、

叔母の湯音を聞いた。ほくは不意に、叔母の真白な裸体を目前に見た。激しい興奮がほくを襲った。しばらくして、階下が静かになった。その静寂の中でほくは、ひっそりとある行為を行なった。瞬間瞬間に、叔母の裸像を

閉じた瞼に描きながら。終って、虚無感を噛みしめている時、突然障子があいて叔母が部屋に入って来た。ほくは驚ろいて立ち上がった。

「前を隠しなさい」そう言って叔母は、唇に笑みを浮かべて、部屋を出て行った。残されたほくは、羞恥で顔が真赤だった。羞恥の後に怒りがほくの心を占めた。パンツとデニムのズボンと一緒にほくは部屋を出た。叔母の部屋の前で、一瞬ためらったが、障子を思い切りあけた。ふとんの上に、寝巻姿の叔母が、こっちを向いて座っていた。その顔は、ほくの男を誘っていた。ほくは唇を噛みしめて、叔母に近づいた。叔母は、目前に立っているほくをひき寄せた。叔母の手が、ほくのGパンの前のファスナーをおろした。そして叔母は、ほくのGパンと一緒に下着を足元にずらした。瞬間ほくは、叔母に押しかさるように体をあずけた。

湯上がりの叔母の肌が匂った。ほくは夢中で叔母の唇を求めた。粘っこいそれだった。ほくは何も判らなくなっていた。

ふと目覚めると、朝だった。ほくはうつぶせのまま眠っていた。叔母はいなかった。枕もとに叔母のたたんだ夜着があった。

その日から四日後の牙子が帰って来る日ま



で、叔母とぼくの、行為は続いた。

叔母はその四日間、派手な藤色の下着をはいていた。牙子が帰って来て二日後、叔父が大阪の出張を終えて、戻ってきた。その前日クラブ活動で帰りの遅い牙子のいない間に、ぼくは叔母を求めた。

「もうこれで終りよ。亘さん、わかってるわね。楽しかったアバンチュールは、こっそり二人の胸の内にしまっておきましょうね」叔母の藤色の下ばきと、自分の下着をつかんでぼくは二階へ駆け上がった。

九月の中旬のある日だった。残暑がきびしく、叔母とぼくは居間で氷水を食べた。パンツ一枚のぼく、シュミーズ姿の叔母。

ぼくは、叔母の汗と体臭に刺激され、激しく興奮した。

その時、牙子の声がして、障子が開いた。牙子の小さな叫びと、叔母とぼくが体を離れたのは、同時だった。二階に駆け上がって行く牙子の足音を聞きながら、青白い顔をした叔母はせわしく身づくろいした。

ぼくはその間仰臥して、天井を見つめていただけだった。自分でも驚ろくほど、無感動だったのだ。叔母と牙子の間に、どんな話し合いがあったか知らない。その夜叔母はいつも通りに、いや、いつも以上に陽気に振舞い

牙子はいくぶん皮肉なまなざしで叔母を見、ぼくを見ているだけだった。その日以来、叔母とぼくの関係は終わった。

ぼくは自分の欲望を、あの行為で偽わることができなかった。ある夜、風呂から上がったばかりの牙子の部屋に、ぼくは無言で入った。叔父と叔母は夕食後、近所の映画を見に行つて留守だった。立ったまま、牙子は、いくぶん青さめて、反抗的な目でぼくをにらんでいた。薄桃色の花模様のネグリジェの下で真白なショーツが、ぼくを刺激した。その瞬間ぼくは、欲望とは異質の、憎しみに似た感情を感じた。叔母との仲を引き裂いたのは、この細い肉体なのだ。ぼくはつぎの瞬間、牙子の両肩をわしづかみにしていた。彼女の全身に緊張が走った。

十二月の中頃のことだった。学校から帰ると、真青な叔母の顔がぼくを迎えた。今にも泣き出しそうな、そんな弱々しい叔母の顔を見たのは、初めてのことだった。

「どうしたんです」ぼくは尋ねた。

「亘さん、あなたって人は」叔母の声は震えていた。牙子が居間で、突伏していた。牙子が妊娠していると言うのである。

ぼくは瞬間途惑つて叔母の顔を見た。「あなたが悪いんだ。ぼくを独りにしたあなたが

悪いんだ」ぼくは叔母にそう叫んだ。叔母の当惑のまなざしを背に受けてぼくは、自分の部屋に駆け上がった。それから一週間ばかり後、叔父の前をうまくつくろつて、叔母は牙子を、隣町の病院に入院させた。

この家をまず出ることが先決だ。ぼくは牙子の留守中、そう決心した。が、牙子が入院したことを知った叔父は人が変わったように激しく叔母を詰問し、すべてを知ってしまった。その結果ぼくは、叔父の家を追われるように出た。

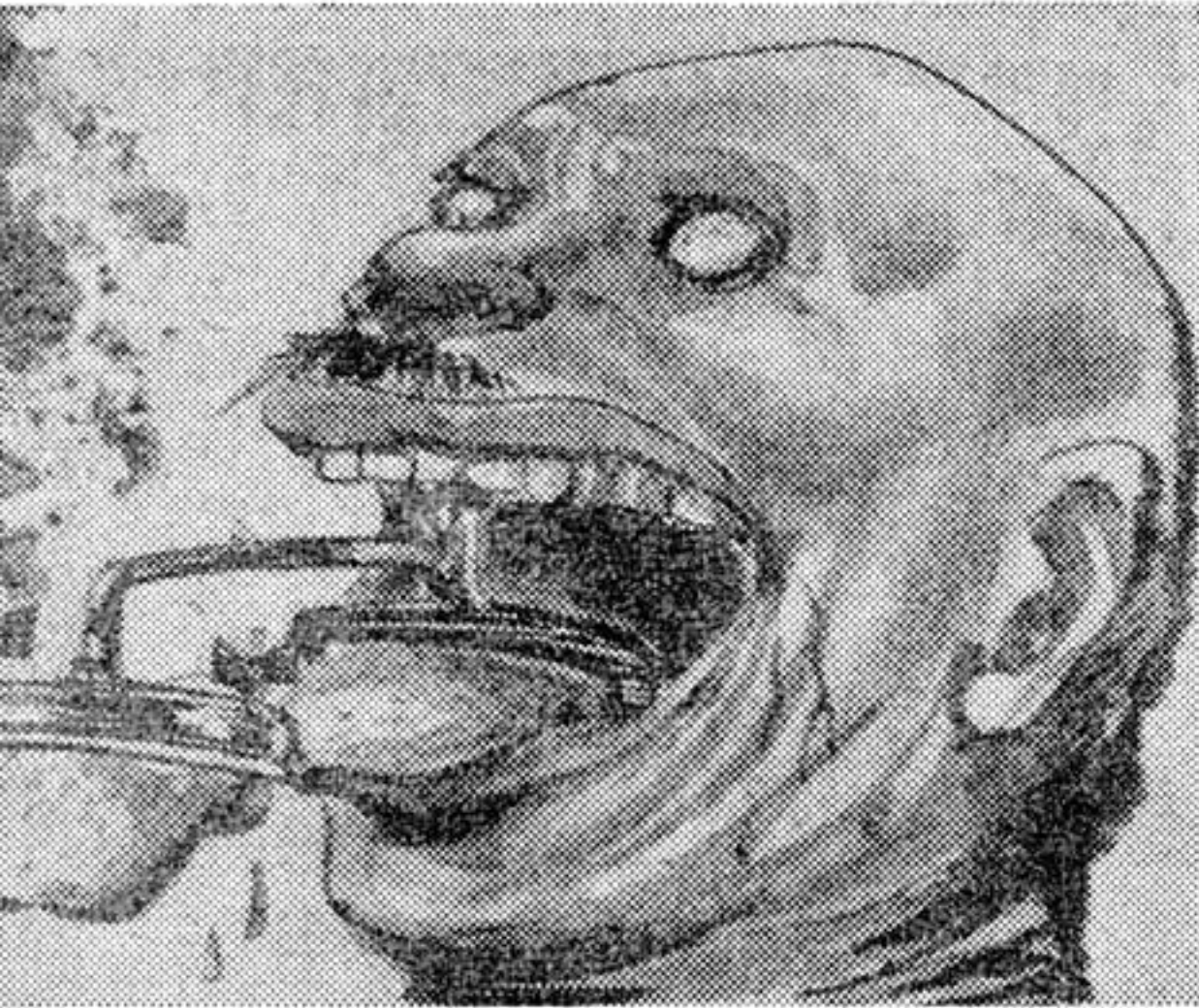
ぼくの移ったアパートの部屋は、小さな窓が一つある。しみだらけの灰色に汚れた壁に包まれた四畳半の独房のような一室だった。使い慣れた机だけが、角の大きなスペースを埋めている。この部屋に移ってから、ぼくは一度も学校に行つてない。この部屋を出るのは、食事の時だけ。汚れたカーテンを閉め切って、夜も昼もない暗い部屋を、暗い裸電球が照らしている。何もすることのないぼくは仰臥して天井の節穴をさがしたり、壁のしみを数えるだけ。そして、——明日はどうしよう、そうつぶやく。この言葉を今日まで、何十回何百回繰返して来た。一瞬に何もかもが狂ってしまったいま、ぼくは本当に明日をどうしたらいいのか判らない。



# 畜獣デリムソン

## VII

阿麻哲郎  
江淵晃夫・絵



### 不安

高梨教授は地下女性政庁宿舍の、その中でも、もっとも上等な一室を当てがわれていた。毎日の生活にも何一つとして事かくことはない。入れかわり立ちかわり、ご用うかがいに顔を出す係の女性職員に、どんな所用でも頼んで用が足りないことはなかった。

へやの造りもなかなか気がきいたもので出窓ふうにはどこされた窓の外が、地表とはかなりへだたった地下であるにもかかわらず特殊な仕掛でもあるのか、柔らかな薄水色の光線が静かな落ち着いた色調でさしこんでい

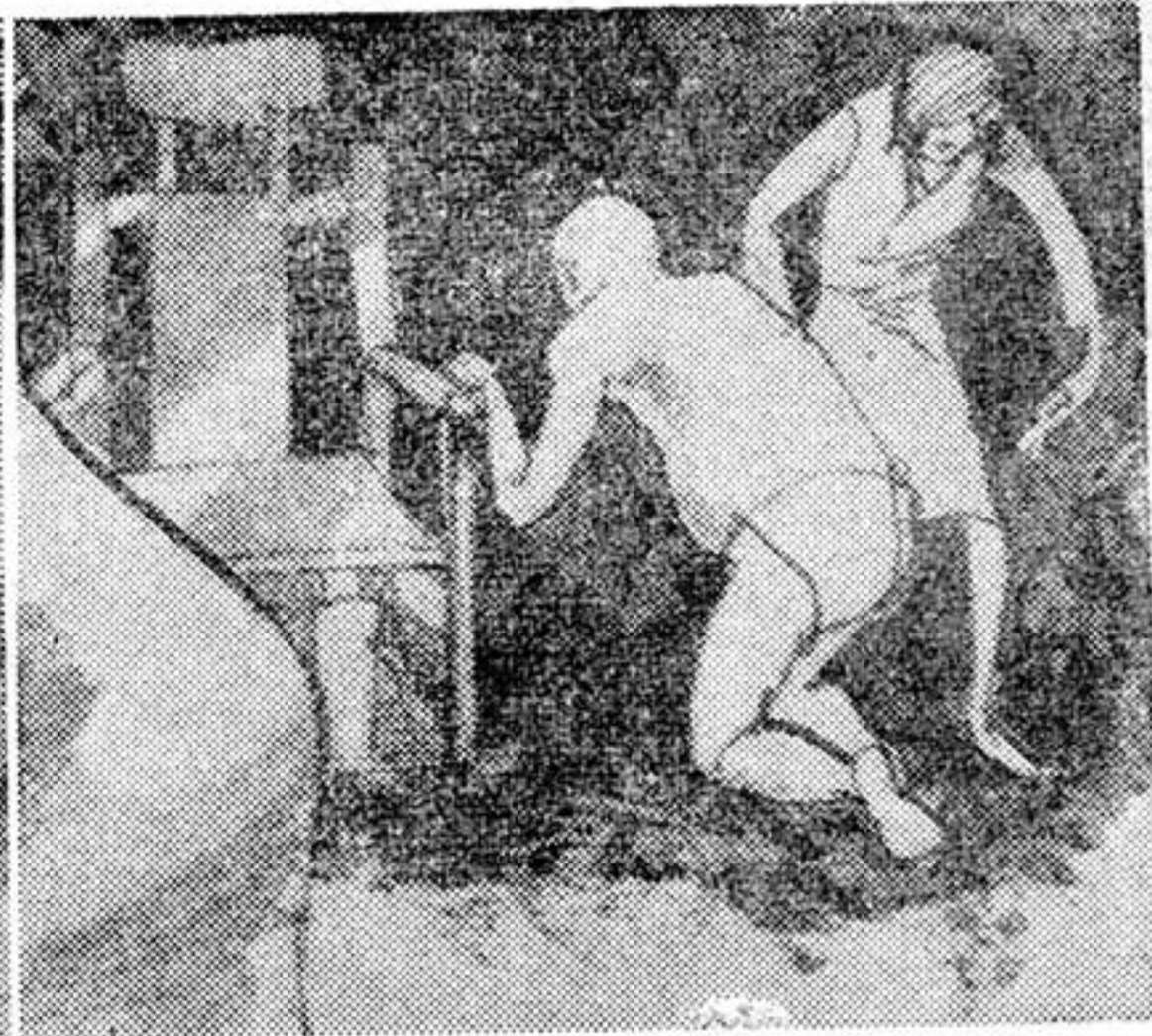
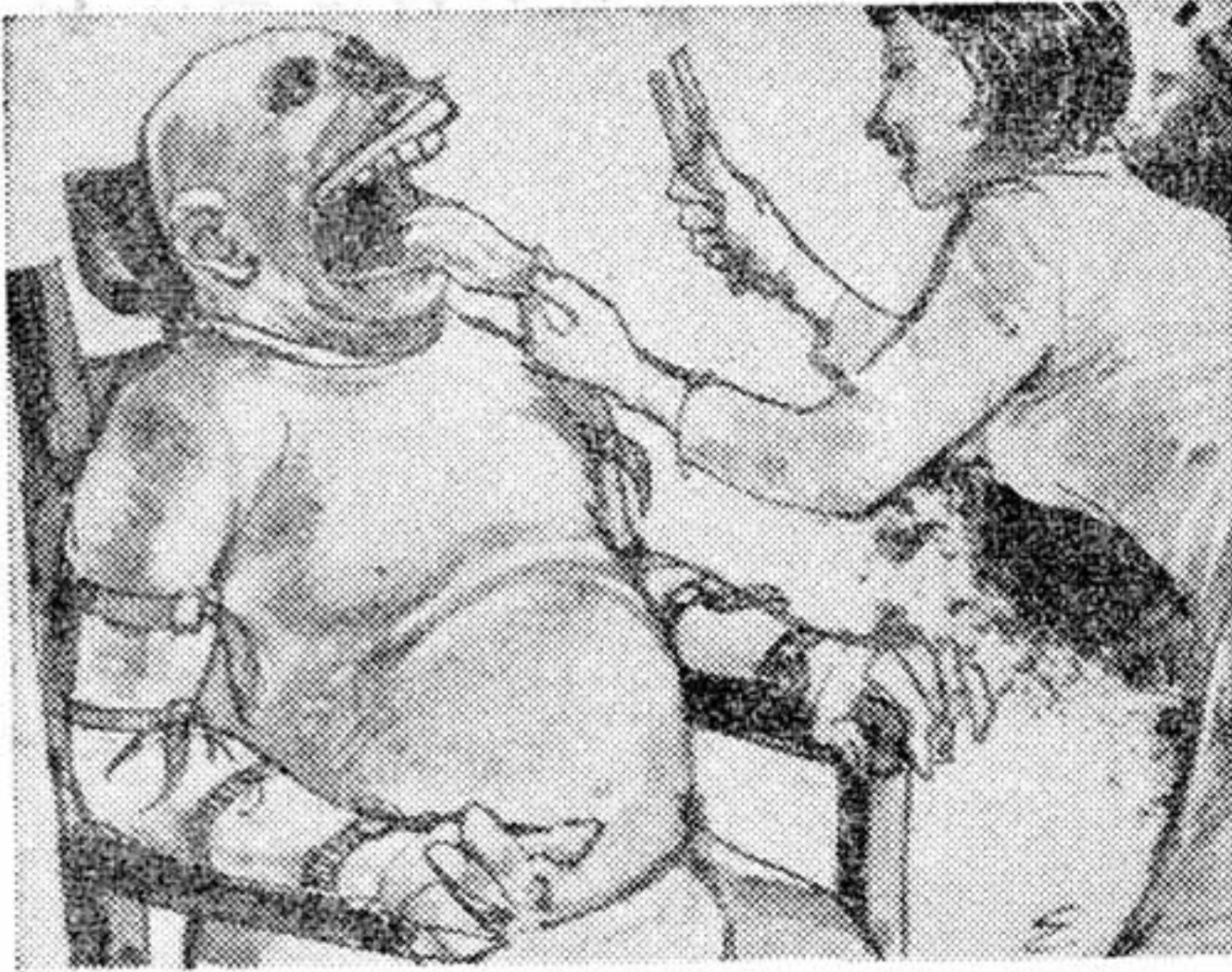
た。

教授は、あれから幾度も教え子たちとは顔を合わせた。顔を合わすというより、教え子たちに取り囲まれての生活であった。その中には、臨時政府の代表委員である小沢美和はもとより、シャーリーもルミ子も、元東亜放送の下沢のぶ子もいた。

彼女たちは、このあわただしい大政変のさなかのもっともいそがしい時期において、多少とも時間の繰り合わせがつけば、お互いに入れかわり立ちかわり、教授をなくさめにやってくる。

だからすでに老境に入ってなくさめのない





教授としては、これは何にもましてありがたい身の上だった。

女性解放の真の意義を、彼女らに鼓吹したのは教授である。教授の、心に期して遂げられなかった、その解放の日が、恐しい破壊的な戦争を契機としてやってきた。それを有効適切に、鉄の意志でしとげたのは、かわいい教え子である女性たちであった。教授の意図はこうしてりっぱな実をむすんだのである。よくやったと、彼女たちをほげまし、ほめてもやりたい。

ところが、すなおにそう言えない底深い恐怖が教授にはあった。

単に理論として、内側にしまっていた間はそれが非常に美しい、理想の燈を教授の心にもしていた女性世界は、こうしてそれが意外にも、現実のものとして実現されてみると思いもかけぬ深刻な打撃を心に受けねばならなかった。

所詮わが学究の道は、理論上でのみ許された甘い学者の空想にしか過ぎなかったのだろうか。

「男性の一員として、わたしは諸君にはじめる」と、教壇から叫んだあのことは、単なる感傷か、あるいは女性におもねるための、きざったらしいゼスチュアか!

同性である男性たちが、今はデリムソンの呼び名のもとに、新畜類としてよみがえったことを教授は知っている。

男性の一員として、わたしは諸君に恥じるといったかつてのことばが本意であれば、いさぎよく己もデリムソンの境がいにも身を落とすべきだろう。その矛盾撞着の深まりの中に教授は、己れもまたデリムソンとして断罪される日の近いことを、身に感じておびえるのであった。

美和やシャーリーや、下沢のぶ子の教授に対する態度の陰に、心定まらぬ不安のあることを教授は見とった。決まって彼女らが、肝心のことに語尾を濁らすことへの不安からルミ子を揃えてその悩みをぶちまけたことがある。

「何も遠慮することはない。今はもはや、女性の時代となった。ほくの任務は、もう終わったのだ。どうかこんな賓客扱いの待遇はよしてほくをデリムソンにしてはくれないか。君たちの奴隷になるんだったら、何もいふことはない。喜んでそうなるよ」

「先生、何をおっしゃってですか。先生のような方までがデリムソンだなんて、わたくしたち、そんなことおっしゃられると、恥ずかしいくらいですわ」



ルミ子の表情には何のこだわりもなく、むしろ晴れ晴れしいものさえあった。

「ほくだって、やっぱり男性のはしくれた。責任をのがれるわけにはいかない」

そういう教授のことばの中に、《男性の一員として君らに恥じる》といった、かつてのあの幾分悲壮な、そしてどこかと思わせぶりで大仰な、気を引くような調子が含まれていた。

教授は自分で自分を悲壮に感じ、それが子どものようにたわいないものにさせていることを、自分では意識しなかった。

ルミ子はまじめな態度で、そしてきっぱりと、そんな過度な思い過ごしはやめてくれ、たとえ先生が男性であっても、例外の特赦やお目こぼしというのではなく、理屈抜きに先生はわたしたちの恩師である。その人をデリムソンなどとは、いくら何でも考えられることではありません、と、口をすっぱくして説き聞かしたのであった。

## ☆ ☆

ルミ子は、教授の扱いについては、いくら恩師といえども例外は許されない、男子である以上はデリムソンとして女性に仕えさせるのが当然だ、という、もっとも強硬な意見を主張し続けてきた立場からみると、彼女のこ

のような、教授への思いやりある説明の仕方は、一貫性にかけるものがあつた。

彼女の真の意図がどのあたりにあつたのかこれは今のところ、何とも察しようもなかったが、何か一筋のものではない、たくらみあつてのことであるのは、ほぼ推察された。

しかし教授の身にしてみれば、ルミ子の慰めは大きな力である。興奮のために深い疲労をおぼえ、ルミ子のことばにいちおうの安堵はしてみたものの、また別の不安が頭をもたげて彼をおびやかすのであつた。

## なぜ恥ずかしい

つづまるところ教授は、日常彼に対する扱いがいかに丁重をきわめ、ルミ子がねんごろな説明で不安に波立つ彼の心を静めようとしても、彼がすでに捕われの身であることを否定はできなかった。

何事もない平安な日々が、それからしばらくの間続いた。

生活に不足はない。女性たちの優しい心づかいには恵まれている。年齢の加減で、多少からだの不自由を感じ始めてはいたが、けっこうそれでも、現在の特別の境遇には感謝せねばならなかった。

《絶えず争いと戦争を事とし、長年にわたつ

て女性を苦しめてきた男性の一員として、わたしは諸君らの前で深く恥じる》

幾多の教え子である女性たちを感動させた教授の叫びは、しかし現在ただ今のような、とてつもない女性革命の時代を予想してのものではなかった。

男性の姿をついぞ見かけなくなつてから一年近くの時が経つ。見るもの聞くもの女性ばかりの世界であつた。甘酸っぱい女性の体臭だけで世界は満たされている。

教授はやりきれなく思った。同性の体臭が恋しいと思った。粗野でかつ達で、どこか獣じみたところのある男性特有の野性がなつかしかった。それを思うと老いの身が、若い時代を思慕するあの血のうずきに襲われる。

しかしほかの事ならともかく、それが男の話になると部屋付きの女たちは、けわし気な顔付きになつて教授をたしなめる。

「先生、男の話はもうおやめになつて下さい。男というものは今ではこの世にはいないのです。人間は女性ばかりです。女性が人間です。人間は王者です。王者にいつさいをささげて仕えるのがデリムソンです」

教授はこれに対して、何も論ばくする余地のないことをさとしてだまっていた。

「デリムソンに会わしてくれないか」



## 清 掃 具

一度教授は、こういう申し出をした。なんでも簡単に受けとる向きのある無邪気なシャーリーは、それを引き受けて美和に言った。

美和はたしなみ深くそれを受け、でも困った事だとひそかに頭を悩ました。このまま何事もなく打ち過ぎて、教授だけは特殊な賓客として、そつとそのまま余生を送らしてやりたかった。余計な動揺やせんさくは、教授自身のためには非常に危険なことであった。

それが美和には危ぶまれた。美和だけではない、大部分の女性が同じ思いであつたろうが、シャーリーは持ち前のこだわりのない快活さで、

「デリムソンぐらい、いくらでも見せてあげるといいわ。彼らへの飼育振りと、彼らがわたしたちに尽くす奉仕の完全さが、どんなものだか、むしろそれを見ていただくことが先生に今の生活を理解していただくいちばんの道ではありません？」

「そうかもしれないけど、でもデリムソンがわたしたちの排せつ物によって生きている状態を、先生に平気でごらんに入れられて……たとえば、わたしたちは、革命前のトイレというものを、今では使用しなくなってくるでしょう。今では慣れっこになって平気であるかもしれないけど、わたしたちが用を足す

のは、皆デリムソンの口の中よ。その肝心のところまで実際の状態として先生のお目にかけられて？」

「そうだね。そのあたりになると少し恥ずかしい気がするわ」

「なぜ恥ずかしいか、それは先生を、やはりまた革命前の異性として認識するからよ。もうわたしたちの間では、当たり前のこととして受け取られている普通の風俗が、先生の前でははばかれる、そこが問題よ」

その時、少しあき加減になっていた戸を押して、ルミ子はいってきた。

「そんなにおふたりとも、仰々しくお考えになることはないわ。何でもお見せするのよ。

昔の先生のお仲間であつた男性が、今ではどんな状態で生きているか、よく見ていただくのよ」

「ルミ子さん」

さすが仲の良いシャーリーさえも、こんなあけすけなルミ子の言い方には、手を引いてたしなめなくなった。

ルミ子はだが、こんなシャーリーを黙殺して言った。

「それが復讐というもののよ。男性の一員として女性の前に恥じていらした先生への、もっとも好意ある態度ではなくて」

女ばかりの世界で、飼ひ殺しにされているような息苦しさと、それから妙にからだにまつわりついてくる目に見えぬ恐怖から、教授は無性にデリムソンの様子をうかがい見たくなった。

とにかく、自分が男であるという体質だけはどうにもならなかったのである。

地下政府の政庁は、床総延面積一五、〇〇〇平方メートルもあつたろうか。それは、女性職員ひとり当たり、三〇平方メートルという、しごくゆつたりとした快適な面積であつた。

もちろんそのほかにも、従畜用デリムソンあるいは食肉用デリムソン、トイレ用デリムソン、気なぐさみに拷問をして、文化生活にありがちなストレスを克服するための拷問用デリムソンと、すこぶる多様な畜獣を飼育するための、畜舎の設備も設けてあつたので、事実はこのままの面積だけでは、多少手ぜまであり、そのうちには、地上に古代エジプトあたりで建設されたであろう、壮大な庁舎、それにふさわしい各設備や住宅を、再び革命後の世界に再現される計画が練られていた。それが新政府の《新建設五カ年計画》であ



り、この実現のためには、延三五万びきの労働デリムソンの労力を必要とした。できるだけこれには機械力を避け、デリムソンという獣的資源を無計画に投入することで、これを果たそうとした。従ってこれを裏側からみれば、これほどぜいたくな遊びはなかった。

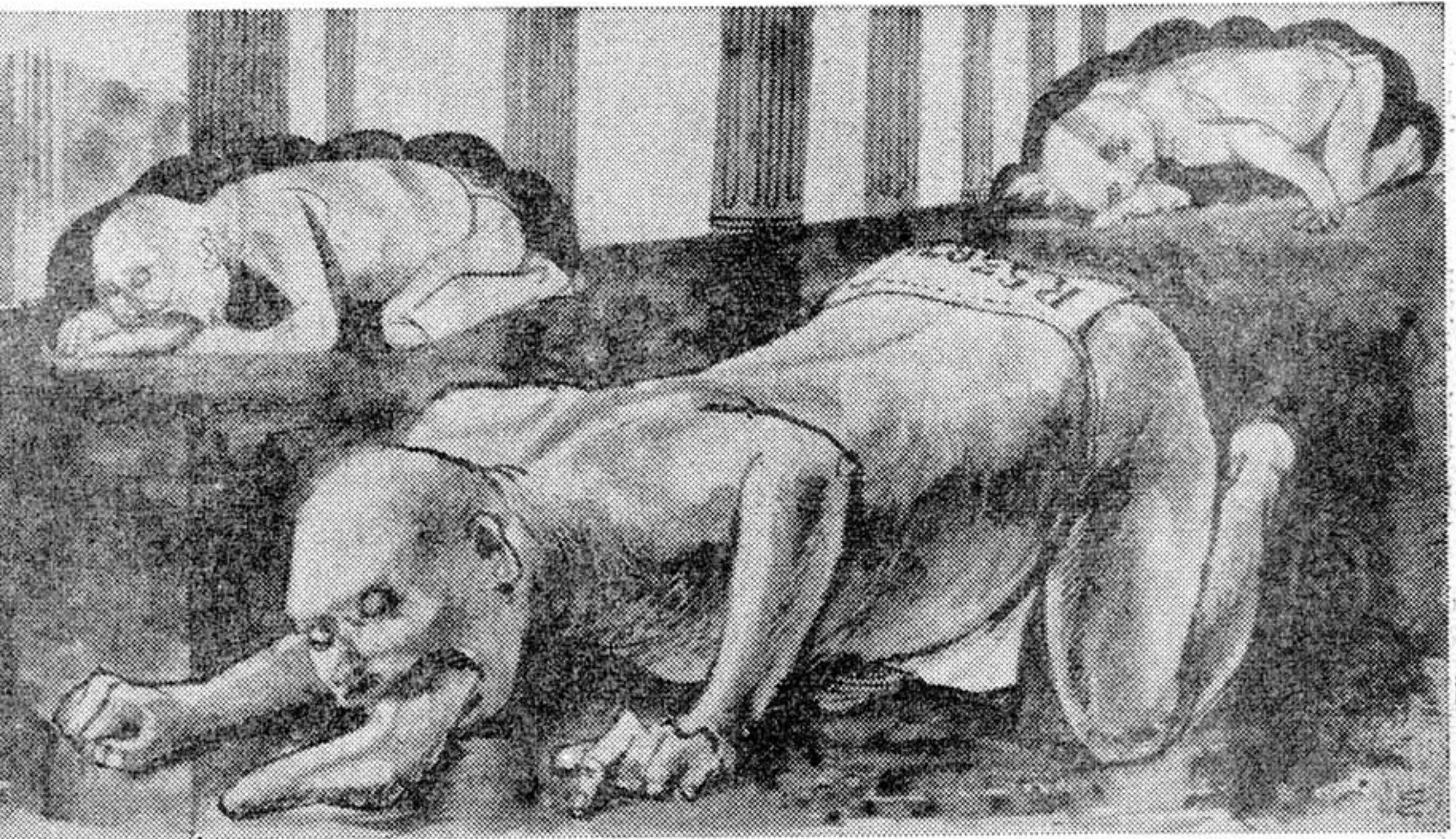
☆ ☆

庁舎の各部屋、豊かな彩色と豪華な装飾に飾られたこの地下世界の内部は、廊下の隅々に至るまでよくみがきこまれ、ちり一つとどめない完ぺきの状態に維持されていた。

その廊下を、清掃用デリムソンが、力無い様子で、イモ虫のようにはい回っていた。彼らには、常、獣であるという自覚を徹底的に呑みこませるため、いっさいの作業には用具を使わせなかった。

用具を使うとは身のほど知らぬ振舞いであり、すべての役務はからだをもって果たさねばならなかった。

だから、そうきんの代わりに小



さな舌先で廊下をなめ歩く。電気掃除機の代わりに、口でホコリを吸い上げる。

幾分でも作業がしやすくするために、清掃用デリムソンは、毎日専門の係の女性職員の手で、口がいを広く、舌を少しでも大きく、というねらいのために、大きなペンチ用の自動修正機で、口がいをむりに押し広げられるのであった。

それはデリムソンにとっては、大変な苦痛で、思わず叫声をあげて、狂い出すほどであったが、器具に付属する手かせ、足かせでしっかりと固定されていたので、目を向き、油汗を流すほかにはどう処置の仕方もなかった。

そういう責苦にも似た基礎修正を施された清掃用デリムソンは、今度は仕上げのために各女性職員の個室に配付される。

個室用清掃器具としてでもあり、またそれが清掃デリムソンとしての、最後の仕上げを施す重要な目的も同時にあった。

女性たちは、いずれも皮革用デリムソンからはぎとった生皮製のくつをはいていたが、そのくつを、いつも足下に、はべるようにうずくまっている清掃デリムソンの、口がいの内深くに差しこんでいた。

夜床につくときは、靴箱のようにデリムソンの口がいに、そして昼間仕事の時とか、あ



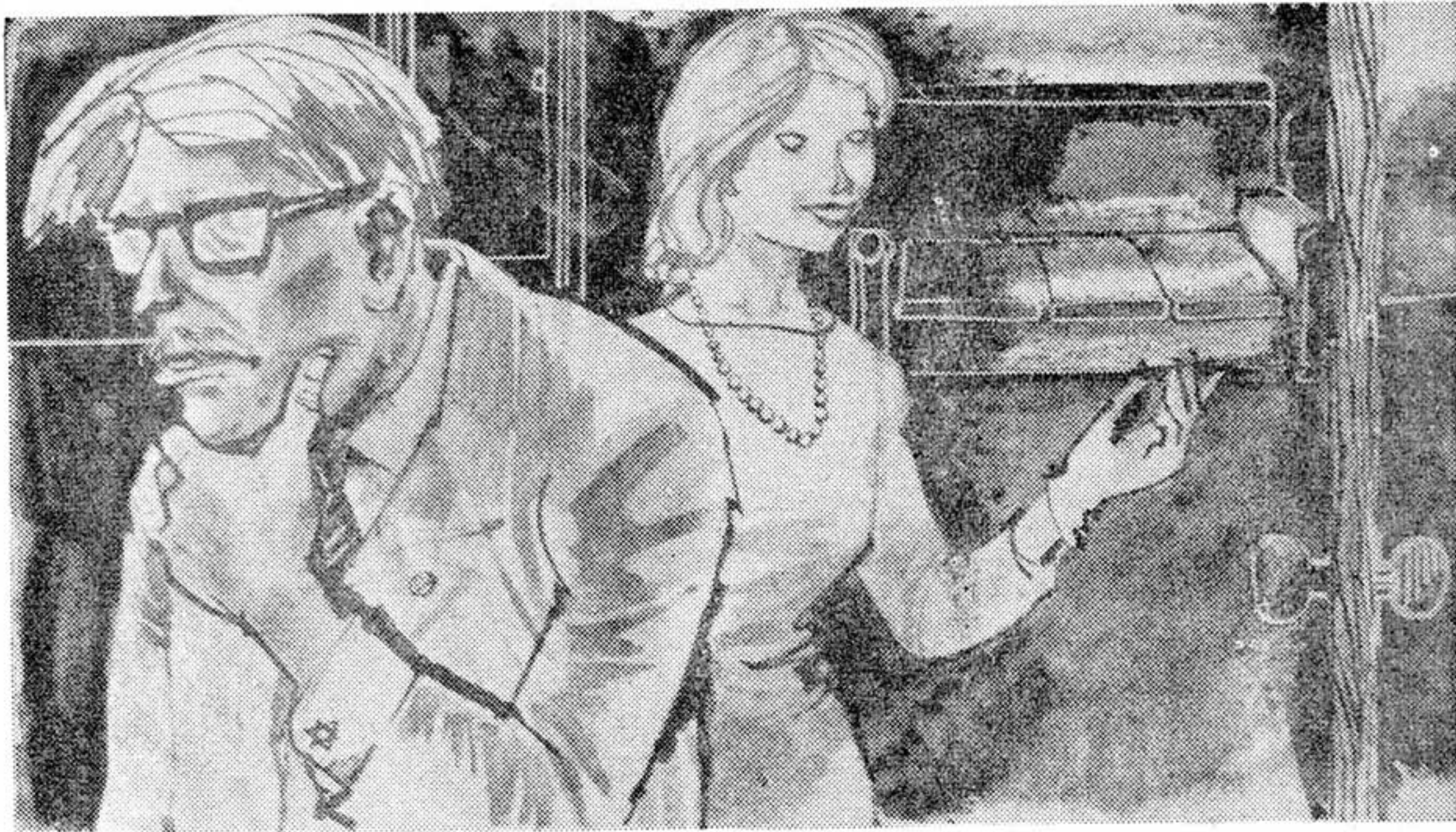
るいはレジャーを雑談で過ごすときなど、足元にデリムソンをはきかせて、その口の中にくつを深く差しこんでいるのであった。

そうすると、第一、くつ皮の持ちがよく、またデリムソンが、清掃に不自由をきたさないだけの、特別大きな口にため直すのに、意外な効果があった。

皮革用デリムソンとは、第二次大戦に際して、補塲の生皮をはいで、部屋装飾に使ったという、彼女らの先輩、ナチ女性の故事からヒントをとったものであった。

そのうちもとは基礎修正を受けている、素質のあるデリムソンのこととて、楽々と女子職員のそのくつを、口の中にすっぽりとくわえこむほどに口も大きく、舌も広がるようになる。舌は一五、〇〇〇平方メートルもある、庁舎の総床をふき上げるぞうきんである。

それで仕上げのために、デリムソンはあらかじめ広がった舌を、床に腹ばいのまま女主人の足元に



広げる。それを彼女は、まるで薄もちを伸ばすように、くつ裏でとんとんと足拍子をとって舌ならしをするのである。それが終わればいちおう卒業である。

彼らは、庁舎共有の清掃具として、廊下はもとよう、応接間、娯楽室、資料室、会議場のホール、食堂、図書室等の清掃の任につく。そして個室には、またつぎの未完成の清掃デリムソンが各配付される。

### お前もデリムソン

高梨教授は、まっさきにこの清掃デリムソンの働く姿を廊下で見た。大方の彼らは、革命前の彼らの身分や立場を証明するかのよう、鼻下のヒゲだけが、りっぱに、手入れされ、変わり果てた彼らの今の境遇を、ひときわみじめに、こっけいなものに浮き立たせていた。

清掃デリムソンは、いったいに革命前は局長クラス以上の官吏、政治家、教師といったように、指導層の立場に立っていた人たちが多かった。

これはそのように、以前の職分からそう選定されたわけではなかったが、たとえば食肉用デリムソンには、元力士、レスリング選手という、肉付きのいい男たちが選ばれたよう





に、指導層をなした人たちは、部下に訓辞をしたり、ラジオやテレビでしゃべりまくることが多かったので、自然彼らの口がいが、並みの人より発達して大きかったのが清掃デリムソンに選定された理由で、他意あるものではなかった。

革命前の彼らは、多く鼻下にヒゲをたくわえ、いろいろと戦争計画や女性圧迫の行政措

置を講じたりしていたもので、そのときの名ごりのヒゲだけは、デリムソンの境がいに落ちたいまでも許されていたので、習慣とは言え、清掃デリムソンが美ぜんをたくわえているさまは、これを見る高梨教授にあっては、いささか、さもない光景として、映るのであった。

廊下のところどころ、油絵などが掲げられ

て息抜きのソファアが置かれてある場所にはきまってその美ぜんのデリムソンが、所在なくひさを折って床に立ち、あの大きな口をぼかんとあけ放しにしている光景には、教授もどうしてああしているのかと、案内役の下沢のぶ子に質問せずにはいられなかった。

のぶ子は女子アナウンサー時代、多くの男性ファンを魅了した優美な言い回しのトーン



をくずさず例の舌たるい声色で説明した。

「あれはもともとは清掃デリムソンが、清掃のあい間には、ああして立っていて、たんつぽの役目をも、果たすことになっているものです」

「君、たんつぽとは何だね」

「あら先生、たんつぽはたんつぽですわ」

「だって君！」

教授はとまどったようなたん息をもらして絶句した。

ちょうどふたりが通りかかった廊下の隅っこには、例のひげだけがいかめしい、清掃デリムソンがたたずんでいた。革命前、街頭などで見かけた選挙演説中の代議士の顔が連想された。

のぶ子はちよつとばかり、どうしようかと思案気に首をかしげて教授の様子をうかがったが、つと軽くせきばらいをしたかと思うとひげをはやしたデリムソンの大きな口の中へぱつと口中のつばきを吐きこんでみせた。これでおわかりになりました？　といったしなをそれで見せた。

「君！」

教授の発したことばはそれだけであった。デリムソンに対して、とても気の毒で、見ていられない気がした。そこでのぶ子の顔をま

じまじと見る。悪びれる風もなく、彼女も教授の顔をまじまじと見返す。しばらくしてのぶ子は、不意にこぼれるような笑顔をつくつて笑い出し、

「さあ、先生、先へ行きましょう」

と、教授をうながして先に立った。

ある程度のことは予想がついていたが、実状を実際に見聞するにつれて、教授の驚きは一方ならず深まった。が、あの何事もなげな明るいのぶ子の笑顔が、教授に一種の決断をそして最後の宣告を、無言のうちに告げ知らしめているのを同時に彼はからだでもって感じた。

お前も本当はデリムソンなんだ、とのぶ子の明るいまなざしが語りかけていた。

## ペ ッ ト

和歌子が地下政府の庁舎にルミ子を訪ねたのは、それから間もなくのことであった。

彼女は、谷を初め旧親衛隊の隊員たちを、背後に引見してやってきた。もう彼らには、以前中山達平の親衛隊員として羽振りをきかしていたときの威勢のよさは、どこをどう捜してもすでになかった。尾羽打ち枯らした敗残者に過ぎなかった。

その敗残者が、ほろをまともにも結構美し

さが目立つ、若い和歌子の従畜として、彼女に従っていた。

「和歌子さん、ずい分待ったわ」

ルミ子は快活に立ち上がった和歌子を迎えた。そして彼女の後にへばりつくようにしてついてきた従畜たちに目をやると、さもけがらわしそうに、

「デリムソンなんか、こんなに何匹も連れてきて」

と、柔らかな眉根をくもらして言った。

「受付の方にもそう言われたけど、特にお願いして入れてもらったの」

「和歌子さん、そんなわがままするもんじゃないわ。デリムソンは甘やかすと増長するものよ。革命後それほど時間がたってるわけじゃないし、彼らだってすぐ以前の男性時代を思い出して、生意気になるわ。教育期間中の今が肝心のときよ」

「だってこの人たち、吉野さんを殺し、わたしにもっともはずかしいことをさせた親衛隊の連中よ。だからその意味でもこの連中とは特別の関係にあるの。わかってもらえるかしら……」

「この連中に復しゅうをなさりたいとでもいうの、和歌子さん！」

「復しゅうっていうような改まった気はない



の。……ただ、この連中はわたしのおしっこがなければ生きてられないでしょ。だからわたしがおしっこすると、奪い合うようにしてみんながそれを飲むの、見てると何だか胸のここらがくすぐったいような、何ともいえない愉快な気持ちになっちゃう、どう言ったらいいかしらね」

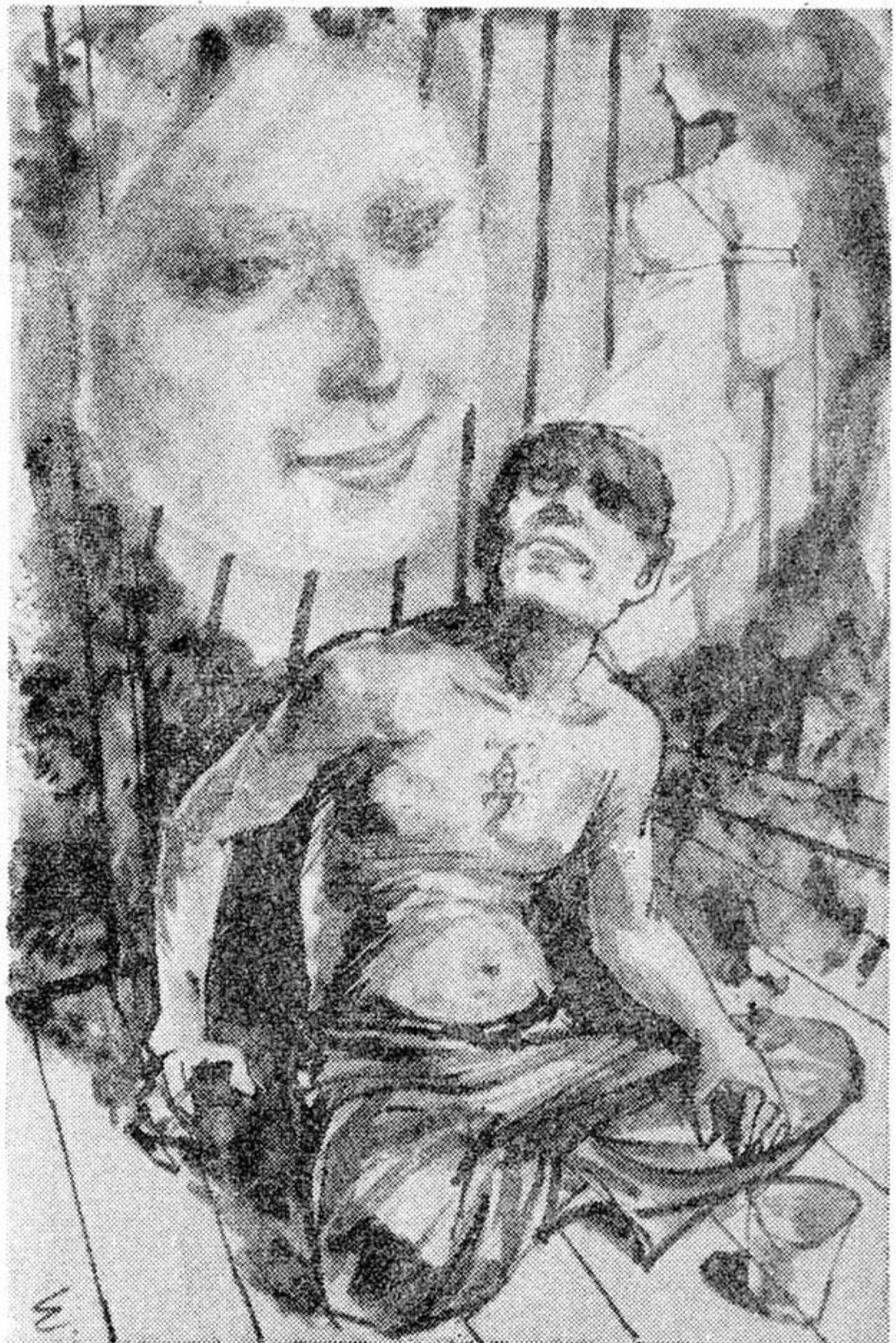
「それもりっぱな復しゅうよ。復しゅう心がそうさせるのよ。いいわ、和歌子さん。わたしが何とか取り図らってあげるから、このデリムソンたちをあなたのベットとして登録なさるといいわ」

そのとき寝台の下から、シロがのろろとはいって出てきて和歌子にあいさつをでもするように頭を下げた。

和歌子はハッとして、あの夢の中のようなルミ子との対面の場面を思い出した。

△和歌子さま。わたくしシロです。いつぞやは突然おじゃまして▽

「シロはね、わたしたちの望む、どんなところへでも、すぐ連れてってくれるの、ふしぎな力を持ってるのよ」



ルミ子がシロのあいさつに添えてそう言った。

## 達 平

中山達平は、ひとりもくねんと畜舎の中で腕をこまぬいてすわっていた。

はなやかな色どりの中にあった革命前の彼

の雄々しい姿は、今はどこにも認められなかった。しょんぼりした、うす寒い風情を漂わしていた。

彼の身边にはもうだれもいなかった。谷はおろか、あれほどはなばしい存在であった、親衛隊の隊員の、だれもが達平を見離して去っていった。



達平は女性革命の行く末が、こんな形で身に振りかかってこようとは、少しも予想したことはなかった。三次大戦があれば、世界はすべて破滅する、そしてその破滅はもう絶対に避け得られないはずのものであった。

だから彼は戦争を望んだ。人類の発展の極点は、自らの生んだ文明によって破壊されるその地点までやみくもに突っ走ることだ。またそうでなければ、終局的な意味での人間の救いはない。人間はいっそ全部が滅亡すべきなのだ。

人間がすべて滅亡し尽くしたその後に、やっと宇宙は人類発生以前の、本来の平穏な自然さを取りもどすことができるのだ。

大戦ではろんだのは、しかしある種の秩序だけに過ぎなかった。美しい若い女性だけが以前の健康と力を備えたまままで生き残った。

これは達平の目算違いだった。そしてみじめにも、自分までが、おまけにデリムソンなるあわれむべき畜獣の同類として、こうした

恥じさらしな生き方をしなければならなかったことはほとんど予想に絶えていた。

何のもくろみがあつてのことか、達平はほかの男性と別個の扱いをされた。食肉用のデリムソン、皮革用のデリムソン、愛がん用、拷問用デリムソン、清掃デリムソン、それらのいずれにも区分けされず、広い畜舎の中でひとりとしこめられていた。

からだの衰えはあつたが、しかし波のひとみの色は往時をしのばせる何程かの不退転の力をたたえていた。とにかくこうなってしまうたからには、いちおういのちだけは大事にしよう。先の先までもう少し見届けてみたいそんな気が一方であつた。

まっくらがりの畜舎の中に、うつすらと明かりがさしてくるような錯覚があつて、彼はとじていたまぶたを開いた。いつも日に三度きまって排せつ物を当てがいによってくる女看手の来る時刻でもない。

彼女はまだ十代の若さであろう。ぼつてり

とした丸っこい顔立ちの娘であつた。幾分恥ずかしげな所作で前をはだける。達平はその暖かみのあるしずくを直接受けて、ごくごくと飲み下す。そうしなければ命がもたないからだ。

突然、円光のなかに、和歌子のういういしい切れ長のひとみが、キラキラと輝くように達平は感じた。

しかし、それは一種の幻想にしかすぎなかったとみえ、じきに円光は消え、すべてはやみの中に沈んだ。

自分を平和の敵として、危険を省みず殺しにきた美しい少女、その少女を、なぜ今になつて幻覚の中で夢みるのか。彼は不かくにも和歌子の白磁のような輝きをもった臀部の素はだを、ふと恋うる思いに迫られた。

彼は和歌子のものを、不意にせつなく口の中にかみしめたいと思った。

(未完)

## お蒐めになるなら 今のうちです！



既刊号目次は最終頁にあります

毎号素晴らしい売行きを示し、類似誌をグンと引き離している本誌は、既刊号でも価格が高くなるばかりです。今のうちに、まだお読みになっていない旧号をお揃え下さい！いまにありませんから！



絵物語  
時代巷談

# 哀艶十六夜街道

作・円城寺達  
絵・喜多玲子

## ① 十六夜街道

山国のならいで、夜になるとくせの悪い時雨が、ハラハラと庇をかすめて、風にもつれる犬の遠吠えが気味悪く尾を引いた。

郡上八幡から、飛弾の高山に抜ける濃州十六夜街道。その本道よりわきにそれた、烏帽子ガ岳のふもとにつづく森かげの、立ちぐされたような一軒屋の入口の雨戸を、ふうてんの仙太は、自分の家に帰ったときのような勢いで、気がねもなくけっっていた。

「おいっ！ 開けねえか。あけろッてえんだ！」  
犬の遠吠えはまだつついている。

「おいっ！ あけろ！」

つめたい時雨に顔をぬらしして、仙太がまた激しく戸をけろうとしたとき、一軒屋の内に、ほのかに灯りの影がさして、入口の戸がガタピシと開いた。

「……いってえ、誰だね、いまごろ……」





その、おやじの言葉の終らぬうちに、眼の前に灯りを吸って、白刃の光りが雨をはじいた。腰をぬかしそうになるおやじの前の闇の中に、濡れそびれた三人の人影が突っ立っている……。



## ② 闖入者

「おいほれ。迷惑だろうが、今夜一晚、やっかいになる」白刃でおどしておいて、そう云ったのが相州浪人剣持小源太。あとの一人は、ふうてんの仙太に腕をねじ上げられて、こう、身を悶えているおきぬである。

おやじを脅しておいて、剣持小源太、土間に入ると、いきなりいろりの前にあぐらを組んで坐りこんだ。

おきぬは仙太につきとばされるように押しこまれて、おやじの腰のあたりにぶつかり、土間に膝をつく。

「仙太、そう手荒くするな。まだ、親分の未練が残っている女のことだ……」

「へ、へえ。しかし先生、そ、そりゃあ、手荒く扱っているつもりはねえんですがね、せっかくこうしてつかまえた女に、また逃げられたンじゃあ、苦勞が水の泡だと思いましてね、へへッ」

「捕らえたら、逃がさぬつもりで、この用人棒の拙者が一緒に来たのだ。決して逃がしはせんが、それほど心配なら、縛っておくがいい」

小源太はそう云いすて、おやじに出させた地酒をあふっている。仙太は、いろりばたの荒縄をたぐりだしておきぬの傍に、にじりよった。





### ③ むくどり

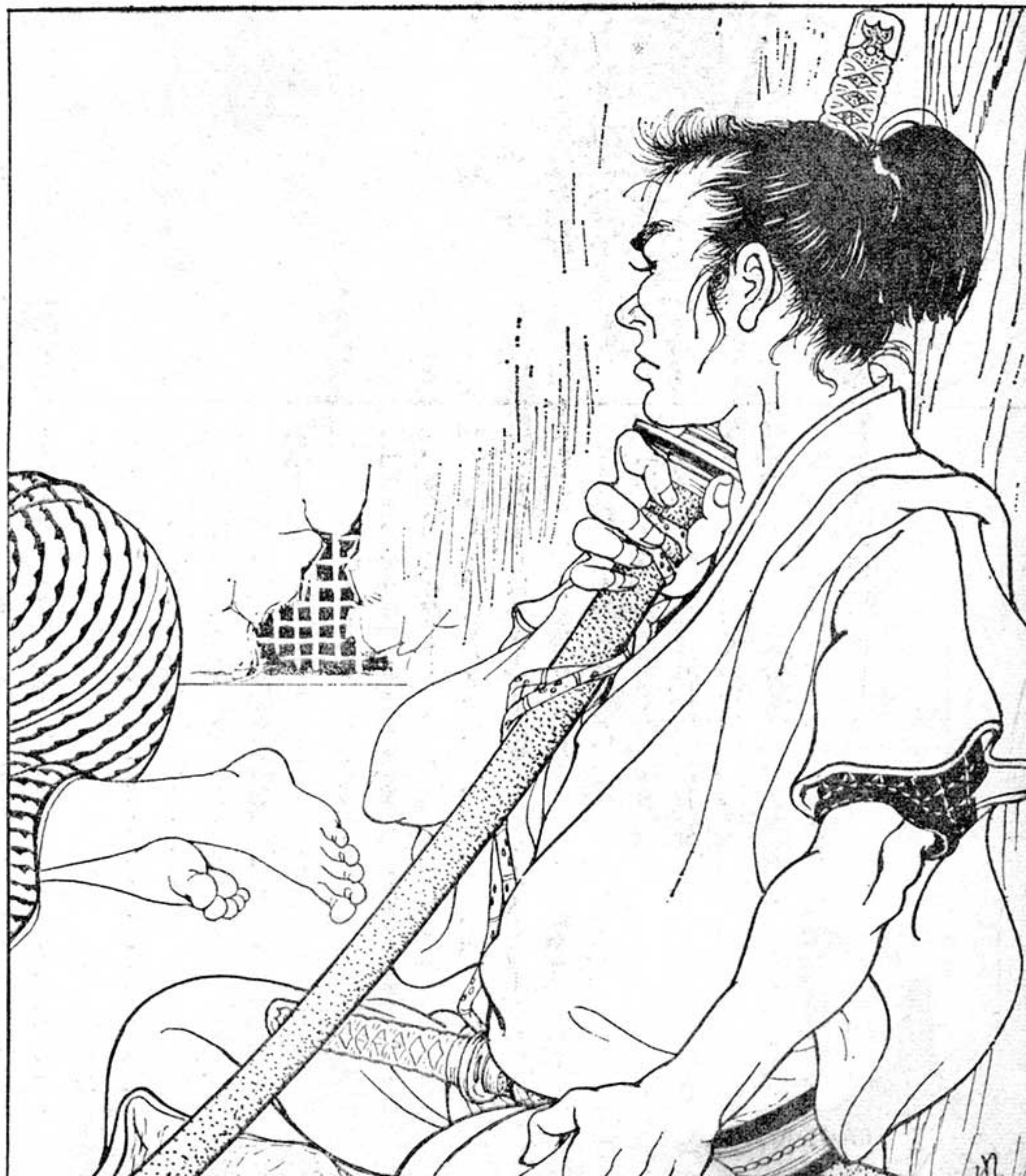
烏帽子ガ岳の山道で、追手を逃れて必死に逃げるおきぬを、やっとつかまえて、ここまできた小源太と仙太だ。

山のふもとで夜になり、雨まで降ってきたので、どうにか見つけた一軒屋で、明日の朝まですごそうというこんたんだ。夜が明けさえすれば、仁部の宿までは夕方までにはたどりつける。あとは、島蔵親分の縄張り内だ。

おきぬは、縛ったまんま、駕籠に乗せて送りこめばいい……仙太はそう考えている。

そのあとが、仙太には楽しみなのだ。ほうびの酒代よりも、この女の、むっちり白い肌を、島蔵親分が、どんなにして折檻するか、それを想像するだけで、たまらなくなる。

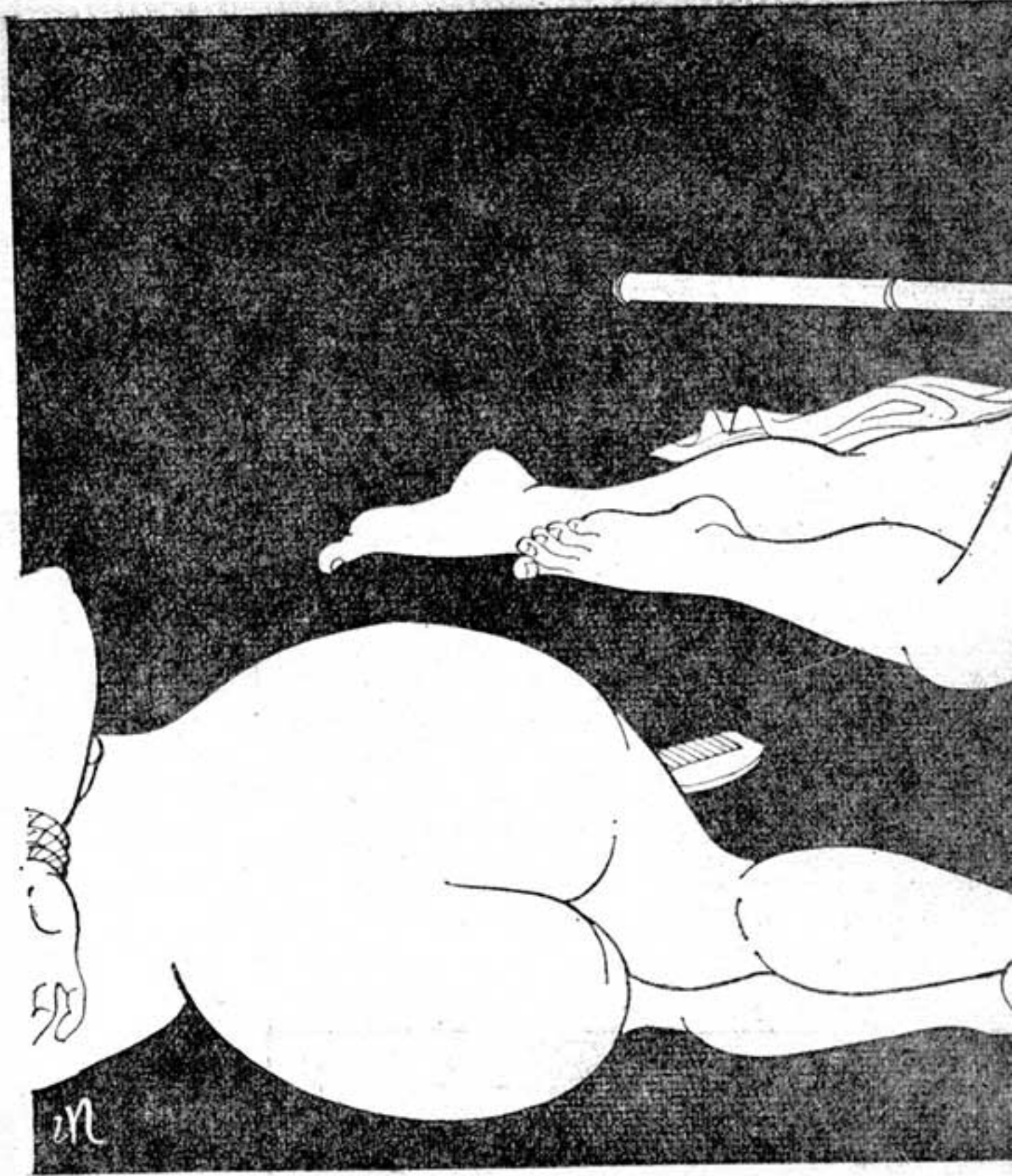
用心棒の小源太が居なければ、親分に渡す前に、妙な味見をしでかさないとも限ない奴だ。小源太が酒を呑んでいるのに、神妙な顔をして杯をねだらないのは怪しかった。



### ④ 仁部の島蔵

仁部の島蔵は、ならず者どもを養って近在では親分を通っているが、もともとは女衞を稼業にしている男だった。濃州一円から水呑百姓の娘たちを、少しばかりの金をカセにして、無理矢理に連れてきては、それを、京や浪華、江戸の色地獄に売り飛ばすのが本業だ。





## ⑤ 追手の役得

だから、島蔵の屋敷内にある、お定まりの折檻土蔵には、いつも買われてきた多数の女達が投げこまれていて、その泣き声が塀外にまで聞えてくるのが、仁部の宿はおろか、近在での噂になっているほどだった。しかし、宿役人や、高山の代官手代までが、そのことを知らぬ顔をしているのは、少なからぬ黄白が島蔵の手から撒かれていたという蔭の噂も、ありそうなことなのだ。

おきぬは、島蔵の配下の手にかかって、買われてきた娘の一人だ。鄙にはまれない美しさが仇をして、欲にからんだ養い親が、重い年貢の代りにと、島蔵の罠の中におきぬを投げこんだものだった。好色な島蔵がこの上玉を見逃すはずもなく自分のめかけにするつもりでおきぬを抱きにかかったところが、気を許した乾分の手違いで逃げられてしまったという訳なのだ。

「ヘッヘッ。用心棒だなんて云っても、酒にやあ、カラ意気地のねえもんだぜ。酔いつぶれて寝てしまやあがった……ヘッヘ、鬼の寝ている間に、おいらはちよいと命の洗濯といこうかい……なあに、軀にさえ手をつけなきゃ、親分に分る訳もねえんだ、御開帳くらいなら、追手の役得というもんだぜ……ヘッヘッヘ」仙太は、小源太の酔いつぶれてしまったのを見すまして、納屋の中に投げ込んであるおきぬのところへ、そっと忍んできた。

「あれっ……」おきぬは納屋の柱に縛りつけられている身を、必死になって悶える。

こんなことには何度も場慣れのしている仙太。まず、おきぬの口に豆しほりの猿ぐつわをはめる。それから、帯に手をかけた……。

猿ぐつわの奥で、声を殺されながら、おきぬはあえいだ。納屋の、よどんだような空気が、着物を脱がされてゆくおきぬの素肌に、まともに触れて、膝がしらが羞恥に震えた。







## ⑥ 助平三ン下

仙太、意地の悪い笑いを、歪んだ頬に浮べている。着ているものを引っ剥いで、縛り直したおきぬをもう一度、納屋の柱に縛りつけてしまったのだ。

おきぬ、腰のもの一つの裸だ。

「ふッふッ。おいおきぬ、親分の思い通りにならねえから、こういうことになるんだ。仁部の宿に連れ戻されたら、どんな目に逢うか知っているはずだぜ。これから、この仙太さまが、その前興行というのをやってやる。親分より、ちっとばかり女にやさしいのが、この仙太あにいのイカスところさ……」

何が女にやさしい野郎なものか。島蔵に輪をかけたような助平三ン下なのだ。島蔵の手に渡る前に、こいつの手にかかって、何人の女が泣いたことか。

## ⑦ 非情の縄

「ふへへへ、さっきは用心棒を眠らせるつもりがあったから、酒にゃ手も出さなかったが、こうなると、めっぼう咽喉を濡らしたくなってくるぜ。いい泣き声を聞く前に、おやじをおどかして、残った酒でもいただくことにするか」

納屋からそっと出てきた仙太。用心棒の寝息をうかがったが、これはもう死んだようになって酔いつぶれてる。

ドスを抜いて、おやじからおどし取った地酒





を片手に、納屋にもどってきた仙太の奴。いよ  
いよ、おきぬを酒の肴にするつもりだ。

「……ふッふ。地酒がまずくて気が利かねえが  
そのかわり、たまらねえ肴だぜ。用心棒はあの  
分じあや起きつこねえし、おやじは、ドスで脅  
かされて、腰が抜けてらあ……おまけに、山の  
ふもとの一軒屋だ。島蔵親分に悪いようだぜ」  
ぐびり、ぐびり、貧乏徳利の口から呑む地酒  
が、五蔵六腑にしみ渡って、仙太をだんだん大  
胆にした。もともと狼のような野郎だが、その  
狼の軀に地酒の酔いが火をつけたのだ。

仙太の手が伸びて、おきぬの腰にまとったさ  
いこのものがハラリとおちた。

悲鳴もあげられぬおきぬの肌に非情の縄はく  
いこむばかり。



## ⑧ 痺れ酒

うひひ、ひひ。咽喉の奥で仙太め、淫らに笑いやがった。  
「さあ、おとなしくしてのことだぜ……」そう云って、妙な恰好でおきぬの傍に  
じわりと寄ってくる。もう、どうすることもできない無防備のおきぬ、狼の前に死  
ぬより羞しい姿を、必死に縮める。

仙太、ふしくれ立った松の木のような腕を、おきぬの軀に伸ばしかけたが、急に  
「ううッ！」と唸って、その場に腰を落してしまっただけはやり立つ心とは別に、手も  
足も痺れてしまっただけ、全身がおこりにかかったように震えはじめたのだ。

納戸の戸がそーっと開いて、おやじが白髪頭をのぞかせると、その仙太のようす  
を見て、安心したように顔をほころばせた。「こんなこともあるうかと、狼の罠に  
まぜるトリカブトの根の汁を、地酒の中に混ぜて吞ませたが、浪人者もこのやくざ  
も、狼と同じように、くたばってしまいやがった……」仁部の島蔵のかずかずの悪  
事が露見して、遂に捕らわれたのは、それから間もなくのことだった。





■責められ小僧

# 色 餓 鬼 島 田

龍 崎 聖 吾

豊田みのる・絵



## 緋鹿の子縛り

神田松ヶ枝町の呉服商は京丸屋のひとり娘  
器量自慢が祟って、いささかとうの立ちかけ  
たおくにというのが、ある夜とんでもない災  
難にあった。

最初にそれを見つけたのは仲働きのおもと  
で、これがいつものとおり朝の六ツ半に、湯  
を張った塗り盥に糖袋、手拭を添えておくに  
の部屋にいったところ、いつになく蒲団がき  
れいに片付けられて主人の姿が目にはいらな  
い。

——おやめずらしい。今朝はもうお目覚め  
かしら。雨でも降らなきやいいが、と眺めや





る小さな丸窓には、きょうも上天氣の朝の日射しがかすかに映っている。それをべつにふしぎとも思わず、

「お嬢さん」

尻上りの声をかけたおもとの視線が、何気なくその脇の床柱に流れたとたん、

「きやアッ」と絶叫、座敷じゅうに湯をぶちまけて腰を抜かした。おもとの手を離れた黒い盥が、その柱にうしろ手にくくりつけられて、いるおくにのほうへ、間の抜けた音を立てて、ごろごろと転がった。

「お嬢さん、まアこれはどうしたこと——」

べったり畳に尻もちをつきながらも四十女のおもと、さすがに年の功で、おくにが死んでいないのだけは見極わめてそういったが、しかしおくには返事ができない。それもそのはず、鹿の子絞りのじぶんの扱情で口のうえをふた巻き三巻き、しっかりおおわれて柱にゆわえつけられ、目だけが苦痛と羞恥に白くうるんで必死に救いをもとめている。

なんの不自由もない京丸屋で、こればかりが嘆きの種の島田の根ががっくり抜けて、血の気の失せた顔に乱れかかったありさまは、なまじ女がいいだけに見るも無惨な態たらくだ。しかもこの女、商家の娘のくせに長襦袢のまま寝ていたらしく、襟も裾もすっかりはだけたその胸元に、細紐がぎりぎり食い込んで、荒い息づかいに波うつ乳房が薄紅色に染まって喘いでいる。そればかりではない。贅美を凝らした夜具ひと揃い二尺あまりに積み重ねたのへ、両足を大きく開いて跨がらせられたうえ、足首を縛った縄尻をうしろ手の紐に繋いであるというのだから、誰の仕業か、たいそう念の入ったいたずらだった。

おもとの叫びを聞きつけて大慌てですっ飛んできた番頭でさえ、初めて目にする主人の娘の肌の色にあてられて、いい年をして思わずぐつと息を呑んだ。

## 陰陽符

変事を聞いて目と鼻の先の紺屋町から、目明し嘉十が刷毛先を風に散らして駆けつけてきたのは、それから小半刻もたったところだ。しかし、縄を解くと同時におくには気を失ない、どんな目に遭わされたものかわからないが、金や品物には手がついていないと聞くと俄かに索然たる顔つきになり、

「縄をほどいたのは早まった」

とぼそりといった。本音はおくにの縛られている姿をひと目拝みたかったのだろうが、これを見なかったばかりに嘉十親分、あとで可愛い女房のつらの皮をおびんずるさまのようになんてせん剥かれることになる。

「へえ、すみません」

間口四間の小振りな店ながら、内福の噂高い京丸屋の主人真っ蒼に興奮しているが、それでも揉み手だけは忘れずに、

「親分がお見えになるまでは、と思いましたが、あんまり娘が可愛想なもので。寒い時だったら凍え死んじまうところでしたよ」

といってから追従笑いをひっこめると、嘉十の耳元に口を寄せる。

いちいち頷きながら聞いていた目明しの目がざらりと光った。そして、

「そいつを呼んでもらおうか」

といいながら、帳場格子の脇から上ってず



かずかと、とつつきの小座敷にとおる。

立膝に座を占めて煙草盆を引き寄せ、吐月峰の竹筒を二、三度雁首で叩いたところにおそるおそるはいってきたのは、丁雅の吉松。

どうせ朝からどこかに軟禁されていたのだろう、足元さえ定まらないほどの怯えようで番頭に小突かれ、ようやく嘉十の前に膝をついた。めくら縞の仕着せに紺の前垂れが痛々しいような、それでも十四、五にはなっているらしい色白できゃしゃな子供だ。それと見るより早く、こめかみに青筋を立てて嘉十が怒鳴りつけた。

「この野郎、年端もいかねえガキのくせに大それた真似をしやあがる！」

物凄目明しのガンにねめつけられたのは臍の緒切って初めてだろう。

「あ、あたしはなにも——」

口ごもりながら、懸命に申し開きをしようとするのにおっかぶせて、

「しらア切るな」

ドスの利いた胴間声とともに、十手の朱房が、ぱしっと激しく吉松の頬へ飛ぶ。

「ヘッ」思わず頭を低く下げるのへ、こんどは真っ黒に垢光りした木綿の守袋が、止どめを刺すように投げ出された。

「あッ、それは——」

「お前のものに間違いねえかと、聞いてるんだ」

吉松なぜか真っ赤になって俯向いたまま、片手を筒袖のなかへ突っ込み、おろおろと、うろたえながら、肌をあらためるのをじろりと見て、

「そればかりじゃねえ。てめえ今朝方八ツ半時、はあはあ息を切らせながら奥から寝部屋に戻ったのを見た者がいるんだ。さアどこでどんな荒仕事をしやがったか、ありていに申し上げろい」

先刻主人から耳うちされたばかりのおもとの口裏をそっくりそのまま、威丈高になって吉松を責める嘉十の手が、いつかびりびりとその袋を裂き破った。そして何気なく中身をあらためるや、

「あ、この野郎、てえしたおまじないを持ってやがる」

時と場所を忘れて失笑したのも道理、なんとそれは、男女のしるしを露骨にかたどったどこか片田舎の社の醜怪な護符だった。

「し、知りません、それは、くに出るとき母親が——」

「馬鹿野郎。どこの娑婆に倅にこんなものを持たせるおふくろがあるもんか」

極めつけておいて十手と煙草入れを帯に挟

む。吉松は一も二もなくその場から引っ立てられた。世間体を氣遣ってか京丸屋の店は、常にかかわらず大戸を開けはじめる。

## 鬼の女房

「というわけ合いだが、ご用向きの忙しいおれが、こんなガキ一匹に手間取っちゃいられねえ。久し振りにお前にひと汗かかしてやるから、暮れ方までに泥を吐かしてくんねえ」紺屋町の家に戻った嘉十は、吉松の襟っ首を掴んで畳のうえに突きのめし、女房のおまさにそういった。

黒光りに磨ぎ込んだ長火鉢の向う、黒襟をつけた滝縞の着物に洗い髪のおまさはもう三十がらみ。目明しの女房にしてはちよっとくだけ過ぎた作りだが、もともと本所界限を縄張りにする同業の娘で、子供のときから稼業の水になじんで育っただけに今でも嘉十のご用向きに口を出し、亭主にときを告げさせる男勝りの牝鶏だった。そればかりか、ときには下っ引きを指図して吟味にひと役買うこともあるという。いずれにしても、鬼の女房に鬼神の諺どおり、一筋縄ではいかない肥り肉の大年増だ。しかもそんなことのあとには、どういふものか定まってこつてりした床をつける奇妙な癖を持っていて、嘉十のほうはこ



れが嬉しいばかりに、女子供の軽い詮議などは番屋を抜いて、おまさに任せるようなこともするのだ。

「見たところ、しなしなした小僧だけれど、そんな荒事ができるのかねえ」

吸いつけた長煙管を亭主に渡してからおまさは吉松の前ににじり寄り、前髪に指を搦めて顔を挙げさせた。それからまるで試すように、よく攪う掌でその頬を打った。

白く肉付いた二の腕が、ちらっと空に躍るとともに、

「びしゃッ」と頬桁が小気味よく鳴り、吉松は意気地もなく横ざまに倒れる。

「堪忍してください……」

こうなるとただもう恐ろしさに苛まれて、大きな声を出すはおろかなこと、身を起さず気力さえ奪われているのを、おまさは冷ややかな目の端に見据えて、

「まるつきり子供じゃないかね」

「白ばっくれてやがるんだ、この野郎」

嘉十は紙入れのなかから、大事な証拠の守袋をつまみ出して女房の鼻先へ、

「ほら、こんなもの持ってやがった」

「いやだよ、このひとあ」

といいながら、もう吉松を見る目のいろが違ふ。色餓鬼ならば、またそのような責め方

も心得ているおまさだった。

「はっはっは」

高笑いを残して出かける嘉十のうしろへ、裾を引き摺りながらついていって切火をうち

おまさは先刻の座敷へ戻った。

上り口のところに、ごろごろしていた留守番の下っ引きが薄笑いしながら、

「姐さん手伝いやしうか」

というのへ妖しい笑みを含んだ目を返し、

「ひっこんでな。お前なんぞにや、フッフ…目の毒さ」

びたりとたてきつた障子の蔭から、絶え入るばかりの悲鳴がたったのひと声。すぐにしんと静かになった。

どんな責めようをしているのか。

からりと晴れた初夏の陽の目さえ、ふとそこだけは、翳るような陰微な殺気が流れて、へんにうわすったおまさの声が、とぎれとぎれの詰問を始めたころ、この家の前に二挺の町駕籠が止まった。

## 色餓鬼いじめ

連れて来たおもとは一旦店へ帰し、町娘の伊達の素足がそろりそろりと、おまさのあとにつづいて座敷にとおった。顔の色はまだ白蠟さながらのおくにだが、座敷の隅に俵のよ

うに転がされている吉松を見て、さすがに、ちよつと眉を曇らせる。吉松が嘉十の家で、しかもおまさに責められているとは、ここに来るまで知らなかった。

あわれ吉松は下帯ひとつで高手小手。胡坐に組ませた両方の脛をぎっちり縛めた縄尻が首を通してそれに繋いであるので迂闊に顔も挙げられない。まだ柔かい筋骨をたわめるばかりに引きしほられた二重の縄目は、とても女の手になったものとは思えない厳しきで肌にひしひしと食い入っている。両頬にくつきりと血が寄っているのは悲鳴を防ぐために噛ませた猿ぐつわの跡だろうが、おくにを迎えて、さすがにそれだけは外したらしい。

「強情な小僧ですよ、お嬢さん」

私刑にひとしい責問を加えながら、おまさはぬけぬけとこんなことをいう。もっとも、だしぬけに訪ねてきたおくにから、下手人は確かに吉松だと先刻上り柩で聞いているのであとは本人の体に訊くばかりだと思ふ気易さもある。

「吉松」

そのおくにの朱い唇が動き、静かに優しくな口説でこういった。

「こうなったら何もかも包まず申し上げてしまいなさい。悪いことはできないもの、わた



しの部屋に守袋を落としていったというじゃないか。そういえば行灯の火も消えたので顔をはっきり見ることはできなかったけれど、わたしを縛ったのは、黒っぽい着物の裾を端折ったお前ほどの小柄な男。なにを恨んでのことかは知らないが、誰かにそそのかされてもしたのかえ？」

吉松は向こうむき。手足を繋いで突き転がされたまま身動きもできず、わずかに肩で息をしている。

「ほらごらん。当のお嬢さんがそういうんだからお前の仕業に違いはない。さ、誰に頼まれたえ？」

おくにの言葉を聞いているうちにおまさもはっとそこへ気がついた。しかし、今まで気の回らなかったじぶんを恥じるより先に、新しい責め道具を得たことの歓びに身をやかれながら、しゃしゃり出て、

「痛い目を見ないうち、さっさと自状したらどうだい」

「吉松、どうしてあんなことをしたの、正直にいつてごらん」

女二人がこもこも問い詰める。が、吉松は石のように黙して答えず、汗と涙に汚れきったおもてをじいっと伏せている。いっこくとも見えるその姿に、とうとうおまさが業を煮



やした。そして、

「よォし」

きりきりと悍馬のように歯を噛み鳴らすと矢庭に温灰のなかにさしてあった火箸をとった。一尺の余もある太い火箸だ。剥ぎ捨ててある吉松の着物をその背に当てて、まず肌を傷めない用心をしてから、おまさは二本を一

緒に引っ掴み縄目のあいだにぐいっとこじ入れた。

「うわッ、痛うッ」

皮肉を食い破るばかりの激痛に思わず呻いて、堪らず頭を挙げようとすれば、それに縛った両足が否応なしに空を蹴って、たちまちうしろへ顛倒しかける。慌ててふたたび前屈



みに突つ伏す吉松の膝頭を、蹠に容赦もなく踏みつけて、

「ふん、痛いのは当り前さ」

おまさはその首根っ子に臂を載せかけ、火箸の触れる場所を変え変えなおも邪慥にこじ上げる。

「あ、あ、あアッ」

「さあどうだえ。こうすればちつとは応えるだろう」

半ば嘲けりの言葉とともに、腰の力が加わって滝縞の前がはだけた。年に似合わぬ赤い湯文字の裾みついた強靱な脚で、こんどは吉松の細首を本手に締めつけながら、体をうしろへ反らせる勢いで逆に火箸をこじ上げるのだから堪らない。まるい肉置きをくつきり見せるいしきの下で、噛みしめた唇の端から血を流した吉松の顔が無惨に押しひしがれて相が変った。

「む、むうッ」

しかし、おまさはもう口をきかない。

吉松の首からやがて背のほうへ身を乗り出し、憑かれたように火箸をあやつるその目のなかに、焰々として、狂った情火が青白く燃えさかった。

「お嬢さん——」

たてつづけの責め苦に霞んだ吉松の瞳が、

あちこち流れた末、ようやくにしておくにを捕え、恨みに濡れて下から見上げた。しかしおくには素知らぬ顔で、酸鼻を極めめるおまさの責めを見つめている。心なしか頬に薄赤く血がのぼり、膝のうえに重ねて置いた白魚の指が固く組み合わされて、刻々に高まる胸の動悸を伝えているようだ。

「お嬢さ、ん」

残されたすべての力を振りしほるようにして、おまさの下敷にされている顔を動かした吉松の口が、何かいいたげにもう一度かすかに震えた。

と、そのとき——。

突然裏手の廊下にあたって、

「野郎！」

という怒声がひびき、同時にどすうん、と人が倒れた。

「なに!？」

二人の女が思わず顔を見合わせる一瞬、その障子が、がらっと、開いた。

そつと責め場を覗いていたらしいさっきの下っ引きが、廊下に長々とだらしなく伸びている。

「あッ」

そいつを一足に飛び越えて、どどっと座敷に踏み込んで来たのは、勾うような藍微塵の

尻を高々とからげた、盗っ人かぶりの野郎一匹。

「あれえッ」と、おくに。

「誰だいい前は。ここをどこだと思ってるんだい?」

さすがに素早く吉松の上からとび退いて身構えるおまさ。可愛想に吉松の体を小楯にこつ噛みつくようにいい募るのへ、男はぬうつとおのれのつらを突き出した。

「ご新さんにはお初だが——」

妙にからんだ物言いをするその男の、芥子玉の頬かむりがらのぞいている女のように美しい鬘の形をひと目見て、おくにはまたまた飛びあがった。

「あッ、お前は——」

今朝方の恐ろしさをまざまざと想い出し、あとずさりに身をよじって逃げようとするのを、

「おっとつと」

手で抑える真似をして、男はゆっくりとそこへしゃがみこんだ。

## 無 惨 花

留守居の下っ引きがやられてしまえば、あそこには社の仔猫一匹いない嘉十の家だった。縛った吉松の蔭になって、男と向い合っている。





たおまきの氣力は直きにくじけ、ぐにやぐにやの吉松を相手の足元に転がして逃げ腰になったとき、「嘉十親分も、とんだ見込み違いをなすったもんだねえ」

苦っぽく笑って、男が口を切った。

「内証がいいと聞き込んで忍んでいった京丸屋の奥座敷で、ひよんなことから覗いて見たのが女だらにあらねえ、その小僧ひとつとらえてのむごい責め場よ。この真夜中、小僧がどんな不仕鱈をしてかしたのかと思って見てりやどうもそうじゃあねえらしい。むすめさん、お前さんから嬉しそうな声を出してその吉松とかいう丁稚をひどく痛めつけていたじゃねえか。年頃になっても男に抱かれねえ生娘に、ちよいちよいある病いとは聞いていたがこの目で見たのは初めてだ。そこでこっちも悪戯っ氣を起こし、仕置にちよいと手間取って狙った銭は頂戴できなかったてえ寸法だが、おい、嘉十親分のお内儀さんよ、お前さんが

縛った小僧はふたなりだぜ」

「えッ」

思いもかけない証言に、おまきは呆氣にとられておくを見る。おくには袂で顔を隠し消えも入りたい恥ずかしい風情だ。

なんと因果な生まれつきで、月々の病いの頃になると犬猫などの生き物を無闇にいじめるという変った性分を、ずっと前からおくには持っていた。ごく若い時分にはそれでも済んでいたのだが、この頃では、はたち島田の焦りが加わってか、どうしても人間を相手にしなければおさまらない昂ぶりを感じるまでになっていたのだ。そんなおくにとって、片輪の丁稚吉松が願ってもないおもちゃに見えたのも無理ではない。ゆうべもじつは夜が更けてから、吉松をじぶんの部屋に引き摺り込み、おくにだけが知っている体の秘密を掴んでの脅し半分、若い体力に任せての腕ずく半分でいやがるやつを押えつけ、裸にむいて心ゆくまで苛なんだことは確かだが、その一伍一什をこの男に覗かれていたとは知らなかった。そういうえば、無理矢理に蒲団のうえに乗せられたことをおくには今になって想い出した。明け方近く、精魂尽き果てた吉松をやっと許して放したあと、どこからともなく襲い掛った黒い影に、あっという間もなく縛り



上げられてしまったというのが、今朝の事件のあらまじだった。

しかしその場では何もせず、ひと言の口もきかずに去っていった賊の後ろ姿。みずみずしく結い上げた髻の艶が行灯の火影に浮きあがり、恐怖にくらんだ目の底に強く灼きついて残ったのだが――。

まぎれもないその男が、きっとおくにを見据えていった。

「盗っ人に掛られたとなりや、そうでなくてえ縁遠いお前のこと。ますます貰い手がなくなることを気に病んで、せめてのことにふたなりをホシに仕立てようたあ、なんてえ薄汚ねえ根性だ。そのくれえなら、てめえの体が折よく汚れていましたと、なんで世間さまに申し上げねえ」

男のいい草はいちいち的を射ておくにの胸に突き刺さる。へまの吉松が守袋を落した揚句、おもとに姿を見られたことから、詮議の次第によつては、おのれの恥ずかしい行ないが明るみへ出ないとは限らない。そこでおんな男の吉松に罪を着せ、江戸の外へ放り出してしまえば、世間への言いわけも立ち、じぶんの所業も人に知られずに済むという浅知恵をめぐらして、吉松の口を塞ぐために、わざわざ嘉十を訪れたおくになのだが――。

「だいいちその吉松に、生きのいい女が縛れるかどうか、お前たちよく承知のはずじゃあねえか。ねえお内儀さん」

と、これもまた吉松の非力を物怪の幸に、存分痛めつけていたおまさにいった。

「なにをいつてやがんだ！」

からかわれたおまさが、鬼神の本性をあらわして目を吊り上げ、

「だれかいけないのかい!？」

と金切声で叫んだのにつづいて、

「だれか来てえ！」

おくにもわれに返って、声を挙げた。

「おきやがれッ」

騒ぎ立てられれば男のほうも追われる身、さっと立ち上ってあたりへ気を配る両眼に、見るも恐ろしい酷薄な光が宿った。二人の女は同時にその場に蹴倒された。おくには落ちていた火箸を握み、半身を起こして男を睨んだ。

「なにをしゃがるんでえ、小僧っ子を尻に敷くとはわけが違うぜ。ちいっとばかり渋皮の剥けたつらを鼻にかけて、弱い者を虐めつけ、うぬだけは助かりてえ女狐めら。どうするか見ろ！」

いうとひとしく、ぐらぐら煮立っている銅壺の耳に手がかかる。つぎの瞬間、

「ぎやあッ」魂入るような女二人の悲鳴があがり、かきむしられる火傷の痛みにもたうちまわる姿を尻目に、藍色の着物がまとわりついた小柄な体が、まるで猿のように庭を横切り板塀を飛び越えておもてに消えた。

そのあとは――。

「お嬢さあん、しっかりして」

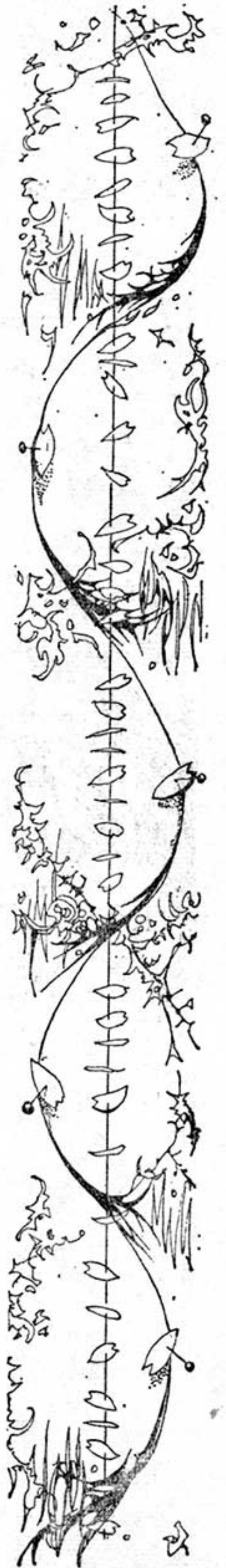
はらわたを断つような悲痛な叫びが、何度もおくにの耳元を伝わった。全身雁字搦目の吉松が、一寸でもおくにへ近づこうと、必死の足掻きを繰り返しているのだった。

それから一年ばかり後のことだ。

奥山の若後家殺しから足がついて、とうとう御用弁になったという名うての凶賊市中引き廻しの道筋に、ふかぶかと頭巾で顔を包んだひとりの女の姿が見えた。

罪人はまだ若い男で、漆黒の月代が額を蓄い、乱れた髪が白い襟足に映えて、さすが色ゆえ犯した罪に身をほろぼしたという男の哀れを感じさせたが、それをじいっと見つめている頭巾の女――おくには半面にひどいひつつりを残し、ふた目と見られぬ変り果てた容貌、あれは京丸屋の鬼娘と、世間はその頃も口さがなかったが、しかしそのおぞましい呼び名はむしろ、松ヶ枝小町の昔にこそふさわしけれ、とは知らなかった。





# 桜とサムライとサデイズム

浜野真砂

## 落花狼籍

敷島の大和心を人問わば、朝日に匂う山桜花——。花は桜木、人は武士——。

などといっても、近頃は、どうもあまり、ピンとこないようすが、昔は、桜の花はいさぎよいものとして讃えられ、日本精神の象徴であるとされていました。

だから、戦争なんかが始まると、桜の花は歌のなかで大そう流行し、もてはやされました。「七つボタンは桜に錨」とか「貴様と俺とは同期の桜」とか「意気で咲け若桜、大和島根の特攻隊」とか、「靖国の桜——」とか、探せばまだまだほかにたくさんあるようですが、そういう強制的発想法と縁が切れてから十六年もたった現在では、すでに記憶もだいぶ薄らぎ、あまりテキパキとは思って出せなくなっています。

とにかく、私はそんなころに少年期を過ごしたのであります。大平洋戦争が始まった年に、私は小学校の四年生でした。

ここで一言、お断わりしておかねばなりません、私は何も、自分の精神史を書こうと思うものではありません。いずれ本題に入っていくつもりです。

さて——桜の花が日本男児を象徴するものであるとされ、「不惜身命。武士道とは、死ぬことと見付けたり」などという非常時の思想に結びついて讃えられていたころ、私という子供は、「すこし妙だな？」と、心の隅でいつも感じていました。

何が妙かという、私が桜から連想するのは「落花狼籍」という言葉だったからです。落花の「花」は、すなわち桜であり、女であります。狼籍とは乱暴、暴行の意であります。

つまり、落花狼籍とは、男の荒々しい情熱が花のように可憐な処女を捉えて強引に、意のままにすることである——と、少年の私は



感づいていたのでした。

しかし、当時の私が抜群にマセていたとか、不良少年だったとかいうわけでは決してなく、むしろ、きわめておとなしい子供であり、小心で内気でさえありました。いや、小心で内気だったからこそ、「落花狼籍」などという言葉が、かえって心にやきついていったのかも知れません。

今の子供と比較するのは無理でしょうが、昔は、小学校の五、六年ともなれば、普通そのくらいの言葉は知っていたのです。

私が桜の花からもっとも卒直に、また強烈に連想するのは、すなわち、この言葉であり、「桜が男らしく散るのは、大和魂に似ている」などという考え方は、どうも妙に思えたのです。

桜吹雪の中を歩いて、「ああ、ボクは大和魂の中を歩いているんだ」などとはすこしも思わず、あたり一面美にしく散った花びらの上を靴で踏みつけて歩くことには、性的快感——つまり、サディズムを覚えるだけだったのです。（雪の上を歩くときにも、同様の性的意識がありました。処女雪——というから、雪はやはり女でありまだ他人の足跡がついていないところを歩くことが、快感を誘うのです）

歩くだけでなく、もっと幼いころ、私は桜の花びらを針で刺すことを知っていました。

これはまだ小学校にも上がらないころ、近所の女の子が教えてく

れたのです。縫針に糸を通し、地面に散っている花びらを、何十、何百となく刺して「首飾り」や「腕輪」などを造る遊びであり、これにサディズムを感じたのが、前述の「落花狼籍」にひかれる心情の下地となったように思えます。

もとより、少年の私がサディズムや精神分析などについて知っているわけではなかったのですが、今にして振り返れば、それらは明確に、サディスティックな快感であったのです。

書物に親しむようになってからは、しおりに押し花を使う——という、多少、少女趣味的な時期もあり、このときは「花をページの間に挿んで押しつけ、枯らす」という方法に「監禁願望」のようなものがみだされる想いがしたことを憶えています。出来上がった押し花には、何か悽愴な感じがあり、私は少し気がとがめました。花が人間の加虐を怨んでいるような——そんな感じがしたからです。たしか、市川右太衛門の「落花の舞」という映画が近くの三流映画館にきたとき、その題名にひどくひかれたのを記憶していますがこれもやはり「落花狼籍・コンプレックス」のせいだったようであります。

### ■ 散る桜

桜の花は女だ——という植物象徴の考え方は、やはり間違っていないのだ、と私が確信したのは成人の後でありました。







桜の色は処女の豊頬の色を連想させるのです。また、姥桜といえ  
ば年増女のことです。姥桜というのは八重桜のことであり、一重桜  
よりも遅く咲き、色も濃艶であり、爛熟の魅力を感じさせるところ  
からくる連想でしょう。

見渡せば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりけり——という歌があ  
りますが、桜と共に、柳も女を象徴した意味に使われます。柳眉と  
か柳腰などというのがそれです。

もつとも、こんなことをクドクドしく並べ立てるのも、すでに愚  
かであり、西洋では、花や植物を女性格としていい表わすことにな  
っているのは、誰でも知っていることです。

では、なぜ、日本だけ「咲いた桜が男なら慕う胡蝶は妻じゃもの  
意気で咲け花桜、大和島根の特攻隊」などという歌が作られるよう  
な事になったのでしょうか。

私は、それらの歌が歌われた時代に若い命を散らした（ホラ、出  
た、このいい方がそもそもサクライズムなのです）幾多の人々に謹  
んで哀悼の意を捧げる点においては、決してやぶさかでない者であ  
り、また、軍歌や戦時流行歌を、いたずらに冷笑するつもりも毛頭  
ないのですが、それらの裏側にひそむものだけは、明らかにしてお  
いた方がよいと思うのです。

これは、やはり、マゾヒズム、サディズム、ナルチシズム、など  
と深い関連性を有している事柄だったのだ、と思います。

自己の生命を桜の花になぞらえて、いさぎよく、死地へおもむく  
——という行動には、明らかにマゾヒズムが潜在していたと思える  
し、そのマゾヒズムは自己破壊の本能、つまり自分自身に対するサ  
ディズムにも通ずるわけです。

敵を攻撃することはサディズムであり、そのためには死を覚悟し  
て悔いしない——という心理、軍神として靖国神社に祀られるのだ、  
という意識の中には自己恋慕症、つまりナルチシズムがあります。

サディズム、マゾヒズム、ナルチシズムなどが錯綜してヒロイズ  
ムを形成する——というのはわかり切った理窟ですが、その  
理を知ることなく、ただ酔っていた、となることは重大です。悲し  
むべきことです。

私は、かつての「軍神」たちが、いさぎよく、悔いなく、何の動  
揺もなく戦死したのだと思いたくはないのです。

人間らしい苦悩や動揺があったのだ。せめて、そうであって欲し  
いと半ば祈るような気持で信じたのです。

サディズム、マゾヒズム、などについての認識を持たず、何の苦  
悩も動揺もなく、ただヒロイズムに酔って決死の体当たりを敢行す  
る——という戦法だったとすれば、ハッキリいって、野蛮でありま  
す。野蛮といって言葉が悪ければ大変に悲劇的な行動であります。

アメリカ兵が特攻戦法を非常に恐怖したのももっともであり、そ  
の恐怖の中には「これでも人間か?!」という驚愕があったものと思



います。

左様、彼らは人間ではない。軍神である——と日本軍の上層部は  
いたかったかも知れませんが、軍神なのか、認識欠如の悲劇であ  
ったのかは大いに疑問です。もともと、大本営だの参謀本部など  
いうところに、サディズムやマゾヒズムにくわしい人物がいて桜イ  
ズムを育成し、利用した——などという推定はまったく成り立たな  
いものでありましょう。

桜イズムは何も昭和に始まったものではなく、いわば古くからの  
お国柄なのです。昨今流行の表現を用いるなら、桜花ムードが日  
本には昔からあったのです。（大正十五年の春、「大逆罪」の被告  
として死刑の判決を下された朴烈事件の金子文子でさえ「散らす  
風、散る桜花とも共に、いさぎよく吹けいさぎよく散れ」という玉  
砕型の辞世を遺しているほどであります）

ですから、特攻隊の悲劇は単に特攻隊員の悲劇というわけではな  
く、日本全体の悲劇です。何百年もの昔にまでさかのぼって考察し  
なければならぬ大悲劇なのです。

過ぎ去ったことは取り返しがつきませんが、今からでもこういう  
大切な事柄はハッキリさせておきたいものだ——と私は考えます。

### 性別無用

そもそも、日本には長い間——つい最近まで「人間の命は大切な

ものだ」という考え方がありませんでした。  
まるっきりないわけではないが、ひどく薄弱なものであったこと  
は確かです。

またまた歌の話になりますが、「大君の辺にこそ死なめ」とか、  
「醜の御循と出で立つ我は」とか「何の命が惜しかろう」などとい  
うことになって「身を鴻毛の軽きにおく」ような考え方が長い間、  
通用してきたのです。これは結局、封建君主制度がいつまでも続い  
たためであります。

「おらたちが暮らして行けるのは御領主様のお蔭だ。文句はいわず  
に年貢を納めようじゃねえか」とか「君のため何か惜しまん若桜」  
というようなことになってくるのが自然だったのです。人間の命を  
桜花ぐらいに安く見積もっておいた方が、何かと都合がよかったの  
でしょう。

人間の生命が大切にされない国では、人間性の研究など軽んじら  
れ、おろそかにされるのは自明の理であります。

つまり、われわれ日本人は、「人間」についての研究が遅れてお  
り、知識が薄弱だったのです。

人間を論ずるときに「男か女か」とか「君であるか臣であるか」  
などという区別がまず考えられる——という行き方でした。

貴族は庶民よりもエライのであり、女は男に隷属するものだ——  
というような調子です。「男のくせに、意気地がない」とか「女だ







てらに、気が強い」などという具合でした。

幸いにして、これは太平洋戦争の終結とともに亡び去り、現在では「戦後強くなったものは、女と靴下だ」といわれるに至っているのは、まことに喜ぶべきことであります。

デモクラシイは、要するに女が強くなることから始まる——といってもさしつかえがないと思います。女が男の下に位しているようでは、民主主義の発展など及びもつかぬことだからです。

まだまだ、いろいろと是正されて然るべき点は残っていますが、すくなくとも「男は強く、すぐれている」とか「女は弱く、浅はかである」というような概念だけは亡びた——もしくは亡びつつあるのです。

そもそも、性別で人間を判断しようなどというのは、乱暴な話であります。

人間を判断するに際して基礎となるものは、やはり「性格」です。主として欧州の学者によってスタートし、研究が進められてきた学問に「性格学」というものがありますが、学問的にいう「性格」とは、単に「気質」というようなせまい意味のものではなく、たとえば、アップフェル・バッハという学者などは「知能も性格構成の一要素だ」と説いております。

アップフェル・バッハが一九二七年に出した「性格構成論」という著書には「人間の性格は性、精神態様、感動性、道徳性、英知性

の五大要素によって構成される」とあります。さらに彼は、第六番目に副次的要素を挙げていますが——わかりやすく表にすると、つぎのようになります。

|       |                |
|-------|----------------|
| 性     | 男性性格……………ア     |
|       | 女性性格……………あ     |
| 精神態様  | 精神的サディズム……………イ |
|       | 精神的マゾヒズム……………い |
| 感動性   | 感動性過敏……………ウ    |
|       | 感動性遲鈍……………う    |
| 道徳性   | 道徳的性格……………エ    |
|       | 非道徳的性格……………え   |
| 英知性   | 知能優秀……………オ     |
|       | 知能低劣……………お     |
| 副次的要素 | 利他的要素……………カ    |
|       | 利己的要素……………か    |

以上、「アイウエオ——」と「あいうえお——」諸要素の組合せによって六十四通りの性格の型ができるわけであり、芸術家、発明家、哲学者などから、政治家、役人、犯罪者、乞食、浮浪者に至るまでの性格型が分類されております。

この、アップフェル・バッハの「性格構成論」は、高良武久博士の著作などにより三十五年も前から日本にも紹介されているのです



が、何しろ十円硬貨を何枚だか引っくり返してどうかする、といった種類の本とはわけが違うので、遺憾ながら発売前からベストセラーになるような具合には行きませんでした。

## ■ 常態性格用語

すべての形態は類似している。しかも、いかなる形態も他に等しくはない——とは、ゲーテの言葉です。

この意味から、私は「アップフェル・バッハこそは最高なり」などというつもりはありません。いくら研究しても「完成」に到ることのないのが「人間」だ、と思うからです。

ただ、アップフェル・バッハ達（ほかの学者も同様です）が、人間の性格のふしぎさを解明する鍵として、サディズムとマゾヒズムを重視したことに拍手を送りたいと思うのです。

サディズムとマゾヒズム——というと、今でも頭のお古い人は、「ああ、変態性欲のことか」などと考えるでしょう。昔の辞書にはそう書いてありました。

たとえば、昭和の初めころの「広辞林」には「サディズム——変態性欲の一種。その性欲の興奮にあたりては、あたかも野獣の如き状態を現わし、相手の異性者に残酷なる処置を加うるにあらざれば自ら満足せざるもの」とあり、「マゾヒズム——変態性欲の一種。相手の異性者が自己の身体に残酷なる待遇を加うることによりて満

足を感じるもの」と出ております。

最近の広辞林については知りませんが、現代でも多くの辞書には「変態性欲、云々」と出ていのではないのでしょうか——。

ご承知のようにこの用語は、マルキ・ド・サド、及びザッヘル・マゾッホという二人の文学者の性向からクラフト・エビングが名づけたものであり、その最初は、たしかに「変態性欲」に関する用語として使われていました。けれども、学者たちはすぐに「そんなせまい意味に限定して考えるのは間違いだ」と気づいたのです。

ですから、古くから専門家の間では、変態性欲に関しては「能動的アルゴグラニー」及び「受動的アルゴグラニー」という用語が使われるようになっていました。

サディズムとマゾヒズムは、変態性欲どころか、人間の本質から切っても切り離すことのできない、重要なものだからです。非常に大切なものだからです。

もし、仮りに、この二つを人間から取り除いたら、人類は進歩発展どころか、子孫を残す能力さえも失って、自然に亡んでしまうだろう——と思います。

私が、もし、至極高級な宇宙人だとしたら、地球を無血占領する方法として、地球人からサディズムとマゾヒズムを奪う放射能何かをバラまくことにするでしょう。つまり、人類の心身における重要な部分を封殺して、彼らを「骨抜き腰抜けの腑抜け」にしちま







おう——という作戦です。

これは、まあ、よけいなことですが——とにかく、そんなS・Fのプロットが成り立ってもおかしくはないほどに、人間の中のサディズムとマゾヒズムは大切なものです。

そして、この二つを持っていない人間などは、たとえ一億円の賞金つきで探しても、地球上には絶対に存在しないのです。

重ねて申しますが、サディズムやマゾヒズムは変態性欲に関する用語などではない。

「常態性格」に関する用語なのです。

### ■ カタルシスの効能

サディズムやマゾヒズムは、人間の性格の謎を解明する鍵である——ということは、近ごろになってようやく、日本でも一般に理解されるようになってきました。

だいぶ遅かったし、まだまだ不十分ではありますが、とにかく、これは非常によい傾向だと思います。

この種の研究は、学者や専門家に独占させておけばよい、というものではないからです。心理学や性格学の知恵が社会全般に普及すれば、世の中はもっとマシなものになるだろう——と私は考えています。

他人に対する観察や自分を反省するときなどに精神分析の要素が

もっと加われば、従来よりはだいぶ間違いのすくない生活を送れるようになるだろう——と思うのです。

それには、まず、芸術の仕事にたずさわる人達が正しい認識を持つことが大切だ——と思うのですが、これはどうやら、最近は適切な方向に針路をとり始めているようだ、と申せます。

いちいち名を挙げるひまはありませんが、近ごろ有能な小説家の多くは、サディズムやマゾヒズムを積極的に取り上げて仕事をするようになってきました。

西欧諸国の芸術家たちには早くからそれがありましたが、日本でもようやく、遅まきながらそういう傾向が目立ってきました。芸術至上論というほどのことではなく、芸術が社会性に先駆し、前衛となるのは当り前の話なのですから、芸術家諸先生には、このさい是非ともがんばってもらいたいものであります。

ここで——頭のお古い人たちに一言お願いしておきましょう。

サディズムやマゾヒズムを扱った作品に接して眉をひそめてみせたりすることは、もういい加減にこのへんでやめていただきたい。人間を解明する——などというところまではいかないにしても、そういう作品は、ただ、存在するだけで大いに役に立つものなのです。

すでに言い古されていることですが、それは「カタルシス」という重要な効能を発するものだからであります。



「カタルシス」は、古代ギリシャの大学者アリストテレスが「詩学」の中において「悲劇」の効能を定義した言葉であり、「浄化」を意味しております。

(もつとも、後世その解釈はひろげられ、特に悲劇の場合とは限りませんが)

「要するにカタルシスだよ。な、判るだろう?」

「ああ、そうか。わかった。了解!」

という具合に好テンポに話が進めば幸いなのですが、そうもいかない御仁のために、下手な注釈をつけ加えると——、カタルシスとは、ある傾向の作品に接した人間が、その精神面にウツ積し、抑圧されていた同傾向の意識や心情を解放し、発散し、軽減せしめることを指しているであります。

これは、きわめて自然に、無意識のうちに行なわれるものです。

さればこそ、「そういう作品は、ただ存在するだけでもよい」といったのです。

サディズムやマゾヒズムは誰にでもあるのですから、仮りに、カタルシス用の作品がなかったとしたら、はなはだ厄介なことになります。

心理の調節法についての知恵を持たない、愚かで野蛮な連中が、何をしでかすかは、すでにご存知でしょう。愚連隊、放火魔、痴漢など——。

彼らも、また、頭のお古い御仁も、紀元前三八四年に生まれたというアリストテレス先生の知恵をいまだに導入していない——ということになるのです。

ざっと二千三百年ほど遅れた頭で、現代に生きていらっしゃるわけですから、じつにお気の毒なことでもあります。

さて——ここまで書いて、実は小生、にわかに裸の美女を縄で後ろ手に縛り上げてみたい、という落花狼籍的欲望を覚えました。欲求不満は精神衛生に害がありますから、そろそろこの辺でペンを置き、カタルシスに適当な本でも読むことにします。

ただ、その前に、結びの言葉としてラファエルの名言をご紹介します。

ラファエテルは十八世紀の人——性格学に先鞭をつけた者のひとりである——ゲーテも一時、彼を支持したと伝えられています。

いわく——何よりも、まず、極端な性格を研究せよ。もつとも、相反する二つの性格を。最良の善人と最悪の人非人の、もつともいちじるしい特徴を。もつとも、無趣味な俗人と、生まれながらの詩人、生まれながらの愚人、賢者、などの特徴を研究しなければならぬ——。





# A心酔のタイプ

絵・美濃村晃

かびや・かずひこ

## ペデラスティー

むかしは男子同性間の行為といえば、「しりが痒い」といい事を陰間しり」「しりのつまらぬは年明けの陰間なり」などの江戸期の川柳や、また小咄、男色をあつかった春本・春画等で知られるようにアナル・コイツスが代表的なものだった。

もともとこれらは、ほとんどすべてが、男娼にたいする客の、また稚子(ちご)にたいする念者(ねんじゃ)の——つまり、いわばウィルニングにたいするペデラストの一方的なA行為ではあったが……

ところが現今のホモの愛戯は、ペニス・ナイドが根幹をなしている、大半がPにたいする行為のようである。A行為はほとんど用いられず、むしろこれを嫌忌するものすらすくなくない。

これはどういうわけかということとは、後にしるすとして、今ではきわめてすくないかにみえる、ホ

モにおけるアナル・エロティックの実際についてみると——

まず二十五歳のペデ傾向の大学生Fが、私のもとによせてきた書信に、

「……ぼくはごく幼い時分から、ホモの傾向があったようで、家が呉服商を営んでいましたので、小僧さんを雇っていましたが、ぼくが八歳くらいでしたか、十歳も年上の小僧さんにはれてしまったのです。」

そこでいつも彼といっしょに寝ているのをさいわい、彼の睡眠中に、こっそりとそのアフターを攻略して、大いに満足したものでした。

小学六年のおわりころ、近所の中学(ぼくより三つばかり大きい)から自慰をおそわり、以後毎日のようにこれを反覆していました。また高校時代に、一人の下級生と仲良くなり、二人で相互オナニーなどをおこなったものです。しかしそのときでも、ぼくはアヌスの魅力に抗しかね、夏休み中を彼と

ともにすごしたとき、睡眠中の彼をいつもA行為して、悦んだものでした。

大学にはいってからまもなく、アルバイト先の会社で、同僚をもち、彼と合意の上では相互オナニーでしたが、彼が眠ってのちは、またまたその後庭への攻略が常でした。

このように自分だけのコソドロ的なA行為は、その後も大学生の従弟と一度、近所の高校生と三度、高校時代の友達と一度、それぞれおこないましたが、いつも悪い事をしているという意識に捉われながら、しかもどうにも自制できなかったのです。

なお、ぼくは浣腸することにひじょうな興味をもつ者です。しかしいままでその相手を得られないままに、鏡に自分の裸体をうつしては、ひとりでオナニーしただり浣腸したりして、鬱をはらしています。

このように人一倍A狂崇の強いぼくは、ゆきずりに自分の好むタ



イブの男性をみかけたりすると、他の多くの人が感じるように、あいてのPを想像するのではなく、あいてのAをその人の話や唇によつておしはかつては、ひとりでエキサイトしてしまうことがたびたびです」

F自身いつているように、そういう狂崇的なアヌス心酔らしい。

しかもそうしたAナイドのころを、ホモの相手にはおしかくして、うわべはPの愛撫をかわしながら、真に望むところのAへの行為は、相手が眠っているさいちゅうに、コッソリと相手のからだにこんなうというのだ。

つまりは、ふつうには人びとから汚穢視されているところのアヌスなので、それにたいする行為をもとめることが、相手にたいしてはずかしい——というよりも劣等感を覚えるからであらう。

現今のホモの愛戯に、Aにたいする行為——アナル・コイツスとかアニリングスというような行為が、僅少にしか現われてないとい



うことも、一つには右のような心因から発していると私は考える。ほんとうにだれでも、アナル・エロティツのころはもっており、ホモのだれでもが、心の底ではそれを充足する行為を望んでいるのだ。

フロイドの高弟で、同性愛研究の著作ももっているところのW・シュテーケルが、

「肛門性欲を完全に卒業してしまったということのできる人は、おそらくほとんどいないであろう」といつているように、肛門帯のある種の性的感帯は、つねにわたしたちの色情経験の一部をなしているのだ。

しかも、フロイドによれば、肛門はわれわれのパーソナリティ形成のうえに、重要な役割を演じているという。

つまり、本能はイド（リビドーとよばれる心的エネルギーの貯蔵所）から生じ、さいしよは身体の部分に関係しながら発展する。

幼児期におけるもっとも重要な

身体的部分は、口、肛門および性器である。経験と習慣的訓練によつて、これらの部分のなかの一つの活動が、つぎつぎと幼児の精神において、重要な役割を演ずるようになる。このなかの一つが特に幼児の心理過程に強く印象づけられると、それが性格特性となる——このように説いているのだ。

そしてそのうちの肛門的性格（アナル・キャラクター）は、肛門期（生後八カ月～四歳ごろ）に発達する特性であつて、そのおもな特長は規則的であること、しまつやであること、清潔で衛生的なこと、頑固なこと等とされているが、これらを肛門の排泄作用と思ひあわせるとまことに興味深い。

### ヒップ 偏好

前記のF君は、知りあつた数名の相手のいずれもにたいして、その睡眠中にやすやすと後庭を攻略したように記しているが、これはおそらく完全なペデラスティーではなく、接触程度の行為にすぎな



かったのだらうと推測される。

その経験者からきくところによると、ペダラスティは、とくにそれが初経験の者にたいしては、双方合意のうえの覚醒時の場合ですらも、そう簡単に遂行されるものではない由だからである。

Dという二十三歳の青年が私に寄せてきた手紙に、次ぎのような一部がしるされてあった。

「……私は現在、Hという土方の若者につきあっていますが、彼が私に要求するのは、私にたいするアナル・コイツス一本槍なのです。

さいしょの関係のとき、彼は潤滑剤としてオロナイン軟膏を使いました。が、それでも、私はどうも堪えがたい激痛に苦しみ、そのため未遂におわたたのです」

また、Dはこんなことも述べている――。

「Hは粗暴な男で、いつも私の臀部やふとももに平手打ちや、バンドでなぐりつけます。でん部と、ものほかは興味がないらしいのです。

また彼は、私に女性用のパンテ

イや海水着やコンビネーションを着せたりするのです。コンビネーションをきせられたときなど、それを着ればすぐ帰してやるというわけて、いうとおりにしたのですがご承知のとおりコンビネーションには股のわれ目があるので、五尺一寸の小柄な私は、強力な彼の力に屈して、アナル・コイツスされてしまったのです」

この文面によると、Dの相手である土方の若者は、Sの傾向があるとともに、でん部にたいする偏好者であるらしい。

でん部偏好は、アナル・エロティックの顕著な現われの一つなのだ。

また、手紙の筆者のD自身は、土方の若者のサディスティックな態度を困ったようにいいながらもその実は結構それをたのしんでいるようすなところは、明かにMであり、そしてまた臀部の展覧性がつよいように思われる。

## A オナニー

アナル・エロティックの強い者は、また、おのがAをもってオナニーレンしたり、浣腸したりして、その鬱を遣ることがすくなくない。

前記のFもその一人であることは、手紙の文面でも明日であり、また、これも私の懇意なMという若いプロフェッサーは、寄せてきた手紙のなかに、

「……私自身を分類してみますとアヌス型、浣腸マニアの部類ではないかと存じます。

これは一つには、はじめてエジヤクレーションしたのが、かぞえ年十三歳のおり、浣腸されたときだったせいではないかと存じます。

オナニーも前でするよりも、後でするほうが好きです」

うんぬんとのべている。

ことわるまでもなく、この人は男色者なのだが、孤独型で、積極的に愛の相手をもとめようとした

いところから、セックスの処理をAオナニーではらすのであろう。

またこれと逆に、Aオナニーが習慣となり、とりつかれて、同性愛者となってしまうたという、変った事例がある。

それはプロッホがその著書のなかに記しているところのもので――ニューヨークの若いタバコ屋だが彼は七歳のとき、棒のような物をアヌスにさしこむことをおぼえ、それによってひじょうな快美をえた。

彼はそれを犬の交尾をみているとき思いついて、犬のアヌスでするものだと思ったということだ。

彼が用いたさいしょの物は、ふつうのエンピツで、それをもってAオナニーしたとき、苦痛と快感を同時に感じた。のちには、油を塗った歯ブラシの柄を使った。

十歳のとき、彼は友だちの少年たちのいうとおりになりはじめ、その以後は同性愛の受け身の位置になつてばかりいた。

彼の外見や態度は、しだいに女



性的になりへたとえば婦人服に似た着物を身につけ、名前には手をくわえて女性的にひびかせる等、異性には完全に不感症になってしまった、というのである。

## 浣腸マニア

世に浣腸に興味をもつ者はすくなくないが、そのなかに自分の手で自分のからだに浣腸することを好むというのがある。これは明かにAオナニーとみていいだろう。こうした浣腸オナニーは、幼時の習慣が因をなすことがすくなくない。

というのは、多くの母親たちは子供たちを浣腸する習慣があり、子供のでん部の清潔にうるさすぎるほど、気をくばる。ところが、

そうされる子供にとっては、浣腸器の挿入や、清拭されるさいの摩擦などからかちえた、こころよい刺激の記憶は、肛門粘膜の本来の粘液の刺激に加わって、子供をAオナニーにみちびきやすく、長じては浣腸オナニーにとりつかれる

ようになるのだ。

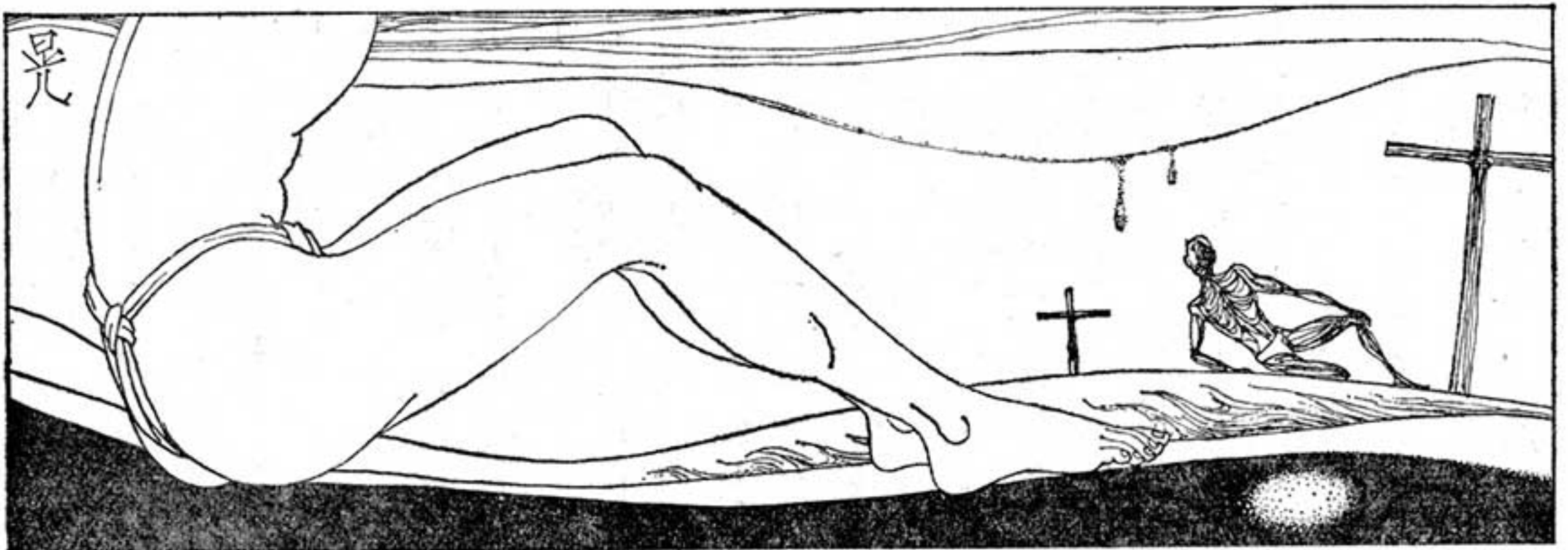
若い新劇俳優のC・Sは、次ぎのような手記を私のもとに寄せている。

「ぼくのホモの芽ばえは、母親の愛情と大いに関係があります。今から思えば、継母に育てられたとか、夫——つまりぼくの父親——の浮気とか、いろいろ気の毒な事情もあって、そのためヒス的になり、その対象にされたこちらは、大いにめいわくしたものです。

ものごころつきはじめたころから、母が死ぬまで、ぼくは彼女からいじめられどおしで、あるときなどは刀をもってきて、殺してやるとおどされました。小学校四、五年のときでした。

もっともぼくも強情で、ことごとくに母にはむかっていったから、両者のあいだに、すこしも和解するということころをみいだせませんでした。

それでも母という女は、いつも兄弟のうちの誰か一人を特に可愛がらずにはいられないたちだった



ので、そろそろぼくにもそのおはちが廻ってきそうなころ、彼女はポックリと亡くなってしまうたのです。

元来、男が女に愛情を感じていく過程は、母親に愛され、それがだんだん発展していったのはじめて自分も母のように女性を愛したいと思うようになるのではないでしょう。か。ぼくみたいな、母に愛されたこともない男には、女性に愛情をもちきれません。

ぼくの胸にはポツカリ穴があいてしまっていて、そのままですべてがおわっています。もう今となってはどうにもなりません。自分がカタワ者のように思えて、やりきれない時もあります。

そんななかで、ただ一つ、いまでも秘密のように思いだされる喜びは、母に浣腸されたときのことです。

腹ぐあいが悪いとき、二階につれていかれ、布団をかぶせられうしろをまくって両足をひとつにして、ぐっともちあげられ、尻をむ



きだしにされただけで、ぼくは顔がほてってきました。

そしてイチジク浣腸をさしこまれ、つめたい液が徐々に体内に入ってきたときは、まったく息がつまりそうになりました。

その後、だいぶ成長してから、そのときの好感が思いだされ、自分で浣腸器を買うようになりました。

浣腸というかなしいたのしみをあたえてくれたことが、母にたいするせめてもの愛のよすがとなっていたと、道化役を得意とするC・Sはいうのだ。

## アニリンガス

アニリンガスの経験を告白する者は、私の知る男色者のかぎり、ほとんど皆無といつてよい。

おそらく、それを経験した者がないのではなく、これだけはさすがに羞恥を覚えるというところでもあろうか……。

アニリンガスは子どものあいだには、性的ないたずらとして、よ

くみられられることである。私なども、たしか六、七歳のころ、遊び友達である近所の同年の男の児から、おのが家の庭の木かげで、アニリンガスをされ、またもとめられたことを、はっきりと記憶している。

また、小学校四年のころ、自家の書生——中学二年くらいだった——から夜陰ひそかに寢床に忍びこまれ、アニリンガスをされたりペデラスティーされたことがあった。後者はもちろん接触態度のものであった。そのどちらも、感覧についてはなんの記憶もない。

これらのことはすべて、アブノーマルなどというよりも、ふつうのだけれどもが、幼時に経験しているところのものだろう。

W・シュテーケルは、その著書のなかで、アントワープの美術館でルーベンスの「不感症のヴィナス」という絵をみたときの印象をのべているが、それによると——

入口で手渡されたカタログの解説には、はいつくばっているヴィ

ナス、キューピッドそれから背景にいる森の神をよくみるように、という注意があった。また森の神が舌を出しているのについて、「彼は舌を示して女神をからかっているようである」

とあった。

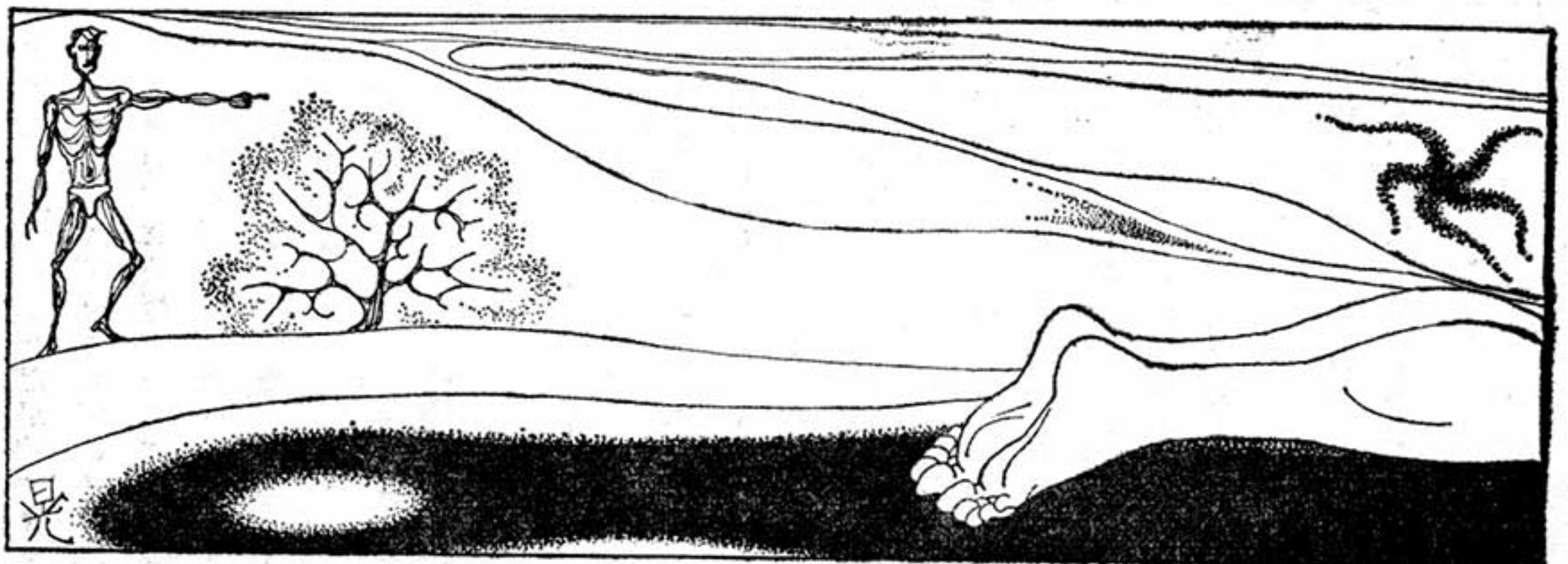
しかし、シュテーケルはこの絵を見たとき、画中の三者の姿勢について、

「キューピッドの姿勢は、明らかに排便のさいのそれであり、森の神の舌はアニリンガスを示唆している。そしてヴィナスは正常な方法にたいしては、不感症であるようにみえた」

というのである。

話題が女性にたいするアニリンガスにそれてしまったが、私はただ精神分析学者のものをみる見方はこういうものだということをいいたかったのである。

私は、アニリンガスは本来はけっしてアブノーマルなどというものではなく、むかしはふつうにおこなわれていたであろうところ





の、ナイーヴな欲望充足の方法の一つだと思っている。

しかもそれがもつとも抑圧されやすいというのは、どういうわけであろうか……

同性にたするアニリンガスの欲望が抑圧された場合、奇妙なかたちであらわれたという例を紹介してみよう。

それはやはりシユテーケルの扱った患者で、三十七歳の公務員だが、集合に出ることをひどく嫌うようになり、それを悩んで分析をもとめてきた。

この病氣は、六年前にトリッペルに罹ってのちはじまったということだった。

彼は前立腺肥大で、まいにちマッサージに通ったが、そのあとではひじょうに快く、それなくしてはいられなかった。マッサージのさいの肛門色情帯の刺激に快感をえていたことは、明らかだった。

分析が進むにつれ、彼がマッサージをよろこぶのは、過去において、まわりくどい方法であいつい

でおこった、一般的精神性欲の抑圧と複雑に関連していることが、明らかにになった。

さいしょ、彼はふと自方の肛門帯がよく湿めつていことに気づいた。(これは肛門性欲ではめずらしいことではない)

このような状態なので、彼はいつもそこをよく洗ったり、こすったりしなければならなかった。(シユテーケルはこれを偽装のオナニとみとめた)

また彼は、「排便がかすかながらも性欲を亢進させるから」というつまらない口実で、できうるかぎり排便をのばした。この生理的なことが、明らかに快感追及となつてしまった。

そしてある日、彼は肛門附近のたえがたい痒ゆさにたえられず、笑婦のところへ行つて、ラムビタスをやらせた。

このことはその後またたびつづけられた。

分析では、彼がじっさいには、無意識に、同性にこの動作をやっ

てもらいたいということを明らかにした。彼の集会嫌忌は、この欲望——同性によるアニリンガスの欲望にたいする闘争のあらわれだったのである。

彼がひとりで外出することの恐怖から、つきそいが必要となったのであつて、つきそいは彼が無意識の欲望にうちまかされるのを防いだのだ。

アナル・エロティックは、まだいろいろに現われる場合があるがそれらはまた別の項目で述べるとして、おわりに、ある男色者がA感覚について語ったコトバを結びとしよう。

「後庭というものは、やはり女性のように原始的な性格をもっているであろうか。男性器はエジャクレーションのちにふれられると、快感どころかかえつて不快を覚えるものであるのに、後庭は逐情のあとでもなお、じゅうぶん快美である。

女性のクリトリスが男性のペニスの退化したものであるとは、生

理学の教えるところだが、アヌスに快美神経が布置されているということは、単孔類から、アヌスとシャイデを、あるいはペニスをもつた高等な哺乳類に進化するとき、快美神経が大部分シャイデへまたはペニスへ移ったときに、なおアヌスに残存したものである。

そして快美小球にM型とW型、あるいはペニス型とシャイデ型というものがもしありとすれば、必然M型は敏感で、W型は鈍感であるはずだから、M型神経は急激に活動してたちまち作用を止め、W型神経は緩慢に作用して長くあとをひくのであらう。

アヌスに残存する快美神経は、ふだん刺激をうけることのなかったため、わずかに排便のとき多少の快感をおぼえるばかりだが、それが性行為にむすびついた刺激を継続してあたえられると、俄然覚醒することはありそうなことである」



# 日本刑罰史(一)

雄弓和名  
絵・史桂東

## 天刑の一 太陽刑

人間が人間を裁き、刑罰を加える他に、天が人間に刑罰を与えろという思想は、長く民間、俗信の世界を支配していたことである。

太陽を、光、力、生命の源泉として、すべての神のうちの最高創造主と、あがめて、お日様は、すなわち天照皇大神であり、この世の万象をつねに、見通していられるから、秘密も悪事も、太陽の眼からは、逃れることは出来ぬと考えられてきたのである。いわゆる、「お天道様の罰が当る」と言い伝えられた俗言が、太陽刑の思想である。

古文献に、子をまびく者達のおそれを表

現した図があるが、産褥の妻が、生れたばかりの嬰兒を、ひざで押し殺しているのを、屏風越しに、夫が眺めている、さらに、天上から、白雲にのった、お天道様(太陽)が、これを見守っているところを描き、てんとうと書き入れている。

## 天刑の二 天罰刑

諺にも、「天罰できめん」と言っているが、悪業はかならず、悪を以て報いられると言う思想が、長く、日本民族の心を支配していたのである。

古書にも「欲深く、人の金銭をむさぼり、横領するもの災難にあう」として、龍巻きに家を吹き倒されて、逃げまどう夫妻を描いている。これが天罰の刑である。

## 天刑の三 天狗にひきさかるる刑

天空を自由自在に飛びかけると言う、想像の怪、天狗は、人間の邪惡をにくみ、罰するものであると信じられて、「いつはりごとをこしらえ、公事(裁判訴訟事)を好み、出入り(けんか)の腰おしをいたし、悪だくみをする者は、天狗にひきさかれる」と添書きして、木の葉の舞い散る、わら屋根の上の空中で、羽根の生えた鳥天狗が、一人の男の両足を掴んで逆さに吊り上げ、股を左右に引きさいている図がある。

## 天刑の四 雷刑

帝釈天(因陀羅神、すなわち天帝)が、阿修羅を制圧して、幸福を、もたらすと言うインド思想は、因陀羅の罰、すなわち雷



神の罰は、悪人に及ぶと考えられ、全東洋を支配した。雷は、天の憤怒の表現であると信ぜられたのである。

「しうとに不幸の嫁、雷様に打ちころされるところ」と添え書きして、輪太鼓を打ちならし、黒雲にのった雷神が、地上に舞いおりて、嫁を打ち殺している古画が残っている。

#### 天刑の五 氏神刑

氏神様が、この世を見通していられることは太陽と同じである。氏神様は悪を憎み、無情な悪業を、ことに憎まれると信じられてきた。嫁を苛酷にあつかう、姑の過失死や事故死は、氏神様に蹴り殺されたと思われていた。

#### 天刑の六 荒神刑

荒神様と言うのは、かまどの神様であつて、三宝を守護し、怨敵を治罰する神であると言うので、三宝荒神と呼び、かまどの上にお祭りする。かまど神、荒神様は、月明りの夜は天に昇って、人間の罪状を、くわしく天帝に告げると信じられている、こわい神様である。江戸時代には、夫にさからう妻、妻は惨酷な夫、この両者は、荒神に殺されると信じられていた。

以上のように、天刑の存在を信じ、おそれる者ばかりであったならば、世の中に犯罪は存在しなくなるであろうが、そうでない者もいるので、やはり犯罪は起こり、必然的に人



串さしの刑

為的な刑罰も行われるわけである。

上古の日本にも犯罪と刑罰の存在したことは、古事記その他によって周知のことである

が、上古、中古の史実として伝わっているものはほとんど伝説的な刑罰であつて、史実としての価値は、いかなるものであろうか。

中古の律令は、支那にならい、刀杖笞の三刑を採用したと言われるが、文献に表れた鎌倉時代の刑罰など陰惨、苛酷なもので多いのは、律令が厳守されず、私刑的なものを加えていたことを物語っている。

#### 磔刑

平安朝時代末期以降の古文獻には、磔刑の史実が数多く存在している。

磔は、幡物、機物、機、肇、罽、八付、張付などと記載されているが、宇治拾遺物語(二)や、今昔物語(二九)などによると、当時の磔はかならずしも死刑とは限らず、幡物と名づけられた木、板、柱、杭等に縛りつけたり、釘で打ちつけたりして、鞭打つ拷問や刑罰を呼んでいた例が見られる。しかし鎌倉時代に入って、政権が武士の手に移ったところから、幡物は死を意味するものになってきたものと思われる。

復仇、敵兵威嚇の手段として、生きている者を、刑架にのせて、刺き殺し、屍を開張、乾枯することが行われた。



元来、磔の字義には、裂く、割る、張る開く、解く、などの意味があつて、生体、屍体の別なく、地上、架上の別なく、刀刃を用いるのと、刀以外を用いるの別なく、以上の字義があるので、古文獻の磔だけの記録では単に刺き殺したもののか、裂いたものか、はつきりしないわけであつて、車裂き、逆磔、水磔なども、混同しているのではないかと思われる。

元暦元年、平家追討の兵をあげた源頼朝は、父義朝を暗殺した仇敵、長田忠致と、その子、長田景家の両名を、義朝の墓前で土八付にして、なぶり殺しにしたと、平治物語に記載してあるが、この土八付というのは、地上に板を敷き、太い竹竿をかつがせて左右の手を縛りつけ、手足を太釘で板と土に打ちつけておいて、刀でなぶり殺しに、長く苦しめながら殺したのである。珍らしいものでは、武道伝来記に箱磔という記載があつて、嫉妬から同僚七名を殺害した女を、被害者の遺族達が、復仇のため厚木で箱をつくり、箱の中に裸体にして釘で手足を打ちつけて、生きたまま、海に流して殺したと言うことで、これを箱磔と言っている。

磔刑は、復仇と処罰をかねて行われることが多く、反逆罪の反臣に対する制裁として行われることが常識であり、その場合、本人だけでなく、近親者、家人まで磔にした。

豊臣秀吉時代になると、盗賊、殺人の刑にも磔を課し、切支丹宗徒の虐殺にも、これを適用した。

安土、桃山時代における磔刑のうち、記録に残されたものの数例をあげると、

永祿五年（三九九年前）吉田の城主、反臣の妻子十一名を串刺しの刑に処す。

永祿六年、織田信雄、反臣玉井父子三名を張付に掛ける。

永祿七年、織田信長、信雄、荒木一族四百六十余名を有岡において焼き殺し、九七名を尼崎において幡物に掛け、数名を京都において、車裂きの刑に処す。

永祿七年、武田信玄、武笠与一郎を、逆機物（逆さにして磔）に掛ける。

永祿十二年、北畠具教、反臣の女を、くびり殺し、串刺しにして張付にする。

永祿十四年 秀吉の命によって、明智光秀の屍に首を継ぎ合せ、栗田口において張付にする。

同じころ、秀吉、西征の途上、近習、油断

の者、重き輩を磔に掛ける。

同じころ、秀吉、小田原城攻略、捕虜、三島右衛門を引回しの上、張付に掛ける。

永祿十九年、秀吉、奈良において、高利貸し数十名を磔に掛ける。

文祿三年（三六七年前）、秀吉、長崎において、伴天連六名、伴頭二十余名を張付に掛ける。

同年、馬盗人二名、張付。

など種々の記録が残っているのを見ると民衆、または敵に対する威嚇、見せしめのため、極刑として、磔を採用したものと思われる。

前述の文中、串刺しと言うのは、丸太棒、または角材を地中に打込み、先端を鋭利に削りとがらせておき、罪人をその上に乗せて刺し通し、そのまま晒しておくものである。

背後から、腹にかけて刺し通す場合と、腔門から刺し通す場合の二通りがある。

永祿十二年、長篠城のほとりで虐殺された鳥井強右衛門の場合は、逆磔で、頭を下にして刑架に縛りつけられ、なぶり殺しにされた凄惨なものであった。

戦乱の世が治まり、江戸時代に入ってから



らも、人の氣風は荒く、徳川幕府の律令も  
確固とした制定もないままに、磔刑は、し  
ばしば行われたらしく、種々な記録が残っ  
ている。

### 江戸時代初期の磔刑

慶長十八年（三四八年前）関東には、盜  
賊がはびこったので、見付けしだい引き捕  
え、首を斬り、磔にかけ、火あぶりにした  
が、つきることがなかった。向崎の甚内と  
いふ大盗人を捕えたときなど、  
首に縄をかけ、馬にのせ、幡を  
ささせ、江戸の町を引回した上、  
浅草原において張付けに掛けた  
と、慶長見聞集（七）に記録さ  
れている。

これは、享保後の引回し、磔  
とよく似た刑式であり、おそら  
くこのしきたりが後年まで、踏  
習されたのであろうと想像され  
る。

寛永三年（三三五年前）、大  
久保相模守様、切支丹吟味役と  
して上洛、転宗せぬ者三名の中  
二名を、富田において、逆磔に  
かけ、都にて、転宗せぬ者四名

の中二名を、火あぶり、二名を磔、堺にて一  
名磔、二名は牛裂きにしたと、切支丹宗門来  
朝実記に記録している。

寛永十七年（三二二年前）、武門諸説拾遺  
の記録するところによると、転宗せぬ切支丹  
宗徒七十余名を、品川沖に逆さに吊して、水  
磔にかたけことが見えている。

朝が満つのと、首から肩あたりまで汐水に  
ひたり、息もつけぬ苦しみにあえぎ、汐が引

くと、顔は、はれ上がり人相も変わり、こ  
の世の人とも思えぬ凄惨さで、八日目には  
皆、死に絶えたと言う。

慶安四年（三一〇前）には、鈴ヶ森刑場  
で丸橋忠弥の母、妻、子と一味の者、磔。  
万治元年（三〇三年前）、にせ銭遣い磔。  
延宝七年（二八二年前）、鈴ヶ森刑場にお  
いて、平井権八の磔が行われている。

### 坑殺

戦国時代、織田信長が行なっ  
たと言われる鋸引きの刑は、生  
き埋めにして首だけ地上に出し  
て置き、鋸で首を引き切ったと  
言われているが、生きた人間を  
土中の穴に、ほおり込み、石や  
土砂で埋め殺す方法は、しばし  
ば行われたものである。

奈良、春日神社の神鹿を殺し  
た者は、この石子詰めと呼ばれ  
る坑刑に処せられるしきたりが  
あって、あやまって鹿を殺した  
少年が、生き埋めにされて殺さ  
れた哀れな話が残されている。  
美濃地方には、人枘ひとまつと言って  
四角い大きな穴を数多くほって





置き、切支丹宗徒を、枿ではかるように、ほおりこんで埋め殺したと言われる切支丹殉教の遺跡が残っている。

一思いに殺すのではなく残酷な坑刑の一例として、明良洪範の卷十九に記載の話では、丹波国、福知山城主、稲葉淡路守記通は、家中の代官で悪事を働いた者を、その家族もろとも、ことごとく搦め捕り、居室前の庭に穴をほって首まで埋めならべて、首に桶をかぶせて放置し、朝夕、慰みに、桶をとらせて、一々見回っていたが、日がたつにつれて、だんだん死んで行き、代官が最後まで死にきれず残っていたが、七日目に息絶えたと言うことである。

### 烹刑

文祿四年七月三日（三六六年前）大盗人石川五右衛門は子供と母ともに、京都三条河原で釜ゆでの刑に処せられて、「石川や浜の真砂子」の辞世とともに死んだ。五右衛門を煮殺した釜と言われるものが、あちこちに現存するが、真疑のほどは判然としない。三本足、足外ぞりの大釜であったであらうと思われる。

伝説によると五右衛門は、一子を両手に支えて煮えかえる釜中であって、子供を熱

湯の責苦から守ったが、力つきてともに死んだと言われている。

### 柴漬簀巻

柴で包み、大石を結びつけておもりとし、水底に沈めて殺す方法であって、古来、各地で、数多く行われた。有名な史実としては、源義経と、愛妾・静御前の間に生れた嬰兒を柴漬けとして鎌倉の海に沈めたと言う。また、大内義隆が、婢を中津川において、柴漬けにしたと言う記録が、義残後覚に残っている。

この柴漬にならい、後世、簀巻と称して、簀で巻き、縄をかけ、水に投ずる私的制裁が、しばしば行われた。

盲人の間や、博徒の間では、水を吞ますと称していたのは、この簀巻のことである。

### 刺刑（はなそぎ）

鼻そぎ刑は、類聚名義抄によれば、はなさく、はなかく、はなはしらえる、と呼ばれ、上古の史実は伝わっていないし、中古の律令にもないが、しばしば行われたものと想像される。

史実として古いものでは、刑罰として執行されたものではないけれども、元暦二年、（七七〇余年前）後白河法皇の院宣の副使、



花方という者が、平忠卿のために、鼻を切り取られた記録が、源平盛衰記三十八に記載されている。

天文十六年（四一四年前）、武田信玄の家臣、赤口関左衛門と寺川四郎右衛門の両名は口論のすえ喧嘩し、喧嘩両成敗のしきりにより、両名とも、耳と鼻をかきさら





れ、首を切られる刑に処せられたことが、甲陽軍鑑十七の四十七に記録されている。弘治二年（四〇五年前）、齋藤道三の首の鼻をそいだ話。

天正二年（三八七年前）、島長城を脱出しようとした男女二千人ばかり（一説には千人ともいう）が、信長のために斬られ、耳

と鼻をそがれた話。

天正十年に、高遠城主、仁科信盛が、投降をすすめにきた信忠の使僧の鼻と耳を切った話などが古書にのっているのを見ると、武家の間では、しばしば鼻や耳をそいだことがあったようである。

以上の五つの例は、刑罰とは言えないかもしれぬが、刑罰として課された鼻そぎも、数多く記録に残っている。

罪名は、種々雑多で一定していないところを見ると、微罪の場合適当に、採用したのではないかと思われる。

慶長十四年（三五二年前）、日蓮宗の僧、日経、連源、玄聰、玉雄、可円、琳碩の六名は他の諸宗を誹謗したかどで呼び出されたが、あくまで自説をまげないで、ついに日経は耳と鼻をそがれ、他の五名は鼻をそがれ琳碩はあまり深く鼻を切りとれたので、出血多量で落命した記録がある。

寛文元年（三百年前）、金沢藩の侍方長屋に忍び込んで、木綿着物帷子を盗みとった者一名、耳と鼻をそいで、追放。

寛文五年、江戸において、奉公人の請人（保証人）に立ったにもかかわらず、その責任をとらなかった者二名、鼻をそいで、江戸五里

四方所払い（追放）の刑に処す。御仕置裁許帳に記載。同じく御仕置裁許帳に、

寛文七年、類似の罪状によって、鼻をそぎ江戸町中追放の刑。

寛文十年、金沢藩で、御横目と詐称して賄（袖の下）をとった浪人一名、耳と鼻をそぎ取り追放の刑。

寛文十年、博奕宿をなした者一名、鼻をそいで追放（金沢藩）。

寛文十一年、流しもちで鴨四羽を獲った者一名、鼻をそぎ、金沢より追放。

寛文十二年、金沢藩で、他国米を買い占め、役人の封印を拒んだ者一名、耳と鼻をそぎ御国追放の刑。

天和二年（二七九年前）、御仕置裁許帳記録によれば、請人に立ち、不都合の処置あった者一名、日本橋もとに三日間、晒しの上、鼻をそいで追放の刑。

享保三年、長崎で公布された律令には、抜荷（密貿易）商売に就き、本人は耳をそぎ、家財の中、相応に取り上げ、追放——の掟があり、公刑として、耳そぎが行われた。

（憲政類典二の二十三、所載）

また、公裁秘録に、享保三年定めとして



耳、鼻をそぎ候科の者より、一等軽き品の者は向後腕に、廻輪、副三分程二筋入墨、致可申候の記載があるということから察すれば、各地において、耳や、鼻をそぐ刑が、江戸時代までしばしば行われたものと思われる。

しかし、宝永六年十二月二十六日付の覚書（憲政類典四の五所載）には、これに制限を加え、耳、鼻をそぎ、または指などを切候ようなること、向後無用可被仕、と言っている。

江戸時代末期には、この刑罰は廃せられたが、私刑の世界では、今日まで、しばしば行われた。

とくに博徒の私刑、てきやの私刑において、指をつめるといって、指を切りおとすことは詫のしるしとして行われた。

刑罰としてではないが、鼻をそぐ話で、とくに興味のある話が、雑兵物語のなかに出てくる。

戦場で、敵兵の首をとった場合、首を数多く持って、本陣に帰ってくることは、めんどろうでもあるし、なかなか重いので、不可能なことである。それで、敵屍の鼻をそ

いで、首をとったしるしに持ちかえるのであるが、その場合、鼻だけそいで帰ってもそれが女の鼻か、子供の鼻か、はっきりしないので、巧名手柄のしるしにはならない。

鼻をそぎとる場合には、鼻を、上唇に一しよに、そぎとってくる必要がある。上唇がついていれば、ひげの具合などで、それが男の鼻であることがはっきりするからである。

戦場では、敵の捕虜の、鼻や耳をそぐことはしばしば行われたと思われる。

京都に、耳塚といふ塚があつて、これは朝鮮征伐のとき、加藤清正が斬りとして持ち帰った、数多くの耳を埋め葬った所であると言ひ伝えられている。

三省堂百科大辞典の中の「はなそぎ」の条に、アイヌ夫妻で両名とも、鼻をそぎとられた者の写真が掲載されている。この両名は、札幌付近のアイヌ部落、豊という所に、明治二十七年頃、住んでいたアイヌで、夫妻とも、数度盗みを働いたため、鼻そぎの私刑に処せられたものである。

夫の名は、チャリサンゲと言ひ、明治中期まで、鼻そぎ刑の実物が、生きのこつていて

写真に残っているなどは、大へん珍らしい例である。

昭和六、七年ごろ、東京郊外、東長崎に住んでいた筆者は、土地のベビー・ゴルフ場で六尺豊かな長身を、灰色の絹の長さん（支那服）に包んだ男をたびたび見かけて、いつしか口をきくようになった。この男は、鼻がなく、短い口ひげを生やした四十五、六歳の鋭い目付きの男であつた。少し親しくなつてから、私は思ひきつて、大へんききたいことであつたが、彼の鼻の由来を問ひ正して見た。

彼の身の上話によると、想像していた通りの支那浪人で、支那奥地で、馬賊連中との話のもつれから、私刑にあひ、縛り上げられ殺されるところを、死一等を減じられて、鼻をそがれて放免されたのであるといふことであつた。

支那は古来、剽刑の盛んに行われた土地であるから、大正時代の支那奥地で、鼻そぎが行われたとしてもふしぎではないと思われる。

（未完）



# 鞭に生きる女④

ヴァン・ロッド・作画

泰西出版資料会社・特約



## ① 三人の奴隷

鞭踊りの人気スター シルヴィアは、三人の奴隷を得た。

シルヴィアの肉体と宝石をねらって、邸のなかにしのびこんだ泥棒男リック・ネルソン。

それより以前に雇い入れた土人女のサージー。

そしてもう一人の女奴隷は、シルヴィアの芸能マネージャーだった、ビッキィ・ドレイクである。

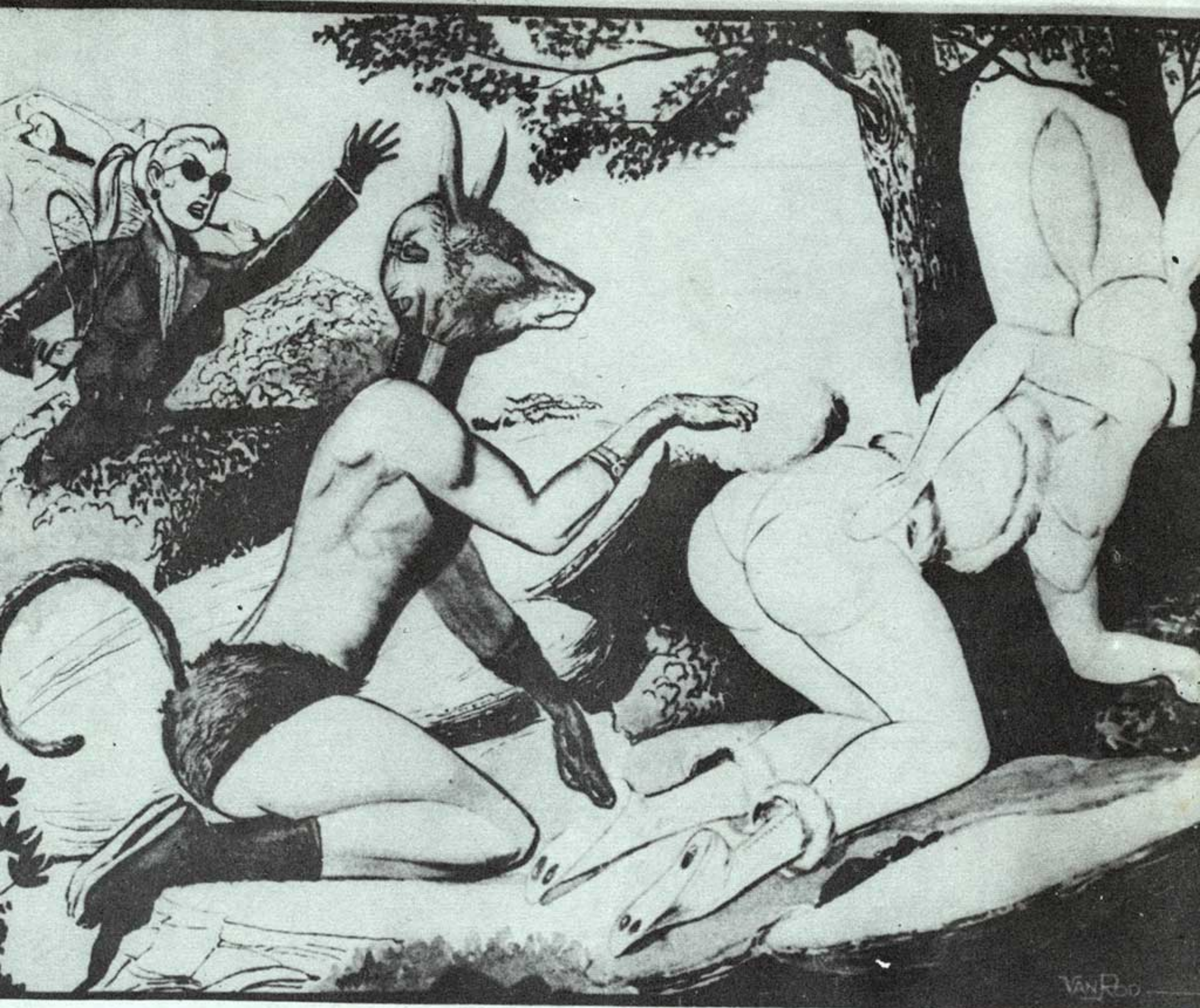
ことに新しい奴隷女のドレイクとリックとの組み合わせは、シルヴィアの興味をひいた。

シルヴィアは、さまざまの束縛道具を考案し、それをつくらせ、男女二人の奴隷に使用させた。

反抗すれば、すぐ鞭を浴びせる。シルヴィアの考案は、まったくデリケートで、天才的だった。

ビッキィ・ドレイクもいまはあきらめ、鞭の恐怖に屈伏した。





## ② 狼あそび

ちかごろシルヴィアが夢中になっているのは、邸を外に、山へ出かけての狼あそびだった。

リックを狼に、ビッキをうさぎに扮装させて車にのせ、人目につかない山のなかで遊戯をはじめた。

「そら、狼、はしれ！ 走ってあのうさぎを捕え、めちやくちやに噛み殺せ！」

リックの背なかに、ぴしりつと鞭がとぶ。

狼のリックは走りだす。

牝うさぎのビッキは逃げる。

二人とも、四つん這いに這ったままで逃げたり追ったりしなければならぬのだ。

「そら、逃げる、追え！ なまけていると、また鞭がいくよ！」

シルヴィアは、ひゅうひゅうと鞭を空鳴りさせながら、二人のあとを追いかける。

牝うさぎは鞭に脅かされ、狼に追われて必死に樹間を逃げまわる。

しかし、男のリックには、どうしてもかなわない。ついには捕われ、ねじ伏せられてしまう。

「さあ、そこで狼は、うさぎをたべてしまおうんだよ」シルヴィアは興奮してけしかけるのだ。

たべてしまえ、というこの命令は、うさぎのビッキを、おかしてしまえ、という残酷な意味だった。

その行為をながめながら、シルヴィアは哄笑した。



### ③ 人間食台

いつものように、仲のよい踊り子たちが、あそびにくる。するとシルヴィアは、得意になって、三人の男女の奴隷を供するのだった。

テラスへでて、コーヒーをのむ。

そのテーブルをささえる脚には、ビッキイを利用した。ビッキイはおおむけに固定され、乳房と腹で食卓を水平にささえなければならぬ。

おまけにビッキイの首は、来客用のいすの下へ、すっぽりとはまるようになっていたのだった。

男奴隷のリックは、シルヴィアのいすの下に、手足を荷物のように縛られて押しこめられている。

「こういう生きたテーブルや、いすで、コーヒーをのむと、またひととき味がいいわね、シルヴィア」

美しく驕慢な客は、そういつてコーヒーをすすする。彼女らの偉大なしりの下では、二人の奴隷が、うめき声をもらすまいと、苦しい努力と忍耐をつづけているのだ。

「ウウム、ウウムウム……」

「ヒイイ、ヒヒヒヒイ……」

苦悶の声が、どうしてももれる。

そのうめき声がまた、こころよい刺激となって、シルヴィアや、彼女の残忍な友人たちの耳をくすぐるのだ。ときには、わざと熱いコーヒーを、ビッキイの乳房のあたりにこぼしたりする。







#### ④ 食事運搬機

天才的なシルヴィアの考案のなかで、もっとも巧妙につくられたのが、この食事運搬機だった。

小さな三輪車の上に、リックの手足を、うつ伏せに縛りつける。

そのリックの背の上に、ビッキイがあおむけに縛りつけられ、足と手でテーブルをささえているのだ。

いちばん下のリックに、ビッキイやテーブルの重量が、まともにのしかかってくるが、リックはつぶれることができない。

リックの腹の下には、するどい鉄の釘が植えられている。すこしでもラクをしようとすれば、その釘は、ようしやなくリックの腹に突きささるのだ。

この運搬機の操作をするのは、土人女のサージーだった。サージーの背後には、シルヴィアが鞭をにぎって見守っている。

「ほら、テーブルがかたむいたよ。コップがすべり落ちるじゃないか。もし粗相をしたら、骨にひびがはいるほど、鞭をくらわせてやるからね」

シルヴィアはそばから、冷酷な罵声を浴びせかけるのだ。

奴隷男の首すじに、ビッキイのしりが、やわらかい拷問具のように、ぐりぐりとのかかってくる。

二人の肉体は一本の縄でしっかりと縛りつけられているので、どうにも避けることはできないのだった。



## ⑤ 地下室

どんなわずかな失敗にも、シルヴィアは逆上して猛りくるう。

カップからコーヒーを一滴こぼしたという過失により、男女三人の奴隷は、れいによって地下室に監禁された。

女中のサージーは、壁に打ちこまれた手錠に、両手をたかくつなされ、リックは細いくさりで前手縛りにされた。

口には皮製のさるぐつわをはめられ、首輪もつけられた。

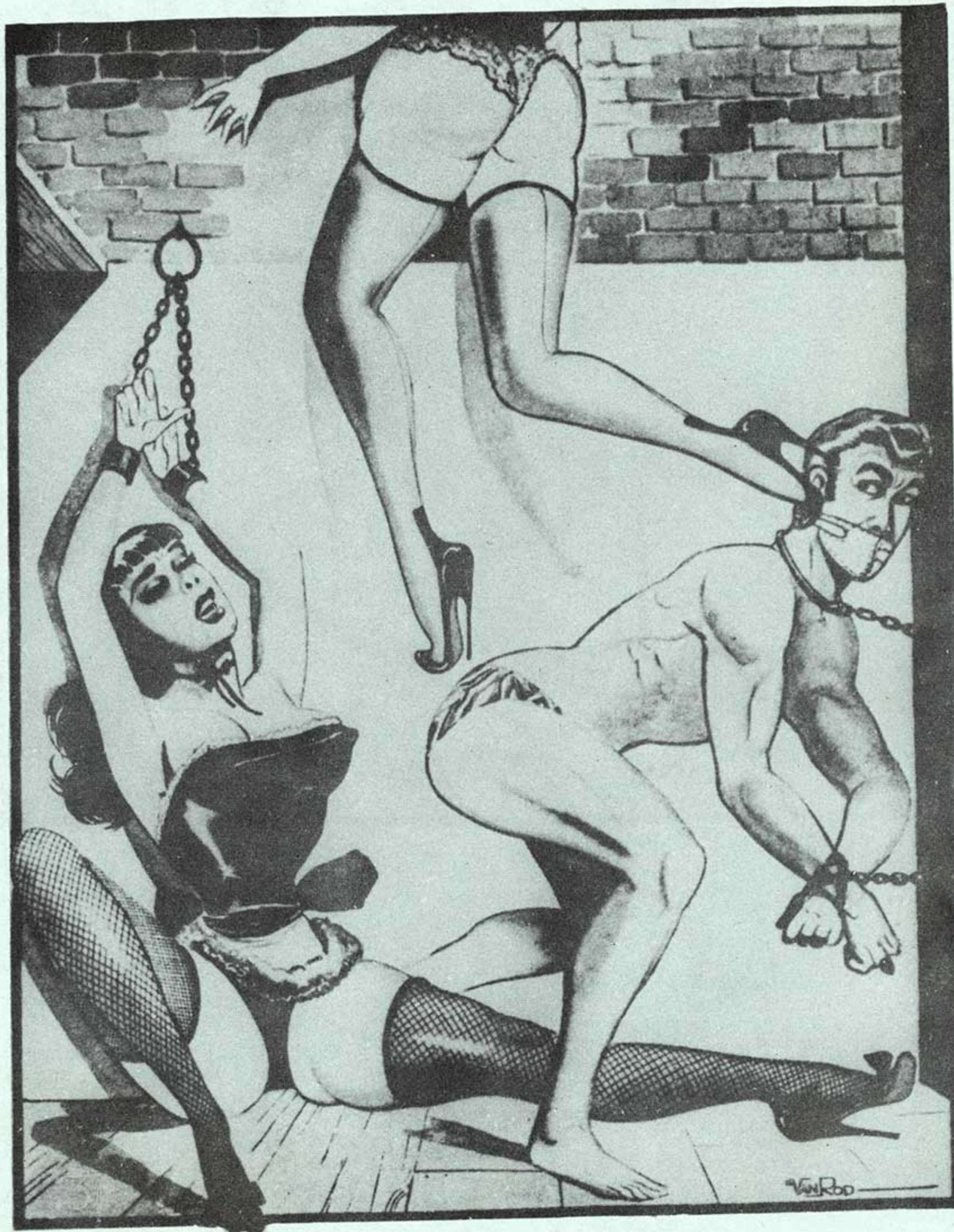
ビッキイもまた上半身をくさりで縛られ、天井から宙吊りに吊り上げられた。

ビッキイの足は、ちょうどリックの肩のあたりに下げられているので、彼女は苦しまぎれにハイヒールの足で、リックを踏みつけにするのだ。

そうしないと、全身が宙に浮いて、くさりかビッキイの乳房を激しくしめつけるのだ。

痛い、たすけてくれ、とさけびたいが、リックは声がでない。

「ム、ム、ムウ!……」



リックのあたまを、顔を、首を、苦しまぎ

れのビッキイの靴が、夢中で蹴りつける。

「おもしろいわ。もっと踏み、もっと蹴ろ。かかとの先で、奴隷男の首すじに穴をあけろ!」

シルヴィアは、長い鞭をふりまわしながらけ

しかける。靴のかかとで踏みこまれるリックの苦悶の表情が、シルヴィアの心に、火のよう

な熱い快感をあたえるのだ。



## ⑥ 特別製の鞭

わめきながらシルヴィアは、自分から興奮の度をたかめていく。

「リック！」  
と、シルヴィアはどなりつける。  
「はい！」  
リックはこたえ、戦慄する。

嗜虐感が、むらむらと身内にみなぎり、がまんできなくなって特別製の皮鞭をにぎる。  
そして、リックのからだを、もっとも鞭打ちに適した位置に縛りなおすのだ。

「あたしの鞭をいただきたいか！」  
と、シルヴィア。

「はい、いただきますございます」  
と、リック。

「特別製の鞭だぞ。いままでより数倍も痛いぞ」  
「はい、かまいません」

リックは、犬がおびえるような声をだした。  
たしかに、その鞭は、すさまじい威力をもっていた。  
六本の皮紐の先端に、小さな星型の鉄玉がついている。

どんなに鞭に馴れた肌でも、この鞭を浴びせられてはたまらなかった。

「うおうッ、うおうッ！」  
リックは吠え、壁をかきむしった。強烈な苦痛と、そして強烈な快感……。





## ⑦ 飛 躍

男女三人の奴隷は、シルヴィアの鞭におどる生きた道具と化した。

シルヴィアは、まんぞくだった。

が、まんぞくは同時に、つぎへの飛躍の欲望をもさそう。

「そうだわ。この従順な奴隷たちを、もっとたくさん人間の目に触れさせてやろう」

シルヴィアは思いつく。この思いつきは、彼女の虚栄心、征服欲を、いっそうまんぞくさせる。

シルヴィアは鞭踊りのスターである。その自分の踊りのなかに、三人の奴隷をうまく登場させるのだ。そして本当に鞭打つ。

大勢の観客は、なんのトリックもない彼女の迫真的な鞭さばきに、大かっさいをするだろう。さっそくシルヴィアは、このアイディアを実行に移した。



「あたしの教えることを忠実に守らないと、さかさ吊りにして九尾の鞭をくらわせるよ」  
「女王さま、おれはどうも、舞台に立って芝居をするなんて、自信がねえ」

おそろおそろ、リックはいった。  
つぎの瞬間、リックのからだは、ゆかの上にたたきつけられ、あらしのような皮鞭にあいでいた。



## ⑧ 魅惑の舞台

ステージに立ったシルヴィアは、水を得た魚のように、はつらつとしていた。

客席はほとんどが男であり、男のすべては美しいものに弱い。

ステージの袖で、リックは思ひだす。それは、夢のような過去だ。

右手に長い皮鞭をにぎり、ぴしりッ、ぴしりッと打ち鳴らす。

その鞭の音は、こころよいリズムとなって観客を魅了するのだ。

数カ月前、リックもまた、この客席にすわり、シルヴィアの麗姿にうっとり見とれた客の一人だったのだ。

あまりの美しさにひかれ、さっそくその夜、彼女の肉体をうばおうとして、リックは邸のなかにしのびこんだ。

ところが、シルヴィアの鞭は、逆に、リックをたたきのめし、屈伏させたのである。

その夜からはじまった苦痛と甘美の生活――。

ふしぎな快樂の経験――。

思えば、奇異な運命の変転である。

前の幕のショウが終わり、新しい音楽がはじまった。

「さあ、出番だよ」

リックとビッキイは、鞭に追われてステージに登場していく。

(つづく)





# たたみの牢獄

62.6

■モデル…………エセル・モニカ













カメラ ■ 毛 卓 三  
モデル ■ エセル・モニカ  
演出 ■ 藤 見 郁



















## 和室のひとり

■カメラ 猪島昌也  
■モデル 谷 まりも  
■演出 美濃村 晃

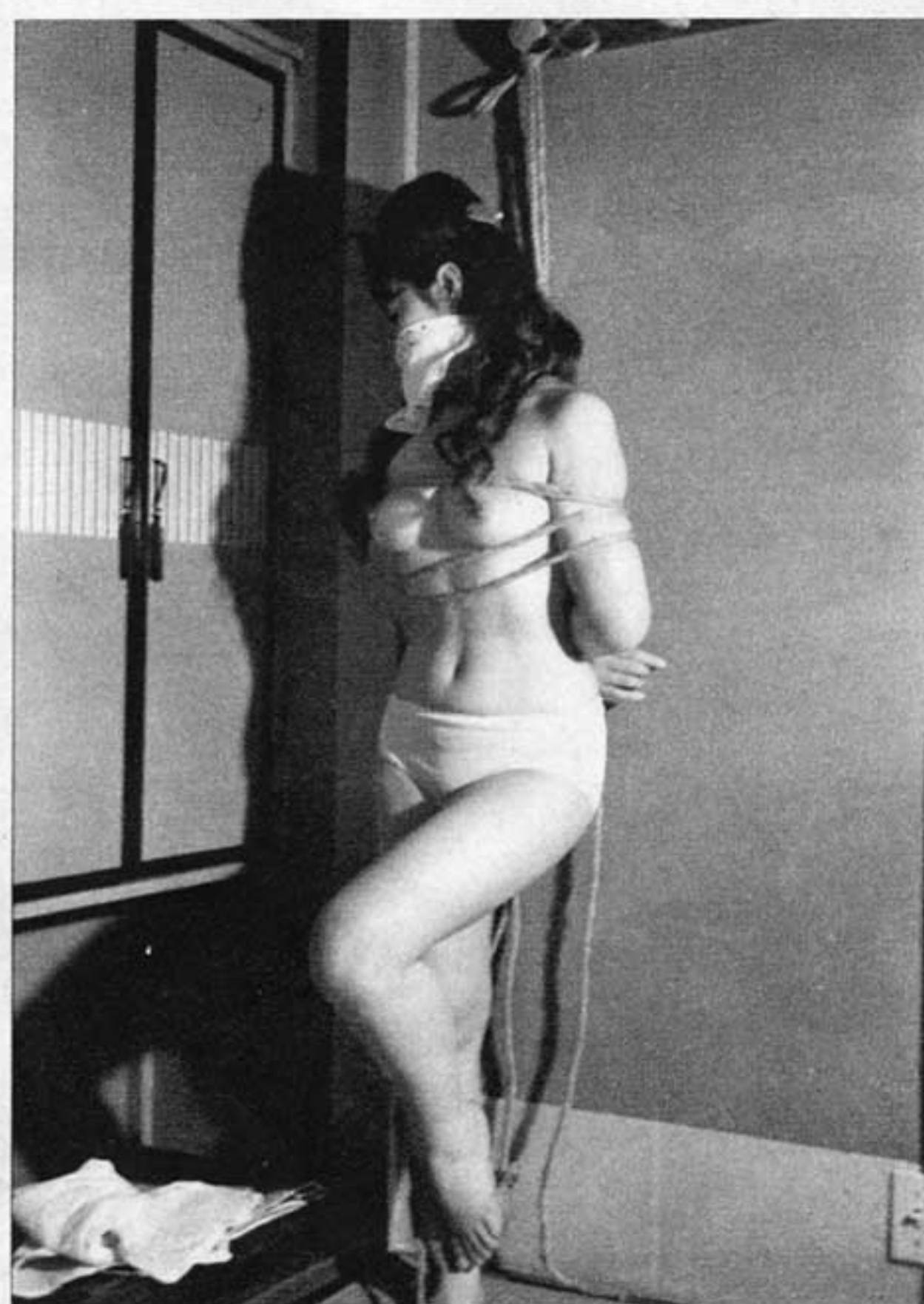


























悪王残酷絵物語

# フン族の猛雄アッチラ

作・松平荘司  
絵・中川彩子

## ① ハレムの美女

西暦四百三十三年――。

フン族の猛雄アッチラ大王のひき  
いる大軍は、モエシア、トラキア、  
イリリクムの各地を征服し、ついに  
東ローマの首府コンスタンチノーブ

ルを包囲した。

東ローマの皇帝テオドシウスは、  
アッチラ大王に和を乞い、多額の賠  
賞金と、みずからの後宮に擁した数  
百人の美女を差しだすことを約束し  
た。

わずか二十五歳の蛮王は、いまや

得意の絶頂にあった。

日夜、美酒美食におぼれ、ハレム  
の大温泉場で、美女たちに、たくま  
しい褐色の裸身を洗わせる。

「もつとごしごしとこすれ。肩をも  
め。腰をさすれ」

アッチラに群がる白裸の女たち。





## ② 女の密使

アッチラの欲望は、やがて極限にきた。

ローマ皇帝テオドシウスにむかって、

「あなたの愛娘マルタ姫を、むこう三年間、人質に申しうけたい」

といいだしたのである。

——この思いあがりの蛮族めが！

と、内心激怒したテオドシウスも、これを拒絶することはできない。アッチラを怒らせれば、ローマは人民ともに灰になる。

やむなく、応諾した。が、同時にテオドシウスは、近国の西ゴードのフレドリック王へ密使を送った。

「たがい協力して、共同の敵であるフン族を、欧州大陸から駆逐しようではないか」

折り返し、フレドリック王から、返事の密使が送られてきた。

しかし、さすがに敏捷を誇るフン族の衛兵は、この密使を捕えた。

フン族軍の目をあざむくために、密使はまだ、うら若い女であった。

「密書はどこだ。裸にむいてしらべろ！」

うしろ手に縛りあげられ、裸身のすみずみまでを調べられていく女。

だが、どこからも密書はでてこない。





### ③ イレズミ密書

このとき、アッチラ大王の目が光った。

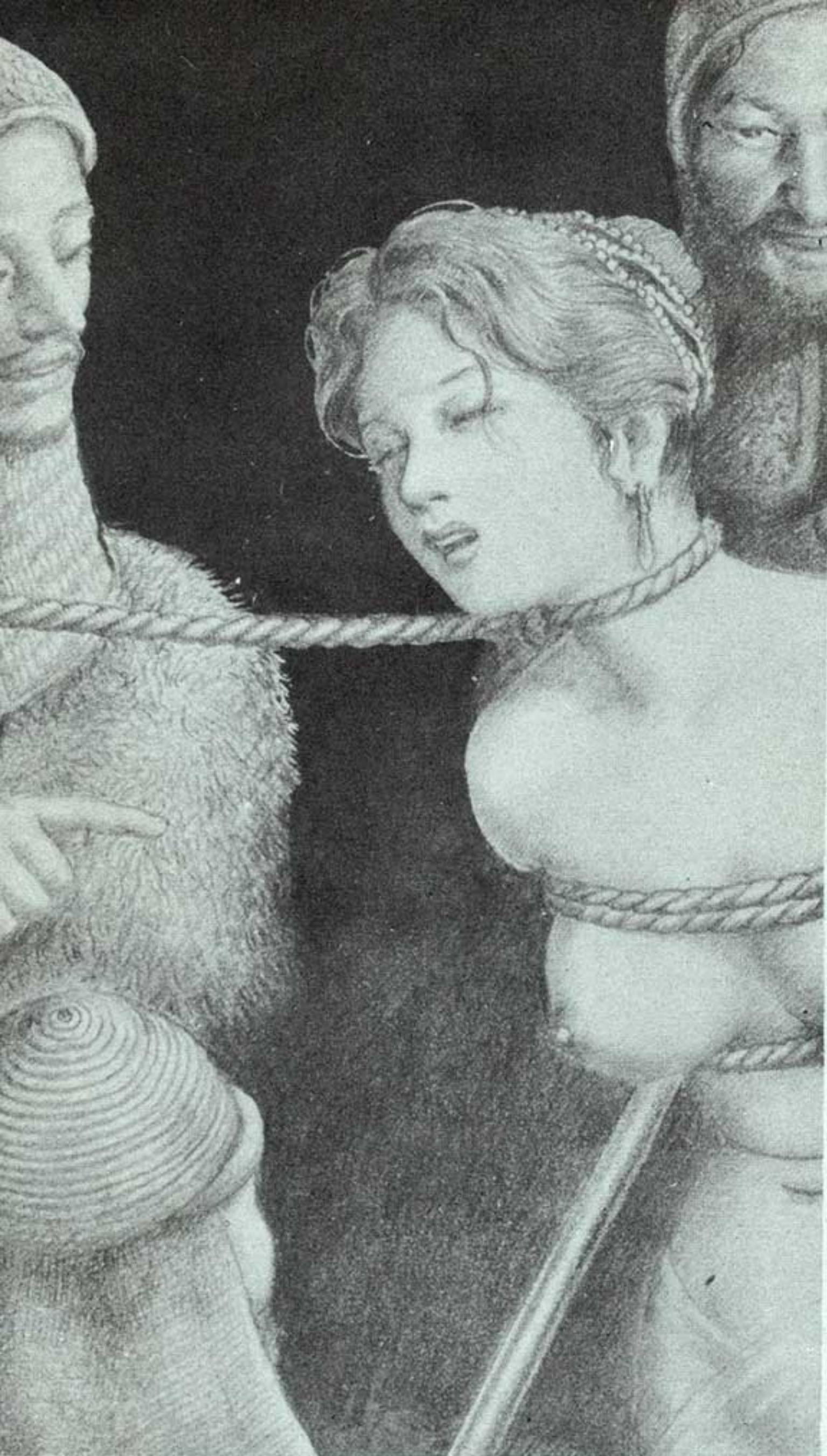
「髪を切れ！ この女の髪をそりおとせ！」

大王の命令に、たちまち、女の髪の毛ぜんぶが、そりおとされた。

すると、女の頭の地肌に、密文がイレズミされていたのである。——協力して蛮族を撃退しよう。という確答であった。

「やっぱり、そうか！」

アッチラの顔に、笑いと怒りがよぎった。



### ④ 高貴の肌

ローマ皇帝に反逆の心あり、と知ったアッチラは、当然、怒り狂った。この怒りは、まず、人質のマルタ姫の肉体にむけられた。

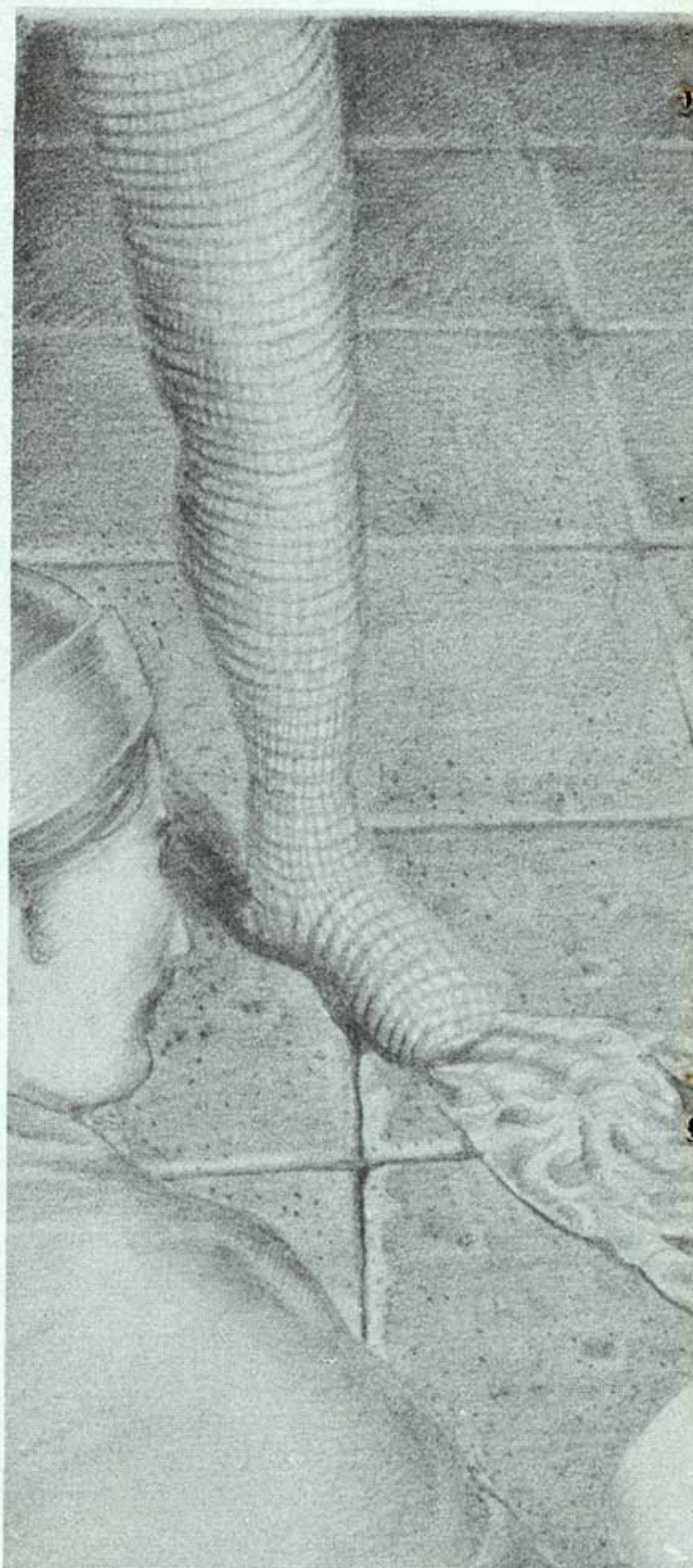
「おまえの親父はうそつきだ。おまえはうそつきの娘だ！」

雪よりも白くけがれないマルタ姫の肌が、蛮族の野卑な兵士どもの手によってむきだされ、そのなめらかな左右の腕は、きびしく背中にしばりあげられた。

「拷問室へひきずってこい！」

アッチラはわめいた。

あらあらしい縄にいましめられた高貴の肌が、犬のようにひきずられていく。







## ⑤ 卑しい目

ぶきみな、暗い拷問室。

マルタ姫をしばった縄は、天井の鉤にわたされ、兵士たちの手によって、その縄じりがずるずる……と引かれた。

「ひいひいッ！」

マルタ姫の裸身は、いましめの縄に引かれて宙に浮きあがった。

乳房にぎりぎり縄がくいこむ。白い足が苦痛と恐怖にふるえ、むなしく宙を蹴る。

縄はなおも休まず引かれ、姫のからだは、さらに高く吊りあがっていく。

「う、うううッ！」

白い足が必死にもかくその下に、アッチラ大王をはじめ、フン族の将兵たちの顔があつまっていた。

高貴な姫の、あられもない苦悶のすがたを見あげて笑う。卑しい目、目、目……。

「いままでは人質だったから手をつけなかったが、今夜からはこのアッチラの女だ！」



## ⑥ 敗走の馬車

西ゴートの王フレドリックは、西ローマの将アエチウスと手をにぎり、ついに起った。

両軍の勢力、合わせて六十余万。

西暦四百五十一年、連合軍は三度の激戦の末、アッチラの蛮族軍を打ち破った。

暴威におごったアッチラも、いまは敗走の運命にある。

多くの美女をローマにすててきたアッチラだが、マルタ姫だけは、はなさなかった。

特別につくらせた馬車のなかに、マルタ姫は悲運に泣いていた。

馬車の内部には柱があり、マルタ姫はその

柱に、嚴重にしばりつけられていた。自殺をおそれ、口にはサルグツワが、がっきりと噛ませてある。アッチラはこの姫を粗暴な方法で愛し、逃亡と自殺をおそれたのである。しかし、この敗走軍の中に、ローマ皇帝の秘命をうけたアントニウスがまぎれこんでいるのを、アッチラもさすがに知らなかった。





## ⑦ 油焼きの刑

アントニウスの秘命とは、むろん、マルタ姫を奪いかえすことであった。

やがて——アッチラの軍は、本国であるホンガリアに到着した。

長い遠征に兵馬は疲れている。一年ほどは英気をやしない、軍備をととのえねば、とアッチラは考える。アッチラ自身は、マルタ姫への粗暴な愛撫に、疲れを休めるのだった。

一方、アントニウスは乞食にまでなって、マルタ姫救出のチャンスをねらっていた。

ある夜、ついにアントニウスは後宮にしのびこみ、マルタ姫の幽閉されている一室にまで潜入した。

しかし、その夜もマルタ姫を訪れたアッチラに見えられ、あえなく捕えられた。

姫を愛していたアッチラは逆上した。

よく朝早く、アントニウスとマルタ姫に対する、残酷な刑が開始された。

後宮の庭に、X字型のハリツケ柱がたてられた。そのハリツケ柱に、全裸にちかいマルタ姫が、両手両足をひらいたまま、しばらくつけられた。

マルタ姫の目の前の庭土に、穴が掘られてあった。穴のなかには、縛られたアントニウスがうごめいていた。

やがて、穴のなかに多量の油がそそぎこまれ、火がつけられた。アントニウスの悲鳴。

マルタ姫は、しばらくたまたま気絶した。









## ⑧ 暴雄滅亡

暴雄アッチラの本当の残虐史は、このときからはじまったといわれる。マルタ姫の心を最後まで自分のものにできなかったあせりが彼を無意味な残虐にかりたてた。

ツミのない女にも、かたっぱしから肉体の

苦痛をあたえ、責めさいなんだ。

こうして、一年ののち――

アッチラはふたたび軍を進撃させてイタリ

ーに侵入し、さらにローマを脅かした。

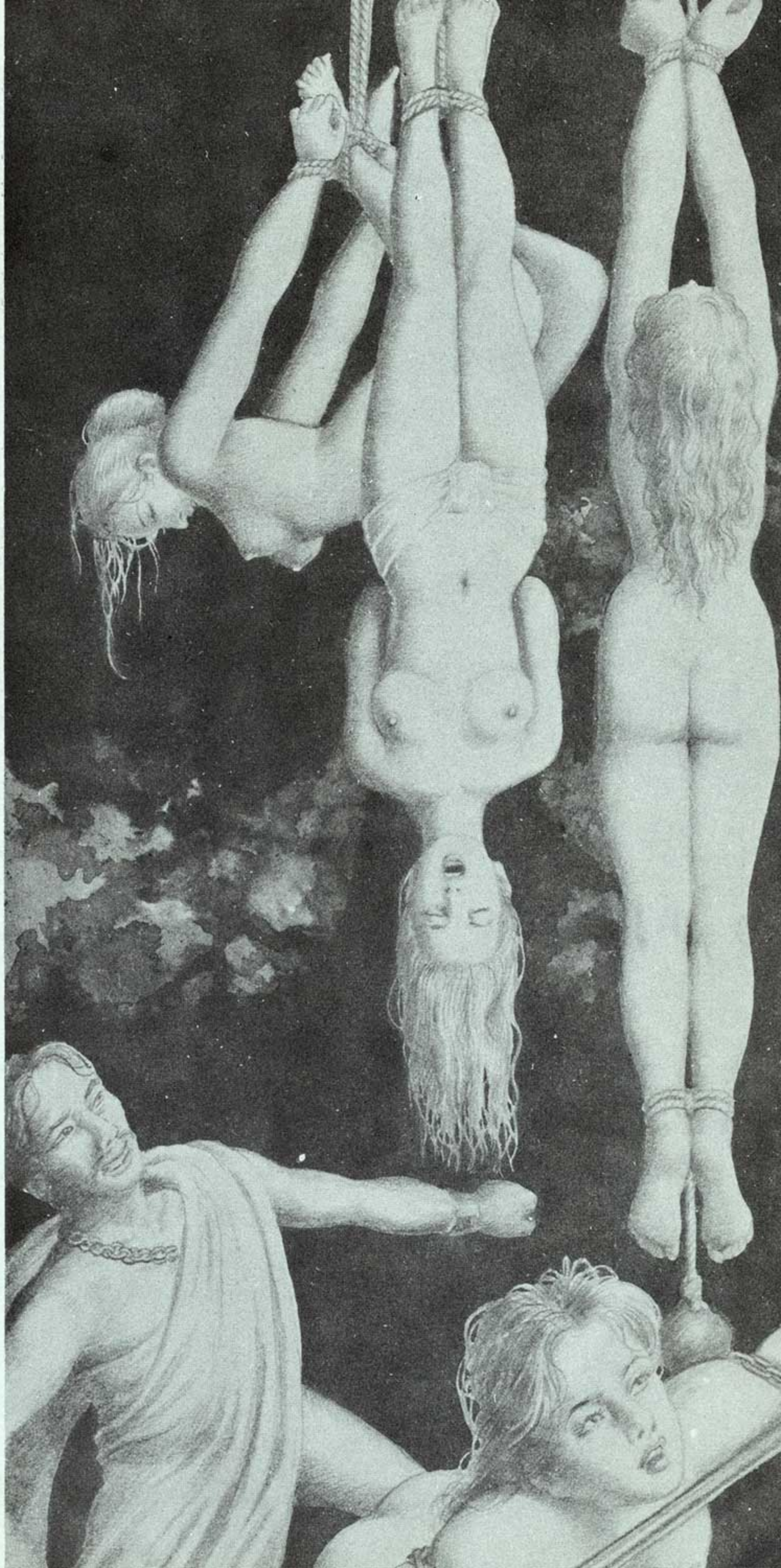
しかし、法王レオ一世にあざむかれて、再度ローマと和をむすんだ。

このときをもって、フン族の英雄アッチラ

の大帝国建設の夢はくずれ去った。

病を得て、没したのである。毒殺されたという説もある。

アッチラの死後、その長子エライが意志を継いだ。従属国や同盟国がむほんをおこして、フン族の暴威も、ようやく滅亡の運命をたどっていくのである。





裏窓叢書  
第五集

責め肌忍法

作・万里小路 崑

挿画・古正英生  
装幀・喜多玲子

気違い学者といわれている小野道玄がつくりあげた、強力な火薬の製法を、公儀隠密の伊賀衆と甲賀忍者が、死力を尽して奪いあう！

道玄の娘、雪絵は、その柔肌に秘文をひめたまま、魔手の渦の中に翻弄されるのだ！

凄艶美貌の女スリ、つばくろお新。淫虐無類の伊賀衆

黒猿党の総帥乾兵部、雌鹿のような肢体をもつ女忍者朱実。正義の剣士扇銀之介。そして女体をむさぼる稀代の好色淫魔で抜荷買いの但島屋源兵衛……正邪入りまじってくりひろげる、伝奇時代責め小説の決定版！！

裏窓叢書第五集完成！

目次

★破幻の巻

白粉彫り、忍者縛り、苦悶の部屋、武蔵野・樹陰の柔肌

★忍風の巻

夜鴉、むささび責め、救いの手、血風陣、忍者屋敷

★魔影の巻

苦悶肌、黒猿印、夜ぐも、責め土蔵、肌吟味

★呪縛の巻

死の襲撃、魔の翳、美女無惨、甲賀縄、白粉彫り

五月初旬発売！

売り切れぬうちに！

価四百円・送料七十円・中野区江古田一  
あまとりあ社（振替東京一〇七五六・久保書店宛）





## 「落日の群像」

「別冊文芸春秋」七十七号所載の黒岩重吾氏作「落日の群像」という百枚の中編小説は「裏窓」的にみても、かなり興味ぶかい作品である。

鈴木金属株式会社の社長、鈴木誠一は、苦勞に苦勞をかさねて、ようやく現在の地位を得た男。

妻の政子は三度めだが、若く美貌で、しかもグラマー。

しかし、ちかごろ鈴木は、この妻と夫婦のいとなみができない。不能なのだ。しかたがないので、秘具を使っている。

ところが、この鈴木も、自分の会社の女事務員の道子とねるときだけは、不能ではない。

なぜか？

そもそも、鈴木と道子との結びつきは、二泊三日の社内旅行の夜である。

深夜、鈴木は男女混浴の岩風呂にはいっていく。すると、誰もいないはずの浴場に、一人だけ白い

裸身がはいっている。小さなからだである。

鈴木は、その相手を中学生の少女だと思つて、

「お嬢さんは中学二年ですか、わしの娘も二年だが……」

と、愛想のつもりでいう。すると、女は泣きだすのである。

その女が道子で、じつは二十歳なのだ。

道子は自分の肉体の貧弱さに、ひどいコンプレックスを抱いている。

——肋骨が見え、乳房がまだ少女のように小さい道子。

——腋窩は無毛であつた。恥毛も極めて薄く、その性器は少女のようであつた。肌は脂気がない。

確かに女というよりも植物質の少女であつた。

——温泉に皆と一緒に入らず、深夜一人しのぶようにつかつたのも、自分の身体を見られたくないからであつた。

——道子が身体をすくめたのは男性が入って来たことに対する羞

恥心からではなく、自分の貧弱さを隠すためであつたようだ。もし道子がグラマーであつたら、彼女は胸をそらしたかもしれない。

などという描写がある。

体重も十貫たらずの貧弱さだが鈴木は、この劣等感にいじけた肉体に、ふいに、嗜虐的な欲情をおぼえる。

そして、浴場のタイルの上で、強引に関係してしまう。

それから、社長と女事務員のひそかな関係がつづけられる。

——道子の顔を起し、薄い唇に吸いつき、縮めている腕と足を握るとき、何時も鈴木は政子に対しては感じたことのない嗜虐的な欲情を感じるのだった。

という次第である。

いかにも実在しそうなサディズムで、よく描けている。一読をおすすめしたい作品である。(藤)

## 香辛料のすすめ

「裏窓」のグラビアは号を追ってますます快調、いよいよ充実し





てきて頼もしき限り——とは、大方の読者のいつわらざる感想だろうと思う。

変な解説文やセリフみたいなものをつけないところがよい——と思っているが「何か物足りないな？」と首をかしげる人のために、調味料（香辛料と云ってもよろしい）のつけ方をお教えしておきます。ひそかに試して、成功している方法です。

まず、ボードレールの詩集「悪の華」の訳本を買ってくる。古本で結構。五百数十ページの厚さで百円ぐらいのものがあります。

この「悪の華」は、絞罪人、断頭台、奴隷女、邪教徒、吸血鬼、鞭、すすり泣き、破戒、懲罰、妖婦、快楽の筈、等々といった辞句を盛大に駆使して、シャルル・ボードレール先生が綴った名作でありますから、いうまでもなく裏窓のもつ雰囲気ドンピシャリ。そこで——適当なページの適当な詩の一部を適当に切り取って、グラビアの余白に貼付するのである。

余白がない場合は、モデルの体を避けて、写真の一隅に貼る。たとえば、こんな具合——。

彼女はかく叫び、怨みの唾をのみ下せども、永遠の天の摂理を弁えざる身は、

あわれ、地獄のどん底に、母性の罪の犠牲となる火焙り台を自らしつらう。

（祝禱）

垂れさがる乳房あらわに、衣服は乱れ、女人たちは暗き九天の下に身をもがきて、生け贄に献げられたる獣の大群のごとく、ドン・ジュアンの背後より長き怒号を漂わしぬ。

（地獄のドン・ジュアン）

お前は全宇宙をお前の閨房の中に置くようだ。淫猥な女よ！倦怠がお前の魂を残忍にする。お前の歯をあの奇怪な戯れに馴らすためには、毎日その歯並びに一つつつの心臓が要る。

（お前は全宇宙を……）

臥床の上には裸の胴体、人目構わず平然と、造物主より賜わりたる、その秘密なる輝きと、そ

の因果なる美しさを、いとしどけなくさらけだす。

（殉教の女）

おお、処女よ、悪魔よ、怪物よ  
殉教の女たちよ、現実を軽んずる偉大な精神よ、無窮を探ぐる女たちよ、狂信の徒よ、半獣神よ、時には喚き、時にはすすり泣く汝らよ、

（呪われたる女たち）

なるべく、グラビアの内容と詩の文句が合致するように工夫をすることがコツですが、しかし極言すれば、「悪の華」は編中いたる所、利用できない部分はないほどです。

また、余り長くなく、二行ぐらいを利用してよい。「まごころの寵もれるためし未だなき、尖れる乳房の悩ましき先端」などというのが随所にある。

（滝）

## 人工お女性

寛政から享和のころにかけて刊行された人見寧という人の随筆集に「黒甜瑣語」と題する本がある。





その（第三編の三）に、こんな話が出てくる――。

西洋人、本国の皮帛を以て裸婦を製す。長短、人のごとし。これを箱中に秘し、旅途幽亭無聊の時、箱より出し捧げ、気を吹けば、忽然として肥沢通脉、真の人のごとし、抱きて衾中に擁すに、雙手交頸、両脚勾欄、己が意のごとし。これを出路美人と名づく。一軀の価銀一流と。一流は十二両を云うと「曠園雜誌」に検せり。本邦の吾妻形なるべし。西洋人の狡計淫欲なる、譬を取るに者なし。云々――。

「何だか、よくわからないな？」と思う人は何回も読み返して下さい。読書百遍、意おのずから通ず――と申しますから。

手っ取り早く言えば、これはつまり、ダッチ・ワイフのことである。文中に「出路美人」とあるのは「旅行者用の美女人形」という意味もあるのだろうが、「出路」は、すなわち「ダッチ」の当て字なのであろう。「しゅつろ」と読

まない方がよいのである。「本国の皮帛」とは、ゴムのことだと思ふ。

「西洋人の狡計淫欲――」は、いささか手前勝手な言い分であり、本邦にも「吾妻形」があったのだから、人間の考えることは、洋の東西を問わず、似たようなものだ。現代でも、南極観測船「宗谷」にダッチ・ワイフが積み込まれていた。とか、持っては行ったが使われなかった――などという噂があったのは、ごぞんじのとおり。

（爽）

### リズ亭の話

エリザベス・テイラーが、また離婚をした。

ローマで、大作「クレオパトラ」の撮形中、相手役のリチャード・バートンに恋したのが原因――という。

この「クレオパトラ」の出演料が百万ドルといわれる。日本のお金にして約三億六千万円である。もっとも、税金でこっそり持って

いかれるのではあるが、それにしてもたいしたもの。史上最高のギヤラだという。

テイラーの離婚は、これで四回目。三回目は正確に言えばマイケル・トッドの事故死でやむを得ず独身になったのだが、その際、親身になって慰めてくれたデビー・レイノルズから亭主のエディ・フィシャーを奪ってしまったので、ひどく評判を落とした。

「クレオパトラ」の撮影中、生命の危機をさえつたえられる大病になり、フィシャー旦那が不眠不休の看病をしたのは、まだ記憶に新しい話だが、やっと治ったのにほかの男のところへ走られたのは、フィシャー君としてもさぞや立つ瀬がなからう。

リチャード・バートン君もいつグッド・バイされるか――当人としても不安だろうと思うのだが、それでも熱くなって結婚したがるのは、相手が何しろ美女であることと、男性たる者は、いざその時がきても「別れたっていいじゃな





いか、泣くことないじゃないか。……俺は俺なんだア」という具合に、割合い傷つかないからだろうか？

一方、テイラーの方は、たとえ前夫の子供を引き取っても、何しろ三億六千万円の女なのだから、これまた傷つかない。

もっとも、バートン君が五人目のリス亭、つまり、リスの亭主になれるかどうかは今のところ未定だが、いずれにしても、彼女の結婚は要するにマンハント型だ。自分が男を選び、あきれば自分の方から捨て去るのである。

それを承知で亭主志願をするのは、バートン君、マゾっけがあるのじゃなからうか？

ただし、世界映画界最高の美女を手に入れて男の優越感を味わいたいのならサド型だ。

テイラーは演技賞を取るくらいだから、演技派に属するには違いないが、非凡なグラマー女優でもある。

去年の夏、突然に、熱いトタン

屋根の猫がバタフィールド8に落っこちたりしたあたり、一連の「性に憑かれた女」を演じた最近の出演歴は、私生活とどう結びついての所産であろうか？

「ジャイアンツ」の撮影中、故ジエームス・デインに縄で手を縛られて笑っている写真が残っているが、彼女、多情で移り気で、割合いにマゾっ気もあるのではなからうか。

(芝)

### 「被虐の系譜」

南条範夫の小説である。信州のある小藩の家臣が代々、藩主たちによって受け被虐の歴史、それを日記体でつづった記録をもとにしてえがいた、なかなかの力作である。

物語は、被虐を甘受した一族の男たちの手で、事件があった日だけをしるした記録、その書出しは慶長年間から廃藩置県がおこなわれた明治の代までを、きわめて簡潔に、含蓄をもって書かれている。

だいたい泰平の世では、藩の大

小をとわず江戸幕府のごきげんさえ気をつかえば、ひまをもてあます藩主や家老たちがいたとしてもふしぎではない。

したがって酒と色事に明け暮れたり、そこをたくみに利用するこゝとで、私腹をこやし権欲をみたしていく家老たちがいたことも想像できる。

「被虐の系譜」の一族は、いわばこうした藩主の慰みや家老の犠牲と屈辱に、代々たえてきた血族である。

——ある代的美青年は、藩主から寵愛を受け、藩主の愛妾とともに房事の相手とされ、そのうえ下着や愛妾の肌着を拝領物として受ける。ここで家臣がさずかる拝領物の意味と、この美青年が受けた拝領物とを合わせて考えてみるとよい。

またある代の男は、一刀流の達人「闇の太刀」と高名だったため妻をおかされたうえ、江戸へ賄路に利用されていた自分の娘の首を目かくしされたまま断つ。





このほか切腹、殉死、かずかずの屈辱による被虐を受けながら、廃藩置県で公に主従関係が終りをつげても、その後裔は藩主とのつながりを断ちきれず、東京に邸をかまえた子爵のもとへ、その飢えをもとめていく。

旧主が狂疾だときき、病める主君は自分が責任をもって看病申し上げると、三年も病院に強要しつづけた後、願いかなって自分の下宿の二階へ、ぶよぶよの狂人、だらしなく唇からよだれをたらしている四十男を迎えいれ、しかもその床へ、殿は長い間お一人でご不自由したからと、最愛の恋人をささげたうえ、自分は階下の三丈でセンベイぶとんにくるまって寝る男があらわれるかとおもうと、この記録の持ち主であった男は――

しかし、なんといっても一番お気の毒なのは陛下です。私は終戦の日、玉音放送をきいて涙があふれました。お痛わしくて、お痛わしくて――と、第二次大戦の思い出ばなしをくりかえす始末だから、

まさに「被虐の系譜」というよりほかはない。「別冊文芸春秋」第七十七号換載。

(広)

### 「マイク・ハマー」より

フジテレビ水曜の夜十時から放送される「マイク・ハマー」というドラマはご存じミッキー・スピレーン先生原作の私立探偵もので主演はダレン・マックギヤビンという御仁。

喧嘩が強くて、顔が広くて、女が好きで、事件は拳骨と足で解決するものと心得ていて、何でもかでも二十数分間で片づけちゃって残りの数分間にコマーシャルを入れる余裕を必ずつくり、もってスポンサーに義理を立てる――というタフ・ガイ。

三月二十一日に放送されたのは「ろう人形の復讐」と題するものであり、「ろう」とは「ローソク」の「ろう」であります。

舞台はコニー・アイランドであり、ここは見世物小屋だのジェット・コースターだのいろいろと

集まっている。いわばアメリカの浅草六区みたいなところ。

その中に、恐怖人形の見世物小屋がある。

後ろ手に縛られた女が絞殺されかかっているところ、美女が拷問台にくくりつけられているところ、断頭台に固定されている女囚、といった種類の人形がいろいろ並んでいる小屋であり、ここのおやじは「誰よりも人形を愛す」と自他ともに認めている変り者だが、一見したところ好人物らしい――という設定。

おやじは、各人形についての説明をしながら見物人を案内して回り、最後にサーピスとしてギロチンを動かしてみせる。

ボタンを押すと刀が降下して、哀れ、後ろ手縛りの囚人の首は床へ切り落とされて転ろがる――という趣向だが、ろう人形であるから心配はないことになっている。

ところが、ここにちよとしたトラブルが起きる。近くの見世物で働く男と婚約したある娘がおり





その娘を脅迫する昔の情夫がお  
り、そいつがヤクザなヤローであ  
って「金をよこせ。さもないと昔  
のことをバラしちまうぞ」などと  
ケチなユスリを始めている。

さらに、誤解からマイク・ハマ  
ーもそのゴタゴタに巻きこまれて  
盛大にブンなぐったり、ブツ飛ば  
されたりが始まるが、いつも娘に  
同情して親切にしてくれるのがれ  
いの恐怖人形のおやじ——。

ところが、この親切は、実はた  
だの親切ではなかったものであり、  
年甲斐もなく、おやじはその娘に  
横恋慕していたのである——とい  
う真相が明らかになる。

自分の小屋の中でマイクたちに  
追い詰められたおやじは、足もと  
が乱れて何かにつまづき、ギロチ  
ンの所で倒れてしまう。そのハズ  
ミでボタンを押しちまっていたの  
でありますから何でたまりましよ  
う、おやじは人形の代りに首を斬  
られて落命する。

つまり「誰よりも誰よりも人形  
を愛す」はずのおやじが人間の女

を愛したので、人形がその裏切り  
を怒り、復讐をしたのだ——とい  
う意味があるのだが、「ただの事  
故」だと思いたい人は思ってもよ  
ろしい。

(酔鱈武士)

### ふしぎなベッド

三月十六日毎日新聞朝刊の「海  
外こぼれ話」という欄に「とても  
眠れそうにない」という見出しで  
きわめてせいぜい沢なベッドの話が紹  
介されている。

四隅に実物大の裸女の立像がつ  
いていて、それがなかなか迫真の  
出来であり、ポーズも、それぞれに  
悩ましい——といった写真が出て  
おり、紹介記事には、こうある。

「四隅に婦人の裸像がある写真の  
ベッドは千ポンドの銀で作られ、  
この上に横たわると各々の裸像の  
持つうちわが静かに動き、オヘン

バッハの天国と地獄がスプリング  
の下から流れるという。これは十  
九世紀の終りにニューヨークで、  
あるインドの富豪のために作られ  
たもので、その行方がわからず、

いま英米の収集家が血まなこにな  
って捜している。」

同紙の写真を転載できないのは  
残念だが、人形は非常に艶美であ  
り、そのほかの飾りも豪華にでき  
ている。

これを造らせた「あるインドの  
富豪」というのは、人間の女が嫌  
いで、ピグマリオニスト(偶像恋  
着症者)だったのではなからうか  
——などと考えたりする。

これだけ大きな物が行方不明に  
なったというのもふしぎだが、英  
米の収集家が血まなこになって探  
しているというのだから、破壊さ  
れたり、焼かれたり、といった言  
い伝えなどはないのだろう。

しかし、小説的にその行方をさ  
ぐるならば、嫉妬深い妻が火を放  
った——といった情景が考えられ  
る。

なお、ピグマリオニズムを文芸  
作品に扱った例では、日本の作家  
としては江戸川乱歩氏が有名。

偶像恋着症は元来、屍体愛好症  
(ネクロフィリイ)と親類のよう





なものだが、乱歩原作を三島由紀夫氏が劇化した「黒蜥蜴」などには、それが濃厚に出ていた。

(腐爛軒酒多飲)

## 同性愛治療法

長いあいだ、高度の同性愛をたのしんできた四十歳の紳士が、薬物投与とテープレコーダーの使用で、さしもの「病氣」もなおったと、イギリスの医学雑誌が発表している。

この「実験」を発表したのは、医学博士のパシル・シヨonz氏。「患者」というのは、大学卒の学歴をもち、十八歳から二十二年間倒錯生活をおくってきたという大ベテラン。

ところで、博士がおこなった苦心の治療法というのがケツサク。まず、アポモルヒネという薬を患者に注射する。やがて患者はひどい不快感をおぼえ、吐きけをもよおしてくる。

このとき博士は、患者に、彼がこれまで交際してきた男たちと同

じタイプの連中の映画をみせる。つまり不快感と「男」とを暗示的感覚的に結びつかせるわけ。

それから二時間おきに、同性愛の原因を説明したテープを、強制的にきかせる。

つぎに、毎晩、患者を二時間おきに起こして、治療の効果が着々あがっていることをきかせる。

「ほーら、きみはだんだんよくなってきたよ。もうすぐ正常になれるんだよ。男なんかとしたってつまらんよ。やっぱりいいのは女だよ」

てなぐあい。

そして、患者に、肉体的魅力百パーセントの写真をみせる。むろん、全裸か、それにちかいようなステキな美人のシャシンなんですよ。

さらに、女性歌手のセクシーな歌をきかせるという趣向。

最後には、男性にはぜったいがない、女性のもっとも女性らしいすばらしい部分をもって、患者の「男性」をたっぷりと恍惚の境地

へ——とまでは書いていなかったけど、さっとソコまでやったにちがいない。

この四十歳の紳士は、自分で決心してそんな病院へ入院したんだろうが、ひとことのせいか、なんともユーモラスな話題である。

だけど、その治療でもうれつに男がきらいになつてしまい、街へ出てもバスにのつても、男の匂いをかいただけで吐きけがするようになったら困るだろう。

社会生活なんか、とてもできない。

しかし、一時的にはよくなって「男ぎらい」になったとしても、すこしの月日がたったら、はたしてどうか。

その紳士の、それから後の情報が知りたいものです。(松)

## 「裁かれる越前守」

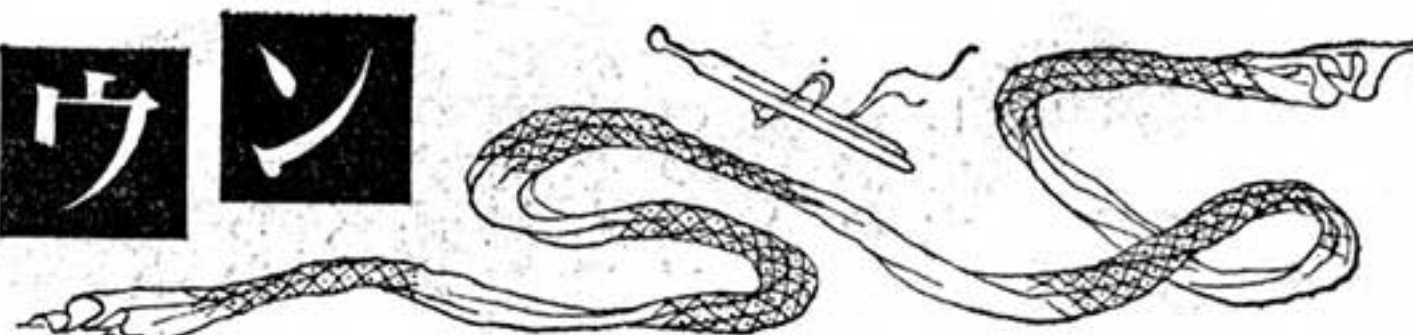
大映映画「裁かれる越前守」のなかに、月丘夢路が縛られる、ちよつといい場面がある。

越前守とは、大岡越前守のこと





# 裏窓



で、れいの名奉行。その名奉行が

若いときに、アヤマチをおかし、女に子どもを生ませる。その女が月丘夢路で、子どもは中村玉緒。

越前守は、その母子をすててしまひ、十五年たつ。母子は越前守をうらみ、いやがらせのために、江戸市中をさわがせる兇器強盗団の一味にはいつている。

はじめに、母親の月丘夢路が役人の手に捕われる。番所へしよっぴかれて、柱へうしろ手縛りにされる。夢路は夜鷹に化けているので、

「ちょっと、お役人さん。あたしのからだを、タダで抱かせてやるから、この縄をといっておくれよ」と、あやしげな誘惑をする。

しかし、番太二人は首を横にふる。夢路は、チェツと舌うち、なおも誘惑する。

このシーンは、夢路の顔がクローズアップになり、縄目のみえなのは残念だが、そのかわりに、さすがベテラン女優だけに「縛られた女の表情」を、的確に演技す

てしまうところがある。

お縄をちょうだいする描写があるか、と胸をときめかせると、画面は無情に溶暗。つぎはもう、お白州となる。

砂利の上に首うなだれてすわる夢路と玉緒には、一種の風情はあるが、たいしたことはない。

女賊——番所——奉行所という舞台から、小田桐爽氏的情緒が想像できるが、じっさいは、さびしいものであった。

奉行所での取り調べの実態を、リアルに演出し、描写したら、なにも「裏窓」派でなくとも、一般の映画ファンにも興味あるシーンになるのではないだろうか。

伝馬町の大牢、とくに女牢の朝から夜まで、とか、夜中から朝まで、とかいうテーマで時代映画をつくったら、かなり異色ある一編になることでしょう。

いかがでしょうか、各映画会社の企画部さま、プロデューサーさま。

(郁)



## ■怪盗絹縄煩惱

# 稲妻ざんげ

使いなれた縄のしなやかさは  
今夜もおれをぞくぞくさせるのだ！

万里小路 崑  
中島喜美・絵

### 一

義賊稲妻小僧、これが俺の通り名なのだ。

何も知らないばかな連中じゃないか。その名前を聞くと俺は思わず苦笑をもらす。

俺が大名から直参旗本の屋敷、大店を襲うのは金を盗むばかりじゃない。もっと違う目的がひそんでいるのだ。

そのついでに盗み出した金を、ちょいとばかり貧乏人にばらまけば、単純な奴らはまるで、俺がそのために危険を冒しているように錯覚して大騒ぎするのだろう。

俺はにやりとわらうだけだ。

俺が八丁堀の十手を尻眼に、大江戸の闇に

出没する理由は、女を縛るためなのだ。

押し入った俺の前で、恐怖に慄えあがっている女を、素っ裸に剥きあげて、縛りあげる悦びが俺をかきたてる。

最初から俺がそうだったわけじゃない。

あれは一年前だった。

俺が押し入ったのはお定まりの妾宅、黒板塀に見越しの松といった仕舞家だ。雨戸をはずして忍びこむと、廊下に薄い灯の色が流れている。起きていようが寝ていようがどっちでもかまわない。俺はふところの七首を握り締めた。

そのときだった。

「う、うう……」

異様な女の呻き声が聞こえた。それは妖しい響きに満ちて俺の胸を高鳴らせた。

俺は足音を殺すと、障子に小さな破れ目を作り、眼を近づけてなかをのぞいた。

そのときの光景を俺は忘れられない。

部屋には男と女がいた。絹布の夜具の上に女は横たわっていた。男はそのかたわらに身をかがめて、ふたりとも荒く息を弾ませていた。

女は裸だった。だが、一糸まとわぬ素裸ではなかった。緋鹿子の燃えるような湯文字を残していた。その鮮烈な赤と真っ白い肌が妖しいほど美しく見えたのだ。

女は後ろ手に縛られていた。ゆたかな乳房



をくびれさせて扱帯が喰いこみ、二の腕をぎりぎり締めあげていた。湯文字はめくれあがり、太腿の付根のあたりまでが剥き出されて俺の眼にしみた。

「う、うう」

女は呻き続ける。かがみこんだ男の手がしきりに動いていた。握っているのは羽根箒なのだ。

俺はごくりとのを鳴らした。

男は商家の主らしく、でっぷりと肥えた四

十がらみだ。ぶあつい唇がぬらぬらと光って見えた。

「お葉、どうだえ。くすぐり責めという奴はこたえるだろうな」

男は女をお葉と呼んだ。羽根箒が動いたたびに、お葉は裸身を小刻みにくねらせた。羽根箒はくびれあがった乳房から、すべっこい脇腹に移っていた。

「だ、旦那、か、かんにん——」

甘い哀願の声だった。

俺は全身が熱くなり慄え始めるのを感じていた。口の中がからからに乾いている。視界いっぱいには白い裸身が悶えているのだ。

「く、くく——」

咽喉から絞り出る呻き。

「ひひひ、これも脱ぐのだな」

男のみだらな声だった。俺は障子の破れに押しつけた眼をむいた。

男のふとい指が器用に動いた。たくみにくねる腰から湯文字が引きはずれた。

「あ、あっ」

女は故意にするのか、羞恥の色を素裸に浮かべて身を縮める。それがたまらなく美しく見えた。

「お、お葉」

男も俺と同じだった。身を低くすると、べ





ろべろと柔肌をなめ始める。そして、盛りあがった隆起に唇を近寄せるのだ。

俺はもう耐えていられなかった。

ふところから七首を抜いた。障子を引きあけると、ふたりの視線が凍りついた。

「だ、だれだっ」

「静かにしろい、稲妻小僧って世間で呼ばれているケチな野郎さ」

俺はお定まりのせりふを吐いて、右手に握った七首を男の顔の前に突き出した。

ふたりの顔は恐怖に歪んでいた。俺は気を抜かれたように女のからだを見詰めた。

「金、金はやる。おとなしく帰ってくれ」

「うるせえ、ひっこんでろい」

俺は怒鳴りつけた。

もちろん、俺は男を縛りあげて、押入れにほうりこむと、お葉の傍に突っ立った。

## 二

あの夜以来、俺のふところには、七首と一緒に一束の縄が入るようになった。絹でより合せた縄なのだ。

絹の縄は女の素肌を締めあげると、みごとに恨いこんで俺を楽しませてくれるのだった。

駿河台の小坂源四郎という旗本屋敷に押し入ったときも、俺を夢中にさせたものだ。主

の源四郎は若い女房をもらったばかり、俺はちらりとその噂を聞いて狙っていた。直参といっても、当節の若い旗本は剣術よりは三味線や笛の方がうまいくらいだ。

武家屋敷の造りは大体わかっている。忍びこんだ俺が、若夫婦の寝所を探し出すのは雑作のない仕事だった。

襖を細くあけてのぞきこむと、薄明るい部屋の中で艶めいた夜具の模様が浮きあがっていた。ふたりとも、深い眠りに落ちている。

俺が寝所に入りこんでも動かなかった。

小坂源四郎の女房はふくらとした下ぶくれで減法きれいなのだ。ういういしい眉の剃り跡が色っぽかった。

「おい、起きろ。静かに起きるんだ」

俺は七首の刃を女の頬にあてた。長い睫毛が動いて、眠たげな重い瞼が動いた。

「あっ、だ、だれです」

「だれでもねえ、盗っ人だい」

女は源四郎にしがみついた。すかさず、俺はきつ先を源四郎の鼻先へつきつけた。

「騒ぐんじゃねえ」

案の定、奴は頼りない直参だった。

恐怖に眼を白黒させている源四郎を縛りあげて片隅に転がす。声を立てられてはまずいので猿轡を噛ませておいた。呻きながら、源

四郎は必死にもがいている。

「あ、あなた——」

夜具から身をのり出して、源四郎にすがりつこうとする女房を、俺は手をのばして押えつけた。

寝乱れた姿が俺の血を燃えあがらせた。

緋の長襦袢をまといつかせた真っ白い肌だった。男の愛撫を受けて、しっとりとうるおったからだなのだ。

「た、たすけ——う、うッ」

俺の掌で塞がれた唇が動く。悲鳴をあげられてはまずい。俺はくびれた胸にある扱帯をむしり取った。

花びらに似た唇を裂いて扱帯をかます。頬の歪むほど、幾重にも力まかせに扱帯を巻きしめた。

「む、むうっ」

すべやかなのどが鳴った。

扱帯を失っている長襦袢の前がはがれる。

俺は突っ伏す女のうしろ襟を掴んで引きもどした。思わず押えようとする両手を、俺はすかさず後に捻じあげる。

むき出された上半身に、俺の使いなれた絹の縄が巻きつくのだ。しなやかな縄が組み合せた手首をしめた。

縄はふくらとした肌に思うさま喰い入っ



た。白く凝脂の光った背に、高々と重ねた両手を思いきり引きあげる。両腕は肱のところからくの字に折れて、白魚の指が苦痛に震えている。

俺は口の中の唾をこくりと飲みこむ。体内

が熱くなり、吐き出される息は火のようだった。

つりあげた両手首の縄尻を、女のまるい顎の下にまわす。柔かな肉を噛んで首縄がしま

源四郎の眼が狂わんばかりに俺をにらみつけている。女房を助けようにも身動きすらできぬ口惜しさ、亭主を前にして、素裸にはがれた上に、あられない姿に縛りあげられた女房の恥ずかしさ、それを思うだけで俺は背筋がぞくぞくするのだ。

「む、むっ」

緋扱帯の猿轡の下で悲しい呻きが洩れる。乳房の両側に縄は喰いこみ、処女の芳香を残した乳房が歪みながらふくれた。とがった桃色の先端がびくりと震えている。

俺はにやりとわらった。

手をのばして柔かな隆起をわしつかんだ。掌に暖もりを伝える乳房はかすかに震えていた。恥ずかしいに違いない、俺は女の頬を見詰めた。薄い行燈の光に照らされた顔はほてって、長い睫毛の影がそれを艶っぽく彩っている。

「ふふ、いい心持だろう」

俺は乳房に指を深く喰いこませた。ぐいぐいと揉みねじった。

「う、うっ——」

女は体をのけぞらした。その指先に湯文字が大きく割れて、真っ白い太ももがさらけ出された。あわてて両膝を合わせようとする。「隠すことはねえぜ」





俺はわざといやらしく言った。

### 三

俺は美しい女ばかりを狙った。

最初のころは縛るだけで満足した。美女を一糸まとわぬ裸身にはぎ、縄を掛けて眺めるだけではもの足りなくなる。

小坂源四郎の女房を責めたときがそのころだった。あの夜の俺は魔物に憑かれたように惨忍だった。いまでも、あの女の苦肉に歪む顔が眼に浮かびやがる。

源四郎の形相も凄まじかった。くびりあげられた両腕が、縄をふりほどこうと懸命にもかく。猿轡の下から陰気な息づかいがもれている。無理はない。己れの女房を素っ裸にさせているのだ。

「う、ううむ——」

俺の眼の下で女は呻いていた。そのむっちり脂の白く輝くからだを、奇妙な形に曲げている。俺が海老責めに引っくくったのだ。

あぐらに組ませた両足首を細紐で縛り、思いきり引きあげて首にまわす。女のがつがき出る。緋扱帯の猿轡が、異様なほど鮮やかだ。桃色にいろづいた女の可愛らしい足の指が、あごに触れそうなほど絞りあげる。

まるくなった背。ゆたかな臀が俺の眼に焼

きついた。

歪んだ乳首が苦しげにあえいでいる。俺はもう夢中だった。

「ぐ、ぐうっ」

女は呻きながら、必死の眼差しで俺を見あげた。燃えるような緋の猿轡の上を、黒い眼が哀願をいっばいにこめている。

剃り跡の青い眉が苦痛を懸命にこらえている。鬚はがっくりと崩れてはつれ毛がなまめかしく散っていた。

あれから、あの女にあらゆる責めを試したものだ。猿轡の奥から、異様な呻きをもらしてもがいた。

俺は狂ったように裸身をさいなんだのだ。

俺は後悔している。

盗っ人の俺に女房を素裸にされて、眼の前で責めつけられた源四郎の気が触れたのだ。

奴は気が狂った。重っ苦しい雨の夜だったそうだ。裸にむいた女房を、庭の松に吊り下げてずたずたに斬った。

もちろん、お家は断絶だ。その噂を聞いたとき、俺はぞっとした。

幸せだった若い夫婦が、俺のために惨めな最後を遂げたと聞いたとき、自分の罪業の深さにおぞ毛をふるった。

ええい、毒喰わば皿までだい。俺は無理に

己れに言い聞かせた。盗み出した金を、ときおりばらまき始めたのは、そのころからだ。罪ほろぼしの心算があったのかも知れない。

御用提灯が辻々に散らばっても俺はじっとしていられなかった。

あの娘を縛りあげて、ひいひい泣かせようと白羽の矢を立てたのは、水茶屋で昼間から一ぱいやっているときだった。

「ほう、凄え娘だぜ」

その声で俺は酔いを帯びた眼を路上に投げた。胸のぎゅっと締まるような一瞬が俺の体を硬くした。

「あ、あの娘はだれなんだ」

思わず俺はかすれた声をあげていた。

絵日傘の淡い色が娘の美しい顔を薄く染っている。首を傾げているのが可愛らしく見えた。女中がひとりついている。どうやら大店の娘らしい。

「お兄さんも眼が早いね。この先の近江屋って油問屋のひとり娘でお千絵さん——近所の若い男はみんな夢中よ」

「ふうん、近江屋のお千絵か。いい名前だ」

ほそりとつぶやいた。冷えた酒をなめる。盃を持った指が興奮にふるえていた。



俺はふところに忍ばせている、例の縄を撫でた。すべやかな感触だった。あの娘の肌もこれと同じようになめらかだろう。あの娘を今夜のうちにものにするのだ。どうあってもやる。

俺の眼は血走っていたに違いなかった。「どうかしたの、変ねえ——」「い、いや、なんでもねえ。ちよいと野暮用を思い出したんだ。帰るぜ」俺は小銭をほうり出すと外に素っ飛んだ。



今夜の下調べをしておかなきゃならない。からだ中が熱くなり、俺の胸をわくわく躍らせるのだった。

#### 四

お誂えむきに月のない暗い夜だった。どこかの辻で夜まわりの拍子木が鳴っている。

稲妻小僧の俺を恐れて、どこもひっそりと宵の中から大戸を下ろす。八丁堀の役人が辻辻を固めているのだが、俺を揃えるには大した役に立たなかった。

塀に貼りつけた身を、俺は軽々と近江屋の庭の中におどらせた。闇の底に油蔵の白い壁が薄く浮かんでいる。

植込みをへだてた所に離れがある。近江屋のひとり娘お千絵が、その離れで寝ることを俺は昼間のうちに調べておいた。使いに出た近江屋の女中に鼻薬を嗅がせて訊き出したのでわけはない。

雨戸をはずしてすべりこむ。ほんやりと障子が明るい。俺は離れに婆と一緒に寝ることも知っている。

まず、その婆を始末するのだ。

冷めたく光る七首と盗っ人かぶりからのぞく俺の眼に、婆は声もなくすくんだ。別に用



意した細引きで、枯れ枝みたいな手足を引くくると、すっぱり夜具で包みこんだ。

お千絵は深く眠っているらしい。ふすま越しに寝息が聞えてくる。俺はごくりとのどを鳴らした。絵日傘の中の顔がよみがえった。全身を流れている血が熱くなった。

襖をゆっくりとあける。

おおいをかけた行燈の淡い光を浴びて、お千絵は眠っている。息を呑むほど美しい寝顔だった。黒く長いまつ毛が眼をひらいているように見えた。

俺はゆっくりとかがみこんだ。

七首のきつ先を白いなめらかな頬にびたりと当てた。冷めたい鋼鉄の感触に眼りを破られたお千絵の瞼が動いた。

まだはつきり覚めきらぬ眼だった。その眼が俺を見あげた。

盗っ人かむりの中でにやりと唇を歪めた。

「おとなしくするんだ。声を出したら、その可愛い胸にぶすりと穴をあけるぜ」

大低の女は黙ってしまふ。

「あ、あ——」

お千絵は夜具を引きあげて顔をおおった。全身が恐しさに固くなっている。

「ばあさんは縛りあげて猿轡をかましてあらあな。だれも来やしねえぜ。そんなに恐がる

ことはねえや」

俺はふところに手をやり眼を細めた。絹縄の柔かい手触りが俺をぞくぞくさせる。もうすぐだ。この縄で暖っかい肌を締めあげてやるのだ。

「俺の名を知ってるだろう。稲妻小僧てえきさな野郎さ」

夜具の裾を掴んだ。ぐいっとはねあげる。

「た、たすけて」

小さく叫んで、お千絵がからだをころがして起きあがった。その拍子に白い膝頭がのぞいた。まぶしいほどの長襦袢、扱帯がきゅっとくびれた胴をはつきりと見せている。両手で襟もとを押えて、恐しさに震える美しい娘だった。

「ふふふ——」

俺は畳に七首をぶすりと突き刺した。

「や、やめて」

お千絵がずるずるとあとずさった。逃すものじゃない。俺はまるい肩を力いっぱい掴んだ。

「い、いたい——」

そのまま、お千絵をぐいっとうつ向きに引き倒す。必死にあばれる手を掴むと同時に思いきり捻じあげる。まるで骨がないようにしなやかに折れまがった。右から左と後ろに絞

りあげた。白魚の指を握りしめた両手を、俺は片手で押さえると、長襦袢のうしろを狙った。

「いやっ、放してえっ！」

顔を振ってお千絵がもがいた。島田が崩れてほつれ毛が散った。俺は慣れきった手さばきで長襦袢と肌衣をむき落とした。ぬめりとした肌だった。

恥ずかしさにお千絵の頬がはてった。

びりびりっと両袖の付根が引き裂けた。俺は例の絹縄を口でゆっくりと解く。必死にもがいている指。俺は眼でそれを楽しみながらほそくふたつの手首に縄を巻きつけた。

肌がよじれるほど締める。痛みには指がびくりと震えた。両肩のすっきりむき出された背に、くくりあげた手首を高々と吊った。

まるくわんを伏せた、固い生娘の乳房だった。俺はそれをじっくりと眺めながら、縄を首にまわした。

「あ、あ」

すべやかなあごの下を縄がくぐる。俺は柔かな隆起の両側をぎゅっちりとくくった。縄のしなやかさは俺を有頂天にした。生娘の肌に絹の縄はいくらでも思い通り喰いこんだ。

「お、おっかさ——」

お千絵は夜具に顔をうずめている。高手小



手首縄に縛られたからだは、俺の意のままになるより仕方がない。

俺は行燈の灯芯をかき立てた。

長襦袢をむしり取り、湯文字一枚でころがつているお千絵をとっくりと眺めるためだ。

「どうでえ、お嬢さん。裸にむかれてよ。男に眺められていて、心持はよ」

俺はまず口で責めはじめる。

「じんわりと楽しんでな。その湯文字を脱がしてやるぜ」

「お願い、かんにんして——」

顔を掩っている黒手拭はずし、より合せると、お千絵の花びらに似た唇を割ってかませた。白く光る歯が黒い布をかんだ。

「これからちよいと責めさしてもらうぜ。どうせ泣き声をあげるからな、猿轡をかましてって寸法よ」

お千絵は猿轡をはずそうと顔を振った。白い顔を一筋の黒布が責めている図は、ため息の出るほど美しいものに見えた。

黒い眼が恐怖を一つぱいにみなぎらせて俺を凝視している。

「なあに怖かあねえよ」

俺はたもとを探った。掴み出したのは、軸を短かく切った筆だ。筆の穂はばらばらにひろがっている。こいつは買ったばかりのをほ

ぐして、水に浸して乾かしたくすぐり責めの道具なのだ。こいつで一撫ですると、柔かい穂先にくすぐられる。痛くはないこの責めが俺は大好きだった。

お千絵が俺の手の奇妙な筆を見詰めた。これが自分のからだをどうするのかわからないに違いない。

「こうしてな——」

と、俺は仰向けにころがしたお千絵の乳房の横をすつと撫でてやった。お千絵の上半身が震えた。いちごに似た乳首が戦っている。

しばらくすると、ふさがれたお千絵のうめきが部屋の中に響いた。俺の責め道具がお千絵の足の裏を責め始めたからだ。

身がくねり、夜具の上から畳にころがる。湯文字がめくれて、真っ白い太腿が俺の眼にまぶしく浸みる。

俺は丹念に可愛らしい指の間をくすぐってやった。桃色をした指先が反り返った。お千絵の息は荒くなり小鼻がふくらむ。額には脂汗が浮かび、流れ出た唾液がまるいあごを伝わっている。

上半身がくねる。お千絵は絶え間なく襲いかかるくすぐり責めにもがき続けている。湯文字がめくれあがり、太腿の付根までがむき出され、それを緋色が鮮やかにいろどっ

ている。俺は口の中がからからに乾き、全身が熱っぽくほてるのを感じていた。

このつぎはどうして責めてやろう。海老責めに引くくろうか、あぐら縛りにしてやるか。俺はもう夢中だった。

「ぎ、ぎえっ」異様なうめきをお千絵はのどの奥からほとばしらせた。

俺はお千絵の両脚を掴むと、全身の重量をかけて折り曲げたのだ。すべっこい太腿がふくよかな腹に密着し、両膝が乳房を押しつけた。俺はもう気狂いみたいだった。

お千絵はふたつに折り曲げられ、両膝の間から顔をのぞかせて泣いていた。お千絵の姿に俺が初めて見た、お葉という女のくすぐり責めにあえぐ顔が重なった。あれ以来俺はくすぐり責めに夢中になるようになったのだ。

俺はお千絵の盛りあがった臀のふくらみを憑かれたように責め続けたものだ。

あの夜が命取りになって、御用弁になったときの俺は、まるで腑抜けみたいになっていたのだ。

どうだね。俺の話はおもしろかったかい。なにもおもしろくねえ——？ どうしてだい。女を縛りあげるってのは気に入らねえってわけか。まあいいや、獄門首になる俺の手向けになると思って聞いてくれよ。



映画・演劇・出版物に現われた

# 現代マゾヒズム文化時評

III

森下 高茂

カット・佐久間 淳

## テレビ映画「キャザリン女帝」

例によってひどい吹きかえ作品で、原映画のよさもけし飛んでいるが、ともかくテレビ映画としては特記すべきものでしょう。(主演はエリザベス・バークナー)

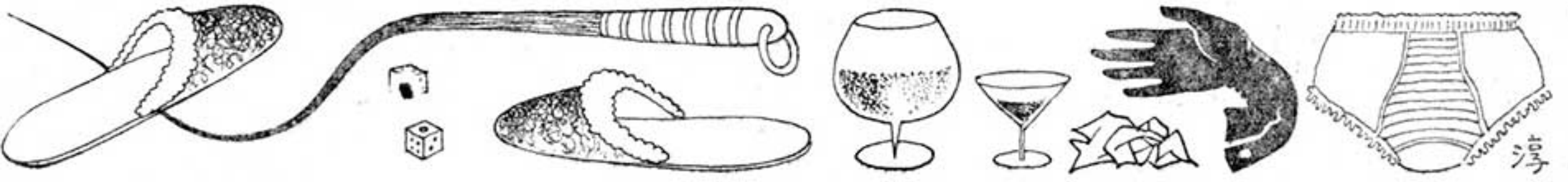
ここにいうキャザリン女帝はエリザベス女帝の皇子の妃になったドイツ生れの女性ですが、この人が男勝りのエリザベス女帝に愛されて、女帝と同じように軍服姿で閱兵したりする場面があります。ロシア宮廷のけんらん豪華をきわめ、一種異様な重厚さをもった感じは、イギリス映画であることと、テレビ映画であることで、ずいぶん軽い感じにかわっています。のちに怪豪ラスプーチンの出現をゆるしたあの怪奇な異教的な独裁専制の真の姿は、ザッヘル・マゾッホならずとも、雄大なマゾヒスト向きの世界をえがくによき雰囲気をもっています。

非常に古い映画で、スチールの入手も困難ですが、私の在米の友人が、偶然送ってくれたスチールのなかに一枚この映画のものがありましたので、このつぎにでもお目にかけしよう。

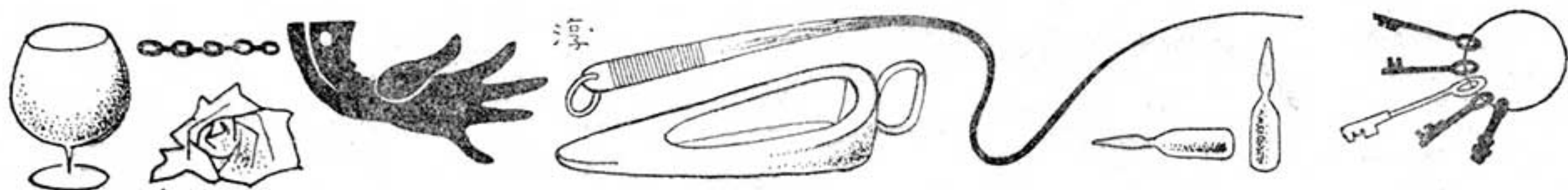
## 女体蟻地獄 (アルゼンチン映画)

これは、まためずらしくアルゼンチン映画の最新輸入ですが、決して芸術的とはいえない作品です。一時各誌の映画評などによく登場した、おなじみ大蔵貢が輸入した旧新東宝系の映画です。むしろ映画以前のものといえましよう。

ただ、この映画のなかで、奴隷農場の冷酷無残な農場主の、うつくしい妻(イサベル・サルリ)が登場します。彼女が習慣的に朝の遠乗りに出かける、というようなタイプの女性であったという設定、そして泥くさい背







景のなかで、この女性だけが都会的においのする人物であるということなど、そこに起こる労働者たちの、この女性をおそう事件と対比してみると、おもしろいと思います。

いわゆる「コロニー」というか、植民地の白人女性もっている独特の矯慢さと階級意識、そしてあり余る富を満尽しての豪華な生活、そういうものはたしかにマゾヒスト好みです。そのうえ、名もしれぬ南米の蛮地の社会生活と隔絶された環境は、法律や道德の規制力をいじりく弱めます。

「もし法と道德と、そのほかの社会的倫理が、その威力を発揮せず、あらゆる残虐行為が権力によって擁護されるような環境におかれるとき、女性は、たとえ彼女がやさしい、もっとも女性的な心の持主であったとしても、思いがけぬほどの残忍性を発揮するものである——その変わりかたは、男性のそれとくらべものにならぬほど烈しいのが通例である」

と、ヨハネス・ビルリッゲルは、彼の名著「残虐な女王たち」のなかで言っていますが、そのような環境は奴隷制が廃止され強制収容所もなくなっている今日、中南米や中近東の奥地にしか、こうした題材はもとめられないでしょう。

こういう点を加味するとき、これは好個の題材と人物と背景が用意されています。しかし、残念なことに不十分な脚本、拙劣な製作技術そして安っぽい大衆性とが、美しい夢の展開をこぼんでいるのです。

## 血とバラ（仏・米映画）

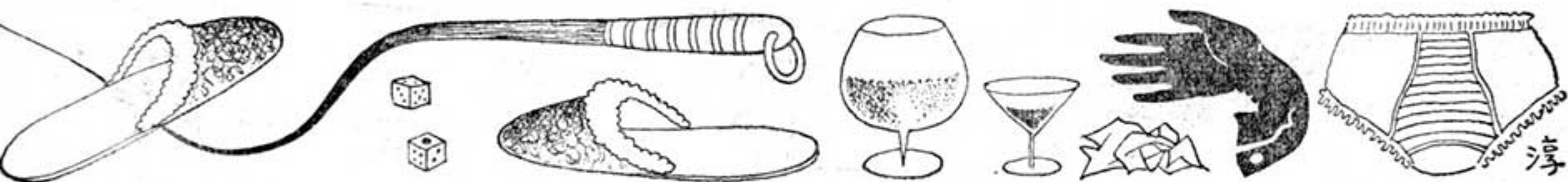
以前のブリジット・バルドーの夫君、ロジェ・ヴァディムがパラマウント映画社で作った現代のおとぎ話。

あるイタリアの小さな町に近い山荘、そこには吸血鬼伝説にいろどられた旧家があります。たまたまその当主メル・ファラーが結婚することになって、恋人（エルザ・マルティネリ）がやってきます。その結婚した二人を、嫉妬の目で見まもる当主の従妹（アネット・ヴァディム）は、ひそかに墓所にしのびこんで、ただ一人、忘れずに死んだ吸血鬼（女）の棺を開き、自分も吸血鬼になってしまいます。

そして、ついに数人の女を殺して、自分もほろびるというのですが、私たちが注目すべきは、彼女が吸血鬼——よく魔女と吸血鬼とを混同していますが、この二つはじつはまったく異質のものです。ここであつかっているのは吸血鬼です——にかわってからは、動物は恐怖を感じて近づかない——人間にはわからないが動物には吸血鬼が見わけられる——ということ。

この映画のなかで、乗馬好きの従妹（つまり吸血鬼になった娘）が、乗りなれた自分の馬に近づくとしても馬はあばれて近よせないという描写で説明されています。この部分については、「魔女に騎られる男」という幻想をあつかったマゾヒスト小説を知っていますが、本能的なおそれるえながら、勒や鞍をつけられているために、魔女騎手が命ずるままに馳けさせられる馬にな





映画＜血 と バ ラ＞より

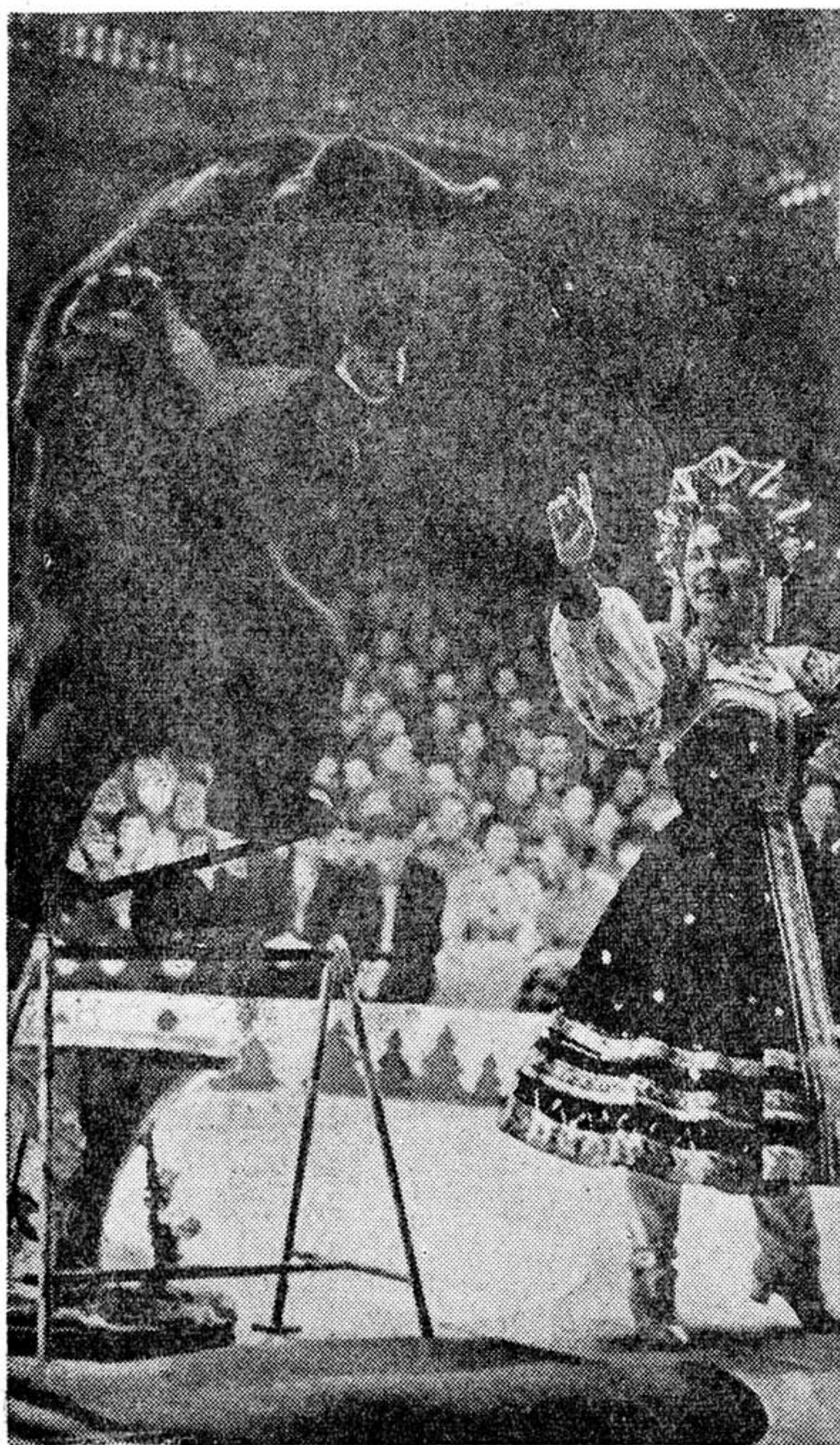
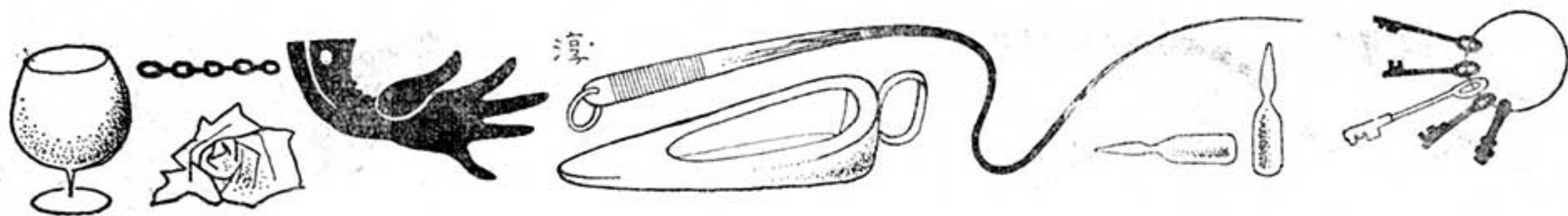
そのほか、魔女の棺をあけて、ある女が魔女にかわるという経過については、本来いろいろなことがいわれています。映画では吸血鬼ですから少しちがうのですが、元来魔女の場合は、悪魔(男)と交情して、悪魔の精を体内に注入されることによって魔女が生まれることになっていたというのが定説で、ロジェヴァデームは大へんなこり屋ですから、女吸血鬼が墓から起き上がって、まだ生きている人間であるアネットとまじわるという説定にしています。これはもちろん木の棒を体内に入れるというような方法で暗示しているのでしょうが、悪魔と女の交情をさらにひとひねりして、女同性愛の秘戯をませ合わせているところは注目すべきでしょう。そういう意味でいうとエロティックな怪奇趣味にあふれた作品といえるのですし、また、かつてジャン・コクトオが名作「美女と野獣」で示したすばらしいおとぎ話とは、ちがったお色気をもつおとぎ話の創造に成功しているともいえましよう。

### ソビエト雑誌 (チルク・二月号)

これはソビエトで毎月出ているサーカス専門誌です。私は二年ほど前からこの雑誌を欠かさず読んでいますが、どうも格好な話題がなかったのですが、新着二月号には、新しい若手(女性)の熊使いが、大きく紹介され

った夢をみる話でした。  
このこととは関係なしに、私は昭和二四年ごろ週刊朝日に連載された北条秀司氏の「私は魔女です」という小説をおぼえています。もちろんこの小説は、マゾヒストとも魔女伝説とも関係はないのですが、その終りの部分に「魔女」とアダ名を、みずからつけている美少女が、高い崖の上で馬をはしらせ、こわがる馬に拍車をかけ崖の上からとびこんで死ぬところがありました。ご参考までにつけ加えておきます。





熊使いの娘<チルク1962年2月号より>

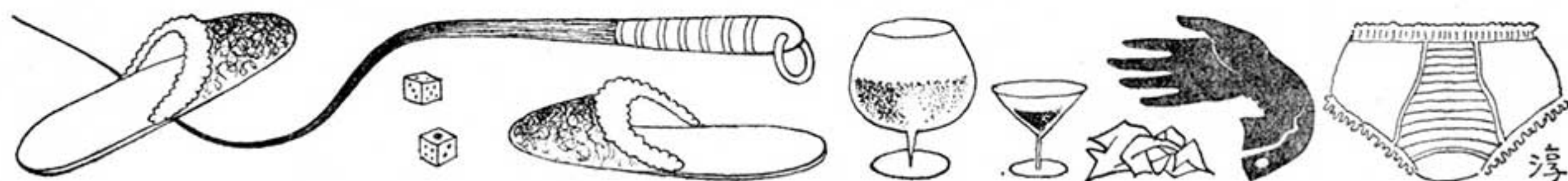
ています。ここに写真をつけておきますのでご参照ください。

かねてからロシアの動物サーカスは瞠目すべきものでした。二度も日本にきたポリシヨイ・サーカスはいずれも動物サーカスの部門で、もっとも注目すべき重要な猛獣は、いっさいつれてきませんでした。マリゲリタ・ナザロヴァ(サーカスの芸人たち)イリナ・ブルジモヴァ(サーカスの女王)タマラ・ブイライエヴァ——かつ

こ内は日本で封切りされた映画名——などの三大女性調教師を擁して、世界でも、もっとも大がかりな猛獣ショウと女性調教師をもっているのですから、来日したポリシヨイ・サーカスだけでは、決してソビエトの国営サーカスの全貌を伝えるものとは考えられないのです。

ここにでている若い熊使いも、おそらくそうでしょうが、ソビエトには国立サーカス学校があって、そこで組織的に教育しているのですから、もっとくわしい資料が





集まればめずらしい事実もわかると思います。

それに「チルク」のこの号（二月号）には外国のサーカス芸人の紹介として、高等馬術のエレナ・ガブリエラ（イタリア）を紹介しています。その写真もでていますが、きわめて不鮮明なので割愛します。

### フランス映画誌より

「シネ・マガジン」一九六一年十二月号三〇ページ。ここには歌手マリア・カンディドのカラー写真で、ハイヒールの黒革長靴姿がでています。もちろん昨年末ヨーロッパではモードのなかに、長靴が大流行してヴォーグ、ロフィシエル、シャルダン・デ・モード（以上フランス）ブルダ（スイス）、フィルム・ウント・フラウ（ドイツ）などにもかならずといってよいほど長靴がでています。

もちろんマリアのもその流行にしたがったのでしょうが、なかなか興味ある写真だと思いました。（写真参照）

### ふたたび「女性競馬」について

前回に申し上げた女騎手、ヘレン・デ・アンジェリスさんを撮影した、ベン・クーパー氏から返信が参りました。

「スポーツ・イラストレイテド社から、ヘレン・デ・アンジェリスさんについての貴信を転送してもらいました。

ちょうど、ここにある彼女の写真を少々お送りしま

す。

私は、彼女の全身をうつした写真はもっておりません。

それはちょうど撮影のときに、彼女が長靴をはいていなかったからです。

私も（マックス・カウフマン氏というクーパー氏の二人）は、故意に彼女の下半身をカットして撮影したのでした。

この写真は、私が「ピムリコ（競馬がおこなわれた町の名）の物語」と題して、写真コンクールに出品する心算でうつしたものです。

現在（あなたのおしゃるように）ただちにヘレンさんを新しく撮影することは、彼女が数ヵ月当地に不在であるため不可能です。

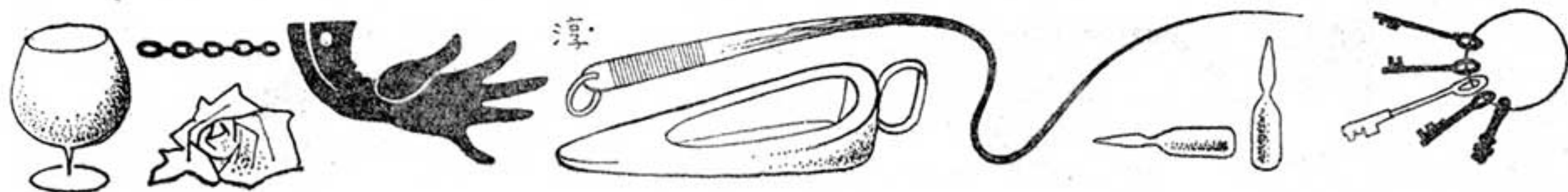
けれども、もしあなたが、彼女に大きな興味をもっているのなら、私は、よろこんで彼女に新しい写真（あなたのために）作ることをすすめます。

ただそれには、彼女の承諾と権利その他の金額を定めることが先決なのです。

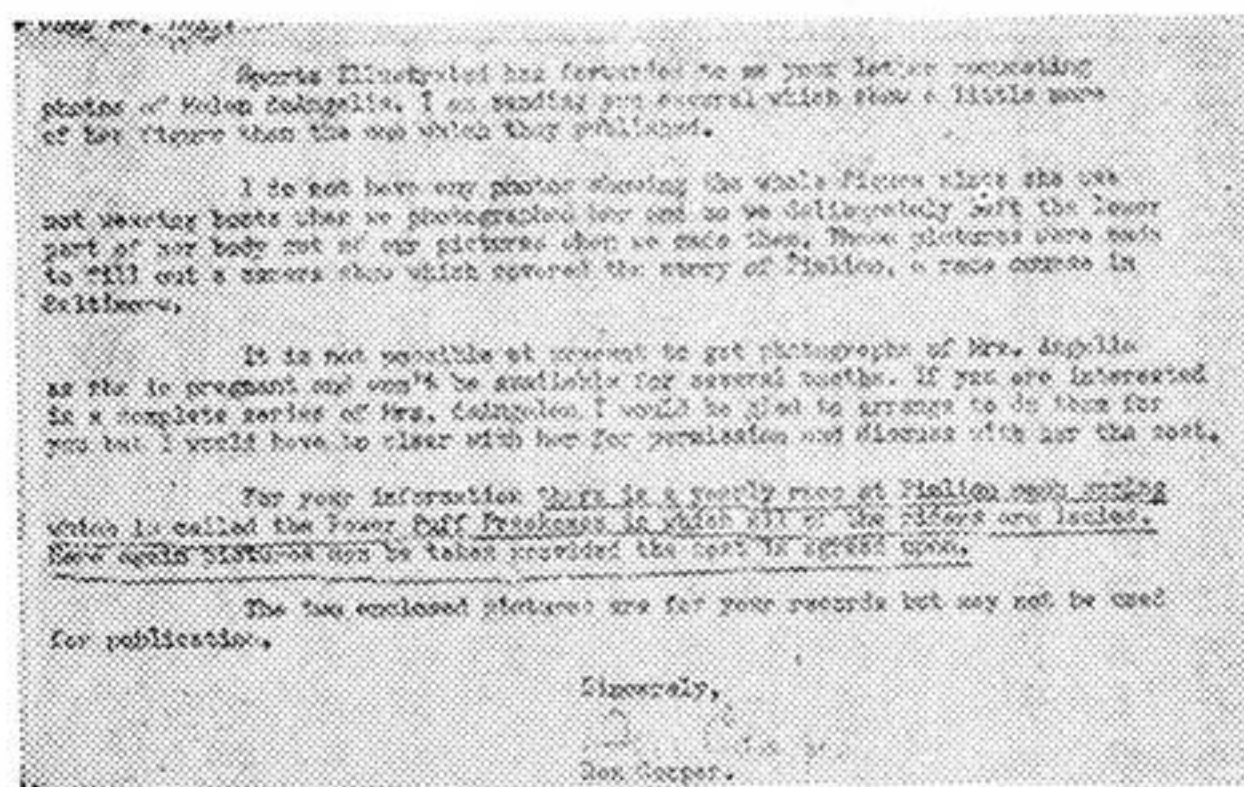
女性騎手が出場する競馬についての、あなたのお問合せについて、私は年一回、毎春ピムリコ市でおこなわれる別名「パワー・パフ・ブリークネス競馬」というレースには、女性騎手のみが出場していることをお知らせします。

くり返し申し上げますが、もし金額上の同意さえ得





黒長靴姿のマリア・カンディド



ベン・クーパー氏から筆者への手紙

られれば、私はいつでもよろこんで、あなたのために写真をとってお送りいたします。なお、ここに同封のヘレン・デ・アンジェレスさんの写真は、あなたの記憶にとめるために、お送りするもので、いっさい、出版物には使用しないでください。

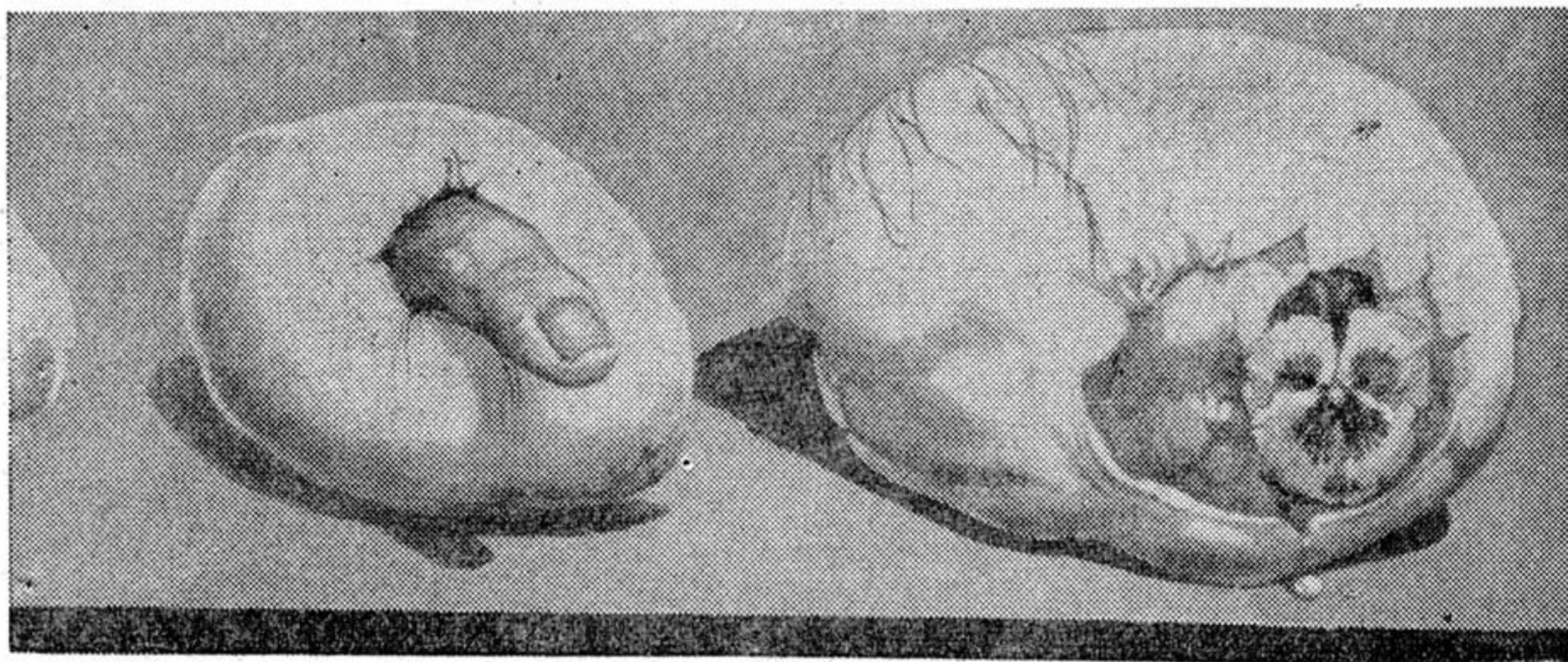
ベン・クーパー

同封されていた写真はコダカラーによる大へん美しい作品ですが、前記の事情でここに掲載できないのが残念です。

しかし女性競馬が実在し、恒例行事としておこなわれているという、新しい事実の参考のために、クーパー氏の手紙の一部を示しました。もし何人かの同志が集まるなら、ヘレンさんの——あるいは他の女性騎手たちの——写真集を希望するならば、比較的たやすく美しい写真が入手できるように思います。

☆注——これまでには英国のポイント・トゥ・ポイントでおこなわれる女性騎手による競馬だけが恒例となっている唯一のものであると、一九二二年以来いわれています。





## 幻想曲

ああ あの黒髪のなかに顔をうずめたい  
鼻がつぶれ 息ができなくなるほど!

秋吉 昀・絵

篁 文彦

### 長い髪の女優

「ウスノロ! なにをもたつくやってやがんだ。本番に遅れたら給料払わねえぞッ」  
ガミガミ口汚くどなっているのはおれたちのオヤジ、大道具係主任熊井文吉だ。

Nテレビ局の第五スタジオ。

明朝九時、このスタジオでVTR——つまり、ビデオテープの録画がある。おれたち大道具係は徹夜でセットの組み立てを急いでいるのだ。

あすの録画は一時間半のワイドドラマ。演出は芸術祭男の凝り屋弘田プロデューサー。特別プロだけにその意気込みはおそろしいほどの熱気にあふれている。

夜、十時からあったカメラリハー——カメラリハーサルには、せりふをろくに覚えていない俳優たちが、たとえベテランスターでも頭ごなしにどやされていた。

罵倒され、蒼白になり、シドロモドロの演技を見せる彼らを笑って見ちゃいけない。プロデューサーの怒声は、おれたちにも飛んだ。旅館の日本間と、それに続く庭のセットが気にいらなないといいだしたのだ。

このドラマは今はやりのよろめきものだ。が、弘田プロデューサーの手にかかるとう





## 黒 髪

イブrouな心理葛藤ドラマとなる。

セットでは、ヒロインの大学教授夫人である日本舞踊の師匠が、欧米帰りの新進音楽家と初めて結ばれるクライマックスシーンが演じられるのだ。それだけに凝ったセッティングが要求された。

若い弘田プロデューサーに不満をぶちまけられ、熊井オヤジは青くなった。カメラハが終了し、みんながセットから引きあげると、こんどはおれたちがオヤジの怒声を浴びた。

きゆうきよ、前のセットをバラして組み替えなくてはならない。

弘田プロの番組だというので、おれたちもかなり入念な組み立てをしたつもりだが……いや、今さらぐちってもはじまらない。

立て替えセットの壁に古新聞がはられ、泥絵具が塗られる。本番までには乾いていなければならぬ。セット内に大型の照明用ライントが幾つも運びこまれて濡れた壁を乾かす。スタジオの壁の時計が二時を示している。眠いなどといったやいられない。おれは庭のセットのなかをウロウロ歩き回っていた。と、そのとき――

おれの鼻腔を甘くこころよい香がツーンと刺激した。

げげんに顔をめぐらしたおれは、その瞬間



心臓が凍てつくのではないかと思った。

上条明美が、おれの眼の前に立っているのだ。上条明美——彼女はこんどのドラマのヒロインだ。週刊誌の人気投票に一位を獲得した、のぼり坂の人気女優。近く映画界入りを噂されているホープだ。

だが、おれは彼女が今日の名声を得る前から注目していた。

マスコミは彼女のエキゾチックな美貌をたたえている。魅惑にみちた黒く大きな瞳、長い憂愁のまつげ、細おもての冷たい顔だち、近づきたい品位をただよわす高い鼻。

しかし、おれのひかれている魅力はそうした近代的な美貌ではない。

彼女の黒髪——肩のうしろに長く垂らしたつややかな黒髪なのだ。

一度、偶然おれはその黒髪に触れさせていただけという幸運に浴した。それ以来、おれは彼女の奉信者、彼女の黒髪のどれいになっってしまったのだ。

三年前のことである。彼女がまだ廊下とんびと呼ばれていた仕出し時代。本番のブザーで、あわててセッティンした彼女と廊下へ出かけたおれと、ドアのそばですれ違った。そのとき、なびいた彼女の黒髪がおれの頬をひと撫でしていったのだった。

一瞬のできごとだった。その一瞬のやわらかなやましい感触は、おれの黒髪への執念に火をつけたのだった。

彼女はもう忘れていよう。いや、全く彼女の記憶にはないできごとであろう。その日から、なんとなく彼女とすれ違ったり、視線がぶつかったりすることがあった。が、彼女の眼はおれの存在を無視していた。あたりまえだ。しかし、おれはもういちど、あの日の感激を味わいたかった。

しかし、おれはトンカチを腰にぶらさげた貧相な大道具の裏方、彼女は今をときめく大スター。その黒髪に触れたいなどと望むほうが間違っていよう。

いつも、おれは離れたセットの隅から、ライトになまめかしい光を放つ黒髪に、火のよ

うな視線を向けていたのだった。  
あの黒髪を愛せたら……日ごとに、おれの恋情はくるおしくつのつていった。

その彼女が、今、おれの眼の前にいる！  
長いみずみずしい黒髪を女学生のようになびかせて、匂わせておれの眼前にいるのだ。

### かわいいそんな黒髪

右肩から胸元にかけて、しつとりと垂れさがっている黒髪——。

明美はその髪の毛の先を指でもてあそびながらブツブツなにやらつぶやいている。  
せりふを暗誦しているのだった。

「だめだ、せりふがまるで入っていないア」  
カメラハの際に弘田プロデューサーからなんとなく注意されていた。注意というよりいやみだった。皮肉の言葉がトゲのように飛んだ。

非情な演技要求に、彼女は情熱でぶつかっていった。みあげた役者根性だった。

スターの座を得るには、日頃の修練も大事だが、他人を押しつけても自我を認めさせようとする意志が必要だ。ハナ持ちならぬ女と他人の目に写っても、女優として大成すればいいのだ。

わがままで冷酷なエゴイスト——おれはそんな女に魅力を感じる。

明美は容姿ばかりでなく性格的にもおれの理想とする女性であった。

まっ赤なセーターに黒いスラックス——見るからに勝気そのものだ。

視線をやや上方にあげ、歩き回りながら、せりふの練習を続けている。

おれの眼はつい明美に奪われがちだった。「ボケナス！ その植木はそこじゃねえッ」  
オヤジの罵言がセット内に響いた。



明美を意識しておれはうろたえた。オタオタしながら指定の場所へ植木を移動させた。

一時間ほどで庭も日本間も雰囲気が一変した。いかにも山の温泉らしい庭の樹々のただずまい、素朴な室内の装飾——うるさがたの弘田プロデューサーもこれなら満足だろう。

あとはセットの壁の乾きを待つだけだ。

組み替えが意外に早く終り、オヤジもこぎげんだ。メシをおごるとみんなを誘った。

おれはセットの乾きを見てるからと居残りを申しでた。

スタジオを出てゆく一同を見送り、セットの隅のカメラ移動車に腰をおろした。

そこに残ったのは、おれひとりではなかった。ガランとしたスタジオのなかに、おれと明美がふたりきりなのだ。

おれはこの機会をたのしみたかったのだ。

だが、明美はおれにいちべつもくれなかった。ひたすら、せりふを暗誦していた。

せりふが高潮すると、ゼスチャーがともなう。長い髪はばさっとゆれて顔の半面をおおった。せりふの激しさにともなって、あやしくゆれた。邪魔になるのか、明美は長い指でその髪をすくいあげた。

が、せりふの激するにつれて、髪は前へ垂れおち、顔にかぶさっていった。そのたびに

明美は神経質にかきあげた。

見守るおれの呼吸は乱れていた。おれの視線はねばっこく、黒髪の流れにまつわりついた。

せりふにつまると、彼女はいらいらした感情をむきだしにした。指先にぐるぐる巻きした髪のを先を邪険なまでもみくちやにした。

まだせりふが出なければ、掌のなかに髪をたばねつかんで、力をこめてぐいぐい引っばる。

美しい顔がきゅっとくずれて、忘れたせりふが朱い唇をついて出てくるのだ。なんととなく、熱い吐息がおれの口から洩れた。

彼女は髪をもてあそび、それをいじめぬいてせりふを覚えようとしているのだ。

・おれの心を奪った黒髪を、まるで憎いものをさいなむように。

（やめてくれ！……髪の手がなにをしたというのだ。あなたには髪の手が泣き叫ぶ声が聞えないのか……いじめないでくれ、そんなに乱暴に責めないでくれ）

おれはいっぱいの哀願の眼を、明美に向けた。血のにじむようなおれの叫びが聞えないのか、彼女はこっちを見ようもしない。その指はなおも黒髪をいじめぬく。

（ああ、かわいいそんな黒髪！）

おれの視線はその黒髪を撫ぜた。声もなく喘ぐ黒髪をなだめながら、長く垂れた髪をなみともなう愛撫した。

ひろいひたいのはえぎわから、うしろにのびた黒髪——肩から赤いセーターの胸のよりあがりのあたりまで長くのびている。

（痛いだろうに……お前の女王様はなんという乱暴者なのだ……こんなに美しいやさしいお前をむごたらしくいじめなくても……）

さあ可愛がつてあげる……ぞんぶんに愛してあげる——おれは視線の愛撫をくりかえした。

それはおれに許された、たったひとつの方法なのだ。

黒髪は、おれの愛撫にすべてをゆだねていた。ここちよげに感謝の媚態すら示しているようだった。なんの抵抗もみせず、おれのなすがままに、長い裸身をさらけだしていた。

黒髪の発する甘くあたたかな芳香が匂うようだった。こころよいうずきが全身を包み、すべての神経が麻痺していった。

（おれの黒髪……誰にも渡したくないおれだけの黒髪！……）

明美の黒髪への慕情は際限なくひろがつていった。



と——、そのこちよい夢は、ぶすいな男の  
声にぶちこわされた。

「や、上条君、待たせたね……」

巨体をゆさぶってスタジオへ入って来たのは  
脚本家の野尻一彦先生だ。

「あら、センセエー……」

鼻にかかった甘ったれ声で駆け寄る明美。

野尻先生の奴、やにさがって迎えた。

プロデューサーと打合せでもしていたの  
だろう。その間、明美はせりふの練習をして  
いたというわけだ。

二人は肩を並べて去っていった。

先生には妻子があるのに、女性関係は派手  
だ。あけみの黒髪はぶよぶよ太った指にいや  
らしくなぶられるのだ。

(畜生ッ……)

くやしい冷汗が全身にこみあげてきた。

### あなたの黒髪を

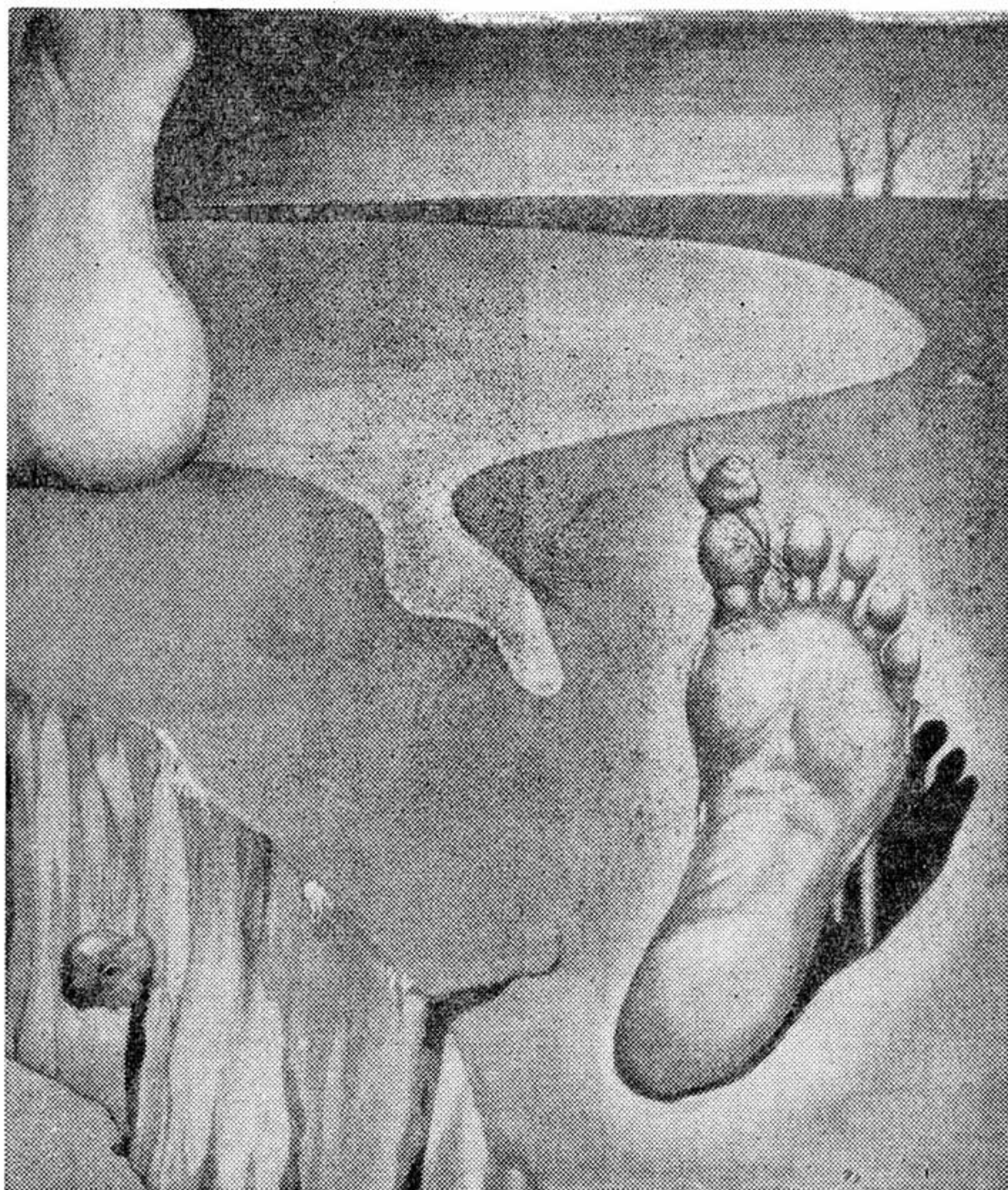
不健康に脂ぎった肥大漢の野尻先生と天使  
のような明美が、裸で、もつれあう——。

そんな姿が、おれの脳裡になんともうかん  
では消えた。

(いやだ……いやだ……いやだッ！……)

想像するだけでもおぞましい。

(おれが愛したい……誰にも触れさせたくな



い……彼女の血がほかの男性の血でよごされ  
るのはいやだ！……)

願ってもかなえられる夢ではない。かなえ

られないと思えばこそ、その願望がつのるの  
だ。

(愛せないのなら、せめて……せめて、あの



黒髪だけでも——」

欲しいのだ……ひとにぎり。いや、そんな欲はいうまい。一本でも二本でもいい。彼女の髪の毛が欲しいのだ。

彼女の髪を手に入れたという願いは、ずっと前からのおれの夢だった。

いちど、願ってもない機会があった。

出演前、化粧室で出演者たちがよく髪の手入れをしている。櫛ですいたり、ブラシをかけたりにして、その齒先に残った髪くずをちり紙に取って捨てていた。

仕事の合い間に、おれは偶然彼女の髪の手入れをかいま見たのだ。

おれは千載一遇のチャンスを見失いたくなかった。

化粧室前の廊下にモニター用のテレビ受像機が置いてある。

おれは画面に見入るふりをしながら、明美の動作を盗み見ていた。

ブラシで長い髪をゆっくりしごいていた。

ブラシにぬけ残った髪を竹の小櫛ですき取っては、またブラッシングを続けた。

蛍光灯の蒼白い光りに、髪は銀色の輝きをみせていた。

鏡のなかのおのが姿に見はれながら、髪をくしけずっている。髪の毛のもつれがブラッ

シングの流れをとめると、彼女はヒステリックに激しく手を動かした。乱暴にしごいて、髪のもつれを直すのだ。

と——。明美はようやく髪のしごきをやめた。

ブラシにこびり残った髪くずを小櫛ですいている。取り終ると青いちり紙に移し、丸めて無雑作に部屋の隅の屑籠へ投げ捨てた。

おれはそのちり紙が欲しかった。そのちり紙のなかの彼女の髪の毛が欲しかった。

本番が始まればみんなスタジオへ入る。

その時、忍びこんで手に入れよう。

胸をときめかして、その機会を待った。

短い時間だったがおそろしいくらい長いもののように思われた。

セottoインを告げるブザーの音。

女たちはおしゃべりをしながらスタジオへ向かう。明美はおれの心のときめきも知らずにふくいくとした髪の香りをまき散らしながら眼の前を横切っていった。

化粧室に人気がなくなった。廊下とんびの歩き回る姿もない。

今だ！……おれは化粧室へ向いかけた。

が、幸運の女神は、おれを見捨ててしまった。スタジオからフロアマネーシャの助手が飛び出してきて、おれを呼んだのだ。

セットのクサビがゆるんで壁がぐらつくというのだ。

(ああ！ せっかくのチャンスに……)

なんということだ。おれは溜息を洩らし、化粧室の屑籠を横眼で睨みながらスタジオへ向った。うしろ髪をひかれる思いだった。

仕事はかんたんだった。二、三分ですませ急いで廊下へ飛び出した。

幸い化粧室にも廊下にも人の気配はない。はやる胸を押えて、おれは素早く化粧室へ踏み入れた。

が、屑籠をのぞいたとたん、おれの心に空洞があいたかと思った。

ちり紙がない！ なにも、入っていないのだ。からっぽなのだ。

おれがスタジオに入っていた僅かな時間、誰かがほかのごみと一緒に彼女の高価な髪の毛を捨ててしまったのだ。たぶん、掃除のおばさんだろう。

いらないことをしてくれたものだ。

お袋が死んでも泣きもしなかったおれだが、そのときばかりは悲しかった。口惜しかった。

二度とそのような機会にはめぐまれなかった。せっかくのチャンスをむなしく見逃がした、たたりなのかも知れなかった。

(明美の髪の毛が欲しい！……)



こんなに夢中になっているのに、なぜ、おれの願いはみたされないのだろう。

いつまでも黙っていたのでは、悶え狂ってしまうかも知れない。

うちあけることだ。思いきって、なにもかも彼女にぶちまけるのだ。おなさけにすがって、赤子のように乞えば、きっと彼女もほだされるだろう。

ほかの男たちの血がまじって、やがてはみずみずしい黒髪もそのつややかさを失ってしまいかも知れない。

それからでは遅い。髪の毛からしっとりした色のさめぬうちに、女の匂いのにこりきらぬうちに、彼女の髪を手にいれるのだ。

その日の午後、スタジオを出たおれは明美のアパートへ向かった。

ひたすら、彼女の黒髪ほしさに、ひかれての行動だった。

昼さがりの春の陽がアスファルト路上におれの影を描いていた。

憑かれたように、おれはアパート入口のドアを押した。

明美の部屋は一階廊下の奥だ。

すぐわかった。ベニヤドアの脇に上条明美と小さな名札がさがっていた。

胸がおどった。ふるえる拳でノックしかけ

たが、ふと宙でとまった。

(とっぴなおれの願いを聞いたら、彼女は間違い扱いにするのでは?——)

だが、ここまできてためらってはいられたかった。

ノックの音が冷い空気をふるわす。

「だあれ?……」

明美の声だ。ドアがなかからあけられる。

「あら……あんたは……」

明美はげんにみつめた。と、その口許でふっと小さくほころんだ。

「あんた、Nテレビの裏方さんじゃないの。

なあに?……」

おれは明美の顔に見入ったままだった。ひっからまって声もでない。無理もない。

彼女が、おれを——大スターの彼女が、しがない大道具の裏方を記憶してくれていたのだ。

おれは冷静を失った。

靈感にうたれたように、心の奥底の言葉を思わず口走ってしまった。

「ほく……上条さんの髪の毛が欲しいんです!……」

そんなに欲しいの?

あっけにとられておれを凝視する明美。

まばたきもせず、おれの心底を見ぬくかのようにみつめているのだ。

おれは視線をそらさなかった。

あけみの眉根がかすかにふるえた。冷たい光りが走った。

おれは戦慄を感じた。

と、怒ったような口調で明美は言った。

「誰か来る……早く入って!」

入って、と言ったのだ。帰れ、ではない。

えっと、おれは彼女を見あげた。

派手な部屋着の襟元をあわせながら、明美は眼顔でおれをうながした。

動こうにもおれはしびれたように動けなかった。思いがけない言葉に緊張したのだ。

明美はおれの腕をひきずるようにしてなかへ入れた。

室内の匂いが鼻をつく。

明美の匂いだ。明美の身体から発散する匂いが部屋いっぱいによどんでいるのだ。

おれはその匂いに酔い始めていた。

立ちつくしているおれを、明美は一方のソファに坐らせた。

腰をおろしてもおれは化石のように身を固くしたままだった。

明美の凝視する眼が、きゆうに意地悪い光りを放った。



「あんだ、あたしのなにが欲しいって？」

正視したまま明美が尋ねた。とっさに答えられるほど、おれの精神状態は正常ではなかった。ただ声もなく眼だけがねだっていた。

「ふふふ……あたし、前から知ってたわ。あんだの眼、いつも異様だったもの……」

あやしげな微笑をうかべて、明美は胸元に垂らした黒髪をもてあそんでいる。

脂汗のにじんだおれの顔をのぞきこみ、眼の前で髪の毛の先をひらひらさせて見せた。

おれの呼吸は乱れた。顔がほてり、黒髪の一つやかさだけが視界にあった。

「ほくにください！……お願いです、この通り！……」

ソファからずりおち、おれはプラスチックの床に頭をすりつけた。

「大事にします……あなたの黒髪を……あなたの分身の髪の毛を、ほくにゆずってください……肌身につけています、約束します！」

言葉ではない。うめきだった。明美の前にはいつくばって哀願をくり返した。

彼女は傲慢な微笑をうかべて、おれをじっと見おろしている。

「いや——だと言ったら？」

拒絶されて帰りたいくない。おれはすがりついた。彼女の黒髪にひかれたいきさつをぶち

まけた。

彼女こそ生きがいなのだと訴えた。

親父に早く死別したおれはおふくろっ子だった。生まれながら醜いおれに、おふくろは愛情のすべてをそそいでくれた。

だが、おれはおふくろを好きになれなかった。おふくろの髪の毛がちぢれ毛だったからだ。

おれのまわりにいるどの子も、長くて黒くて美しい髪の毛のおふくろを持っていた。

ある友達の母親は、日なたの縁側でその長い髪をすくのを日課にしていた。おれは羨望の眼でその姿を眺めていたのだった。

子供心に、そんなおふくろのいる友達がうらやましかった。ねたましかった。その母親に育てられている友達は、みんな世界一のしあわせ者に見えてならなかった。

こんなおれだけに黒い長い髪にはもろかった。長い黒髪に恋をしていた。

明美は美しいだけにおれの女神だった。

若いつやつやした黒髪、みどりの匂うような黒髪——それを愛せたらどんなにしあわせだろう……。

それがかなわぬなら、一本でも二本でもいい、彼女にはぐくまれた、長い髪の毛が欲しい。おれは彼女のおめぐみにすがった。

明美は両腕を抱くように組んで、おれを見くだしている。眼のふちがひきつった。

「そんなに欲しいの？……あげてもいいわ」  
ああ！ おれは感激にくずれかかる顔を明美に向けた。

が、よろこぶのはまだ早かった。

「あげてもいいけど、その前に、あたしの言うことを百パーセント聞いて欲しいの」

彼女の髪の毛がただただのなるなら、どんなことでもしよう。しなければならぬのだ。

おれは首を大きくふった。従順な犬のように。犬になってもいいとさえ思った。

つめたい笑顔を見せたまま、明美は言った。  
「よつんばいになって……あたしの足の裏をなめてごらんさい」

### 髪が頂けるなら

つぎの瞬間から、明美は女王、おれはいつびきの犬ころだった。

おれはよつんばいになって進み出た。

ソファに深く身を沈めた女王様は、ふさふさ白い毛の部屋ばきから、片足をおれの鼻先につきだした。白い、挑発的なおみあしだった。

形のよい、まっ赤にマニキュアされた爪。ひとつひとつが宝石の輝きを見せている。



うながすように、親指が、鼻の頭を小突いた。

おれは舌をだしてペロペロ指先をなめた。

「だめだめ！　なによ、その愛しかたは……髪のをあげないわよッ」

明美はヒステリックに叫んで、足の裏をおれの顔にすりつけた。

おれは大きく口を開いて、足先をしゃぶった。

口いっぱい、五本の指がふさいだ。

苦しかった。が、悦びにみちみちていた。

舌で五本の指をまんべんなくなめ続ける。

乳房をしゃぶるようにその指を吸う。

くすぐったいのか、舌の愛撫のさなか、口のなかで指がてんでにあげられる。おれは逃すまいと、なおも強くしゃぶるのだった。

くくくッ……女王様は喉の奥で笑いをこらえている。顔が赤い。おれの愛撫に満足しているのだ。

指が終ると足の裏を一面——そして、もう片一方の足の愛撫に移るのだった。

一時間たっぷりかけて、足しゃぶりは終わった。

だが、女王様の命令は、終わったわけではない。

「さあ、こんどはこれよ……」

明美は青いちり紙にずふずふとハナをかんだ。そのちり紙をひろげておれの眼の前にさしだした。

ねばねばした透明の粘液が、水晶のような光を放っている。

いきなり、ねばねばの紙をおれの唇に押しつけた。

ぐしゃっ。なまぬるいねばねばが、唇の間から口のなかに押しこまれた。

舌の先にぬらぬらとねばりついた。

(彼女の髪の毛が貰えるのだ……)

おれは夢中でちり紙を噛み始めた。

ぴりっ！と塩味が感じられる。が、たちまち

甘美な味わいに変っていった。

黒髪同様、そのねばねばの液体も彼女から生まれたものなのだ。

ちり紙は溶けて、粘液だけがねばっこく口いっぱいひろがった。

そのかくわしき、そのおいしき、とろけるような甘さはすべての官能を麻痺させていった。

その味わいをぎんみするように、口のなかでなんとなく舌を上あごになすりつけた。

ぬめぬめと粘液と唾液がまじりあい、ねばっこい泡が舌のすべりを活発にする。

くちやくちや、ちり紙を噛みしめては、じゅ

っとしほりだされる液汁を泡だちの液にまぜあわせ、舌先でミキシングをする。

口いっぱいに溜まると、舌で味わいながら飲みくだすのだ。

ちり紙もどろどろに唾液にかして胃のなかへ送りこんだ。

唇がねばねばする。舌でペロペロなめまわしてぬぐいとる。唇のまわりに附着した粘液もすっかりなめとるのだった。

髪の毛欲しさに、ただひたむきに命令を甘受しているおれを、明美は満足そうに見守っていた。

終わったとみるや、にこやかな微笑を見せて声をかけた。初めてのあたたかな声だった。

「のどが乾いたでしょ？　ジュースをこちそうするわ……ちよっとうしろ向いててくれかい？　あたしがいいというまで……」

おれは素直に壁に向かって立った。背後で明美の歩く気配がした。

そして——

しゃーっ！……小さいが、はげしい音が耳をうった。ある分泌液が勢いよく便器を叩きつけているのだ。

思わずおれは振りむきそうになった。

「だめ！　動いちゃだめ！」

叱責されて、おれはびりびり全身緊張させ





て立ちすくんだ。

その音がやむと――。

「いいわよ、こっちをむいて……さあ、いら  
っしゃい」

彼女の声に、おれは顔をねじ向けた。

リビングルームの隅の水洗便器のそばに明

美はこぼれる微笑で立っていた。

「あんたのために特別にこしらえてあげたジ  
ュースよ……さあ、おあがんなさい」

はいつくばって近づいたものの、なかをの  
ぞきこんで、さすがに途惑った。

白い陶器から、ほかほか湯気がたちのぼっ

ている。その底に、黄ばんだ液がよどんでい  
た。無数の泡がその面に浮流していた。

と、いきなり、あけみの手がおれの頭髪を  
ひつつかんだ。ぎゅうと指に力をこめる。

痛い。髪がひきぬかれそうに痛い。

「さあ、早く飲むのよ、あったかいうちに」



おれの顔を、力ずくで便器のなかへ押しこんだ。

なまあたの液体が顔一面を濡らした。眼も鼻も口も、すべて黄色の液にふさがれその苦しさに口があく。その口中へ明美の醸造したジュースが流れこんだ。

おれはもう夢中だった。

ごくごく飲みこむ。そのたびにのどが鳴った。舌でぴちゃぴちゃやりながら、明美の体臭を味わうように飲み続けた。

頭髮にからんだ指が離れていた。

おれは、びしょ濡れの顔を明美に向けた。

「ふふふ……約束通りあげましょうね……その前にさわらせてあげる」

明美は美しい顔をほころばせ、黒髪を両手にのせておれの前にさし出した。

素晴らしい！……思いがかなううえに、夢にまで見た彼女の長髪を愛せるのだ。

興奮に身をふるわせ、おれはぎこちなく両手を明美のほうへさし出した。

その手が髪の毛の先に触れようとしたときだ。がんと、背後から肩口をひと突きされた。

## 一筋の髪の毛

あやうくつんのめりそうになり、おれはかッと眼をむいた。

が、あッと瞼をしばたいた。

明美ではない。眼の前にいるのは、オヤジだ。熊井文吉の酒臭いヒゲづらがそこにあった。いつから眠ってしまったのか、おれはカメラ移動車の上で舟をこいでいたのだ。

スタジオ内は関係者が姿を見せはじめ、にぎやかになっていた。

「こんなところで眠ってる風邪ひくぞ……」

おれの肩をもういちど叩いてオヤジは離れていった。

おれの全身は火のようにほてっていた。

幻影だったのか。髪に憑かれた哀れな幻想曲でしかなかったのだ。

夢でもいい——せめて、彼女の黒髪を思い

きりなぶってみたかった。長い黒髪に顔を埋めて、匂いをかぎ、噛みしめ、その陶醉にわれを忘れたかった。

頭がえぐられるように痛い。失望と口惜しさにさいなまれているのだ。

もう八時だ。本番も間近い。

さわがしいスタジオにいたのでは、せっかくの夢がぶちこわされるだけだ。おれはふらく足をふんまえて、廊下へ出かかった。

と、その足が、思わずその場に釘づけられた。上条明美がやって来たのだ。黒オーバーの背にあざやかな漆黒の髪を垂らして——

おれの存在など意にかいしたふうもなく、明美は見すえる眼の前を横切ってゆく。

そして、セツトとセツトのたてこんだせまい通路を通りぬけようとした。とたん——。

あッ、明美は小さな悲鳴をあげて立ちどまった。長い髪の毛の先端がセツトのへりのささくれにでもひっかかったらしい。痛そうに髪をひっぱられて顔をねじまげている。

おれは眼をみはったまま立ちすくんだ。手をさしのべて髪をはずしてやるんだ——

気はせいでも行動がともなわなかった。

明美は美しい顔をきゅっとしかめ、乱暴に髪をひきちぎり、セツト奥のプロデューサーのそばへ駆け寄っていった。

意気地なし！ 自分に愛想がつきた。生きた髪に触れる機会をむざむざ見逃したのだ。おれは狭路に歩み寄った。

ああ！ そこに、柱のささくれにからまって長い髪の毛が一筋残っていた。その毛先の

彼女の肉の一部だった脂肪のかたまりが、にぶく銀色に光っていた。

夢ではない。本物の明美の髪の毛！

おれは髪をそっとはずし取り、ふるえる手に握りしめた。強烈な彼女のうつり香をいとおしむように、その場に立ちつくした。



読者評壇



郷保夫

★五月号の小説、読みものについての評をかかせていただきます。まず巻頭絵物語「赤ん坊がわらうとき……」豊田先生の作はいつも安心して読めます。「戦慄」の章まで一気に読ませ、読了後も赤ん坊の泣きさけぶ声や、シューというガスの音、そのとき大あばれにあられたであろう美奈子の狂態がいつまでも心にやきついてはなれません。心にくいまでたくみなコメントでした。小生はその興奮を止めるためによりページのくねった女体をしばらくみつめたものでした。

「女獣飼育」すてきな題です。どんな白く柔かな女体を飼育するのでしょうか。「わたくしの生涯に秘められた唯一の暗黒の物語を告白しよう」ウンウン、こりやア、冒頭から気に入った。どんな暗黒の告白なんだ、さっそく聞かせてもらおう。ウムウム……。この間

三十分相たち申し候)ゲー、ゲエー、ゲエー、ゲゲゲエー。小生は便所にかけこみ、おもいきり吐きました。この作品とか「しつぽが生えたおんなの子」といい、どうもオトナシイ小生にはシゲキが強すぎます。この二作どちらかといえは「しつぽ」の方がすぐれていますね。まさに二十一世紀の怪談です。そして、こういう趣味のない者をもグングン引きこむあやしい力をもっています。作者は少しも作中で歌ってはいません。あくまでも非情に対象をつきはなし冷酷なまでに筆をすすめている。小生は淡路先生に本格的な小説を書いてくださるようお願いしたい気がします。この「しつぽ」もすばらしい小説ですが。この作では特に、七十ページあたりから七十二ページにかけて、深く感動しました。じつに、気味の悪い感動を！「むざん火あぶり地獄」さすが矢桐先生の作だけに巧みなものと思えました。へ肉体の「口」の描写三度読みかえしましたが、興奮させられました。先生の筆法をかりるならば、「いかに文字の上とはいい独り者の身に、矢桐先生はひどい描写をしてみせたものである」。『いやらしい眼』この小説でやっと、小生本来のS的気分が満

足させられました。というのは、九十九十郎先生は失礼ですが、小生と同じご趣味の方だからです。先生はつぎのように書かれています。曰く——裾よけをめくり取ると、ナイロンパンティをつけた腰から尻にかけてのポリウムが、あざやかに眼にとび込んできた。それが老人の好みなのか、パンティは何の飾りもつけない、あるかなきかの薄さのものだった。乳色の肌と共に、尻の割れ目までクツキリと見て取れた——と。何といふ表現でしょう。「何の飾りもない」ないあるかなきかの薄いパンティ「それはまた小生郷保夫の好みでもあります。さてこの小説、八十八ページが圧巻です。何度もよみかえして想像しひとり興奮させられました。今月にはマゾ物にも一つひろいものがあつて嬉しくなりました。それは「鞭に生きる女」です。さし絵にひかれて読んだのですが、なかなかいいですね。奇抜な責めですし、文章も女体特有の柔かさ匂いのかんじさせない文章です。さすが海外のものはあかぬけしている。こういうのでS的なものがあるといいのですがね。「永遠の女囚」このフォト・ストーリーはいつもおもしろく読んでいます。写真がいつもいいですね。ただしこれも暗すぎて残念です。これをグラビアで見たいですね。こういうすばらしい写真のものと物をデスクでゆっくり見ながら、ときどき美人事務員の方をチラチラ眺めている貴社の編集部の方方うらやましい。主人公大津雄作は、じつは小生の空想している生活の、またこういう人間になりたいと思っているタイプの何分の一かを示してくれています。鳴滝先生、小生はこの大津のようなS的生活をしたいのです。「京洛の烈女」鼻孔責めがよかったと思います。小生の所有している本に幾松の洋装している写真があります。彼女が、外人のようにちよつと上をむいた鼻をしていますからじつさい鼻責めにはもってこいですし、それをしたたい気持を男にいだかせます。そのほか、いちいち申しませんでした。貴誌のよび物の一つである「裏窓タウン」は毎号楽しく読んでおります。大いに今後も充実されんことを。タウンの同人はいずれ編集部の方士たちなのでしようが、ユーモアたっぷりな筆致あり、報告書風のかたまりのありで実にたのしみです。小生の駄評などのせすに、タウンをその分増ページした方が本当はいいのかもしれないね。



# 縄を待つ女

堀 越早苗

悶 え

私の名前を、仮りに、浜村啓子——としておきましょう。

自分の仮名を選ぶのに、あれこれと、ずいぶん迷いましたが、けっきょく、独特な名前などはないものだ気がついて、ごくありふれた名前にいたしました。

浜村啓子——そんな名前をお持ちの人は日本中のどこにも、たくさんいらっしゃるでしょう。

ですから、誤解のないように、もう一度申し上げておきます。これは、私の仮名なのです。

もし、お知り合いの中にそういう名前の女の方があったとしても——また、名前以外にも似かよった点があったとしても、それはただの偶然であり、暗合なのですから、決してお間違えなどなさいませんよう、お願い申し上げます。

わたくし——浜村啓子は、二十六歳。結婚をして四年目になりますが、現在、あるバ——で働いています。

良人は……いま、刑務所におります。不運な事情によって、誤まちを犯したのですが、決して悪い人ではありません。刑期は二年で

す。

あと一年足らずで、良人は啓子のところへ戻ってきます。それまでの辛抱——と思うのですが、女が独りで待つということは、とても哀しく、辛いものです。淋しさ、苦しさ、切なさ。悶え、呻き、喘ぎ——もっとほかに適当な言葉はないものでしょうか？

そうです。そんなおあつらえ向きの、体裁のよい言葉などありません。啓子の現在の気持ちを表わすには、もっと正直に、包み隠さずお話しするよりほかに方法はないのです。

「済まないことをした……。待ってなくてもいいんだよ。離婚をしてくれ」

と良人は何度も申しましたが、啓子は、もとよりそんな気にはなれませんでした。

啓子は待つのです。悲運にたえて、ただじと待ち続けるのです——。

すでに、一年余りが過ぎました。けれど……正直に言って、それは余りにも長い、余りにも辛い一年でした。

愛する良人と引き離された女が、不貞も働かず、に過ぎた一年は、普通の人妻の一年とはまったく違います。しかも、酔った男、浮気な男から誘われるのが当たり前で、誘われなかったら、かえってふしぎ——という世界



に働いているのです。

「今夜、俺と寝よう……」

「送って行ってやろう。どこかで飯でも喰って……」

「……君、秘密、守れる？」

露骨なのや、強引なの、キザなタイプ、気の弱い型——等々、口説き方はいろいろですが、目的はだれも同じです。啓子の体なのです。男たちにとって、「酒」と「女」は密接な関係にあるものとされていて、ときには、

それは腹立たしくなるほどでした。

啓子はその気にさえなれば、そして、相手をよく選びさえすれば、不貞を働く機会はいつもあり、それを良人に知られることはないのです。

無理にお酒を飲まされて、酔ってしまったときなどは、意志の力が弱まり、とても哀しくなり、からだも心も崩れて行きそうになります。

けれども、啓子はいつも踏みとどまってき

ました。必死に自分を抑えてきました。

変な考え方かも知れませんが、いっそのこと良人が本格の犯罪者であり、啓子が共犯者だとしたら、むしろ楽だったのに——と思うことが何度もありました。それなら啓子も一緒に捕縛されて、刑務所に入れてもらえるからです。

鉄格子の内につながれてしまえば、

「俺と寝よう」と云う男も「秘密が守れるか」と念を押す男も存在しない。

否応なしに、貞節を守るほかはない——と思ったのです。

## 相 性

「考え方が古いのね。そんなの詰らないじゃないの。割り切っちゃいなさいよ」

と、いっしょに働いているA子さんは言います。

たしかに、啓子には古風なところがあるのです。すくなくとも当世風とは申せません。

けれど、本当の理由は、良人と過ごした日数が余りにも強烈であったためなのです。

良人が啓子に与えてくれたも





のは、ただの愛撫ではなかったのです。良人はいろいろなことを教えてくれ、仕込んでくれましたが、そういうとき、いつでも必ず使われるものがありました。

縄——。

そうです……啓子は……マゾヒストなのです。正直に白状してしまいます。啓子は生まれつきのマゾヒストなのです。

良人から言わせれば、

「女房を、自分の思う通りの女に仕込んでやった」

ということになるのかも知れませんが、啓子は仕込まれる前から、いわば素質十分だったのです。

初めて良人から縄をかけられたときの羞じらいや驚きは、「優等生」としての計算であり演技のようなものでした。

開眼——という言葉がありますが、啓子に「マゾヒストとしての開眼」はいらなかったのです。

子供のころから、わかっていました。いじめられることの悦びが——。

昔から、知っていました。自由を奪われることの快さを——。

と言っても、啓子は決して特殊な育ち方をしたのでも、特異な環境の中に生きてきたの



でもありません。平凡な、普通の娘でした。

ただ、世の中の、見るもの、聞くもの、学校で教えられること——その他の何事のなかにも、啓子の心を刺戟するものがひそんでおり、鋭敏に感じ取れる瞬間がさるのでした。

啓子は、マゾヒズムを自分からすすんで育だててきたのか、それとも、自然の成り行きで運命的に育だってきたのか——その辺の区

別はむずかしいことです。

ただ、啓子の心の中にいつも秘められていたのは「縄」に対する憧れのような、奇妙な気持ちでした。

縛られたい。男の人から、縄で、後ろ手に縛ってもらいたい——。

もちろん、明瞭にはありませんが、そんな想いが心の中でうごめいていたのです。



けれども、それは「花を活けたい」とか「歌を歌いたい」とかいう願いとはまったく違って、実現不可能の願望です。

自分ひとりでは思う通りにはならない事柄でした。

(もし、強盗が家へ入ってきたら……)

そんなことを考えたりしたときもありましたが、嫌悪の方が強くて、その空想はすぐに消えました。

整理してみれば(なるべく美しく、安らかに

状況の中で、好ましい男から縄をかけられいじめられてみたい——)となるのです。まったく贅沢な願いでした。

それをみたしてくれた人が良人なのです。

啓子は、自分の心身にひそむマゾヒズムの充足を目的として結婚するほど、大それた女ではございません。

ありふれた職場結婚でしたが、「幸運」にも恵まれていたのです。

良人となった人が、自分のマゾヒズムをみ

たしてくれる「相性」までも持っていたのですから——。

もっとも、結婚前に二、三度、彼が男のサディズムらしいものを示したことはありませんでした。

一度は、他愛もないようなことから喧嘩になっけしまい、不意にはげしく頬を叩かれたときです。

いま一度は、彼が啓子の手を背中へ捻じ上げたような形で掴み、唇を奪ったときです。

アメリカ映画にときどきあるみたいな、荒々しい接吻でした。

「……乱暴ね」

「強吻……とでも言うのかな？」

照れかくしのように、そんなことを言うのでした。

そのほか、会話のなかなどにサディスティックなものが、幾分か表われたことなどもあったのですが、恋愛中の男とはこういうものなのかも知れない、とも思い、「縄」や「相性」のことまでは確かめずに、結婚に踏み切りました。

初めて良人の手で縛られたとき、啓子の悦びは無上のものとなりました。

けれど、悦びを露骨に表わすのは、はしたないことであり、羞恥の方が適切であることを





啓子は知っていました。

「誤解しないでくれ。つまり……可愛いから  
いじめたくなるんだ……」

「羞ずかしい……」

「どうして？」

「だって……」

「大丈夫。いまにわかる」

「いや！」

「平気だよ。わかってくれ」

「ひどいわ……」

「痛い？」

「何も叱られるようなこと、していないのに」

「叱っている訳じゃない。可愛いからだ」

「許して！」

「判ってくれるまでは、許さない」

——決して、省略しているわけではありま  
せん。正直に再現すれば、だいたい、そんな  
やりとりが、小さな声で交わされて行ったの  
です。

劇のセリフのような、美しく、豊かな、激  
しい言葉が使われるようなことはなく、とき  
には無意味な、不合理な言葉も出ます。

その間、啓子は身をくねらせ、顔を赤らめ  
喘ぎ、悶えていたのです。

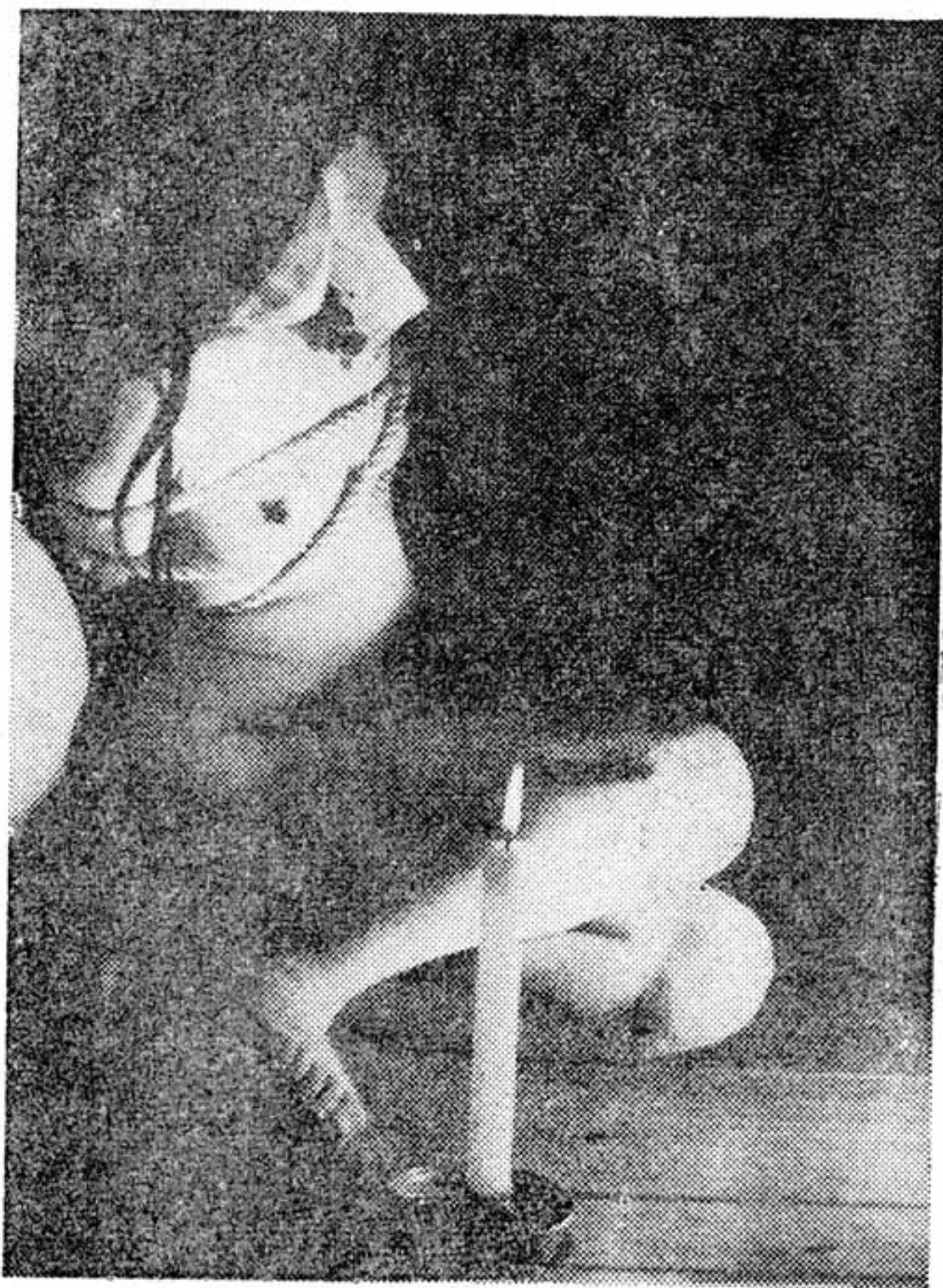
## 縄の束

マゾヒズム

——と、ひと  
口に言っても、  
その種類はい  
ろいろあると  
思いますが、  
もっとも代表  
的であり基本  
とも言えるの  
は、縄で体を  
縛られること  
ではないかし  
ら……という  
気がいたしま  
す。

良人がいな  
い現在でも、  
啓子は「縄」に敏感な反応を覚えてしまいま  
す。

街を歩いているとき、荒物屋の店さきに白  
い縄の束などが吊るしてあったりすると、啓  
子は瞬間、胸が締めつけられるような想い  
におそわれ、惹き寄せられそうになるのです。  
埃りを防ぐためだと思いますが、近ごろでは  
縄の束にビニールの袋がかぶせてあります。  
そのせいか、かえってナマナマしい感じ——



何か、一種輝かしいような感じに見えること  
があります。

（まだ汚れていない、真っ白い縄……。あの  
縄のうちの何本かは、人間の体のために買わ  
れて行くことが、あるのかしら？ 美しい若  
妻が、良人に命令されて、素知らぬ顔で買  
にくることなど、ないかしら？）

そんなことを考えたりするのです。  
良人を連れ去られる前の啓子がそうでした





「繩が足りないね。もっとたくさんあった方がいい。新らしいのを買ってきなさい」  
ある土曜日の夕方、良人がそんなことを言

いはじめたのです。  
「そんなに、いらないわ」  
「明日、庭で啓子を縛ってやる。昼間だ……」  
「駄目よ、そんなこと！」

「いいさ。裸にして磔だ」  
「いや！ 人が来たらどうするの！」

「門も木戸も、錠をかけておこう」

「電柱の上から見物されるかも知れないわ」

「だれがそんな所から見物する？」

「電気工夫……」

「バカ。いいから早く買ってこい」

「あなたも一緒に行ってくださらないや、いやよ。ひとりじゃはずかしいわ」

「捕縄をたくさんください……とでも言うつもりか」

もちろん、そんなことは言いませんが、荒物屋の人などというのは、案外、こちらの使用目的を見抜くことができるところではないでしょうか――

啓子は、なるべく遠い所にある荒物屋へ出かけて行き、できるだけ何気ない様子で新しい縄を買ったのでした。

翌日――

啓子は、初めて、白日の下で裸身に縄をかけられたのです。

このときばかりは、演技でも計算でもなく本当に羞恥し、身悶えし、哀願をくり返しました。

「もう、許して！ はずかしいわ！ おねがい。早く解いて！」

「声を出すな！」

「家の中でなら、どんなことをされてもいいけど、そとでは厭！ もう勘忍して！」

良人から注意されるまでもなく、大きな声の出せる場合ではないのです。

啓子は声を殺して、必死に哀願を続けました。こういうことは、かえってエネルギーを消耗するのか、やっとな磔刑の形から解放されたとき、啓子は、グッタリとなってしまう、赤ン坊のように良人に抱き上げられ、家の中まで運こばれたのでした。

## 女 奴 隷

良人は、しだいにいろいろと工夫をこらし、変ったことを試みるようになりました。



吊り責め——。

海老責め——。

ソロバン責め——。

多くは、むかし行こなわれた拷問法からの着想でしたが、伝えられている通りをそのまま試みるものではありません。

たとえば、「ソロバン責め」というのは、むかしは膝の上に石を積む方法で、別名を「石抱き」とも言ったそうですが、わが家のソロバン責めは、本当のソロバンが使われるのです。

ソロバンの上に坐らされるのは苦痛も大きく、肌も傷つくので、良人は別の方法を考えてくれました。

膝を揃えて正坐するさいに、ふくらはぎと太腿の間に——つまり膝関節のうしろ側に、ソロバンをはさむのです。

もちろん、手は後ろで縛られています。

理由かいるときは、強引な理由が突然つけられることになります。

「啓子は今夜、テレビのメロドラマを勝手に見ていた。俺は同じ時間に、別な局のアメリカものスリラーを見たかった……」

「それなら、はじめからそうおっしゃってくださればいいのに……」

などと抗弁しても、もう間に合わないの

す。啓子は「チャンネル独占の罪」により、有無を言わず縛られてしまします。

まず、背中中、両手首が括り合わされるとき、啓子の体の中を妖しい戦慄が走り始めます。

胸、胴、首——と容赦なく縄がかけられて行くと、もうだめ。

啓子は「妻」から「女奴隷」へと急速に変化して行くのです。

「一度、啓子を別な人間に縛らせたいな。啓子がだれかに縛られるのを、俺はそばで見物していたい……」

「もう一人、べつな女が欲しいな。啓子と、もう一人の女を並べて縛ったり、並べて吊るして耐久力をくらべたり、啓子が女に縛り上げられたりする場面など、見たいものだな……」

ときどき、良人はそんな夢みたいなお話を口にするがありました。

「別の女なんて、いやよ！」

啓子は、良人が他に女をつくるような人間ではないことを信じてはいましたが、それでも不安になって、強く反対しました。

「冗談だよ。ただ、男にはそんな願望があるんだ」

と良人は言うのでした——。

## ★裏窓ちゃんねる★

啓子は、やはりこのまま、良人の帰る日を待ち続けることでしょう。

その日もっと迫ったところには、ひとり新しい縄を買い求めに行くのかも知れません。

辛くても、苦しくても、啓子は縄といっしよに恋しい人の帰りを待ち続けるのです。

「畜獣デリムソン」第七回の原稿を頂戴するために、編集部の人M君が阿麻哲郎先生と新宿でおあいした。

ぶじに原稿をいただき、おまけに先生に高級レストランの夕食をごちそうになったまではよかったが——

以下はM君の言。

「先生、料理をたべながら横目でテレビをごらんになり、ああ、あの女優の液体がのみたい、固型物がたべたい——には参りました」  
ちなみに、頭文字はMだが、M君はやはりS派なのです。

(豊)



★見たもの聞いたもの★

## キャバレーの 女どれいショウ

藤 見 郁

客席が暗くなる。と、ステージにピンク色のスポットがあたる。ショウ・タイムである。

アナウンスがあつて、どこか、ベルシャあたりのどれい商人の衣裳をきた男が、ライトのなかにうかびあがる。「みなさま、女どれいはいかがでございますか。主人の命令なら、どんなことでも服従する女どれいです。なにしたらいいんです。えへへへ。お安くまけておきますよ」

と、ムチを鳴らしながらいう。ステージ下手にライトがあたると、クサリで両手を前にしばられた半裸の女がうなだれて立っている。グラマーをとおりこしてやや肥りすぎの女。



男はクサリを引っばつて、女を中央につれてくる。そして「お前のヒップはどのくらいだ?」とか「オッパイの大きさは?」とか、「味はどうだ?」とか、いささか卑わいなやりとりをする。

急テンポの音楽がはじまる。商人と女どれいとの、かなりサディスティックな踊り。女はクサリでしばられたまま、髪をふり、腰をくねらせて踊りまわる。

商人は女をムチで追いまわす。そのムチが、竹のさきに紐をむすびつけただけの、おそまつな小道



クサリを鳴らして踊る女

具だったのには興ざめ。嗜虐的な踊りは数分つづいて、暗転ののちに、つぎの、ふつうのヌードショウにひきつがれる。

東京神田のキャバレー「C」での所見。ちょうどカメラマンが行っていたので数枚撮ってきた。キャバレーや、ナイトクラブのショウも、マンネリズムになって手がつまつてくると、どうしても「SM」性の匂うものが登場してくるようだ。そしてまたお客さまも、けっこう、よろこんでいるようである。



にわとりと

ホルモン剤と

性転換の話題



本誌二月号に「けんらんたる妖花」と題して、東京浅草のロック座に出演した性転換女性の興味ある写真および記事が掲載されていたが、これは、期せずして男性が女性化したという、どこかユーモラスな海外の話題である。

こんどアメリカ下院議会の一委員会で行なったフランシス・M・ポテンジャー博士（南カリフォルニア大学教授）およびロバート・K・エンダーズ博士（スワズモア大学教授）の証言は、全アメリカ人を驚かせた。

両教授が口をきわめて説いたのは、次の証言である。

「いまや全アメリカ人は、ホルモンの恐るべき中毒症状に陥りつつある。この症状を放置しておく

完全に中性化して、生殖機能が衰退する。政府はよろしく対策を講じなくてはならない。すでにデンマークでは、政府がこの措置を講じはじめている。デンマークで行なわれた性転換の事実、ホルモンの利用によるものであることを警告しておく」

「デンマークで行なわれた性転換」とは、七、八年前、新聞紙上を、にぎわしたジョージ・ジョーシエンソンおよびチャールズ・マックレオッドという二青年が、突如、女性となり、名前もおのの「クリスチン」、「シャーロット」と改めた事実をさしている。

ジョージとチャールズの性転換は、もともと生理的に半陰陽で、デンマークのクリスチャン・ハンブルガー博士の手術により、ジョージは五〇年に、チャールズは五

一年に、それぞれ完全な女性になったと一般に信じられていたが、しかし、その後のハンブルガー博士の報告によると、ある性ホルモン剤を用いて両青年の性転換を促進したものであった。

だが、この両博士の証言が、アメリカ人を驚かせたのは、そればかりではなかった。この恐るべき「性ホルモン剤」が、ある食物を通じて、毎日ほとんどのアメリカ人の口に入っているという事実であり、この状態が長くつづけば、いやおうなく、「君は性転換をする」という事実であった。

いったいアメリカ議会がこの問題をとりあげたのは、ポ、エ両博士のみならず、多くの学者が、ゆしき一大事として社会的に発言しだしたからである。

たとえば、エール大学のモリス・グリーン博士は、次のような観察と研究報告を発表した。

「私は一九五六年十一月以来、ある幼児の発育を研究、観察しているが、性ホルモン剤の影響による性転換的兆候は、ハッキリとあ

づけることができた。その幼児は、ある食肉鶏飼育場主の三歳の男児だが、徐々に体格

構造が女性化してきたので、診察を請われたのがはじめであった。

彼（男児）は、見たところ、その乳房がもりあがり、筋肉は明らかに女性化していた。原因は、エストロジェン（性ホルモンの一種）にあった。というのは、彼の父が食肉鶏を早急に太らせるために、鶏の首にエストロジェンの注射を行い、その錠剤を幼児が始終オモチャにして、時々エン下していたからである。

そこでエストロジェンのみならず、一般に性ホルモンを服用、または皮下注射してみると、男性は一時的には性欲が高進するが、やがてインポテンツとなり、生殖能力も減退して、中性化の兆候があらわれてくる。すなわち、男性機能が衰えて女性化してくるのである。逆に、女性は月経が促進されたり止まったりして、やがて不妊となっていく。一種の男性化である」

また著名なホルモン学者L・ヘッセルビック博士も、十カ月の幼児につき、同じような事例を観察した。

ところで問題なのは、アメリカ中の食肉鶏飼育業者の全部がその



飼育ビナに対し、エストロジェンまたはダイチルスチルベストロールという性ホルモン剤を、ペレット（小円柱形の錠剤）や、パステ（軟膏）の形で用いているという事実である。

この性ホルモン剤をもちいて、不自然なまでに、柔らかく太らせた雄鶏は、「ケイボン」とよばれるが、すでに雄鶏としての機能を失ったケイボンは、毎年やく五百万羽ぐらいつつ市場に送りだされていく。

従って性ホルモン剤は、チキン料理に供されるケイボンを通じ、アメリカ人の体内に毎日入っていく勘定である。

こういうかんがえかたが、医学、動物学、ホルモン学者のあいだで、ようやく強まってきたので、アメリカの農務省（養鶏業を指導している）および保健、教育、厚生庁などでも種々の実験を開始した。

すると合成ホルモン（剤）は、性機能に対してばかりでなく、摂護腺ガンの発生の原因になる疑いも生じてきたし、またある学者は人体の酵素にも悪影響がある、という意見を発表した。

前者は、保健、教育、厚生庁付属の全米ガン研究所の発表、後者はニュージャージー州ラリタン市にあるオーソ研究所のカール・ハートマン博士の意見である。さらにスワスモア大学のエンダーズ博士は、性ホルモン剤を摂取しつづけると、血液の凝固力を失わせ、わずかなカミソリ傷でも血が止まらなくなり、生命を失う危険すら生ずる、という重大発表を行なった。

こうした諸学者の発表に痛く注意をひかれたのは、ネブラスカ州選出のA・L・ミラー下院議員だった。

「性ホルモン剤が、男性の女性化、女性の不妊症（男性化）を招く疑いがあるとすれば、人類の将来に対する危険は、水爆どころのさわざではない。」

その原因が、ケイボンにあるのなら、アメリカ政府は、あすといわず、直ちに性ホルモン注入によるケイボンづくりを禁止させなければならぬ。

近き将来、全アメリカ人が、男のような女、女のような男ばかりになってしまったら、それこそたいへんだ」

かくて、下院も捨ておけず、専門学者を呼んで、公聴会を開いたわけだが、そうなると、ケイボンづくりによって普通の五割以上の利益をあげている食用鶏業者、および性ホルモンを売り出している化学、薬品会社が黙っていないかった。

元来、ケイボンというのは去勢した食用雄鶏のことをいうのである。

ところが雄鶏はただ飼育したただけでは、肥満体にはならないし、肉も柔らかくならない。そこで、性ホルモンを注射して女性化し、肉を柔軟にして、かつ目方をふやす。「エストロジェン」を注射すると、雄鶏はたちまち女性化して、目方は五〇パーセントふえるといわれる。だから、このケイボンのヒナ（ケイボネット）は、普通のヒナ肉より、三、四割値段が高いのである。

従ってケイボンづくりが禁止されると、アメリカ農民の収入は激減するといわなければならない。農民たちが、性ホルモン発売禁止に真っ先に反対したのは無理もなかった。

次は、製薬会社である。

もっとも製薬会社は、性ホルモン剤の副作用を認めている。しかし、食物を通じて人体に吸収されたものが性転換の原因になるとは、断定が早すぎると反対意見を表明した。

が、「とんでもない」というのが、フィラデルフィアのジェファソン医科大学のアブラハム・ラコフ博士の声明であった。「性ホルモン剤は、クリームなどの化粧品にまで使用されているが、こうした方面の使用も禁止すべきだ。アメリカの男性が、みな女性化してしまったては困るではないか！」というのが博士の意見である。

——というのであるが、これは単に「性転換」だけの興味ではなく、空想を飛躍させれば、この話題には、痛快なマゾヒズム小説のモチーフが存在していることが見逃せないのだ。

本誌連載の「畜獣デリムソン」ではないが、男性のすべてが「エストロジェン」を注射され、女性たちの食肉に供される。というプロットである。

（真木不二夫）



# 地 獄 船 青 龍 号

沖 涉 二 ・ 絵

永井卓二郎

柳村三郎は、酔っていた。

胃のなかのものを、ぜんぶ吐きだし、それでもまだ苦しかった。

船酔いである。這うようにして甲板にのぼり、積み荷と積み荷のあいだに、ボロ布のようにうずくまっていた。

しばらくたつと、苦痛がいくらか去った。

潮風が頬をたたき、はげしいローリングにも、ようやく馴れたようである。

目をあげると、海の色はあざやかな濃紺だった。うそのような、その濃紺を切り裂いて船はすすんでいた。

船の揺れが、またはげしくなった。屋久島の沖を通過して、いま七島灘をのりこえているのだ。沖縄航路ずい一の難所だった。

せいぜい五、六十トンの発動機船だ。ひどい揺れもむりはない。

この小さな船のなかに、密輸物資のセメントや、日本杉などの建築材、そして密航者、さらに、これも密輸出品である女も積みこま

れている。出発地は、九州南端の某地点だった。

「ばかやろう！」

あらあらしい怒声がおこった。数名の足音が、乱れあった。怒声と悲鳴と足音が、もつれあって甲板にのぼってきた。

「じょうだんじゃねえぜ、まったく。やばい橋をわたって、資本をかけたためえたちに、こんなところであつさり死なれてたまるもんけえ！」

口ぎたなくわめいている。男は水夫だった。三人いて、一人は水夫長だった。

荒っぽい三人の男が、若い二人の女を甲板にひきずりあげてきたのだ。

柳村三郎は半身をおこして、積み荷のかげから、かれらをのぞいた。

悲鳴とも泣き声ともつかぬわめきとともに二人の女が甲板に投げだされた。すでに手ひどくなぐられ、蹴られたらしく、髪を乱し、スカートは裂けていた。

「なんだ、なんだ」

上のほうから声がした。操舵室の窓から、ワイシャツだけの上半身をのりだした男。この男が、船長だった。

「へえ。それがね、この女ら、自殺しようとしやがったんだ。壁の釘に紐をぶらさげて、首をくくりかけたんだ。あぶねえところだったよ」

船長を見あげて、吠えるように水夫長がいった。

「ばかやろう、よく見張ってねえからだ！」

船長も負けずに吠えた。

「なあに、おどかしかも知れねえさ。だけどよ、いま死なれちゃ、タマなしだからな」

大男の水夫がいった。口のききかたが、みんな乱暴だった。船長も水夫もない。

そのとき、若いほうの女が、水夫のすきをみて、いきなり身を起こした。

蹴るように甲板をかけて、手すりから海中にとびこもうとした。





白いスリッパのすそが、花びらのように舞いあがった。水夫のひとりが、泡を食ったような顔で、その女の足にとびつき、かじりつ

いた。

水夫は意味のとれないことばを大声でわめき、その女の両頬にはげしい平手打ちをくわせた。

「ヒイッッ！」

と女は泣く。なぐられた顔が、みるみるうちに、まっ赤に腫れあがった。

「そんなに死にてえのか、ばかや

ろう。くそおッ、二度とこんなバカなまねができねえように、足から縛りあげてやる！」



水夫長が青ざめた顔で怒り、二人の水夫に命令した。

二人の女をこの甲板にひきだしてきたのは、リンチを加えるためらしかった。二人の水夫は、ロープの束をつかんで、女にせまってい

いく。海中へ身を投げようとした女は、どうみても、まだハタチ前だった。少女のおもかげが残っていた。

男たちはこの娘を多美子と呼んだ。彼女はおそくたまされてこの船にのせられたにちがいない。どこか、いなかの山村の出身で、うっかり人買い業者の口車にのつたのだろう。前渡しのと金と、気前よく貸してくれた新しい洋服にまどわされて、汽車で運ばれ、船にのせられ、そしてはじめて、自分の運命を知ったのだ。

明治のはじめ、島原の娘たちが外国船の石炭倉に入れられて満州や支那、南洋に売られていった悲惨な歴史は、現代にも受け継がれているのだ。

「ヒィーッ、ヒィーッ」少女は悲痛な泣き声をあげていた。ロープの束で、ばさッ、ばさッ、としたたかに肩や背を打たれているのだ。

もう一人の女は、かなり疲れた感じの、黄色っぽい顔色をしていた。としはすでに、二十七、八になっ

てい

る。肌の色が不健康に白く、ぶよぶよと、しまりのない肥えかただった。一見して、水商売の女だということがわかる。水夫たちは、この女を、ナミエと呼んでいた。

「そんなに死にたけりや、おれたちがぶち殺してやろうじゃねえか。え、おい、ナミエ」

ナミエの両腕が、おもいきり背中へねじあげられ、塩分がしみこんでいる堅いロープがそこへ巻きつ

いた。ナミエも多美子も、うしろ手に縛りあげられ、肩で息をしていた。両足首も縛りつけられた。

立っている自由を失ったふたりの女は、甲板の上に「く」の字の形になって横たわる。

さながら、白いマグロといった感じで、妙になまめかしかった。縛られる前に、ブラウスもスカートもひき剥がされていたので、うすい安物のスリッパ一枚だった。

そのスリッパも大きくまくれあがって、白い肌が海の風にさらされていた。縄に上下をしめつけられた乳房が、苦しそうにあえいでいる。縄のために、異常な形にゆがんでいる。

ナミエはぐったりと身動きせずただ顔をしかめていたが、若いほうの多美子は、背中に縛りあげられた両手首を、しきりにこすりあ

わせるようにしてもがいている。だが、もがいても縄はすこしもゆるまず、スリッパのすそだけが

かえってむざんにまくれていくようだった。そのむきだしたふとも

もの、みずみずしい色と艶。三人の水夫の目が、おなじような意味の色になって、そのまるみを帯びたふとももへのびた。

「ユルシテ、ユルシテ……」泣き声に似た小さな声が、多美子の口からもれた。

口紅の剥げた唇から、やがて本物の泣き声がでた。その悲しげな声からは、もう自殺の意志は消えていた。

「よし、多美子から責めてやる。二度もおれたちを、ひやりとさせやがったからな」

うす笑いとともに、水夫長はすごみのある口調でいった。本当のリンチは、その水夫長のつぶやきから、はじまったのだった。



の上をふまえたのだ。  
水夫長の足は、少女をふまえた  
まま、ぐりぐりと動いた。全身の  
体重をかけるようにして、なおも

ぐいッ、ぐいッとゆすった。その  
たびに多美子は、  
「ギエッ、ギエッ」  
とうなった。白いなめらかな腹

が、毛だらけのハダシに圧されて  
へこみ、多美子の口から、ハラワ  
タがでるかと思われるほどだっ  
た。多美子は赤い顔をして身をよ  
肉づきをしてやがる。へへへ」





いやらしく笑った。水夫長は足の裏で、多美子の肉づきを計ったのだ。

二人の部下が、うらやましそうな目つきで、水夫長の役得をみつめていた。この男たちは、みんな女には飢えている。女は船艙に、十二、三人も放りこんであるのだが、彼らにとっては商品なのだ。商品に手をつけることは、当然、禁じられている。

「おいッ、ほやほやするな。足の縄を解いてな、片足だけを縛ってウインチにつなげるんだ。いいか片足だけだぞ。多美子から先にやれ」

水夫長が命令した。

「へえい」

二人の水夫は、ふざけたような返事をした。舌なめずりをするような顔になった。そして、たがいに、めくばせをした。多美子を責める、その部署をきめるめくばせらしかった。一人の水夫は、ウインチ（起重機）を操作するために甲板を走り、もう一人の水夫は、

多美子の足もとに腰をおろした。まくれあがったスリップの下にはちきれそうな少女のふとももがふるえている。

ごくり、と水夫ののどが鳴った。多美子のふとももに、水夫の手がのびようとした。

「ぐずぐずするな。早くやれッ」

水夫長の罵声がとんだ。水夫はあわてて、多美子の足の縄に手をかけた。

「片足だけを縛るんだッ」

また水夫長がどなった。

凄惨な光景が、甲板の上に展開した。水夫は、少女の片足首を縛った縄を、ウインチの鉤綱にむすびつけた。そして、マストのそばで待機している相棒に声をかけた。

「はじめろゼッ」

「よしきたッ」

相棒は、ウインチのハンドルをまわしはじめた。起重機は、なんのためらいも感情もなく、哀れな少女の半裸体を、甲板の上たかだかと吊りあげた。

これは、悲惨なショウだった。青い空を背景に、目にしみるほど白い物体のものがき。その物体が、「ヒイッッ」

という絶叫をあげる。片足首だけを縛られて吊られれば、多美子の全身もまた、さかさになって吊られるわけである。少女の腰にまといついていたスリップが、大きな白い花びらのように、はらりとひらいた。

そのために、すっかりむきだしになったふとももが、男たちの目の前におどった。水夫長の目的はこのへんにあったのだ。

よく発達し、ゆたかに肉づいた多美子の下腹部には、びっちりとパンティのゴムがくいこんでいた。肉づきがいいせいか、そのゴムが陥没して、妙に情欲的だった。「てへッ」

「こいつアたまらねえぞ」  
「ついでにそいつもとったらどうだいッ」  
水夫たちが、そろそろと集まってきた、いやしいカン声をあげた。

のどを鳴らし、齒をむきだし、鼻の穴をふくらませた。

みんな飢えた男ばかりなのだ。

女が船艙に積まれていることを知りながら、手をだすことのできない男たちなのだった。だからこの見世物は、目のたのしみなのだ。

「ヒイッッ、ヒヒヒイッッ」

多美子にとっては、いまは羞恥や恐怖よりも、もっと直接的な苦痛が身をおそい、顔面が真っ赤になった。片足吊りの苦痛は、残された自由の片足がだらりとさかさな垂れさがって、おそるべき重量で自分の身を苦しめるところにあった。

少女の顔は、さらに赤くなった。目も鼻もゆがみ、みるまに血がさがって充満していくのだ。吊られてない片足が、股から裂けるほどにひらき、垂れさがった。スリップが、破れた旗のようにみじめに潮風にひるがえった。  
「ヒッヒッヒッ、ウッウッウウッ」  
悲痛なうめき声が、ときれとき



れにきこえた。縛られてウインチに引きあげられている右足首の骨が、はずれそうに見えた。自分の肉体の全重量を、その片足首にか

水夫長が不敵な微笑をうかべていった。それは嗜虐性をむきだしにした、残忍な笑いだった。「へえい」

水夫の一人がうなずいた。少女のケツをかわいがる、という命令をすぐ理解したらしい。水夫は自分のズボンから、幅の広い皮ベル





トをぬいた。堅そうなベルトだった。

「さあ、こい！」

彼はうれしげにわめき、ベルトの端をつかんでふりかぶった。

ぴしんッ！

その音は、ひどく肉感的だった。

パンティにつつまれた多美子のしりの肉が、はちきれそうに鳴った。

「ヒイッッ！」

少女の全身が苦痛をこらえて硬直し、のけぞった。そのはずみに片足首を中心に、胴体がゆらりと半回転した。

ベルトが、また少女のしりに命中した。

「ウ、ウウウ、ウーッ！」

白いのどの肉が苦しげにひくっひくっとふくれ、また息を吸いこんだ。さかさに垂れさがっている黒い髪の毛が、風に吹かれてひきちぎれるほどなびいた。

「なぐるんだ、もっと、ぶちのめせ！」

うめくように水夫長がいった。

口もとは微笑をただよわせていたが、目の色は異常な興奮に血走っていた。その興奮は、あきらかに性的なものだった。野獣のような顔つきになっていた。

水夫の皮ベルトが、また空に尾をはねあげて鳴った。

はちきれそうなパンティのしりへ、ようしゃなく打ちおろされる。ぴちんッ、というような音で鳴るのだ。

「ヒイッッ、ヒイッッ、ゆるしてえーッ！」

少女は、きれぎれの声で泣きわめいた。内ももの肉が、けいれんした。パンティの内側のしりには、赤い鞭あとがついたことだろう。

もう数度たたけば、パンティは破れるだろう。

「ぴしりッ、ぴしりッ、ぴしりッ！」

ベルトをふりあげる水夫も、悪かれたような顔になっていた。ひやけた首すじから、汗がながれて光っていた。水夫はシャツもズボンもぬいで、ふんどしひとつの

裸体になった。たくましい筋肉だった。ウインチにさかさ吊りされた小ウサギのような多美子の裸身とは、まったく対照的だった。

「それ、もういっちょう！」

ぴしりッ、とたたく。ベルトにひびき、手首につたわる肉感的な弾力が、この男を夢中にさせているのにちがいがなかった。

「ヒイッッ、ウウウーッ、ウウーッ！」

多美子の悲鳴が弱まってきた。

ベルトでたたかれるたびに、パンティのしりが、ぷりッぷりッと反射的に息づく。それは無言の悲鳴をあげているようだった。

「クウーッ！」

かすれた声が、少女の口からふきあがり、そのまま少女のからだはうごかなくなった。全身の硬直が解けて、さかさに吊られたまま、だらりとなった。悶絶したらしい。

「どうした、おい、多美子。くそッ、もうのびたか。だらしのねえアマだ。しかたがねえ、おろしてやれ」

少女の顔をのぞきこみ、あわてた口調で水夫長がいった。いくらリンチだといったところで、殺してしまつてはモトも子もない。女は商品なのだ。

——ひどい！ まるで鬼のよう

柳村三郎は、悪夢にうなされている気もちだった。手に汗をにぎり、背すじには悪感がはしる思いで、積み荷のかけから、リンチを見つめているのだった。

しかし、柳村三郎にはこの非人道的な行為を中止させる権限を、なにひとつあたえられていない。十万円という船賃こそ支払っているが、無力な密航者なのだった。

きみたち、そんなひどいことはやめろ！

などと言おうものなら、野蛮な水夫たちは、すぐさま彼の鼻柱をたたきつぶすだろう。海の中へ投げこまれるかもしれない。

ギャング映画にでてくる主人公のような超人的な腕力は、柳村三郎には無縁だった。船酔いを耐え



るだけで、せいっぱいなのだ。  
ふと見ると、水夫の一人に追わ  
れて、十数名の女たちが、そろぞ  
ろと甲板へ現われた。

「見ろノ おめえたちも、わがま  
まなマネをしやがると、このとお  
りだぞノ」

水夫長がわめいた。女たちは、

多美子の悲惨なすがたを見つめ  
た。そして、これからのリンチを  
見物することを強制された。

女たちは、まっさおな顔になり

肩を寄せあい、唇をふるわせて、  
むざんな仲間の肉体を凝視してい  
た。

ウインチから解き放たれた多美





予は、ようやく甲板にねかせられたが、両腕はまだうしろに縛られたままだった。顔に海水をぶちまけられて、かろうじて息をふきか

えしていた。スリッパはむざんに破れ、よく見ると、皮ベルトの鞭のために、パンティも裂けていた。裂けめから赤い鞭あとが見えていた。

「見ているんだぞ。目をそむけるんじゃないぞ。いいな！」

甲板にいらんだ十数人の女たちにむかって、水夫長がどなった。それから水夫たちにむかい、

「つぎはナミエだ。ぐずぐずするな！」

と、わめいた。

水夫たちは、見物人がふえたせいか、いっそう調子づいていた。

縛られてぐったり横たわっていたナミエが、首をあげた。

「わるかったよう、あたしがわるかったよう、かんにんしておくれよう、もう逃げたりなんかしないよう！」

ナミエの顔は、恐怖にひきつ

ていた。多美子にくわえられたり、ンチのすさまじさに、顔の色がまっさおだった。

「うるせえ！」

ナミエの頬に、一発平手打ちがくわされた。彼女のあごがのけぞり、ワアワアと声をあげて泣きだした。哀願と泣き声がいっしょになった。

水夫たちはしかし、すこしもようしやしなかった。多美子と交代に、ナミエをウインチに吊りさげた。こんどはさかさ吊りでなく、うしろ手に縛ったまま、まともに吊った。

うしろ手の手首が、肩のあたりまで吊りあがり、ナミエは「ヒイツ！」と泣いた。

足の縄が解かれた。足首を縛っておいては、見えるところも見えないからだろう。足が自由になったとたんに、ナミエは二本の足をいっばいに躍動させて宙を蹴った。すると、足のつけねまでがあらわになって、男たちが期待したとおりの結果になった。

「ばかやろう、悪魔！ けだもの！」

ナミエの口から、哀願にかわって罵声がとびでた。そのツバが、水夫長の顔にとんだ。

顔にかかった女のツバを、ぬぐいもせずに水夫長がいった。

「てえした元気だな。よしよし、まあ待ってな。すぐにヒイヒイいわせてやるぜ！」

ウインチの鋼鉄の腕が、巨大な生きもののようにうごきだした。ナミエの肥えたからだ、高く高く吊られていく。風が強くなる。さすがのナミエも、もう罵声を吐く氣力がなく、蒼白になっていた。胸にくいこんだロープが、自分の体重で、ぎりぎり乳房に噛みこんでくるのだ。

「ウウーッ、ウウウーッ！」

ナミエはうなりはじめた。目が細く吊りあがっていく。口のはしから、こまかい泡のようなものが見えだした。

「潮漬けにしてやれ！」

水夫長が、左舷を指さしてい

た。ウインチの回転音が、ひときわ高く、野獣の歯ぎしりのようにひびいた。その音につれて、ナミエの半裸身は、ゆらりゆらりと左舷のほうへ運ばれた。

「ヒイーッ、ゆるして、ゆるしてようッ！」

いくら泣いても、もうおそいだ。ナミエのからだは、手すりの上を越えた。

下は海なのだ。見物の女たちの間から、恐怖の悲鳴があがった。ナミエの目のしたには走る水面があった。波しぶきが荒く、高い。船はかなりの速度で走っているのだ。

見物人たちが、いっせいに左舷へ寄った。

その男女たちの目に、ナミエのからだ、極度の恐怖のために、かたく凝縮しているのがはつきり見えた。

水夫長が大声でなにごとかを命令した。

つぎの瞬間、ウインチの黒い腕は、非情なメカニズムの正確さで、



下降を開始した。

「キーンッ」

金属的な絶叫が、風を切つてきこえた。

その絶叫と同時に、ナミエの全身が見物人たちの視界から没した。舷の外側へ沈んだのだ。

ナミエのからだは、舷のむこう側へ消えてから、十秒たった。いや、あるいは四、五秒だったかもしれない。その残酷な時間は、おそろしく長く感じられた。

ウインチの回転音がひびいた。

ナミエのからだは引きあげられた。

ナミエの髪の毛は、黒い藻のように顔面に貼りついていて、ずぶぬれだった。スリッパも水にぬれてべったりと裸身に密着し、胸の大きな隆起や、不半身の曲線をあらわにしていた。

首をうなだれ、肩を落として、ナミエは死んだようにぐったりしていた。

海水をふくんだ縄が、そのからだをぎりぎり巻きに締めつけて、

白い肉をくびれさせている。

「どうだ、わかったか」

水夫長が、とくいげにいった。甲板にならんだ女たちのほとんどは両手で顔をおおい、耐えきれずに泣きだす者もいた。

「ざまアしろ。もう一度漬けてやれ。三度までは大丈夫だ」

水夫長がふたたびその命令を口にしたとき、それまで積み荷のかげから目撃していた柳村三郎が、ついに、がまんできずに立ちあがった。

「もうやめろ！ それ以上つけたら、女は死んじゃうよ！」

激怒の声だった。水夫長がふりかえり、あきれたような表情で、柳村を見た。

「殺したら、おまえたちは殺人罪だぞ！」

柳村はさげんだ。水夫長とその部下たちは、腹をかかえて笑いだした。

「なにをぬかしやがる。密航者のくせに、でけえ口をきくんじゃねえ！」

それから三、四秒後、柳村三郎はしたたかにたたきのめされ、鼻血をふきだし、胃をなぐられて、また嘔吐した。

「あそびはそのへんで切りあげてもうみんな仕事につけやい！」操舵室から身をのりだして、船長がどなった。水夫長以下、水夫たちは騒ぎをやめて沈黙した。飢えた血が、いくらかおさまったらしい。

十数名の女たちも、ふるえながら船艙へおりていった。ナミエと多美子だけは、縄目を解かれずにマストの根もとに縛りつけられていた。

水夫長は、まだこの二人の自殺をおそれているらしかった。

そして、甲板にたたきのめされた柳村三郎も、脇腹を蹴られた苦痛に、うつ伏したままだった。血と嘔吐が、柳村の顔をぬらしていた。

柳村はくやしかった。たった二人の女すら救えない、個人の無力が……。

この船に積みこまれている女たちの運命はもうきまっている。彼女たちの肉体は、二、三日後にはもう、沖縄本島にいるアメリカ軍の兵士たちに供されるのだ。

なかには、ひとかせぎをもくろんで、自分から沖縄行きを志望した女もいるだろう。しかし、その女にしても、しょせんは貧苦のため、内地を追われた哀れな敗残者なのだ。

柳村三郎は決意する。

おれは、力のかぎり抵抗せねばならない。この、すべての非人道行為の背後にそびえる巨大な権力と。

そのために、おれは、おれの祖国である沖縄へ帰るのだ。祖国を失った苦しみにもうめく同胞たちが人間らしい生活と希望をとりもどす日のために。

ひとりの若い密航者は、血と嘔吐にまみれながら、決意をあらたにするのだった。



☆新連載巨編☆

甲州農民一揆

# 風雲地獄街道

鈴宮英樹

小日向一夢・絵

信玄が規定せる租税法は如何か、文書の徴すべきもの乏しく、従って之が詳細を知るに由なしと雖も、甲州人がその余徳を欽仰するの深きを觀れば、必ず土宣に従ひ、民衆に便なる仁法たりしならん。

甲州には公租徴収に特法あり、俗に大小切法といひ、信玄の制定と称す。徳川治世中、すべてこの旧法に循へり。その法田畠の税を合算して三分し、その二を大切といひ、籾納とし、その一を小切といひ、金納とせり。後、大切の内、その三分の一を金納とし、毎年十月の御張紙値

段とて、公より定めらる。小切は安石代といひ、金壹両に付き米四石一斗四升替にて、毎年九月、上納することの定めなり。  
(武田信玄事蹟考)

恵林寺

甲州は、いまさら説くまでもなく、山国である。

甲斐という地名は、山間を意味する峽(かい)からでたといわれ峽中といえ、甲斐の中央、すなわち、甲府のことである。

そしてまた、甲斐といえ、武田である。

武田氏の滅亡は、遠く天正十年の昔だが、しかし、いまでも甲州人は、武田を、ことに武田信玄を、神格としてあがめている。



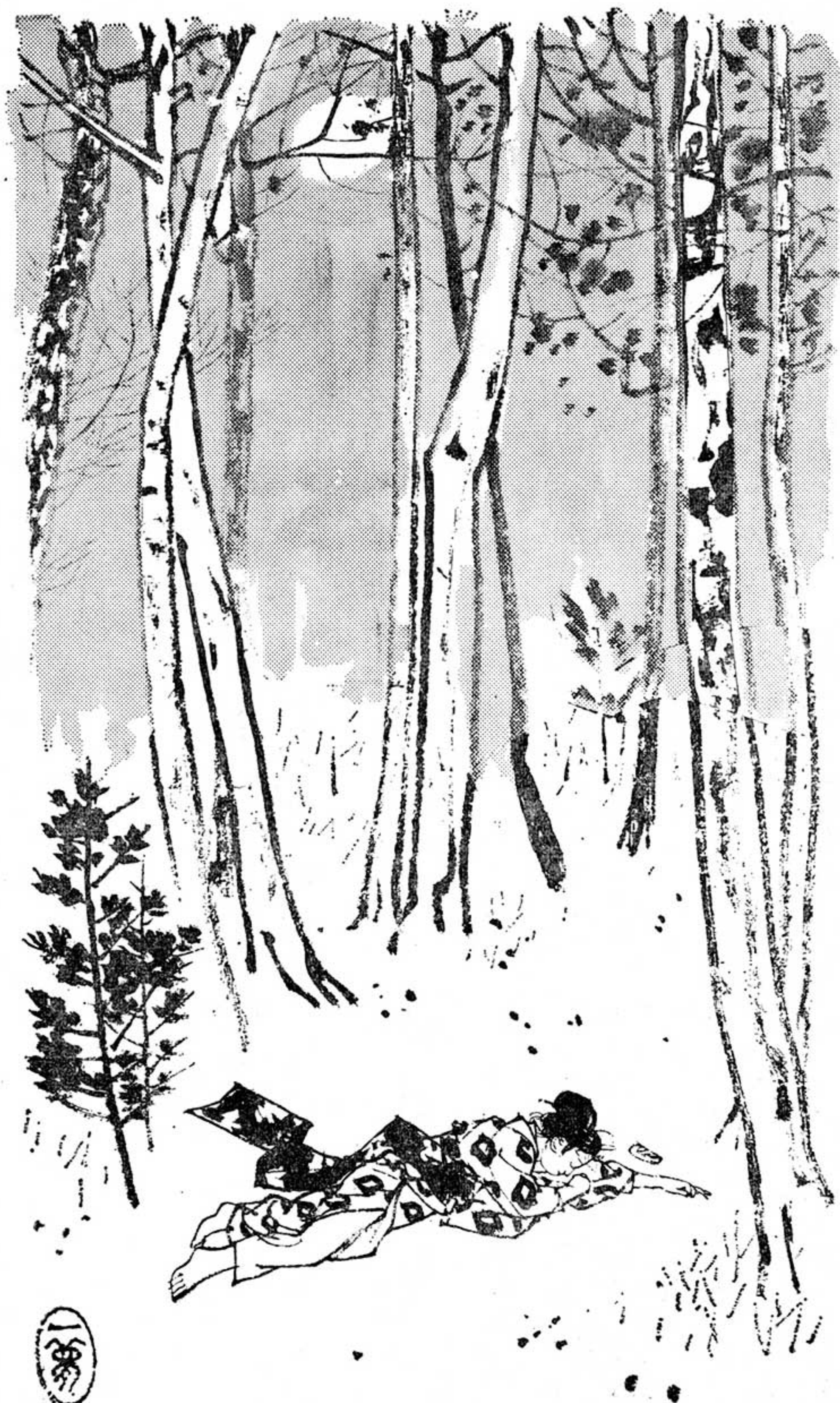
他国の人間が甲州を訪ずれ、路傍であそぶ子どもに、  
「信玄の墓は、どこだ？」

と、たずねれば、子どもは肩をそびやかして、

「信玄公だろう」

敬称をつけ、ききかえす。

甲州の歴史のなかで、信玄こそはもつとも偉大な武将であり、ま





た、もつともすぐれた政治家であった。

その菩提寺は、甲府から北東へ約四里ほどいったあたり、笛吹川の東、秩父街道に沿った山梨郡小屋敷村の恵林寺にある。

恵林寺は、元徳二年、二階堂入道道蘊の創建になり、夢想国師を開山とする、名刹である。

永祿元年、武田信玄は、寺領三百貫を附して、ここを寿藏所としたが、天正十年、織田信長と戦って敗れた武田勝頼の家臣が寺内にのがれひそんだため、怒った信長が火をはなち、焼きはらった。

その折り、最後まで武田の残党をかくまいとおした快川和尚が、杜苛鶴が悟空上人を詠じた詩の転結の二句、

安禪、必ずしも山水を須<sup>も</sup>いず

心頭を滅却すれば、火もまた涼し

を高唱して、紅蓮の炎のなかに大往生をとげた話は、あまりにも有名である。

のちに、徳川家康が僧瑞岳をして寺を復興せしめ、壮麗な再建が成ったが、その規模は往古のものに比すれば、なかばにも及ばず、という。

恵林寺——乾徳山と号し、宗派は臨済宗古規関山派、わかりやすくいえば、禪宗の一派である。

## 円 応 和 尚

明治五年八月（陰暦）の八日。

小屋敷村の村長小沢留兵衛は、恵林寺の山門を通りぬけようとして、ふと足をとめた。

盛夏、それも日ざかりである。

火もまた涼し——で、名高い寺を訪ずれる身としても、暑さはや

はり暑い。

日光東照宮の皇嘉門（俗に竜宮門という）に似ているといわれる恵林寺の山門の下は、風が吹きぬけてころよい。汗が、いちどにしりぞく思いがした。

——しょせん、私は凡俗だな。忘暑三味の安禪の境地などには、どうも無縁らしい。

足をはこびながら留兵衛は、快川和尚の故事を想いうかべて、かすかに苦笑した。

火急の用事、というほどのことではない。しかし、きびしい暑さのなかを、あえて訪れてきたのには、もとより、理由があった。

村長と寺院の和尚、といえば、ともに村の代表者である。

当代の住職、円応和尚を、留兵衛が相談相手としてえらぶのは当然だったが、それだけではなく、武田信玄の菩提寺ということにもきょうは、ことに意味があつて訪れてきたのである。

——この問題は、信玄公をまつた恵林寺へいって、熟考してみたい。

という想念が、しきりとおこつたのだ。もとより、円応和尚の意見もきいてみたい。

留兵衛は、風通しのよい境内を突っ切って庫裡を訪れた。

円応和尚は、座敷の窓ぎわに小机をすえて書見をしていたが、

「これは、留兵衛どのか。まあ、おあがり」

と、柔和な声をかけた。

円応は五十五歳だが、顔の色艶もよく、若々しい。

禪の道に生きるお人は、年齢までも超越するのだろうか、と留兵衛はつねづね感嘆している。

「和尚は、いつもご壮健でなによりです」



「まあ、そんな他人行儀なあいさつは、ぬきにしよう」

円応は、留兵衛にうちわをあたえてから、ふと、改まった顔になり、

「わしは、他人の目には、ひどく若くみえるそうだが、本当かな」と、小首をかしげてみせた。

「ならばひとつ、若い嫁でももらうとするかの」

「嫁を？」

冗談とも本気ともつかぬ円応の顔つきであり、留兵衛は思わずきかえした。

「おかしいかな。この四月に、坊主の肉食妻帯蓄髪、法用のほかは平服を着用するも勝手たるべし——という布告があったのだが、留兵衛どのはご存知なかったか」

童顔になり、円応はまるいあたまをなでまわした。

「いや、これはすこしも……」

「まあ、世の中も変わったな。こうしているうちに、どんどん変わっていくのだ」

「まったく、そのとおりです」

吐息をまじえた、沈痛な返辞となった。

「うかぬ顔だな。なにか、悩んでおられるな」

ようやく円応は真剣な表情となった。

「察しはつく。税法改正の件で、頭を痛めておられるのだろう。近頃は、ほうぼうの村で百姓衆が寄り合い、しきりと新税法反対をとなえているそうだが……」

まさに、留兵衛の気がかりになっているのは、そのことであつた。

## 大小切り

この年の七月二十八日、新政府の地租改正条例が、全国に公布された。

従来、米で納めていた年貢が、にわかに、金納に切りかえられたのである。

制度が、新しいものに改まるさいには、とかく摩擦がおこりやすいものだが、甲州の場合、とくに、その素因は大きかった。

甲州には「大小切り」という、独特な年貢の納法がある。

武田信玄の制定といわれ、織田、豊臣、そして、徳川三百年の間にも、変わることなく守られてきた税法であつた。

元来、甲州は米作りに多くを望めない山国である。

そのため、武田信玄は土地柄に適合した物産の振興や、礦山の開発（甲州金として名高い）などに力をつくし、農民への課税は、他領に比較してゆるやかであつた。

現に、他領では、一円（旧、一両）に米五石の換算法が行なわれているが、甲州の大小切り法では、一円に四石一斗四升である。

農民は、これを信玄公の余徳として崇尊しており、大小切り法に固執している。

固執、というよりも、米だの年貢だのは、そういうものだ、と生まれたときからごく自然に信じているのだった。

米の計りかたにしても、甲州人は他領——つまり世間一般で使用されている一升枰というものとは、先祖代々、無縁ですこしてきたのだ。

どの家にも、ふちが磨滅してまるみをおび、黒光りのしている「甲州枰」という頑丈で大きい枰が置いてある。

これは他領とちがって、三升を一度にはかる甲州独特の三升枰であり、何代も前から、各々の家に伝わっているものである。



なかには、信玄公の時代から残っているという古い枡を、誘らしげに使っている家もあった。

「信玄はただ敵を挫ぎ戦を決するに長ずるのみにあらず、鎮国安民に智あり。——この故に、他国には一揆を企つる者あれど、信玄一代の間、手に入れたる国民の二度叛きたること、ついになかりき」

とは、湯浅常山の「武将感状記」にある記述だが、いまもなお、甲州人の間では信玄は不滅である。

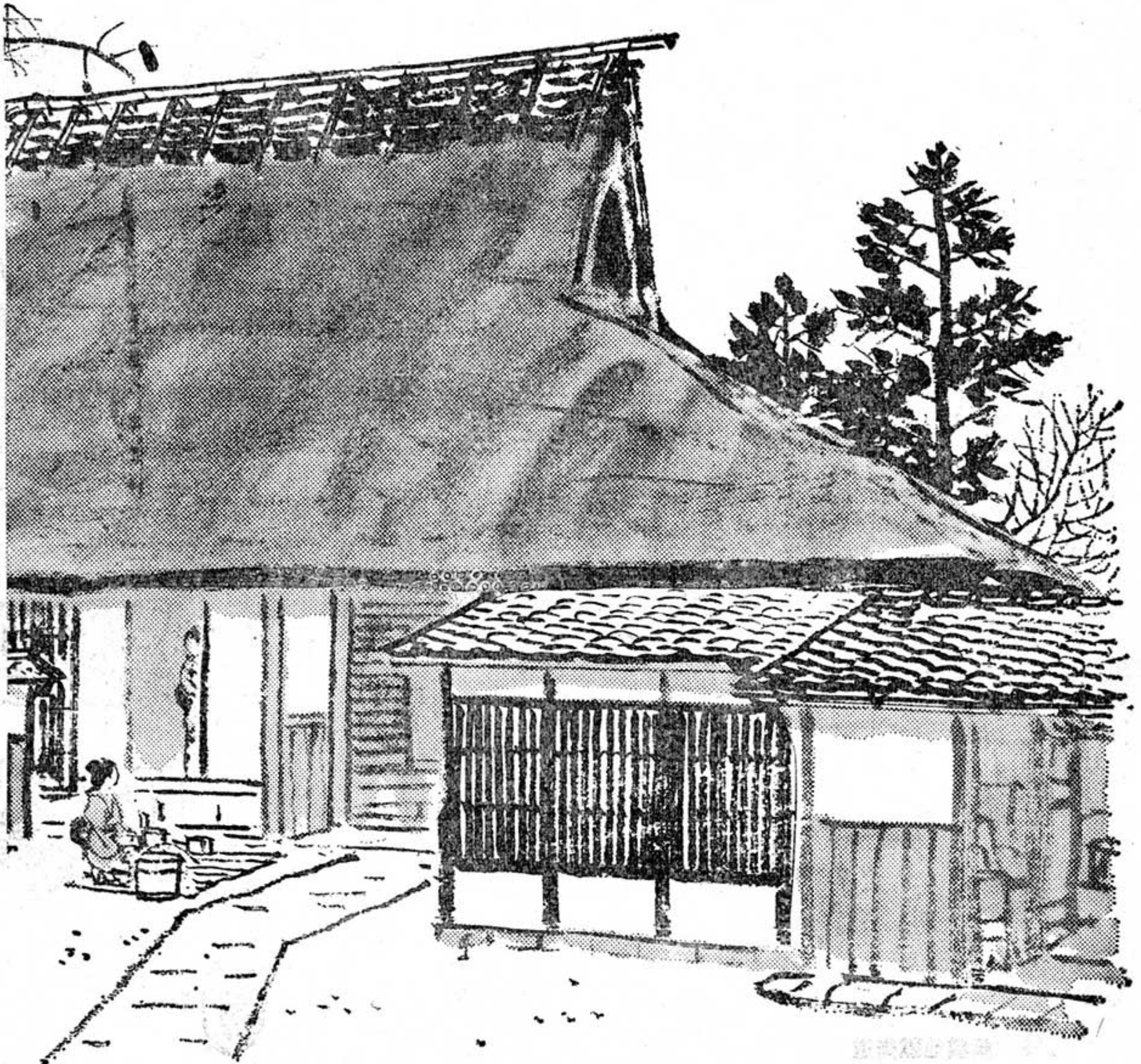
徳川氏が、甲州を天領（直轄地）と定めた理由は、ひとつには、金山があったので幕府が直接にこの地を支配したかったためだといわれているが、いまひとつの大きい理由は、ほかの大名にあたえては、武田の余徳をあがめ慕う領民を、刺激することになり、円滑に支配し得まい——という配慮からであった。

大小切りによる年貢の納法が、三百数十年間、変わることなく守られてきたのも、そのゆえに、ほかならない。

ところが——。

このたびの税法改正では、物納が金納に改められるばかりではなく、大小切り法の廃止が通告されてきたのである。

農民にとっては、二重の衝激であった。





「諸国税法ノ儀、其ノ風土ト篤ト相弁ヘズ、新法相立テ候テハ、人情ニモトリ候間、先ズ一兩年ハ旧慣ニ依リ申スベシ」

という大政官布告が発せられたのは、明治元年八月のことだったが、これは一兩年ではなく四年間つづき、五年目の今年に至って、

にわかに、地租改正条例が公布となったのである。

農民には、なんの準備もない。

さあ、ことしから金納だぞ——といわれても、金銭のたくわえはないし、第一、新政府の新貨や金札（通貨や紙幣）など、まだ見たこともない者さえいる。

しかし——それらは、まだまだよい。

問題は「地租改正」の条例というものが、けっして改正ではないことにあった。

重税への改訂であり、さらにはつきりいえば、新政府による改悪の匂いを感じとれたのである。

単に、大小切り法が廃止になっただけではなく、旧幕時代よりも過重な税が、強大な権力によって課せられようとしているのだ。

農民たちが底知れぬ不安と、不服をとなえるのも、むりからぬことであった。

## 万民保全

「——これが天子さまのご仁政か、と百姓たちはいっております。

徳川の天下が終わったから、こんどこそ世の中はよくなる、だれもが暮らしよい、新しいりっぱな国になると、ご一新のころ、鎮撫総督として甲州を通られた宮さまや、官軍の参謀海江田さまがお約束



なされたことは、あれは反古なのか、嘘なのか、といっております」しだいに熱をおび、激してくる留兵衛のことばを、円応はおさえるように、

「古来、国を統持する者が変わるときには、まず、人心を収攬することに努める。民百姓をよろこばせる。だれが天下をとろうとも、これは変わりのないことだな。つまり、常套手段ともいえる……」しずかにこたえた。

鎮撫使の公約などに、あまり期待をかけるな、あまい夢をみるな、という意味のことばにも、留兵衛の耳にきこえた。

「しかし、天子さまのおことばにも、万民保全の道をたてる、とあります。こんどの新税法は、けっして……」

けっして「万民保全」などというものではない、といいかけた留兵衛だが、さすがに、表現を変えた。

「——信玄公のおのこし下された大小切り法こそは、甲州の百姓たちにとって、万民保全の民法といえましょう」

留兵衛のいう「天子さまのおことば」とは、慶応四年三月に発せられた「五箇条の御誓文」をさしていた。

一、広ク會議ヲ興シ、万機公論ニ決スベシ。

にはじまる五箇条の後に、

我国未曾有ノ変革ヲ為サントシ、朕躬ヲ以テ衆ニ先ンジ、天地神



明ニ誓ヒ、大ニ斯国是ヲ定メ、万民保全ノ道ヲ立テントス、衆亦此旨趣ニ基キ、協力セヨ。

という字句がある。

しかし、円応和尚は、首を横にふった。

「万民保全の道を立てるゆえ、協力せよ、というあのおことはな、新政府の定める法に従がえ、との意味であろう。むろん、天子さまは、ご仁政をおしきくださるお心にはちがいない。だがな、留兵衛さん、ここは甲州だ。天子さまから、甲州までの間には、山や川の数よりも多い役人がいる。上から下へ及ぶにつれて、いろいろとくいちがいもあらわれ、思わぬゆがみをみせることも多からう。とかく、そうしたものはなからうか」

このことばに、留兵衛は、あごをふかく落としてうなずいた。

「たしかに、そうです。——こんどの地租改正に先立って、大蔵省租税司から各県庁に発せられた差図の中には、まず旧来の歳入を減ぜざるを目的とせよ、という一項がある、とききました。これでは百姓と油は、しぼれるだけしぼれ、という徳川公方さまのころのやり方と、同じではありませんか。そればかりか、その差図のなかには、旧来、租額のすくなかった県からは、多く取りたてよ、という意味の項目があるということです。ひどい、まったく、ひどい……」

「なるほどな。それで甲州にも白羽の矢がたち、大小切り廃止、地租増額の内定があったわけか……」

円応は、ふとい眉をひそめた。童顔が消えた。

新しい世の中がやってくる——という農民の期待は、一時のヌカよろこびだったのか。

——それにしても……

と円応は、鎮撫使が甲州を通ったときの記憶を、しずかによみが

えらせた。

慶応四年春、新選組の近藤勇一党が、甲州勝沼で官軍に抵抗し、敗走したあと、民心鎮撫のため官軍の海江田参謀が領内各所に立てさせた高札の文句を、円応はいまでもおぼえている。

ほかでもない。小屋敷村では、この恵林寺の門前に立てられたのだ。

いわく——。

「年来、苛政に苦しみ罷り在り、其のほか、仔細これ有る輩は遠慮なく本陣へ訴え出するべし」

新政府による善政を示唆する布令であった。

だが、官軍の宿泊していた本陣へ「苛政」について訴えてた領民は、ひとりもいなかった。

官軍への疑心や恐怖心が先立ったためもあるが、大小切り法による年貢が、円滑に納められている甲州では「苛政」が存在しなかったからである。

甲州の伝統や人情にうとい官軍が、百姓とみれば苛政にあえいでいるものときめてかかったのは、いささか政治感覚が不足ともいえた。

しかし、ともあれ、そのころさしだけは、農民たちをよろこばせるに十分だった。

ほかに、これに類する「善政」への示唆は、さまざまあった。

それが去年の廃藩置県を境として、にわかにな変わったのである。

旧幕時代、甲府勤番支配であった水野出羽守忠敬は、維新後も、暫定の統持者として甲府にとどまっていたが、明治五年一月二十八日、新任の山梨県令として土肥謙蔵実匡という役人が東京から赴任してきた。



このときから、すべての趣きは変わったのである。

土肥実匡の前歴は、刑部省の判官事（刑事裁判官）であつたという。

菊は栄える、葵は枯れる、西に轡の音がする——とは、倒幕から維新へかけての新旧勢力交代の様相を、巧みに唄った文句だが、土肥実匡も、いずれはその轡の音とともに江戸へのりこみ、新政府の組織に、要路の人材として加わった一人に、ちがいないだろう。

新任の県令、土肥実匡は、最初から峻厳な姿勢をもって、甲州の伝統的地租、大小切り法にいどみ、その廃止を強行しようとしていたのである。

## 不安の影

「お父さまは、恵林寺さんへお出かけかえ」

じゅうは、娘のおせいにたずねた。

「ええ」

うなずいて、おせいは明かるい微笑を母親にむけた。

「恵林寺は、涼しい風がよく通るから、とおっしゃっていました。」

夏場は、だから碁に負けても、あまりくやしい気はおきないのです  
って……」

おせいは、父親の留兵衛が、碁がたきである円応和尚のところへ涼みがてらの碁を囲みに行った、と思っているものようであつた。  
だが、じゅうには、わかる。

負け惜しみのような冗談をのこして、恵林寺へおもむいた留兵衛が、本当は碁などをうてる心境ではないことが、よくわかるのであつた。

娘たちには、よけいな心配をさせまい、という心づかいにちが

ない。

まだ、形として表面にあらわれてはいないが、地租改正をめくつて、栗原、万力筋（笛吹川沿岸の諸村）の農民に、ただならぬ動きのあることは、留兵衛からきいて知っていた。

ほかの村の村長たちからの、ひそかな連絡なども、近頃は多くなつた。

小沢留兵衛は、栗原、万力筋の村長の間でも、ひとときわ信望のあつた人物である。

じゅうは、その妻として誇りに思っているのだが、それは同時に不安にもつながる部分をも持っていた。

一揆——。

騒擾——。

お上への反抗——。

その先頭に立つ良人。

思いたくはないが、ややもすれば、そんな想念が脳裡をかすめ、不吉な予感を生みやすい、きょうこのごろである。

いまから三十八年前。ちょうど、自分が生まれた年である天保七年の八月に、甲州都留郡に、大規模な百姓一揆があつた、ということとを、話にきいて知っている。

その年は、未曾有の大飢饉であつたため、百姓たちの不満が爆発したのだという。

結果は、首謀者四人が磔刑、九人が死罪、その他、遠島、重追放入墨、重敲き、手錠、過料、など、大勢の人たちがきびしいお仕置きをうけた、という。

人に頼られる者、俠気や義心、指導力を持つ者が、つまりは首謀者として、極刑をうけることになるのだ。



留兵衛の信望、義侠心、智力、実行力、などは、妻である自分の目からながめても、男としてのたのもしきにあふれ、それらが美点であり、長所であるのはむろんだったが、そういう良人を、万が一にも刑死などさせたくない。

そんなおそろしい、かなしいことで失うのは、たまらないと思う。じゅうは一度だけ、そんな不安を遠まわしに口にしてみたことがある。

「大丈夫だよ。お前や娘たちをのこして、いたずらに暴挙にはしるようなことはしない。第一、天保のころとは、時代がちがう。いまさら、竹槍や、箆旗でもあるまい」

留兵衛はかるく苦笑をみせ、うち消したのだったが、じゅうの不安は、それで消えたわけではない。

つい、いしましたが、県庁の役人が訪れてきたときも、その不安は色濃くじゅうの胸にせまり、思わず顔が青ざめた。

役人といっても、低い地位の者であるらしく、その物腰は、威圧をあたえる種類のものではなかったが、それでも、相手の目的がわかるまで、緊張が去らなかつた。

「お留守ならばしかたがない。置いてまいりましょう。かならず、お帰りになり次第、お手渡しくださるよう」

役人はもったいをつけて、なにやら文書をじゅうに手渡した。

役人が帰ったあと、どうにもがまんのできない気持ちで、渡されたものをひらいてみた。

内容は果然、地租改正に関する通達文だったが、読むうちに安堵をおぼえて、じゅうは胸をなでおろした。

——国の本なる民なれば、相続成り兼ね候様の御処分は曾つてこれ無きにつき、無益の心配など致さず——

そんな文字が、ならんでいた。

これならば、いまずぐ恵林寺へ持っていき、一刻も早く留兵衛に安堵してもらおう、とじゅうは思った。

鏡のなかの自分を、ちらりと覗いてから屋敷を出た。自然といそぎ足になる、じゅうの心であった。

## 妻と娘と

「——それで、一揆をおこそうという回状でもでたのかな」

円応は、留兵衛を凝視した。

「いえ、まだそこまでは……しかし、このままでは、あるいは……」  
留兵衛は、きびしい相貌になっていた。

その顔を、円応は凝視しつづけた。

鄙にはまれな——というたとえは、あながち、若い女の場合にのみ使われる讃辞とはかぎるまい。

小沢留兵衛は、知恵のふかさと、剛毅さとが、がっつきりと組み合わせた感じの、りっぱな顔をもつ男であった。

断髪令はすでにだされていたが、このあたりではほとんどの男がまだ鬘を切ってはいない。

ザンギリ頭の流行は、まだ甲州には達しておらず、留兵衛も鬘をのせているのだが、頭の格好の如何にかかわらず、理智に光る顔立ちであり、鄙にはまれ——という感じが、あてはまるのだった。

もっとも、鄙にはまれという形容をもちいるならば、小沢の家は、だれもがそれに、あてはまった。

妻のじゅうが、やはり評判の美貌であったから、二人のあいだにできた子どもたちは、両親の血をひいて、みな美しかった。

男の子はなく、娘ばかりが三人つづいて生まれた。



長女、次女、三女、それぞれ名づけたが、長女の名は「留守」に通じて良名ではないようにも思われたので、成長後、おると改名させた。留守の逆という意味をふくめたのである。

いま——おるが二十一歳、せいは十八歳、やすは十六歳。みな、におうようなよい娘に育った。

男の子がないので、おるには、婿をとらせた。

婿は、松里村の旧家で、武士の子孫である窪田家からもらい、名を為蔵という。

初孫はまだだが、若夫婦の仲は、きわめてむつまじい。

まず、そんなふうには、小沢留兵衛は、なにひとつとして不足のない、恵まれた境遇にあるといえた。

円応和尚は、それをよく知っている。

知りすぎるほど知っているだけに、

——この男が、もし一揆に加わって……

と思うのだ。

いくら時世が変わったとはいえ、一揆はやはり一揆である。

いや、時世が変わり、変わったばかりであるために、なおさらに危険ともいえる。

新政府への反抗——。

むざんな弾圧をうけるおそれが、多分にある。

留兵衛は、おしだまった円応の顔色から、その胸中を読みとったように、

「あるいは、一揆をおこす勢いにまでも成りかねませんが……しかし私は、一揆ばかりが解決の道とは考えておりません。もっとよい方法を、みなに教えてやりたいのです」

緊張をやわらげた声音で、そういった。

## 御沙汰書

ふとい眉を、ややひらいて円応がいった。

「ほう、よい方法とは？」

「それが……」

留兵衛は、ふかい吐意となり、

「正直のところ、自分の無力が、くやまれてなりません。こんなときには、もっと知恵や勇気がほしい……」

「知恵と、勇気か」

「はい、それなくしては、ただの竹槍連といわれ、世のそしりをうけることになりましょう」

竹槍連——とは、一揆騒擾の徒を揶揄してよぶ、近頃の新造語である。

そんなことばができるほどに、維新後は諸国に騒擾事件が続発し、また、つまらぬ理由で、いたずらに騒ぎをおこすものも、すくなくなかった。

維新以来、一揆の大きなものを数えれば、明治元年二十余件、二年四十余件、三年三十余件、四年二十余件——（土屋喬雄編「明治初年農民騒擾録」となっている）。

このなかには「旧藩主留任要求」とか「屠牛反対」「ペスト予防反対」などという奇異な要求をとнаえる騒擾もあった。

たとえば「ペスト予防反対」などというのは、外国で流行したペストが日本へはいるのを防ぐため、

——何レノ地方ニテモ、追テ御沙汰アル迄ハ、病死セシ禽獸ヲ売買致ス事厳禁タリ。若シ売買セバ御咎メアルベシ。病死セシ禽獸ヲ食シ、又ハ其ノ皮ヲ剥ギ用ユル事厳禁タリ。



という条例がでたことから始まった一揆なのだから、迷妄の徒輩といわれても、しかたがない。

「正当な要求と、おだやかな解決。それを私は、なによりものぞんでおります。けっして、いわゆる一揆をおこさせたくはないのです。耐えしのべる事柄ならば、でき得るかぎりしのんで、事をかまえぬよう、皆にすすめるつもりでおります」

留兵衛は、いまあらためて、その決意をかためたのである。

「うむ、よくぞいわれた。留兵衛どの。心に堪忍あるときは事を調す、じゃ」

円応は、安堵と信頼の色をうかべていった。

「心に堪忍あるときは……」

「すなわち事を調す。——信玄公の遺訓だ」

軽挙妄動に足を踏みすべらぬよう、円応は祈る気持ちだった。

じゅうが、県庁から届けられた文書を抱いて現われたのは、ちょうどこのときだった。

和尚へのあいさつもそこそこに、じゅうはそれを留兵衛に手渡した。

「県庁から？」

「はい。申しわけございません、心配で心配で、さきにひらかせていただきました。地租改正についての御沙汰書です」



「なに」

「ごらんなさいまし」

こわばった留兵衛の表情を、じゅうは笑顔でときほぐそうとした。

「——御一新以来、諸般御改正の折柄……」

留兵衛は、円応にもきいてもらうつもりで、声をあげて読みはじめた。

——当国大小切安穀代ノ義、仍旧貫候ハ不都合ニ付、今般廃止候トモ、元来免元等不相当ノ廉モ有之ニ付、精細取調ノ上ハ適當ノ御処分可相成処、末々ニ至リ候テハ一概多分ノ貢納可相増事トノミ心得候哉モ計リ難ク、国ノ本タル民ナレバ、相続成兼候様ノ御処分ハ曾テ無之ニ付、無益ノ心配等不致、謹テ上裁ヲ仰ギ、必ズ心得違ノ挙動無之様、懇ニ可申論モノ也。壬申八月 山梨県庁と、あった。

「なるほど。つつしんで上裁を仰げ。悪いようにはせぬ、との趣旨だな」

つぶやいて円応は、しかし、小首をかしげた。

真実、上からの通達のとおりならば、だれも心配はない。

本当に無益の心配であるならば、である。

だが——。

古来、この種の通達が、信用にたるものであった例は、ほとんどない。

——女、子どもはだましても……。

留兵衛の嗅覚は、欺まんの匂いを感じとった。

しかし、それを口にするとはひかえた。役所からの通達書を受けとった者としての





節度がある。

また、妻の微笑が意味するものを、傷つけまいとする思いやりからでもあった。

留兵衛は黙し、しずかに腕をこまぬいた。

——疑がわしい。この通達を、あたまから信ずるわけにはいかない……。

いちど留兵衛の嗅覚がとらえた不安は、払いのけようにも、あまりに重い。

のみならず、その不安は、ぶきみな黒い渦となつて、留兵衛の胸底から、わきたつてくるのだった。

## 回 状

県庁からの通達があつた日を境として、農民たちの動きは、にわかに活撥なものとなつた。

やはり、どの村でも、よろこぶ者もあり、疑う者もあつたが、願いはひとつのものに、自然とまとまつた。

「県庁がこういうことをいつてきたのなら、いまこそ機会だ」

「おれたちのいい分を、とつくりときいてもらおうじゃないか」

「よけいな心配かどうか、話しあって納得した上でなければ、安心はできない」

「一揆ではない。おれたちの実情を、掛け値



のないところを話しに行くのだ」

三百人、五百人、と諸方で農民が屯集し、協議がつづけられた。

栗原、万力筋——。

逸見、武川筋——北川筋——とそれは急速に拡大されていった。

松本村の村長、島田富士郎から留兵衛のところへ回状が届いたのは、そんな騒ぎのなかの、ある日の夕暮れどきであった。

島田富士郎は、栗原筋の村長たちのあいだでも、有能な男と尊敬されている人物であり、留兵衛は以前、いくどか会ったことがあるので、その人柄については信頼をおいていた。

「大小切り廃止反対の件につき、運動をはじめている村は、県下九十余もの数に達しており、もはや甲州の百姓ぜんぶの問題となっていることは、すでにご承知と思う。ただ、現在は各村の動きが、まことに不統一にて、なにかと不便、不利益であるゆえ、このたび、各村長に集まってもらい、今後の方針につき、忌憚のない意見をだしあい、適切なる良策を構じたい——」

という意味の文面であり、集合の場所と日時が指定してあった。

「小沢留兵衛、たしかに承知をしたと伝えていたきたい。かならず参りましょう。遠路ご苦勞でした」

留兵衛は使いの者に、そう伝言を頼んだ。

「へえ、伝えます」

使いは、色白の大男である。

丸顔で目が大きく、眉毛がさがっており、鼻すじはとおっているが、唇は不釣りあいなほどうすい。

全体に不調和な顔をもっていて、一種の異相ともいえた。

なにを考えているのかわからないような感じの巨漢だが、島田富士郎が使いとしてよこしたのだから、役には立つ男なのだろう。

「これから、どちらへおまわりなさる？」

留兵衛はきいてみた。

「へい。もう一カ所、寄るところがござりまするので、それをすませたら、松本村まで帰ります」

「夜道を大変だな。ちかごろは役人の目が光っているともしきく。あやしまれぬよう、用心して行きなさるがよい。提灯のろうそくは、まだおありか？」

いってから留兵衛は、富士郎がこの男を使う意図が、わかったような気がした。

役人にとがめられたとしても、この巨漢ならば腕力でそれを突破し、回状を最後まで送り通せるだろう。

「力が強そうだな」

留兵衛は、男の腕のふときをみて、ふと微笑した。

「へえ。角力なら、だれにも負けねえです」

「ほほう。それで、名は？」

「桑ガ崎の浪太郎」

男は肩をそびやかした。

「四股名まであるのか」

「わしは、三度のめしより角力が好きだ。ときに旦那さま」

「なんだな？」

「堀之内村へは、どう行ったら、ちか道でござりましょうかね」

「堀之内村の……窪田の家へ行くのか」

「へえ」

「よし。案内させよう」

留兵衛は廊下へでて、人を呼ぶための太鼓を打とうとした。

この太鼓は、小沢家に古くから備えてあるもので、これをたたく



と、屋敷の裏に住む与作という百姓の家から、だれかが用を承まわりにやってくるようになっていた。

小沢家と与作の家とは、代々主従関係にあった。

留兵衛は屋敷のなかには、あまり雇い人を置かず、雑用、急用をほかにたのむときは、この太鼓を打って与作を呼ぶのである。

打ちかたには二通りがあつて、いつまでも打ちつづけるときは、与作ばかりではなく、村じゅうの者が集まるしきたりになつていた。もつとも、それはめつたにない。ないほうが平穩無事の証拠である。

留兵衛はその太鼓のバチを、一度は手にしたのだが、打つのをやめた。

回状を持つ者の道案内を、いかに忠実な与作であるとはいへ、他人にまかせてよいものか。

謀りごと、といつては大仰だが、やはりこれは、密なるをもつて良しとする種類の事柄にはちがひなかつた。

白昼ならばともかく、時刻が時刻なので、村人をおどろかせることにもなりかねない。第一、役人がこのあたりのようすを探ぐりにきていないともかぎらない。

そこで、為蔵を行かせよう、と考えたが、おりあしく昨日から、おるが身体をこわして床に臥している。熱をだしていた。

父親として留兵衛は、為蔵を娘のそばにおいてやりたい気がした。そこで彼はこの役を、せいに頼むことにした。

## 桑ガ崎浪太郎

小屋敷から堀之内村までは、たいした道のりではない。

途中まで案内すれば、そのさきは、はじめての者でも迷わずに行

ける。

おせいは、浪太郎とともに屋敷をでた。

「小沢さまのお屋敷は、どなたもべっぴんぞろいだときかされてござりましたが、いやア本当でござえますなあ。おらア、びつくりしてしまった」

あるきながら、浪太郎はそんなことをいった。

ふだんはどんなことばの使いかたをしている男なのか。無理にかしこまったような調子の口のききかたが、ひょうきんなものにきこえて、おせいはつい笑つてしまった。

唇をおさえた掌のあいだから、クスクスと箸がころんでもおかしいと、俗にいわれる娘ざかりの笑いが洩れた。

暗い夜道での娘の笑い声は、妙ななまめかしさがある。

「お嬢さまも、えらくべっぴんだあ。おらアこんなきれいな娘に会うのは、はじめてだ」

感にたえぬ、という素朴な口調であり、なんとこたえてよいか、

おせいは返事に困る。

「おかしいだかね？」

「おかしくはないけれど」

「まったく、はじめてだ」

「わたしは、あなたのことを、前から知っています」

「へえッ？」

浪太郎は、とんきような声を発した。

「おらのことを、知っていなさったのかね」

「ええ、穴切神社のお祭りで」

「ああ、そうか」

おせいは、甲府の穴切神社の祭礼で催された奉納素人角力を見物



したとき、桑ガ崎の浪太郎を見て知っていた。

「お嬢さまは、おらの角力を見てくれなさったかノ」

「桑ガ崎さんはお強いね。とても人気がありました」

「へい、おらア、角力なら、だれにも負けねえ。江戸へ出て、本当の関取りに弟子入りしてえと思うが、年季が明けねえです」

浪太郎の声は、いかにも残忍そうだった。

「どこに奉公しているの？」

「寺本村の名主さまのお屋敷で」

してみると、浪太郎が年期奉公しているのは、島田富士郎の屋敷ではないらしい。

それにしても、江戸だとか、名主だとか、古い言いかたをする人だ、とおせいは思った。

「どうして桑ガ崎というの？」

「へえ。桑戸村の生まれなもので、桑の字をとりました。もともとおらの家はとうのむかしになくなっちまったが……」

仔細は知るよしもないが、けっして仕合わせな身の上の者でないことはわかる。

おせいは娘らしい、清純な同情心を、この大男は抱いた。

「浪太郎って、よい名前」

はげますようにいった。

「そうかね」

「浪太郎さんは、いくつなの？」

「へえ、二十一になります。お嬢さまは、いくつにおなりなすったかね？」

「わたしは、十八」

浪太郎のほくとな話しぶりに、おせいはつい、ここが夜の野道

であることを忘れていた。

相手が若い男であることを、ふと忘れた。

浪太郎がふいに立ちどまるまでは、そうであった。

「……………」

不審をおぼえ、ふりかえった瞬間、若い娘の本能が、反射のように身をかくさせていた。

すこし前までの浪太郎とは、まったく別人のような男が、そこに居た。

身をひるがえす余裕もない。おせいの右手首は、男の大きな、かたい掌に強くつかまれていた。

「なにをするのですノ」

さけび声をあげるつもりが、思うようにいかない。ふるえた声かとぎれながら唇をでるだけであった。

おそろしい力で、おせいはひき寄せられ、背にも腕がまわった。

「お、お嬢さまノ」

男の声もふるえているようだった。くさい息が、おせいの顔に吐きかけられた。

「は、はなしてノ」

おせいは身をのけぞらせた。浪太郎の片手が、おせいの胸のあたりにかかった。

そのやわらかい感触が、男の心をいっそう熱く狂わせた。

「やめてッ」

もがけばもがくほど、浪太郎の腕に、娘のからだの柔軟な魅力が伝わる。

「お、おめえさまが、好きだノ」

「ゆるしてッ」

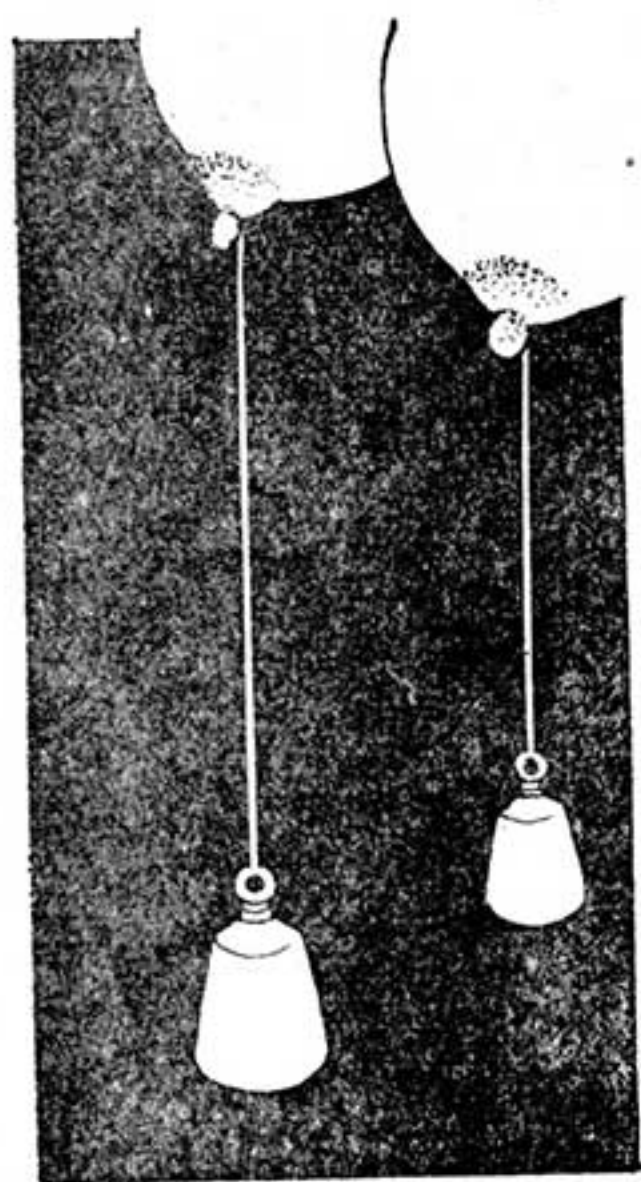


死にもものぐるいになって手足をうごかすのだが、巨漢にとっては  
愛らしい小動物の抵抗にすぎなかった。

「たすけてえッ、だれか！」  
さけびかけた口が、掌で荒くふさがれた。







# 直参被虐年譜

島本春雄

■ 巻頭長編読切時代小説

ご期待ください！

同時に、おせいのからだは宙に浮いた。

荷物のようにおせいは、浪太郎の頑丈な肩の上にかつがれた。

月光を頭上に、くろくろと茂った雑木林が、道の左手にみえる。

そこをめざして、浪太郎は大腿に歩いた。

浪太郎の肩の上で、おせいは必死の力をふりしほった。

落ちそうになり、浪太郎はあわてておせいのからだをつかみなおした。

そのとき、男の手が、十八歳の、もっとも敏感な反応に触れた。

「ひいッ」

おせいは絶叫し、身をよじった。

獣と化した男の手が、いつそう残忍に、そこをつかみ、ねじった。

男の血が猛り狂い、狂ったまま走った。

たちまち、雑木林のなかにきた。

暗い。

「たすけてえッ！」

声をふりしほるおせいの顔のすぐ前に、浪太郎のむきだした歯がせまった。

「好きだよッ」

重く、荒く、浪太郎の巨体がのしかかってくる。

(つづく)

直参の栄誉のかげに悲惨きわまる屈辱のうめきあり。  
忍苦の血、甘受の涙、駒木野一族にふりかかる残酷の  
三百年。そして、被虐につぐ被虐の運命に一族の男女  
たちは、やがて異常の陶醉におぼれこんでいくのだ！





### 「牛若天狗」

日本テレビが、土、日曜を除く毎日夜六時から十分間ずつ放送している「牛若天狗いざ見参」という連続時代劇映画。美女の危難場面が、じつに多い。極端なときは、一週のうち半分以上もSシーンが登場する。

四月十日放送した「寅猫四人組」にも、若い女がうしろ手、豆しほりのてぬぐいのサルグツワという、典型的な時代縛りシーン。

おまけに、この娘を縛る四人組というのがぜんぶ若い女の男装で、ふともも露出のサービスつきやくざ姿。

この映画をつくっている脚本屋さん、カントクさんには、どうもアブツけがあるような気がしてならないのだが。(重)

### 春の午後

四月中旬のあたたかい土曜日の午後。喜多玲子氏といっしょに新

宿行きのバスにのり、その車中で  
の見聞。

中学三年くらいのかわいらしい女の子がふたり、ならんで腰かけている。学校帰りらしい。車内は珍らしくすいている。

やがてそのふたりが、なにやら声をあげて笑いだし、ふざけはじめた。たがいに相手の胸のあたり  
に手をやり、抱きあうようなかっ  
こうでキャアキャアさわいでい  
る。胸のふくらみをたしかめあっ  
ているのだ。

なにげなく見れば無邪気なふざけっこなのだが、よく観察してみると、おさないながらも、妙ななまめかしさがある。

玲子氏、それを見ながら微笑。  
「春ですねエ……」と、こっちも  
ニヤリ。(飯田)

### 酷電もまたたのし

このごろになって、いくらかは  
緩和されてきたが、ラッシュ時の  
国電はまだまだ酷電である。

しかし、M派にとっては、この  
酷電から思わぬ恩恵をちょうだい  
することもある。

ある朝、れいによつてのギュウ  
ヅメ地獄。いかなる偶然か必然  
か、車内中央に突っ立っているれ  
いの金属の棒に、私の前面が押し  
つけられてしまった。そのままギ  
ュウギュウ押され、私の背中を押  
しているのが、若い女性。

苦しまぎれ、という形で私は右  
手を自分の背中へまわした。する  
と、びっしりつまっている人間た  
ちの圧力で、もうぬけない。

私の右手は若い女性によって背  
中へねじまげられ、しかも顔面は  
金属の棒にぐりぐり押しつけら  
れ、完全な肉体的拷問の形になっ  
てしまった。

十分ほどで電車は神田駅につ  
き、甘美な拷問は終わったが、加  
虐者(?)が若くてハツラツとし  
たB・Gだっただけに、朝っぱら  
からM的陶醉にひたれたしだいだ  
った。(亀)



読

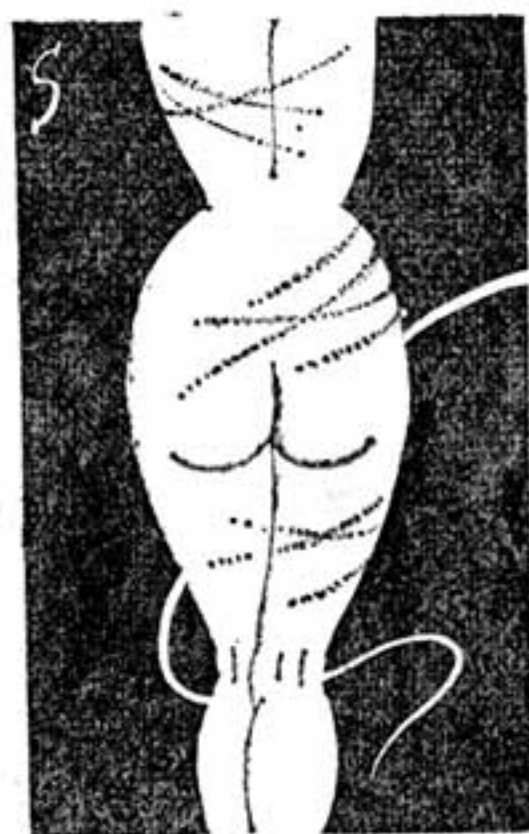
者

コ

1

ナ

1



★他にも多くのご投稿がありましたが、スペースの都合で掲載できなかったことをおわびします。このらんの投稿はハガキでも結構ですからご自由にお書きください。

今月掲載しました方には、本誌次号をお送りします。誌上匿名は自由ですが、住所・氏名はお書きください。（読者コーナー係）

★私は、まだ裏窓が「かっぱ」という誌名だったころからの読者です。ずいぶん、むかしからの愛読者というわけです。ちかごろの裏窓の発展ぶりは、わがことのようにうれしくてなりません。さて、五月号も期待にそむかぬおもしろさで、二百円以上の上のしみを頂きました。グラフィア写真の、高倉光子さんの背面のものは、さいきんにない迫力あるもので、私のコレクションの中でも、けっさくの写真になりまして。腕にくいこんだ縄の強さ、光線のあたりぐあい、みればみるほどすばらしい。この写真と、つぎのページの二枚のものは、被虐美に満ちた芸術作品だと思います。吉田久氏は

おそらく仮名で、ほんとうは名のある一流カメラマンではないかと、私はいつもひそかに想像しています。そのつぎのページの「荒縄を使った写真」もすばらしいでさばえです。つぎに絵物語の「女帝ゼノビアの敗北」好調の中川彩子先生はまたまたすばらしい絵で大感激です。五月号の「ある早春の宵に」という文章で、中川先生が本当の女性だということを知り、胸がドキドキしてたまりません。よく絵をみれば、やはり女性的なデリケートなタッチですね。今後のご活躍を心から期待します。また同じ絵物語の「肌責めお紋裏街道」ひさびさの喜多玲子先生の時代もの。いつにかわらぬ

なまめかしい線です。喜多先生の正体は、昨年十二月号でわかりましたが、なんとなく安心しました。「肌責めお紋」は物語にもドンデンガエシがあつて、おもしろかった。このヘンが、「裏窓」のねうちですね。他誌では絶対にみることができない貴重品といえましょう。とにかく作家といい、画家といい、カメラマンといい、モデルといい最高のスタッフを抱えている貴誌は、やはりこの種雑誌のトップでしょう。読みものでは淡路周五氏の「しっぽが生えたおんなの子」が、妙な味があつておもしろく読みました。こういう変わった小説をのせる雑誌は、天下広し、雑誌多しといえど、

裏窓だけでしょう。東洋太郎氏の「京洛の烈女」は、小説ともいえないような稚拙な文章の小説でしたが、その稚拙なシロウトくさいところに、変わった味が感じられました。小田桐爽氏の「入牢志願の女」は、また逆に、上手すぎてややマンネリズムを感じさせ、円熟と稚拙のおもしろい対照だと思いました。それから忘れてならないのは、マゾ絵物語の「鞭に生きる女」の中に、突如として、女性の縛られシーンが登場し、それがまた迫力あるので、うれしくなりました。これはまるで掘りだしもので、来月号がたのしみなくらいです。「永遠の女囚」は、写真のほうですばらしく、物語はあまりに暗く、後味がわるかったです。私の好みとしては、あまりに陰惨なものとはごめんです。救いのあるもののほうが好きです。それから絵物語の「土手のお六鬼念仏」の絵、古正英生先生は、私は古くからのファンなのですが、タッチの古いのが、どうもものたりません。男の顔にしても、女の顔にしてももうすこし、現代的にかいていただけないでしょうか。ことに女の顔がお人形か、なにかのよ



# 読者コーナー

うです。ついペンがすべって、ずいぶん悪口雑言をかいましてしまいました。編集部でうまくカットしてください。それから、裏窓のファイル注文しました。三枚とも似たものばかりで物足りないのですが、ほかのと変えていただけないでしょうか。変えてくれれば、ファイルをもう二冊注文します。それからもうひとつおねがいがあります。それは「裏窓随筆・早春のある宵に」のような記事を毎号のせてください。私のような読者はああいう内幕ものに、とても心がひかれます。なんとなく人生が明るくなるような気がします。へんなことをかきましたかどうかお笑ください。六月号がたのしみです。(東京・栄)

★悪戦苦斗の人生。文字どおり身も心もクタクタに疲れはて、ともすると生きることにさえ煩しさを感ずることを考えても、ダメダメ！ 疲れはてた老体では正にそのものグニヤリ？で、どうにもならぬ。ああ何かのしい慰めを……とねがうや切に……。グンと引きはなした裏窓誌。最近の飛やくと内容の充実ぶりはまったく驚歎にあたり

いする。「裏窓」の愛読者を、あやしげな片言まじりの悪批評する輩があるが、ほっとけほっとけ！ かれらこそ読みたいく読みたいくたマラヌヤツダ！ それとも木仏金仏石仏……の類かな？……(福岡・変一郎)

★編集部の諸先生には、いよいよご健勝のごようす、なによりです。これは五月号の「裏窓」でわかります。四月号より三十パーセントぐらいいいです。カエルだって地下から出てきてはねまわる気候なのですから、先生がたの大ハリキリ(とくにここは誤植しないように。ハラキリではありません。ほかの趣味の人たちをよろこばせたいとは、べつに思っています。その結果ね)も当然でしょう。その結果のわが「裏窓」の飛躍は、愛読者の一人として非常にうれしくまた、心強く思います。写真から感想をのべさせて頂くと――目次うらの二枚は、S派とF派へのサービスなのでしよう。両方に属する小生、よろこんでお受けしますが、S派へのサービス品は、ちよつと粗悪ですね。「女をさらっていくところ」なのでしようが、あまり、ハッキリしない。この全体が見たいも

のです。F派のはいまさらのように、女の靴下はぬい目がある方がよいと思わせるに十分といった感じのもので。こういうところへのせる写真の選択にもいろいろ苦心があるのでしようね。しかし以前(紙がわるかったころ)のそれの方がよいのがありましたね。ホラ、あのアメリカ物の責め写真をズラリとならべて……。ああいうのがいいですね。

「美貌のいけにえ」両手をこのように縛るのはあまりすきではありませんが、いい肉体をしたモデルさんですね。黒々としたわきの下、ふくらとした乳房そして腹から腰への曲線。もう少し手をずらして、上をむいた彼女の鼻孔も見せていただきたい。彼女がモデルがあまり立派なものでその方が強烈でありS的ムードはおおきく後退しています。その原因として、両手吊りにしたことがあげられましょう。次のページの高倉光子さんの写真。豊かな乳房を責めつけているきびしい縄目は、演出の藤見先生、いつまで見ていてもあきず、見れば見るほど、いろいろな幻想がわいてきて申し分ありません。とくに左の方のイスに

腰かけている方がいいですね。彼女のみだれた黒かみも晴雨調をモダンにした感じですし。あごをひいて伏目になっている高倉さんの美しい顔には、Mの境地にひたっている女特有の輝きがあります。藤見先生のご教育のほどがしのべれますが、どうも彼女のはいているものが気に入ります。黒色、いや、これはいいんです。黒でなくてはいいんです。黒でなく、ピッチリ、パンティ感のあふれるパンティをはかせてもらいたいです。パンティ感のあふれるパンティって何んだ、とおっしゃるのですか？ その一ページ前の「美貌のいけにえ」のモデルがはいているパンティ、もし、これが前のヒラヒラがなかったならば、それでありました。五月号には、幸いなことに、実にパンティのいい作品がありますからその点につきましては、そのときまた――話をもちまして、右ページのパンティなどは、あまりに細くダブついているので、フンドシをゆるくしたみたいで大いに興感をそそぎます。次のねている二ページ大の写真は、彼女のパンティにシュミーズのすそをはさむことのできた





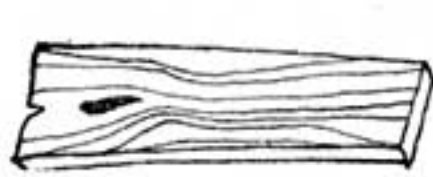
藤見先生をうらやむだけの作品です。結局、五月号の高倉さんをとった写真では、次のページの背面の一番でしよう。これは実にいい写真です。丸い肩、ぐっとくびれるほどしめつけられたうで、かたく縛り合わされた両手首。それに、縛り方がすばらしいですね。無造作でありながら、しかも要所々々はきびしく縛ってある。また彼女のまわと光沢がなんともいえぬS的なエロティックな味を出しています。光沢といえ、彼女の肩口からうでへかけて、肌のつやが見事にうつし出され、じっと見ていると、高倉さんのこの写真が息づいているのではないかとあやしまれるくらい迫真性にとんでいます。カメラの吉田先生、見事なおうで前に敬服すると共に、ありがたく思います。これは、演出、カメラ、モデルの三者の息がぴったりあった好写真と申せましょう。左上のもいいですね。左下のは、おへそマニヤへのサーブスですか、編集部もあっちこっちへ気を配って大へんですね。次のページの荒縄で、しかも、乳房のくびれ（これはまた、スゴイです

ね。ありがとう！）が魅力的ないい写真なのですが、下がスッポリしているのがおしいです。さて「とらわれの時間」。藤見先生、さっき「パンティ感のあふれるパンティ」のよい例と申したのは、実はこの作品なのです。実にいい写真です。フェチストは大いによろこぶことでしょう。今後パンティはこのようにピッチリはかせてください。でも、もう少し小さめの方がいいですね。このパンティなら、お腹が冷えないでいいかもしれません。この「とらわれの時間」シリーズのページ目、モデルさんに、ぐっと猿ぐつわをかませて、後ろをふりかえらせ方が迫真性という面からみてよいと思います。これならどんなにもがいたところでとけないでしょう。合格です。しかし、高倉さんの背面のくらべるとちょっと劣りますね。それは、手首はこれで百パーセントいいのですが、上の方の結び目がわるいからです。次のページの左のなんか、そのゆるさをよく示した貴重な写真です。中上のはゴテゴテしてだめ。この中では左の一番です。ちょっとはずかしそうにきちんと両手を縛ら

れてすわっている可憐な感じのするいい写真です。そこをめぐって次。左のいいですね。パンティがお尻にくいこんでいるのがよくわかります。様名さんの表情もきれいでいいです。このページで一つ理解に苦しむ写真があるのですが、それは上のもの。一体狙いは時計なのか縛りなのか判りかねます。藤見先生のかかりかねます。藤見先生がかがでしよう。時計がはつきりうつっていて、そのうしろに縛られた女がボンヤリうつっている。ヒップのあたりすごい。ポリュームの女体なのに、おしい。時計会社のポスターみたいですね。「ご入学、ご結婚にはぜひ××時計を……」なんていうコマーションが聞えてくるようです。いや、冗談でなくこういうポスターで宣伝すると売れるでしょうにね。時計ばかりでなくカメラだってそうですよ。「グレン中佐の持っていた○○カメラ」というよりも、「裏窓」誌の「とらわれの時間」でお尻のくほみにくいこんだパンティのしわまでよくとれた○○カメラ……と宣伝できるような時代が早くくるといいですね。えっカメラでなくウデですか。深森先生失礼！

次のページの南条ユカさんの写真。二枚ともS的ムードのあふれたいい写真です。南条さんからは女子大生といった清らかなピチピチした感じをうけます。これは、ちょっと私事で恐縮ですが、南条さんは、以前小生をソデにした女子大生に感じが似ているので、この写真は、小生になかなか気味のよいものだと思います。「どうだ！」といった思いで見つめると、後ろをふりかえった南条さんの美しい表情が、なかなか意味深長なものにみえてくるのです。彼女のピッチリはかされたパンティも小生好みです。右ページののちから、足をギリギリしぼったのもよい、それに、アッ、二つの乳房の上と下に縄がくいこんでいっぺんに二カ所を責めているじゃないですか。次のページの五月八重さんと天城優子さんのお縛りおあそび。たまに息ぬきにこんな写真があってもいいでしょう。左上の八重さんの写真。せつかく黒タイツをはいたのですから、もう少し大たんぽーズもとれたのではないですか。「白と黒」——短評欄に、黒いナワがじゃまだという読者の声がありました。まさに同感で





# 読者コーナー



す。二つとも見あきたポーズ。左のは、谷さん、おねむりになったみたいですね。実に静かです。小生もねむくなりました。「海外SMフォト集」待望のもので。写真が小さい、思ったほどおもしろいがないという不満はありますが、第一回目ですから仕方がないでしょう。最初のは、女の両足が縛ってありませんか、女がああいう風に足をそろえているのは不自然です。ムチを持った写真は、小生の趣味とは正反対なのでおもしろくありませんが、Fの面であつと小生をよろこばせました。魅力的なうすい黒靴下と、やわらかそうな、コルセットよ、ああ！ 棒をはさまれてうしろ向きになってるのは、尻のあたりの光沢がエロチックです。女尊の国の女を責めている写真は、小生に、いやが上にもSの血をたぎらせませう。今後もおつづけください。最後の「拷問ベツドの女」その字がちょっとじやまでですね。何をはめているのか大体想像はつきませんが、貞操帯？ でも、縛り方はなっていないですね。「裏窓」を輸出したら売れるでしょうね。

「特選悦虐フォト集」小生が毎月心まちにしているのは、このシリーズです。このシリーズはなんともいえぬ一種独特の雰囲気を持つています。「裏窓」化された晴雨調といったところでしょうね。数多い読者の中にはあるいは、古めかしいと思われる向きもあるかもしれませんが、日本的な責めも、いいものだと思います。小生がいつも感たんするのには、このシリーズのモデルさんたちは、完全にMということ。そして責め手、いや演出家が心にくいまでSだという事です。だから、できあがつた写真にはSの香がエロチックな匂いとまぜあつて、あたり一ぱいにたちこめています。演出者の「ハイ、うつしますよ、パチ」なんていう声はどこからもきこえてきません。ただじつと写真を見てみると、モデル女の息づかいが、よろこびのうめき声がしずかに小生の胸中深くきこえてくるのです。さて、一ページ目の立姿ですが、左の腰巻しわがなんともいえぬ味です。もう、このモデルさんは、長い間責められていた様子、しっかりかまされたサルグツワから、どんな喜びの声がもれていたことでしょう。次の一ページ大の

もの。半分見えたのも、その上にかぶさった腰巻がいい。そばに猿ぐつわの手ぬぐいが落ちていますが、この女、どうやら白状する気になったのでしよう。次ののは、下のがいいですね。はつきりしています。左の女の乳首がポチッと縄の上からのぞいている。ああ女は、どうしてこうにくらしいほど可愛いのでしよう。片肌ぬぎにされた長じゅばんがいい味です。ただし背面の女は尻の丸みを強調すべきです。次ののは、右の吊りがすばらしいです。猿ぐつわをはめられた女の表情が非常によく、縛られた手の指、腰のふくらみ、右の女の、ふんばった足、割れた腰巻等。どれもこれも申し分ありません。貴社のサービスがありがたくいただきます。「ある連続写真」どれもおもしろいものばかりですが、一体に暗くはつきりしないのが残念です。右から二列目の上、下、三列目の中、下、四列目の中、下、など、とくに四列目の中、下、三列目の中などははつきり見たいと思います。(なんだ、それじゃ全部じゃないか) そうですよ、全部もつとはつきり見たいですね。

最後のページの写真。実は、これが五月号で第一等の写真です。縛られた女の感じが実によく出ています。とくにその中でも、下のは女の表情という、体をしめつけている縄目といい、まさに五月号の圧巻です。これで二百円とは安い。(オセジでなく本当です) しかし、これも小生の買ったのは黒っぽく印刷されているので、あまりはつきりしないのですよ。暗すぎるのです。全部こうなのですか。小生のだけかな。そうだとしたら、オレはよほど運の悪い男なんだ、ああ……、猿ぐつわからでている女の鼻が官能的ですし、男に肩をつかまれて、猿ぐつわをはめられた顔をそむけたところが実にいい。

最後に、飯田編集長様。先生からの内緒バナシ、まことにうれしくまた、ありがたく拝見いたしました。過分なおほめをいただき恐縮に存じておりますが、いづれ、先生の内緒バナシが終りましたら、改めて小生も何かお答えを致したく存じます。

(東京・郷保夫)

★五月号拝見。今月もまた中川先生の麗筆に酔わされました。「フランス乳房の塔」以来ます





ます円熟味を加えられた感あり四月号におけるサビナ之美しさ、とくに鉄製の馬にまたがったサビナの苦肉の表情には、これまでどんな責め絵にもなかった迫力が感じられます。苦しみ悶える女性の表情を細かいタッチで表現したその美しさ、迫真力、正しく芸術品であると言わねばなりません。とかく醜くなりがちな女の責め場を一貫して美的に表現される先生の作品には敬服を惜しみません。今後とも素晴らしい作品をお願い致します。

また四月号より喜多先生の登場もうれしく「肌責めお紋裏街道」楽しく拝見しました。先生もまた独特の描写で美しい苦悶の女性を描かれるので、今後のご活躍を期待しています。

五月号は比較的アブM的なものが多いようでものたりませんが、なかでは「京洛の烈女」がふくらみのある筆致で幾松の悶えが生々と描写されている点、一番の読物でした。「永遠の女囚」とか「刺青」のような読物はいわばなれ合いの責め話で真実味がないせいか訴えるものにとほしく感じられます。これらは文学で言えば私小説のような

もので、ものたりませんが、もっと物語性豊かなスケールの大きい迫真力ある責め物語を期待したく、こういう意味で既刊の「女隠密スパイ特集」とか「時代小説特集」のようなもの（絵物語が多ければなお結構、他に「切支丹迫害史特集」「宗教裁判物語」「戦争残酷物語特集」などはいかが？）を編集していただきたく思います。

なお映画紹介で、傑作映画を紹介していただけるのはわれわれ地方読者には大変ありがたくとくに、「蒙古の嵐」のような写真の多く入った詳しい記事を希望します。前に「どくろ砦の決闘」の紹介が大変よく、映画も期待通りの作でした。

以上勝手なことばかり書きましたが、ご参考にしていただければ幸いです。（静岡・谷俊六）

★ほくが拝見したのは「裏窓」四月号です。「二百円……豪華けんらんたる重量感」と編集後記に書いてあります。スマートな雑誌であると思います。

ほかの娯楽雑誌などにくらべると、装ていからして違います。編集長が小説、詩、絵から芝居の経歴までもつ才人だから今後ますますおもしろいものに

なることは、うたがいのないところでしょう。けれどもSMA「」という英語には「すばしこい」「ちゃっかりした」という意味が「軽妙な」より、のう厚です。ほくはどちらかというと雑誌「裏窓」が文字どおりスマートな風俗誌として、すすんだほうが存在価値があるような気がいたします。そして「いくら庶民的でヒューマンな目」の旗さえおろさなかったなら、どぎつい風刺や表現も大いにけっこうではないか——たとえば億万長者が室内プールを作り、一年中裸女たちを、金魚代りに泳がせる——そういう夢のような現実の話。新しい風流夢譚が雑誌、「裏窓」から飛びだすといいですね。（埼玉・ひろし）

★先月もかなり多くの書籍雑誌類を読んだ。そのなかでもっともお色気にとみ興味をもったのは、やはり「裏窓」であった。それから編集長の言のごとく、全巻すみずみまで細心の注意と配慮が加えられていることを認めることができた。しかしそれが単なる商業主義に墮するのを一方ではおそれる。風俗雑誌とはいえ、あまり低級な娯楽作でお茶をにこしてもらいたくない

ところで前回も三点苦心して投稿してみたが、やはりのせられなかった。が、すべては天命であると思得ているから編集長も気をわるくしないでください。無心になつて読むと五月号は本当に「裏窓」ムードを盛りたてるにふさわしい読み物ばかりがそろえられていた。わざとらしいさはあるが、しかし「いやらしい眼」は痴人の夢をかなえてくれるし、「土手のお六鬼念仏」はかなりきわどい描写で、読者の希望にこたえている。その他「京洛の烈女」「女獣飼育」において嗜虐の狙上にのせられたヒロインの常識を絶する艶麗さに打たれることもしばしばであった。なお編集長に望みたいのは——吐哺握髪して、天下の士をまち、少しもその才能を恃まれなかった周公の徳の広さである。（京都・無名作家）

★はいけい「裏窓」さま。貴誌が二百円に値上げしてから、内容的にもまた装ていや編集上のこまかい点にまで、一だんとよくなつてきたのは、読者としてひじょうに満足しております。もともと「裏窓」は、かぎられた一部の人によってのみ独占されたり、ぎやくに他から目をそ



# 読者コーナー

むけられたりするものではないと信じています。SとかMとかは、人びとの心のうちに秘められた世界ですから、それを日常生活のなかで、どのようなかたちで、みたりもとめたりするかは、それが犯罪にむすびつかない以上、自由にゆるさるべきでありましょう。ところで四月号、五月号を通じて、二色ずりの絵物語は、ひじょうに興をそそる読み物でしたし、絵の先生がたの、読者の気持をつかんでいるのに感服しました。グラフィアでは四月号の「はんにゃのめん」これはすばらしいアイデアであると思います。カメラマンの腕もさることながら、こういう縛りの幻想的なイメージをつかみだしてくる演出ぶりには、「裏窓」がほかの雑誌にみられない特色といえますか、すぐれたフォト・ボエジを作りましたといえるでしょう。ここでこれに関連した感想を申し上げますと、バックや小道具が、フォト・ボエジをひきたてたり、じやましたりしている場合もあると思います。五月号のグラフィア写真では「はんにゃのめん」のように、それが生かされていないような気がします。小

説は「女獣飼育」が、あまり見られなかった傾向のものとして印象にのこっています。小田桐先生の「入牢志願の女」は、さすがに要をえた、しかも五月号では一ばんの作品です。「京洛の烈女」は面白いが、史実の点に何か不審に思われるところがありました。この傾向の読み物では、史実を明確にふまえた上でないと、読者としては何かものたりない印象をうけるものです。それから「裏窓タウン」が最近やや映画やテレビ評？にかたよりがちな感じもします。このらんは「裏窓」でしめる比重が大きいので、趣向をおこたらないようつづけてください。では期待します。(伊豆・岬)

★私の住む雪国にも、やっと春らしく暖くなったところです。編集部の皆様、読者の皆様お元気でしようか。また「読者コーナー」に投稿させていただきます。「裏窓」五月号のグラフィアについて一言。巻頭と巻末に、三月号に似た写真があり、いささかガツカリの感じですが、その中に、榛名リエさんの「とらのわれの時間」はさわやかな涼風のごとく、ほっと救われた感じがしました。榛名リエさんのポ

ーズは、まったく清楚で新鮮で魅力があります。読みものは、よいものばかりが集まった感じですよ。こんでいます。「刺青」は内容もよいが、さしえの都築峯子氏の美しさに、うっとりしました。「永遠の女囚」のようなフォト・ストーリーを、来月号にものせてください。ほかに「京洛の烈女」や「入牢志願の女」なども、よい作品だと思います。新連載の長編小説の予告がでていましたが、いまからののしみにしております。それから巻末の喜多玲子氏の絵物語「肌責めお紋裏街道」の美しさに目をうばわれたことを、申しそうておきます。(長岡・すみれ)

★五月号拝見しました。いよいよ快調の充実ぶりです。たのしい数日をすごしました。早くも次号が待ちどおしいです。私はとくに、さしえの良し悪しに敏感で、さしえのよい雑誌こそ、全般的な内容もすぐれた雑誌だと信じています。「裏窓」の場合は、なんととっても、喜多玲子氏と中川彩子氏が両巨頭だと思えます。お二人ともそれぞれ絵の質はちがっておりますが、われわれ読者の気もちをピチットおさえている絵だと思っています。

このお二人が「裏窓」に描いていることは、どんなに「裏窓」の力になっていくかわからないでしょう。また、都築峯子氏の「刺青」のさしえは、長い間の不調を脱皮した快作だと思いました。じつに濃艶な女体です。東桂史氏の絵は、巧みだと思えますが、女にどうも色気が不足で、その点、迫力に欠けていると思います。秋吉檀氏の絵は、よいと思いますが、すこし凝りすぎという感じで、文章のほうの内容にそぐわないという気がします。

古正英生氏の「土手のお六鬼念仏」は、なんとなく絵が古めかしい感じで、とくに女の顔や表情に、真にせまった色気がとほしいと思います。堂昌一氏の絵は、時代もののさしえでも、女の顔が現代的で、新鮮味があり、うっとりさせられますが、五月号にはなかったもので、がっかりしました。堂先生の絵物語が私は大好きです。

いろいろ書きましたが、どうか没にしないでください。

(大阪・清)



# 原稿募集



## ★創

作★(四百字詰め) 25枚まで

S・M、その他を題材とした作品をお寄せください。妖気ただよう、異色ある小説をお待ちしております。

## ★告白体験記★(四百字詰め) 20枚前後

真実の告白、得がたい体験記をもとめます。本誌むきの原稿を、どしどしお寄せください。

## ★読者随筆★(四百字詰め) 10枚ほど

本誌に適する風俗、社会、身边雑記、見聞記など、思いついたままを、かいてお送りください。

## ★裏窓雑報★(四百字詰め) 10枚以内

映画、演劇、テレビ、ラジオ、週刊誌、月刊誌、新聞、その他における裏窓的なニュースをお知らせください。

## ★読者コーナー★

本誌最近号に対する批評、感想、希望などをお送りください。原稿紙におかきくださるなくとも、ハガキでもけっこうです。

掲載させていただいた方には、本誌一冊(掲載号の翌月号と)二百円をお送りいたします。

◎応募原稿は、それぞれの種別を朱書してください。

◎原稿の第一ページに、住所氏名をおかきください。

◎掲載させていただいた作品には、相応の稿料を掲載後二カ月以内にお送りいたします。

◎原稿はおかえし致しませんから、必要ある場合は、コピーをとってください。

◎原稿は第五種郵便になりますから、五十グラムごとに十円の郵券をはり、開封にして投函をおねがいいたします。

◎原稿の送りきは、つぎのとおりです。

東京都中野区内江古田一ノ二三〇二

久保書店内 裏窓編集部

## 編集

## 後記

▼本号からはじまった連載の「風雲地獄街道」は作者の鈴宮英樹氏が異常な情熱を燃やされ、四月はじめには、当時の史実や、実際の地理地形を調べたために、わざわざ甲府、塩山の恵林寺などを歴訪されました。編集部からも一名がおともしましたが、鈴宮氏の熱心さに感動して帰ってまいりました。第一回目に張られた重厚な伏線が、第二回以後から、いかに「裏窓」的な展開をしていくか、なにとぞご期待ください。

▼さいきん、投稿作品が急激にふえてまいりました。質的にも上昇してきて、編集部にとっては、まことにうれしい現象です。▼毎月二編三編とお寄せくださる方もいらつしやいます。どうして載せてくれないのか、その理由を返事せよと怒ってくる方もあります。

▼ご投稿は、まず原稿の文字を読みやすく書いていただくと、非常に有利です。それから、じょうずな文章よりも、たとえヘタでも「裏窓」的な血のかよった作品を歓迎します。熱と努力の見える作品は、かならず掲載させていただくことを、あらためてお約束いたします。(飯田)



62.7.

# 女体倉庫

カメラ・毛 卓三





# ふとんの上で

- カメラ・猪島昌也
- モデル・谷 まりも
- 演出・美濃村 晃





















S F ・ S 絵物語

# 時間旅行機第一号

たいむ・ましん



## ① 星影無窮斎

お八重は夢中でもがいた。鬘の根がくずれがつくりと島田がかたむく。

—— ああッ！

意識をとりもどした。うしろ手に、かたく縛られている。しかも、わずかに腰のものひとつが、肌をかくすのみ。

むきだされた可憐な乳房が、荒縄を噛んでうめいていた。

「あばれるな、うるさい！」

ちいさく舌を鳴らし、星影無窮斎が、無表情にいった。

銀一色の総髪である。無表情のなかに、ほそい目だけが激しい感情に燃えていた。

文・豊田一狼  
絵・山田彬弘



## ② 腰元お八重

江戸のはずれ——というよりも、内藤新宿を發つて甲州街道を二里余丁の大久保。つっじの名所である。

その大久保の草ぶかいなか道を、さらに数十丁西北へ踏み入った中野江古田村にあるつっじ屋敷。名は優雅だが、世間からは、きちがい学者とおそれられている星影無窮斎の誰からも邪魔をうけず研究に没頭する、荒癪した古屋敷であつた。

「おねがいでございます。お屋敷へ、どうかお屋敷へお帰してくださいませ！」

主人の使いをすませた戻り道。いきなり無窮斎に襲いかかられ、この荒れ屋敷の一室へ監禁された、十八歳の腰元お八重であつた。



## ③ 奇怪な箱

無窮斎の背後に、異様な形をした箱が据えてある。色は黒っぽく、湿ったような艶がある。ちょうど、ひと一人がはいれるほどの大きさで、上のほうには、奇妙な触角が数本生えていた。

「わかるか、娘、この道具が。これはな、時の流れを越え、また逆のぼらせ、または停めさせる道具。一生かけたわしの成果だ——」





#### ④ 最初の実験

きちがい学者とよばれる無窮斎の、黄色くしなびたほろい指が、お八重の裸身のなめらかな肩にかかった。

「ひえーッ！」四肢をすくませ、身をのけぞらせてお八重は恐怖する。

「さあ、実験をはじめよう。娘、おまえがこの箱のなかへはい入るのだ。栄誉ある、わしの研究の成果をたしかめるために——」

枯れた笑いが、無窮斎ののどからでた。

老学者は、裸身を抱きあげた。娘が必死の力であばれるために、三、四度もひざをつき彼のひたいには汗がにじみでた。

痛痛しいのは、むしろ無窮斎のほうであった。しかし、ついに彼は、お八重の裸身を、その奇怪な箱のなかに運び入れた。

そして、頑丈なフタを、ぴたりとしめた。

「たすけて、たすけてえーッ！」

お八重の泣きさけぶ声がきこえる。

「心配せずともよい。ほんの十呼吸ほどで、また出してやる。ほんの十呼吸の辛抱じゃ、天才老学者は、やせほそった腕をのばし、箱の上部にしている鍵型の把手を「未来」へまわし「百年」の目盛りに合わせた。同時に、娘の悲鳴が消えた。



男は二人とも、濃いねずみ色のだぶだぶした股引きをはき、上半身は逆に、妙にぴっちりとした肌に密着したじゅばんを着ていた。

あたまに、髷がなかった。

しかし、お八重がおどろいた以上に、二人の男と一人の金髪の女はおどろいた。

「あ、あ、あんたは、だ、だ、だれだい！」  
男の一人が大きな目玉をむいてどなった。

.....

邇カメラマンと藤見郁氏は、声もでない。編集部のとなりに新設したフォト・スタジオのなか。裏窓六月号グラビア写真撮影中の奇怪な事件であった。



## 裏窓・既刊号総目次

★既刊号をお買い洩らしになった愛読者の方々の  
為にこの機会にバックナンバーをお揃えになる  
ことをおすすめします。

★三冊以上御注文の際は送料は不要です。

★二冊以下の御注文は一冊につき送料12円です。

★御送金は振替か現金書留が最も確実です。

東京都中野区江古田1の2302 株式会社 久保書店 (振替東京 10756)

|                |                 |                        |                      |             |                  |                  |                |                    |                      |                  |               |                          |         |                        |        |                       |        |                          |                  |               |                     |                       |
|----------------|-----------------|------------------------|----------------------|-------------|------------------|------------------|----------------|--------------------|----------------------|------------------|---------------|--------------------------|---------|------------------------|--------|-----------------------|--------|--------------------------|------------------|---------------|---------------------|-----------------------|
| 京洛の烈女……………東洋太郎 | 入牢志願の女……………小田桐爽 | 鞭に生きる女(3)………ヴァン・ロッド作・絵 | 現代マソヒズム文化時評(2)……森下高茂 | 刺青……………北野竜一 | ある熱烈な一日……………黒田史朗 | 室内馬場恍惚記……………山本節夫 | 永遠の女囚……………鳴竜三郎 | 畜獣デリムソン(6)…………阿麻哲郎 | しっぽが生えたおんなの子…………淡路周五 | いやらしい眼……………九十九十郎 | 女獸飼育……………森田陽一 | ○時代繪物・土手のお六鬼念仏<br>繪・古正英生 | 文・五斗六太郎 | ○々 女帝ゼノビアの敗北<br>繪・中川彩子 | 文・松平莊司 | ○々 肌賣めお紋裏街道<br>繪・喜多玲子 | 文・豊田一狼 | ○繪物語・赤んぼがわらうとき<br>繪・江洲晃夫 | ○々 海外SMフォト集…………… | ○ 白と黒……………吉田久 | ○ ．とらわれの時間……………深森映士 | ○ グラビア・美貌のいけにえ…………吉田久 |
|----------------|-----------------|------------------------|----------------------|-------------|------------------|------------------|----------------|--------------------|----------------------|------------------|---------------|--------------------------|---------|------------------------|--------|-----------------------|--------|--------------------------|------------------|---------------|---------------------|-----------------------|

37年(四月号)二〇〇円

○グラビア・はんにゃのめん……………吉田 久

○　　・ゆがむ豊胸……………藤沢 修

○　　・いすと女……………吉田 久

○　　・片隅にうごめく……………猪島 昌也

○絵物語・地獄への招待状……………

文・小川左門  
画・喜多玲子

○　　ある夜の強盗……………

文・藤見 郁  
画・山田彬弘

○　　砂漠の恐怖王ハッサン……………

文・松平莊司  
画・中川彩子

リボンに巻かれる娘……………綾川 妖司

姫肌受難船……………黒部 恭治

奇妙なあしながおじさん……………黒田 史朗

畜獣デリムソン(5)……………阿麻 哲郎

私本・札津女切腹抄……………団 克衛

なめたい……………田沼 醜男

日本拷問史(3)……………名和 弓雄

フオト・ストーリー・鞭に生きる女(2)……………

ヴァン・ロッド作・画

　　・妖蘭亭の愛欲……………豊田 一狼

捕われた姫君……………宮古志満夫

姫君様御入牢……………小田桐 爽

おえん地獄夢……………五斗六太郎

37年(三月号) 一五〇円

○ グラビア・沈黙のポーズ……………吉田 久

○ ヌソファベッドのあるへや……………藤沢 修

○ ……もだえ三態ほか……………編集部・編

○ 絵物語・青い野獣のブルース  
鳥丸 克彦  
絵・秋吉樹

○ ……女忍伝奇館……………

文・黒部 恭治  
絵・古正 英生

不貞現場の女……………春川 光彦

畜獣デリム・ソンⅣ……………阿麻 哲郎

マゾヒズム文化時評……………森下 高茂

由美子よ逃げろ……………竹谷 十三

鞭と縄と美貌の迫害者……………院南 五郎

○ 絵物語・吸血鬼号の女囚  
文・島本 春雄  
絵・中川 彩子

日本拷問史②……………名和 弓雄

美妃責め行者譚……………来島 摂次

フォト・ストーリー・鞭に生きる女①  
ヴァン・ロッド作・画

○ 絵物語・煩惱地獄医者……………絵・中島 喜美

極楽パンティ往生……………重 文彦

マンガグローブの葉かげで……………松平 荘司

海老沼武七の執念……………小田桐 爽

黒い鉄の扉……………南郷 京助

37年(二月号) 一五〇円

○グラビア・がくぶちの女・吊られる  
白いとらわれ……………藤沢 修

○グラビア・光る円丘・逃げられない部屋  
吉田 久

○グラビア・鞭をもつ貴婦人たち

○絵物語・フランス乳房の塔  
文・島本春雄  
画・中川彩子

○絵物語・脱獄囚を追え……………  
文・松平莊司  
画・山田彬弘

絵物語・姫小姓さらぎ呪縛……………絵・中島喜美  
畜獣デリムソン(3)……………阿麻 哲郎

奇妙な町の奇妙なたべもの……………淡路 周五

赤い野牛の群れ……………画・秋吉 樹

美貌の毒花……………画・文彦

日本拷問史①……………名和 弓雄

○絵物語・臆病者は地獄へ行け画・沖 涉二  
きょうもまた黒い太陽……………豊田 一狼

被虐妻……………御子神吉雄

ビンの中の女……………牧田 洋一

修羅縄侍……………万里小路崑

ぬめ肌むさん雨……………江津 浅夫

江戸悪党伝……………小田桐 爽



37年(二月号)一五〇円

|                      |                    |
|----------------------|--------------------|
| ○ グラビア・縄のムード……………    | 吉田 久               |
| ○ ……ろうそくのあかり……………    | 編集部・編              |
| ○ ……雪の朝・浴室の女……………    | 編集部・編              |
| ○ ……ながいまつ毛……………      | 吉田 久               |
| ○ ……熊笹のなか……………       | 編集部・編              |
| ○ 絵物語・恐怖王イブラヒム……………  | 文・松平 莊司<br>画・中川 彩子 |
| ○ 縛った男をさがせ……………      | 文・島本 春雄<br>画・堂 昌一  |
| ○ 捕り縄恋慕……………         | 小田桐 爽              |
| ○ 畜獣デリムソン(2)……………    | 阿麻 哲郎              |
| ○ 朝姫磔仔細……………         | 吉田 義雄              |
| ○ 絵物語・手綱をとる姫……………    | 文・山本 節夫<br>画・小日向一夢 |
| ○ あらしの夜の悪夢……………      | 三井多美子              |
| ○ 犬の独房……………          | 須見 憲治              |
| ○ 新春うらまど・いろはかるた…………… | 画・沢拳史              |
| ○ 魔女鏡……………           | 西田 仁               |
| ○ 奇妙な町の奇妙なたべもの……………  | 淡路 周五              |
| ○ 夜の刑律……………          | 鳴滝 三郎              |
| ○ 変幻鬼女囃子(最終回)……………   | 矢桐 重八              |
| ○ 風流責め句選……………        | 画・中島 喜美            |
| ○ 濡れる屈辱の夜……………       | たけの・みのる            |
| ○ マゾヒズムへの道程 VI……………  | 黒田 史朗              |

36年(十二月号)一五〇円

|                      |                      |                      |                    |                   |               |              |                                |                   |                |               |                    |                |                   |              |                   |                |            |                  |                |               |                  |
|----------------------|----------------------|----------------------|--------------------|-------------------|---------------|--------------|--------------------------------|-------------------|----------------|---------------|--------------------|----------------|-------------------|--------------|-------------------|----------------|------------|------------------|----------------|---------------|------------------|
| ○グラビア・ポーズするヌード……藤沢 修 | ○「」……豆しぼりと長襦袢……編集部・編 | ○「」……救いを求める乙女……深森 映十 | ○「」……悦虐フォト集……編集部・編 | 川柳猿ぐつわ漫考……絵・小日向一夢 | 浅草えれじい……花巻京太郎 | 花開かぬ夜……豊田 一狼 | ○絵物語・女旅逢魔峠……文・黒田 泰治<br>画・古正 英生 | マゾヒズムへの道程V……黒田 史朗 | 札束は悪魔の手先……八巻 金 | 手錠と女たち……院南 五郎 | ギブスに泣く恵子(3)……片山 俊一 | 黒髪化粧(1)……志摩 不二 | 畜獣デリムソン(1)……阿麻 哲郎 | 凌辱の公開……鬼山 絢策 | 裏窓既刊号挿絵名作選……編集部・編 | ろくでなしの檻……鳴滝 三郎 | 乾いた泥……西田 仁 | メスノ専制帝国の罭……九十九十郎 | 宝石が女を狙う……三田 三郎 | 責め句選……絵・中島 喜善 | 変幻鬼女囃子(6)……矢桐 重八 |
|----------------------|----------------------|----------------------|--------------------|-------------------|---------------|--------------|--------------------------------|-------------------|----------------|---------------|--------------------|----------------|-------------------|--------------|-------------------|----------------|------------|------------------|----------------|---------------|------------------|

36年(十一月号)一五〇円

○グラビア・アメリカ悦虚フォトより  
久

○「ボーズするヌード」……吉田  
久

○「悦虚フォト傑作選」……編集部・編  
文・深川 昌夫  
画・秋吉 椿

○絵物語・髪と拳銃……  
八丁堀の鬼……小田桐 爽  
屋根裏部屋の大嵐……長谷川 勇  
倦怠期は演技で埋めろ……黒部 恭治  
マゾヒズムへの道程Ⅳ……黒田 史朗  
スリッパはもうゴメンだ……九十九十郎  
ギブスに泣く恵子(2)……片山 俊一  
黒髪模様(二)……志摩 不二  
明治棄民秘話……樋口 逸馬  
黒いホクロのヴィーナス……阿麻 哲郎  
白磁の壺……島田 昇

○絵物語・魔女を縛れば縛られる……文飯田豊吉  
画・堂 昌一

裏窓タウン……  
虚構の真実ということ……古河 豊  
妖奇の顔……鬼山 絢策

○グラビア・悦虚フォト集……編集部・編  
江戸川柳・責め句選……画・中島 喜美  
変幻鬼女囃子(五)……矢桐 重八

36年(十月号)一五〇円

|                    |         |    |
|--------------------|---------|----|
| ○グラビア・執念泥沼地獄……………  | 本誌      | 特写 |
| ○　　　　　・海と女……………    | 藤沢      | 修  |
| ○　　　　　・悦虐フォト集…………… | 編集部・編   |    |
| ○絵物語・復讐の鬼……………     | 文・万里小路崑 |    |
|                    | 画・古正 英生 |    |
| ○々脅迫者に明日はない……………   | 文・花房由紀夫 |    |
|                    | 画・秋吉 樹  |    |
| セールスマンに御注意……………    | 九十九十郎   |    |
| 黒いホクロのヴィーナス……………   | 阿麻 哲郎   |    |
| 懸想文受難……………         | 小田桐 爽   |    |
| 白い肌と黄色い画家……………     | 南村 蘭    |    |
| マゾヒズムへの道程Ⅲ……………    | 黒田 史朗   |    |
| ○漫画・山の夜ばなし……………    | 左 次朗    |    |
| 黒髪模様(一)……………       | 志摩 不二   |    |
| ギブスに泣く恵子(一)……………   | 片山 俊一   |    |
| 褐色のひとみ……………        | 藤見 郁    |    |
| 江戸断獄記……………         | 吉川 玄    |    |
| お六受難街道……………        | 東 洋太郎   |    |
| 紅いスピード……………        | 久我不二郎   |    |
| 獄門桶の囚人……………        | 坂木 頼    |    |
| 執念泥沼地獄……………        | 美濃村 晃   |    |
| 責め句選……………          | 画・栗原 伸  |    |
| 変幻鬼女囃子(四)……………     | 矢桐 重八   |    |

36年（九月号）一五〇円

|                     |                   |
|---------------------|-------------------|
| ○ グラビア・アメリカの悦慮絵物語より | 久                 |
| ○ ッ                 | 吉田                |
| ・ あきらめの表情……         |                   |
| ○ ッ                 | 深森 映士             |
| ・ 障子の影……            |                   |
| ○ ッ                 | 編集部・編             |
| ・ 悦慮フォト集……          |                   |
| ○ 絵物語・幻影の崖……        | 文・西崎 彰<br>画・豊田みのる |
| 暗い湿っぽい穴の中で……        | 松平 莊司             |
| 戦国血笑記……             | 万里小路崑             |
| ドル箱スターに手を出すな……      | 鳴滝 三郎             |
| スリルは引き合わない……        | 九十九十郎             |
| 明治地獄島秘話……           | 樋口 逸馬             |
| 黒いほくろのヴィーナス2……      | 阿麻 哲郎             |
| ○ 絵物語・真夏の夜の戦慄       | 文・飯田 豊吉<br>画・堂 昌一 |
| 上客は逃がすな！……          | 長谷川 勇             |
| 刺青人肌蜘蛛……            | 佐伯 邦夫             |
| 花と女と眼帯と……           | 豊田 一狼             |
| サジストは地獄へ行け！……       | 佐路 素人             |
| マソヒズムへの道程Ⅱ……        | 黒田 史朗             |
| 文芸切腹史……             | 中康 弘通             |
| 真窓既刊号挿絵名作選……        | 編集部・編             |
| 和服姿の乙女に寄せる……        | 植野 達也             |
| 変幻鬼女囃子（三）……         | 矢桐 重八             |



36年(八月号)一五〇円

○グラビア・お好み映画誌上試写会

○オプジェ……………吉田 久

○鏡のある部屋……………深森 映士

○悦虎フォト集……………編集部・編

○口絵・奴隷の反乱……………石塚 芳幸

○絵物語・畏は女にかけろ！……………文・依田精二

○ある表情集……………画・秋吉 豊

○殺し屋は真夜中に泣く……………文・飯田豊吉

○邪法忍者呪縛……………画・堂 昌一

○生き人形と二人の男……………文・万里小路崑

○マゾヒズムへの道程I……………画・古正 英生

○弗の馬……………藤見 郁

○黒いほくろのヴィーナス……………黒田 史朗

○じゃじゃ馬馴らし……………西田 仁

○獣の家……………阿麻 哲郎

○女に腕はいらない……………九十九 郎

○謡拐吸血鬼秘話……………永井卓二 郎

○絵物語・眠らせてちょうだい……………鳴滝 三郎

○黒髪美髯記……………樋口 逸馬

○変幻鬼女囃子(二)……………文・豊田一狼

……………画・山田彬弘

……………志麻 不二

……………矢桐 重八

36年(七月号)一五〇円

○グラビア・椅子……………深森 映士

○あき家の女……………吉田 久

○悦虎フォト集……………深森 映士

○絵物語・にせ聖女……………編集部・編

○ある表情集……………文・雪俊 遥

○裏窓既刊号挿絵名作選……………画・山田 彬弘

○お吉魔除け肌……………美濃村 晃

○弄 獣……………編集部・編

○黒水仙の女……………小田桐 爽

○Fの世界……………葛原令太郎

○戦国割盗記……………竹谷 十三

○あべじの足……………佐瀬利五郎

○若妻地獄……………万里小路崑

○青木菊子の最後……………新津 勉

○妬 刑……………竹田 十三

○むしだんご……………柳生 亘

○春岡村事件……………松江梨矢子

○旅芝居見てある記……………佐々木 力

○裏窓ショート・ショート……………境 利彦

○裏窓タウン……………森 喜一

○変幻鬼女囃子(一)……………矢桐 重八

36年(六月号)一五〇円

○グラビア・溪流……………山下久一郎

○倉庫の中……………吉田 久

○フロア・ランプ……………深森 映士

○悦虎フォト集……………美濃村 晃

○口絵・開魔堂……………画・石塚 芳幸

○妖艶責絵競作選……………各 画 伯

○魔性の客が這ってくる……………浜松 武

○ある老遊侠伝……………矢桐 重八

○スカートの下の世界……………阿麻 哲郎

○明治女工哀話……………樋口 逸馬

○痴者の文……………南村 蘭

○妖夢を覗けば縛られる……………藤見 郁

○マゾヒズムへの誘惑……………黒田 史朗

○悪 女……………明石 沙子

○芳村順造のレジャー……………秋 久夫

○髪屑箱……………大塚真佐男

○バスティーユ牢獄の黒い処女画……………中川 歌子

○絵物語・復讐は俺に任せろ……………文・万里小路崑

……………画・沖 涉司

……………浅尾の蛇責めについて……………狩 勝彦

……………逆転への陶酔……………聖 粒三

……………裏窓情報……………永井卓二 郎

……………悦虎の園(終回)縄と恋と夢……………殿村 恵

36年(五月号)一五〇円

○グラビア・悪(あくむ)夢……………吉田 久

○儀(いけにえ)牲……………深森 映士

○絵物語・真夜中の闖入者……………文・藤見 郁

……………画・沖 涉司

○絵物語・三つ目竜船の妖女……………文・島本春雄

……………画・堂 昌一

○暗い部屋で笑った女……………ホー・ハター

○妖異お菊虫……………矢桐 重八

○スカートの下の世界(4)……………阿麻 哲郎

○江戸誘拐魔秘聞……………樋口 逸馬

○黒髪懺悔(完結編)……………志摩 不二

○悪(あくじょ)女……………明石 沙子

○マゾヒズムへの誘惑V……………黒田 史朗

○女王様お馬にどうぞ……………山本 節夫

○絵物語・強盗ごっこ……………文・松平 莊司

……………画・豊田みのる

○司祭と悪魔と若後家と……………長谷川 勇

○名月恋遊女……………久富 浩司

○グラビア・悦虎フォト・柱……………吉田 久

……………火あぶり……………成宗美美夫

……………昔懐かし活動 写真の思い出……………由茂 滋

……………裏窓既刊号挿絵名作選……………編集部・編

……………悦虎の園V甘美な戦慄……………殿村 恵

36年(四月号)一五〇円

○グラビア・荒縄と黒髪の構図……………吉田 久

○障子と女……………深森 映士

○絵物語・照姫呪縛……………文・島本春雄

……………画・堂 昌一

○絵物語・責め具製造人……………文・九十九 郎

……………画・沖 涉司

○グラビア・悦虎フォト集……………編集部・編

○悪魔の唇……………田沼 醜男

○呪われた乳房……………小田桐 爽

○音に憑かれて……………松平 莊司

○マゾヒズムへの誘惑IV……………黒田 史朗

○井上筑後守覚え書……………明石 沙子

○とらじを縛るべし……………阿里 俠二

○飢えた眼は階段に光る……………永井卓二 郎

○奇妙な女護が島……………豊田 一狼

○黒髪ざんげ(続・青春編)……………志麻 不二

○スカートの下の世界(3)……………阿麻 哲郎

○座談会・晴雨画伯を偲んで……………聖 粒三

○美食ストーリー妙……………文津部三郎

○乱歩文学における耽美趣味……………森脇 光

○ネオ・ナチズムの地下組織……………編集部・編

……………裏窓既刊号挿絵名作選……………殿村 恵

……………悦虎の園IV女奴隷の折り……………殿村 恵



